

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第116集

親久保 I・II・III・IV 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

親久保 I・II・III・IV 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査



- | | | | |
|-----------|--------------|-----------|----------|
| 1. 聚切Ⅰ遺跡 | 4. 新久保Ⅱ遺跡(A) | 7. 新久保首遺跡 | 10. 国道4号 |
| 2. 竹林Ⅰ遺跡 | 5. 新久保Ⅱ遺跡(B) | 8. 室北本線 | |
| 3. 新久保Ⅰ遺跡 | 6. 新久保首遺跡 | 9. 馬淵川 | |

巻頭写真 遺跡付近遠景(西方から)

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。特に東北縦貫自動車道の建設は、産業経済開発の大動脈として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日の課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道八戸線に関連する遺跡は、安代町から青森県境まで53遺跡があり、一戸町所在の6遺跡については昭和60・61年に野外調査を終了し、これまで2遺跡の発掘調査報告書を刊行してまいりました。

本報告の親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡は、一戸町北部の丘陵縁辺部に立地し、昭和60・61年の発掘調査によって縄文時代の陥し穴状遺構や平安時代の竪穴住居跡等が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに調査報告書として発刊するはこびになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、一戸町、一戸町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和62年6月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸町一戸字親久保に所在する親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 遺跡台帳番号、調査期間、発掘調査面積、調査担当者等は、各遺跡の中扉に記したとおりである。

4. 発掘調査に際しては、一戸町教育委員会の御協力をいただいた。

5. 分析、鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)

火山灰の蛍光X線分析	三辻 利一	(奈良教育大学)
石器の石質鑑定	佐藤 二郎	(佐藤地質工学研究所)
炭化材の樹種鑑定	早坂松次郎	(岩手県木炭協会)

6. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

I 調査に至る経過	昆野 靖
II 遺跡の位置と環境	佐々木嘉直
III 調査と室内整理の方法	佐々木嘉直
IV 親久保Ⅰ遺跡	遺構 佐々木嘉直
	遺物 酒井 宗孝
V 親久保Ⅱ遺跡	A 調査区の遺構 佐々木嘉直
	同遺物(土師器) 渡辺 洋一
	同遺物(土師器以外) 酒井 宗孝
	B 調査区の遺構 佐々木嘉直
	遺物 酒井 宗孝
VI 親久保Ⅲ遺跡	中川 重紀
VII 親久保Ⅳ遺跡	中川 重紀
VIII 親久保遺跡、その他の遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	三辻 利一
IX むすび	佐々木嘉直

7. 現地調査においては沢内市郎、田村利一、柴田源八郎の各氏をはじめとする地元一戸町の方々に、室内整理では整理作業員の方々の協力を得た。

8. 調査の諸記録と遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
1. 遺跡の位置	2
2. 地形概観	2
3. 地形区分	2
4. 基本土層	4
5. 一戸町の遺跡	6
III 調査と室内整理の方法	15
1. 調査方法	15
(1) 地区割	15
(2) 粗掘・精査	16
(3) 実測・写真撮影	16
2. 室内整理方法	16
(1) 作業手順	16
(2) 図版・写真図版	16
(3) 土器分類	18
IV 親久保I遺跡	19
1. 調査の経過	20
2. 検出された遺構と遺物	20
(1) 土坑	20
(2) 陥し穴状遺構	22
(3) 溝跡	22
(4) 出土遺物	25
3. まとめ	25
V 親久保II遺跡	33
1. 調査の経過	34
2. 検出された遺構と遺物	34
(1) A調査区の竪穴住居跡	38
(2) A調査区の土坑他	54
(3) A調査区遺構外出土遺物	57
(4) B調査区の竪穴住居跡	62
(5) B調査区の土坑他	70
(6) B調査区遺構外出土遺物	89

3. まとめ	119
(1) A調査区の住居跡	119
(2) B調査区の遺構と占地	125
(3) 出土遺物	127
VI 親久保III遺跡	187
1. 調査の経過	191
2. 検出された遺構と遺物	191
(1) 土坑	192
(2) 陥し穴状遺構	208
(3) 遺構外出土遺物	221
3. まとめ	247
VII 親久保IV遺跡	277
1. 調査の経過	278
2. 検出された遺構と遺物	279
3. まとめ	280
VIII 火山灰の蛍光X線分析	287
IX むすび	291

図版・表・写真図版目次

図版 1	遺跡位置図	3
図版 2	地形分類図	5
図版 3	基本土層図	7
図版 4	周辺の地形と遺構分布図	13
図版 5	図版凡例図	17
一戸町内の発掘された遺跡一覧表		11

親久保 I 遺跡

図版 1	遺構配置図	21
図版 2	遺構図	23
図版 3	出土遺物	26
写真図版 1	遺構(1)	29
写真図版 2	遺構(2)	30
写真図版 3	出土遺物	31

親久保 II 遺跡

図版 1	遺構配置図 (A調査区)	35
図版 2	遺構配置図 (B調査区)	37
図版 3	A II-1 住居跡(1)	39
図版 4	A II-1 住居跡(2)	41
図版 5	B I-1 住居跡(1)	43
図版 6	B I-1 住居跡(2)	45
図版 7	C II-1 住居跡	47
図版 8	C III-1 住居跡(1)	49
図版 9	C III-1 住居跡(2)	51
図版 10	D III-1 住居跡	53
図版 11	A調査区土坑他	55
図版 12	A調査区出土遺物(1)	59
図版 13	A調査区出土遺物(2)	60
図版 14	A調査区出土遺物(3)	61
図版 15	III F-1 住居跡他	63
図版 16	IV D-1・IV E-1 住居跡	65
図版 17	VD-1 住居跡他	69
図版 18	B調査区土坑(1)他	71
図版 19	B調査区土坑(2)	73
図版 20	B調査区土坑(3)	75
図版 21	B調査区土坑(4)	79
図版 22	B調査区土坑(5)	81
図版 23	B調査区土坑(6)	85
図版 24	B調査区土坑(7)他	87
図版 25	B調査区出土遺物(1)	97
図版 26	B調査区出土遺物(2)	98

図版 27	B調査区出土遺物(3)	99
図版 28	B調査区出土遺物(4)	100
図版 29	B調査区出土遺物(5)	101
図版 30	B調査区出土遺物(6)	102
図版 31	B調査区出土遺物(7)	103
図版 32	B調査区出土遺物(8)	104
図版 33	B調査区出土遺物(9)	105
図版 34	B調査区出土遺物00	106
図版 35	B調査区出土遺物01	107
図版 36	B調査区出土遺物02	108
図版 37	B調査区出土遺物03	109
図版 38	B調査区出土遺物04	110
図版 39	B調査区出土遺物05	111
図版 40	B調査区出土遺物06	112
図版 41	B調査区出土遺物07	113
図版 42	B調査区出土遺物08	114
図版 43	B調査区出土遺物09	115
図版 44	B調査区出土遺物00	116
図版 45	B調査区出土遺物01	117
図版 46	B調査区出土遺物02	118
写真図版 1	遺跡遠景 (A調査区)	131
写真図版 2	遺跡遠景 (B調査区)	132
写真図版 3	基本土層	133
写真図版 4	A II-1 住居跡(1)	134
写真図版 5	A II-1 住居跡(2)	135
写真図版 6	B I-1 住居跡(1)	136
写真図版 7	B I-1 住居跡(2)	137
写真図版 8	C II-1 住居跡	138
写真図版 9	C III-1 住居跡(1)	139
写真図版 10	C III-1 住居跡(2)	140
写真図版 11	D III-1 住居跡(1)他	141
写真図版 12	D III-1 住居跡(2)	142
写真図版 13	A調査区土坑類(1)	143
写真図版 14	A調査区土坑類(2)	144
写真図版 15	III F-1 住居跡	145
写真図版 16	VID-1 住居跡	146
写真図版 17	IV E-1 住居跡	147
写真図版 18	VD-1 住居跡	148
写真図版 19	III E-1 住居跡状遺構	149
写真図版 20	B調査区土坑(1)他	150
写真図版 21	B調査区土坑(2)	151
写真図版 22	B調査区土坑(3)	152
写真図版 23	B調査区土坑(4)	153
写真図版 24	B調査区土坑(5)	154

写真図版25	B調査区土坑(6)	155	図版12	陥し穴状遺構(3)	213
写真図版26	B調査区土坑(7)	156	図版13	陥し穴状遺構(4)	215
写真図版27	B調査区土坑(8)	157	図版14	陥し穴状遺構(5)	217
写真図版28	B調査区土坑(9)	158	図版15	陥し穴状遺構(6)	219
写真図版29	B調査区土坑(その他)	159	図版16	陥し穴状遺構(7)	222
写真図版30	B調査区陥し穴状遺構(他)	160	図版17	土坑出土遺物(1)	223
写真図版31	A調査区出土遺物(1)	161	図版18	土坑出土遺物(2)	224
写真図版32	A調査区出土遺物(2)	162		遺構外出土土器(1)	224
写真図版33	A調査区出土遺物(3)	163	図版19	遺構外出土土器(2)	233
写真図版34	B調査区出土遺物(1)	164	図版20	遺構外出土土器(3)	234
写真図版35	B調査区出土遺物(2)	165	図版21	遺構外出土土器(4)	235
写真図版36	B調査区出土遺物(3)	166	図版22	遺構外出土土器(5)	236
写真図版37	B調査区出土遺物(4)	167	図版23	遺構外出土土器(6)	237
写真図版38	B調査区出土遺物(5)	168	図版24	遺構外出土土器(7)	238
写真図版39	B調査区出土遺物(6)	169	図版25	遺構外出土土器(8)	239
写真図版40	B調査区出土遺物(7)	170	図版26	遺構外出土土器(9)	240
写真図版41	B調査区出土遺物(8)	171	図版27	遺構外出土遺物(弥生)	241
写真図版42	B調査区出土遺物(9)	172	図版28	遺構外出土土器(1)	242
写真図版43	B調査区出土遺物(10)	173	図版29	遺構外出土土器(2)	243
写真図版44	B調査区出土遺物(11)	174	図版30	遺構外出土土器(3)	244
写真図版45	B調査区出土遺物(12)	175	図版31	遺構外出土土器(4)	245
写真図版46	B調査区出土遺物(13)	176	図版32	遺構外出土土器(5)他	246
写真図版47	B調査区出土遺物(14)	177	写真図版1	遺跡遠景(北から)	251
写真図版48	B調査区出土遺物(15)	178	写真図版2	基本土層	252
写真図版49	B調査区出土遺物(16)	179	写真図版3	土坑(1)	253
写真図版50	B調査区出土遺物(17)	180	写真図版4	土坑(2)	254
写真図版51	B調査区出土遺物(18)	181	写真図版5	土坑(3)	255
写真図版52	B調査区出土遺物(19)	182	写真図版6	土坑(4)	256
写真図版53	B調査区出土遺物(20)	183	写真図版7	土坑(5)	257
写真図版54	B調査区出土遺物(21)	184	写真図版8	土坑(6)	258
写真図版55	B調査区出土遺物(22)	185	写真図版9	土坑(7)	259
			写真図版10	土坑(8)	260
				陥し穴状遺構(1)	260
			写真図版11	陥し穴状遺構(2)	261
			写真図版12	陥し穴状遺構(3)	262
			写真図版13	陥し穴状遺構(4)	263
			写真図版14	陥し穴状遺構(5)	264
			写真図版15	II A区遺物出土状況	265
			写真図版16	出土遺物(1)	266
			写真図版17	出土遺物(2)	267
			写真図版18	出土遺物(3)	268
			写真図版19	出土遺物(4)	269
			写真図版20	出土遺物(5)	270
			写真図版21	出土遺物(6)	271
親久保田遺跡					
図版1	親久保田遺跡遺構配置図	189			
図版2	土坑(1)	193			
図版3	土坑(2)	195			
図版4	土坑(3)	197			
図版5	土坑(4)	199			
図版6	土坑(5)	201			
図版7	土坑(6)	203			
図版8	土坑(7)	205			
図版9	土坑(8)	207			
図版10	陥し穴状遺構(1)	209			
図版11	陥し穴状遺構(2)	211			

写真図版22	出土遺物7)	272
写真図版23	出土遺物8)	273
写真図版24	出土遺物9)	274
写真図版25	出土遺物10)	275
写真図版26	出土遺物11)	276

親久保IV遺跡

図版 1	遺構配置図	278
図版 2	出土遺物1)	281
図版 3	出土遺物2)	282
写真図版 1	基本土層・土坑	285
写真図版 2	出土遺物	286

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は二戸郡安代町で青森線と分岐し、浄法寺町、二戸市、一戸町、九戸村、軽米町を経て青森県八戸市に至る延長68kmの高速自動車道である。このうち、本県にかかる第7次及び第8次施行命令区間は54.3kmであり、一戸インターチェンジ以北の第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年までに終了している。

二戸郡安代町から浄法寺町、二戸市、一戸町に至る27.6kmは、昭和53年11月に第8次施行命令区間となり、岩手県教育委員会はこの間に所在する埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。その結果、浄法寺町に所在する天台寺の古刹である天台寺及びその周辺の地域が天台寺緑地保全区域に指定されていることから、路線はこれを避けて設定された。

昭和54年10月、岩手県教育委員会文化課は日本道路公団の協力を得て、実施計画路線に沿った幅500mについて埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、さらに両者で協議を行った。ついで昭和56年5月に路線が公表されたことに伴い文化課によって道路用地内の分布調査が実施され、約30遺跡が確認された。翌57年には安代町所在の5遺跡について発掘調査範囲の確認が行われた。

昭和58年に至り、安代町に所在する遺跡の発掘調査が文化課の調整を経て当埋蔵文化財センターに委託された。湯の沢Ⅲ、繁沢Ⅱ、石神Ⅱ、関沢口遺跡の4遺跡であるが、関沢口遺跡は粗掘及び遺構確認調査であり、翌年度への継続調査である。そのほか、文化課は浄法寺町所在の12遺跡について現地確認調査を実施している。

昭和59年には、安代町の関沢口、水神の2遺跡と浄法寺町の柿ノ木平Ⅲ、五庵Ⅰ、五庵Ⅱ、海上Ⅰ、海上Ⅱ、大久保Ⅰ、沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの9遺跡について発掘調査が委託された。同年度に文化課は二戸市、一戸町所在の各6遺跡の発掘調査範囲を確認している。また、新たに発見された浄法寺町の五庵Ⅲ、広沖遺跡についての現地確認調査が行われ、浄法寺町所在の発掘調査対象遺跡は14遺跡となった。

昭和60年は、前年度からの継続調査となった沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの3遺跡のほか、浄法寺町田余内Ⅰ、田余内Ⅱ、五庵Ⅲ、安比内Ⅰ、広沖の5遺跡と二戸市西久保、大久保の2遺跡、一戸町堀切、竹林、親久保Ⅲの3遺跡、あわせて13遺跡の発掘調査が委託された。このうち、親久保Ⅲ遺跡は粗掘及び遺構確認調査である。

昭和61年には、二戸市大久保・太田・馬立Ⅰ・馬立Ⅱ・腎ノ久保の5遺跡と一戸町親久保Ⅰ・親久保Ⅱ・親久保Ⅲ・親久保Ⅳの4遺跡の発掘調査が委託された。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

親久保Ⅰ～Ⅳ遺跡は、岩手県二戸郡一戸町字親久保112-1ほかに所在し、東日本旅客鉄道東日本線一戸駅から、北西約2.5～2.8km地点に位置する。遺跡は馬淵川左岸の集落八木沢の南側に位置し、東西約700mの間に分布する。調査範囲の東縁は馬淵川の段丘崖付近に達する。国土地理院発行の五万分の一地形図「一戸」(NK-54-18-11)図幅中では、北緯40度13分30秒、東経141度16分45秒～17分5秒付近に位置する。

遺跡付近に至る経路には、鳥越付近から八木沢の集落を経由する経路と一戸町役場付近から昼場を経由する経路がある。

2. 地形概観

一戸町は岩手県北部に位置し、東は九戸郡九戸村・岩手郡葛巻町に、西は二戸郡浄法寺町に、南は岩手郡岩手町に、北は二戸市に接している。

東部には、小倉岳(652.3m)・傾城峠(735.9m)・就志森(769.8m)など北上山地の一部をなす600～700m級の山々が連なる。南部には、奥羽山脈の支脈、七時兩山地を構成する町内最高峰の西岳(1,018.1m)があり、山麓には高森高原などの丘陵が広がる。この七時兩山麓丘陵は、町内の北西部に広く発達し、300～500mの丘陵地である。

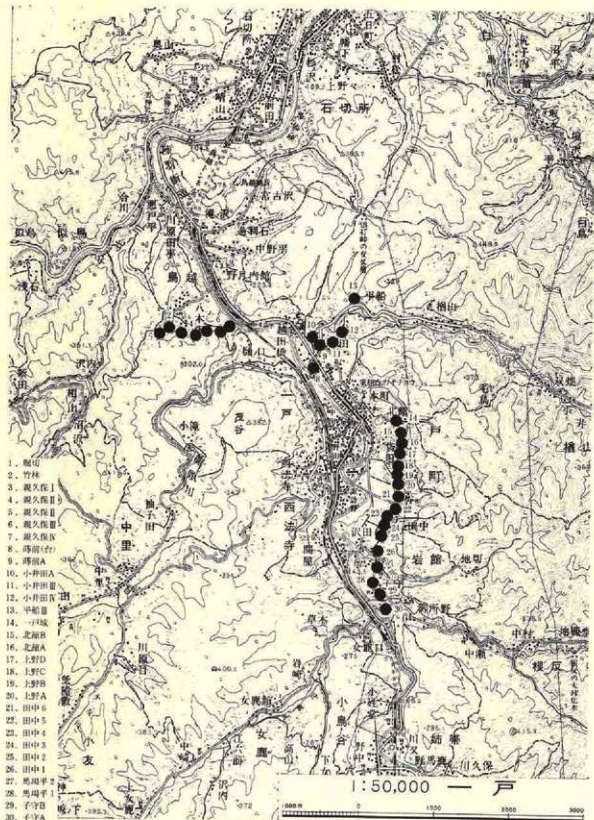
西岳山麓に放射状に発達する水系は馬淵川の支流を形成する。葛巻町南部の小屋瀬付近に源を発する馬淵川(142km)が、支流の平兼川(25km)・小繋川(11km)・女鹿川(10km)小井田川(9.5km)・龍頭川(小友川・二ツ石川16.5km)と合流し、一戸町の北部中央をゆるく蛇行しながら北流し、小規模な段丘群や谷底平野を形成している。これらの台地や低地は耕地として利用されており、主要な集落もこの地形面に立地している。

国道4号や東北本線などの主要交通路は、中央部を南北に通っている。南の奥中山付近は馬淵川と北上川の分水界をなし、十三本木峠(458m)は国道4号の最高地である。また、北の二戸市界の旧道である奥州街道の浪打峠は交叉層で知られている。

3. 地形区分

地形区分図は土地分類基本図「一戸」(1971年岩手県)による。馬淵川流域の段丘群をみると低位から高位へ四つの段丘面に大別される。一戸付近では、越田橋段丘、沢田段丘、一戸段丘、岩館段丘が、また二戸付近では、中曾根段丘、米沢段丘、福岡段丘、仁左平段丘がある。

バイパス関連遺跡の発掘調査によって、米沢段丘、福岡段丘、一戸段丘面上の遺跡群は、網



第1図 遺跡位置図

文時代と古代を中心とする複合遺跡であったことが判明している。

今回調査した親久保Ⅰ～Ⅳ遺跡は、地形区分図の丘陵地Ⅰに載る。この丘陵は七時雨山麓北東端部にあたり、茂谷北西側では標高300～200mの尾根が北東に緩く傾斜しながら馬淵川左岸に至る。この尾根は、南側を龍頭川に、北側を八木沢によって開折されている。尾根の北側と南側には山腹緩斜面が広がる。親久保Ⅰ～Ⅳ遺跡の調査範囲は北～北東斜面が多く、八木沢の集落より10～70m高い面である。八木沢の集落は標高150～180mの面にあり、付近には火山灰流凝灰岩（シラス）の厚い堆積層がみられる。このことから八木沢の集落は主として一戸段丘面に立地していると言える。親久保Ⅳ遺跡も同じ特徴をもつ。これに対して親久保Ⅰ～Ⅲ遺跡の場合は、一戸段丘を特徴づけるシラスの堆積がみられない。各遺跡の地形の概略は以下のとおりである。

親久保Ⅰ遺跡の調査範囲は、中心杭S T A 240+00～240+80の間であり、北に下る山腹の斜面下位にあり、東西に2分される。東は尾根状を呈し、西は削平された谷状の地形面である。標高は194～203mである。

親久保Ⅱ遺跡のA調査区は、中心杭S T A 241+60～242+40の間であり、北に下る山腹の斜面と裾部を占める。西は比較的平坦な斜面であり、東は沢に下る緩斜面である。標高は185～195mである。B調査区は、中心杭S T A 243+20～244+00の間であり、北東に下る尾根上にある。調査範囲の標高は210～222mである。

親久保Ⅲ遺跡の調査範囲は、中心杭S T A 244+40～245+60の間であり、尾根最東端部の頂上部と斜面である。標高は190～206mである。

親久保Ⅳ遺跡は同Ⅲ遺跡から続く斜面の下位を占め、東縁は馬淵川の段丘崖である。調査範囲は、中心杭S T A 246+20～247+00の間であり、標高は168～185mである。

調査前の土地利用は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳは畑地、ⅡはA調査区は畑地と山林、B調査区は山林である。山林も近年まで畑地として利用されていた所である。

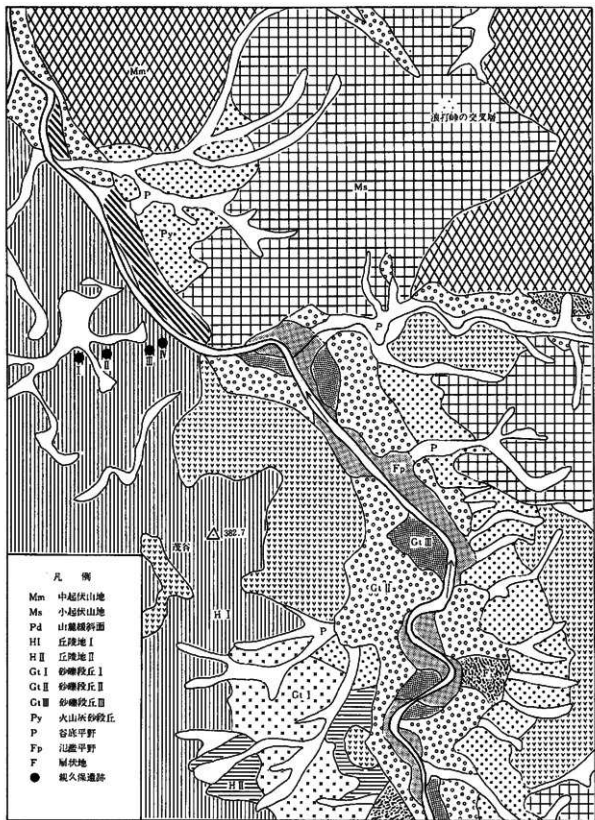
4. 基本土層

親久保遺跡付近の基本層序は、岩手県北部に分布する第四系の層序とほぼ同じである。基本層序を特徴づける各種火山灰の堆積状況等は以下のとおりである。

白頭山火山灰

朝鮮半島の白頭山火山を噴出源とする火山灰である。親久保Ⅱ遺跡（A調査区）の住居跡3棟では、埋土下位～床面に3～5cmの厚さで堆積している。隣接する堀切Ⅰ遺跡でも確認されている。いずれも、三辻利一氏によって白頭山火山灰と鑑定されたものである。

十和田a降下火山灰



第2図 地形分類図

親久保Ⅱ・Ⅲ遺跡の沢や窪地では、厚さ20～30cmの再堆積層がみられる。また、親久保Ⅱ遺跡では、古代と縄文後期の住居跡埋土にみられる。いずれも、三辻利一氏によって十和田a火山灰と鑑定されたものである。その他に、親久保Ⅰ遺跡の西側の埋没谷で少量みられる。

十和田b降下火山灰

成層として確認したところはないが、親久保Ⅱ遺跡(A調査区)のBⅡ区で、十和田a火山灰層より下位の黒色土中に粒径10mm前後の硬い灰白色浮石が極少量みられた。二戸市や九戸郡軽米町では同様の堆積が確認されており、当町内にも堆積している可能性がある。

中塚浮石

中塚浮石層は、親久保Ⅱ遺跡(A調査区)の沢付近で最も多くみられ、基本土層Ⅲ層としていられる。粒径1～8mmの明黄褐色浮石が厚さ10～20cmの塊状に断続する層を形成している。その上部は浮石を含む暗褐色の層となっており、この層は尾根頂上部の一部を除き比較的広く分布している。下位の南部浮石層との区別が明瞭でない所が多い。

南部浮石

中塚浮石層と同様、親久保Ⅱ遺跡(A調査区)の沢付近でみられる。中塚浮石の最下層(Ⅲ)より60cm下で、粒径2～20mmの黄褐色浮石の塊状として確認している。一般的には、尾根筋では浮石を含む褐色土、沢筋では浮石を含む黒褐色土として分布する。

褐色火山灰

南部浮石層の下位にみられる褐色火山灰層は、親久保付近で最もよくみられる火山灰層である。住居跡や浅い土坑の底面はこの土層の上面にあたり、深い土坑の多くは下位面まで掘られている。

火山灰流凝灰岩

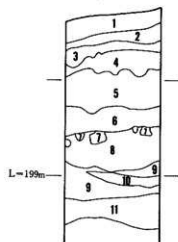
八戸浮石流凝灰岩や大不動浮石流凝灰岩は、福岡段丘や一戸段丘を特徴づける構成層であるが、親久保Ⅳ遺跡以外ではみられない。

各遺跡とも基盤は門の沢層か四ツ役層の凝灰岩である。上部は風化が進み、角礫混じりの層を形成している。親久保Ⅲ遺跡の土坑の多くはこの層まで掘り込まれている。また、同様の例は親久保Ⅱ遺跡でも一部遺構にみられる。各遺構ごとの基本土層(柱状図)は第3図に示している。

5. 一戸町の遺跡

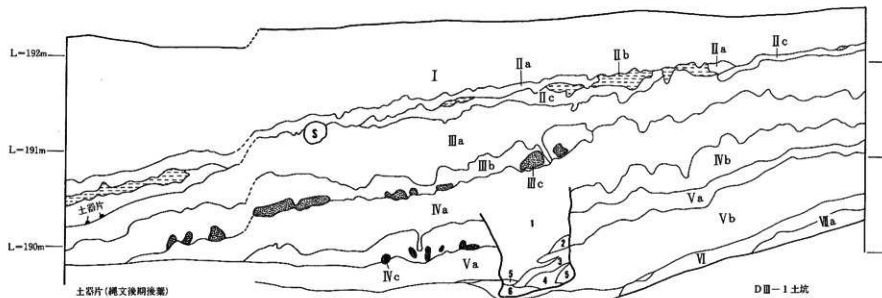
一戸町内の遺跡は、岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧(61年7月、岩手県教育委員発行)によると184箇所である。遺跡の種別は、散布地98(53.3%)、集落跡65(35.3%)、館跡18(9.8%)、一里塚2、古墳1の順となり、散布地と集落跡が全体の88.6%を占めている。

観久保Ⅰ遺跡土層柱状図



1. 7.5YR 2/2 黒褐色 盛土部分
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 盛土上の遺土
3. 7.5YR 2/1 黒色 田耕層土
4. 7.5YR 3/0 暗褐色 中層浮石を含む
5. 7.5YR 6/4 褐色 南部浮石を含む
6. 7.5YR 5/8 暗褐色 南部浮石を含む
7. 10YR 5/8 褐色 中層の南部浮石を含む
8. 7.5YR 4/3 褐色 粘土質火山灰層
9. 7.5YR 6/8 褐色 粘土質火山灰層
10. 7.5YR 4/4 褐色 粘土質火山灰層

観久保Ⅱ遺跡 (A調査区DⅢ区南縁)



土器片 (縄文後期後葉)

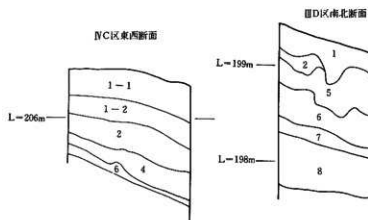
DⅢ-1土坑

- I 10YR 2/1 黒色 耕作土
- IIa 10YR 1.7/1 黒色 十和田火山灰層
- IIb 2.5Y 黄褐色 十和田火山灰層
- IIc 10YR 2/3 黒褐色 土層に多い
- IIIa 10YR 2/2 黒褐色 中層浮石少量含む
- IIIb 10YR 3/3 暗褐色 中層浮石多く含む
- IIIc 2.5Y 暗褐色 陶製浮石層 中

- IVa 10YR 1.7/1 黒色 南部浮石、10%含む
- IVb 10YR 2/2 黒褐色 南部浮石、20%含む
- IVc 10YR 6/4 暗褐色 南部浮石のアラック
- Va 10YR 2/1-2/2 黒色-黒褐色
- Vb 10YR 4/5 褐色
- V 7.5YR 5/4 土に黄褐色 粘性がある
- Va 10YR 5/2 土に黄褐色 粘性あり、塊を含む
- Vb 10YR 5/4 土に黄褐色 粘性あり、塊を含む

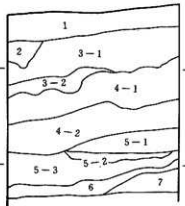
1. 10YR 1.7/1 黒色 南部浮石含む (IVa層)
2. 10YR 2/2 黒褐色 Va層の遺土
3. 10YR 3/2 黒褐色 南部浮石が下にまじる
4. 10YR 2/2 黒褐色 IVa層とVa層の遺土
5. 10YR 3/3 暗褐色 Va層の粘り土
6. 10YR 2/3 黒褐色 Va層とIVa層の遺土

観久保Ⅲ遺跡土層図



- 1-1 10YR 2/1-3/2 黒色-黒褐色
- 1-2 10YR 2/3 黒褐色
- 2 10YR 2/3 黒褐色
- 3 2.5Y 5/3 黄褐色
- 4 10YR 3/1 黄褐色
- 5 10YR 2/2-3/3 黒褐色-暗褐色
- 6 10YR 3/4-4/5 暗褐色-褐色
- 7 10YR 5/6 黄褐色
- 8 5YR 2/3 淡褐色

観久保Ⅳ遺跡基本土層図
ⅢC区東西断面



- 1 10YR 2/2 黒褐色 耕作土
- 2 10YR 2/2 黒褐色 十和田火山灰を含む
- 3-1 10YR 2/2 黒褐色 中層浮石と思われものを含む
- 3-2 10YR 3/2 黒褐色 中層浮石と思われものを含む、縦く結っている
- 4-1 10YR 3/4 暗褐色 遺構、遺物の埋蔵、浮石を含む
- 4-2 10YR 4/4 褐色
- 5-1 10YR 5/6 黄褐色
- 5-2 10YR 5/3 土に黄褐色、砂多
- 5-3 5YR 8/4 黄褐色、砂粒を含む
- 6 10YR 4/6 褐色 浮石を含む
- 7 10YR 6/3 土に黄褐色、砂粒を含む

第3図 基本土層図

遺跡の分布をみると、小井田川流域が最も多く、これに一戸バイパス関連遺跡と鳥越地区の遺跡を含めると70遺跡となる。また、親久保遺跡群の所在する八木沢地区も17遺跡と多く、以上の地域で集落跡と散布地の53.4%を占める。

遺物は殆ど縄文土器であり、集落跡と散布地の87%に当たる142遺跡で縄文土器が採集されている。時期別の遺跡数は、早期2、前期8、中期13、後期26、晩期56であり、時期が降る程多くなっている。これは遺物が表面採集であることに起因すると思われる。最も多い晩期の遺跡は、小井田川流域から鳥越地区にかけて分布し、49遺跡を数える。特に、小井田川と馬淵川の合流点付近に多く、馬淵川右岸の蒔前遺跡は著名である。

発掘調査された遺跡は、蒔前遺跡を除くと、一戸バイパスと東北縦貫自動車道の建設に伴うものである。調査遺跡数は、親久保遺跡群を含めて30遺跡を数える。これらの遺跡については遺跡一覧表に示している。

調査結果をみると、総計592の遺構が検出されている。遺構別にみると、土坑250基(42.2%)、陥し穴状遺構126基(21.3%)、縄文時代の住居跡69棟(11.7%)、古代の住居跡58棟(9.8%)などが多い。

縄文時代の住居跡を時期別にみると、早期2棟、中期53棟、後期9棟、晩期1棟、不明4棟であり、中期の住居跡が76.8%を占める。また、遺物の時期別遺跡数は、縄文時代早期8、前期15、中期17、後期16、晩期17、弥生時代12、土器師16、須恵器8である。これらの資料を手懸に、以下時代別に概略を述べる。

縄文時代

遺構別の検出数

住居跡(縄文)	69	炉跡	3	円形周溝	1
住居跡(弥生)	7	焼土遺構	11	墓墳	1
住居跡(古代)	58	土坑	250	墓	2
住居跡(不明)	3	陥し穴状遺構	126	溝跡	6
住居跡状遺構	8	埋設土器	5	堀	4
掘立柱建物跡	34	立石・配石	3	鍛冶工房跡	1

縄文時代の時期別住居跡数と遺跡

早期	2	小井田III
中期中葉	38	馬場平2、小井田III
中期末葉	15	田中1、田中2、田中4、田中5、子守A
後期前葉	2	親久保II(B)
後期中葉	1	堀切
後期後葉	6	小井田IV、堀切、竹林
晩期中葉	1	堀切
不明	4	親久保II(B)、沼山、上野D

早期は小井田Ⅲ遺跡で小集落がみられる。遺物は、平船Ⅲ遺跡(白浜式主体)、小井田Ⅲ遺跡(寺ノ沢式主体)で比較的多く、周辺でも少量出土している。なお、親久保Ⅰ遺跡の西方3kmに位置する二戸市福田の馬立Ⅰ遺跡では、住居跡14棟(主に寺ノ沢式～吹切沢式)が検出されている。

前期は、遺物が少量出土するものの、住居跡は検出されていない。

中期は、前葉の様子は明らかではないが、中葉には馬場平2遺跡で大きな集落が営まれている。後葉になると、馬場平2遺跡近くのやや高い地形面(一戸段丘)に載る田中遺跡や子守A遺跡で2～6棟検出されており、小規模な集落が分散してみられるようになる。

後期の住居跡は9棟と少なく、集落の様子は明らかではないが、前葉から中葉にかけて、中期と異なり、馬淵川左岸の八木沢地区で小集落がみられる。後葉には、八木沢地区の他に小井田Ⅳ遺跡でも集落が営まれるようになる。

晩期に属する遺跡は多く、遺物も葺前遺跡を中心に多く出土している。しかし、住居跡は堀切遺跡の1棟だけであり、集落についての実態は不明に近い。

弥生時代

住居跡は、馬淵川右岸の小井田Ⅲ遺跡や上野B遺跡などで7棟検出されているだけである。しかし、堀切、竹林、親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡でも遺物が出土しており、馬淵川左岸でも小さな集落が営まれていたと思われる。

歴史時代

古代の住居跡は、一戸バイパス関連遺跡で多く検出され、高田和徳氏によって、Ⅰ期(8世紀前半)→Ⅱa期(8世紀後半)→Ⅱb期(9世紀前半)→Ⅲ期(9世紀後半)→Ⅳa期(10世紀前半)→Ⅳb期(10世紀後半)とする年代観が示されている。今回、親久保Ⅱ遺跡のA調査区では、白頭山火山灰が埋土下位に堆積する住居跡が検出されており、この住居跡は、Ⅳb期に後続する可能性をもつものである。

以上、住居跡と遺物を中心に述べたが、検出数の多い遺構に土坑と陥し穴状遺構がある。いずれも、時期は縄文時代に属する遺構が主体と思われる。

土坑は、小井田Ⅲ、田中2、親久保Ⅱ、親久保Ⅲの各遺跡で多く、4遺跡で159基(63.6%)である。地形的には、小高い丘や稜線部につくられているものが多く、フラスコ形の土坑が主体であるが、同一遺跡内で住居跡との占地や対応関係が明確な例は少ない。これは調査範囲が限定されていることも一因である。

陥し穴状遺構は、小井田Ⅲ、親久保Ⅲ遺跡で多く、2遺跡で102基(81%)である。土坑以上に地形との関連性が強く、段丘や丘陵の先端部のけもの道に沿ってつくられるものが多い。

一戸町内の発掘調査された遺跡一覧表

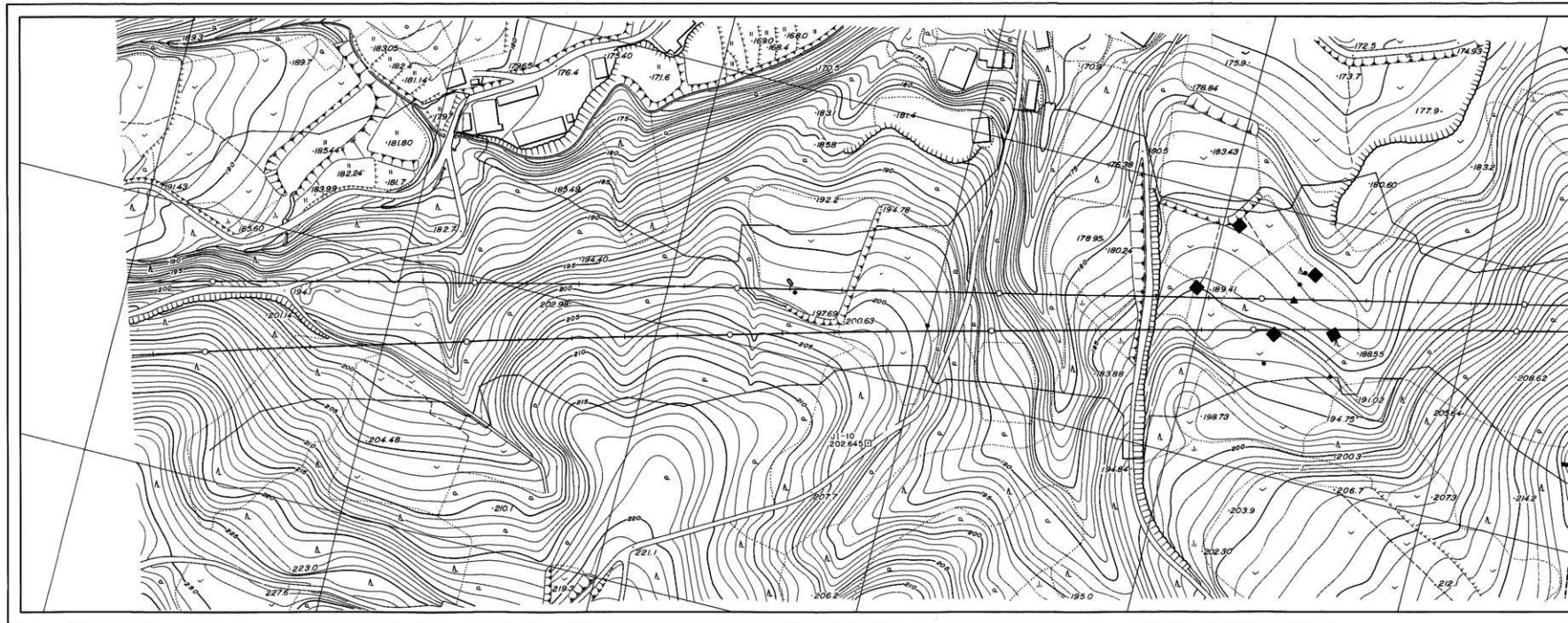
No	遺跡名	検出遺構	出土遺物	備考
1	堀切	住居跡(縄文3、不明3)、土坑4 焼土1、埋設土器1	縄文土器(早、前、中、後、晩期) 弥生土器、土師器、石製品	標高205~227mの丘陵地集野
2	竹林	住居跡(縄文1、古代1)	縄文土器(中、後期)、弥生土器、石器	標高185~191mの岩盤段丘面?
3	親久保1	土坑2、陥し穴1、溝跡1	縄文土器(後期)、弥生土器、石器	標高194~203mの丘陵北斜面
4	親久保II (A調査区)	住居跡(古代5)、土坑4、陥し穴1	縄文土器(前、中、後、晩期) 弥生土器、土師器、石器、鉄製品	標高185~195mの丘陵北斜面 古代住居に白頭山火山灰が入る
5	親久保II (B調査区)	住居跡(縄文4)、住居跡状1、焼土1 土坑20、陥し穴1、埋設土器1	縄文土器(前、中、後、晩期) 弥生土器、石器、土製品、土偶	標高210~222mの丘陵地
6	親久保III	土坑20、陥し穴27	縄文土器(早、前、中、後、晩期) 弥生土器、石器、土製品、石製品	標高192~206mの丘陵地
7	親久保IV	土坑1	縄文土器(早、前、晩期)、石器	標高165~185mの一戸段丘面
8	藪前(台)		縄文土器(後、晩期)、石器、土製品	越田横段丘~沢田段丘面
9	藪前A	遺構、遺物とも検出されない。		北東方向が遺跡の主体か?
10	小井田A	遺構、遺物とも検出されない。		
11	小井田III	住居跡(縄文3、弥生3) 土坑28 掘立柱建物跡1、陥し穴1、溝1 近世基1	縄文土器(早、中、晩期) 弥生土器、石器	一戸段丘~岩盤段丘面 早期の住居跡がある。
12	小井田IV	住居跡(縄文4)、土坑9、焼土5	縄文土器(中、後、晩期) 弥生土器、土製品、石器	沖積平野の扇状地
13	平船III	土坑5、陥し穴5、溝跡1	縄文土器(早、前、後、晩期) 土師器、陶器、石器	標高165~167mの岩盤段丘面 縄文土器は早期主体
14	一戸城	住居跡(古代9、中世16) 土坑5 掘立柱建物跡(中世20)、陥し穴2、堀4	縄文土器(中、後、晩期)、石器、土師器 須恵器、陶磁器、鉄製品、埴輪、古瓦 土製品、硯、砥石、木製品、銅引口	標高1800前後の一戸段丘面
15	北部B	住居跡(古代11)、住居跡状1、溝1 土坑5、掘立柱建物跡(近世1) 陥し穴2	縄文土器(早、前、後、晩期)、土師器 須恵器、土製品、鉄製品、古銭、引口	標高177~181mの一戸段丘面
16	北部A	住居跡(古代4)、土坑2 掘立柱建物跡(近世1)	縄文土器(早、前期)、土師器、土製品 鉄製品、石器	標高165~167mの一戸段丘面
17	上野D	住居跡(縄文1、古代4)、土坑4	土師器、須恵器、土製品、鉄製品、石器	標高170~174mの一戸段丘面
18	上野C		縄文土器、古銭	南側の尾根頂部の遺跡の主体か?

No	遺跡名	検出遺構	出土遺物	備考
19	上野 B	住居跡(弥生3、古代3)土坑7 陥し穴5、竃土4、配石遺構1	縄文土器(前、中、後、晩期) 弥生土器、土師器、須恵器	標高169~173mの一戸段丘面
20	上野 A		縄文土器(中、晩期)	東側の平垣部が遺跡の主体か?
21	田中 6		縄文土器	東側が遺跡の主体か?
22	田中 5	住居跡(縄文6、古代3)、土坑2 住居跡状(古代3)、陥し穴1	縄文土器(中期)、土師器	標高177~179mの一戸段丘面
23	田中 4	住居跡(縄文2、古代7)住居跡状1 竃立建物跡1、鍛冶工房跡1 土坑2、墓壇1、溝1	縄文土器(中、晩期)土師器 須恵器、陶器、石器、土製品 鉄製品、古銭、石臼、炭化米	標高178~181mの一戸段丘面
24	田中 3	住居跡(古代1)、生居跡状(古代1)、近 世1)、土坑4、陥し穴1、墓1	縄文土器(前、後期)、土師器、須恵 器 石器、土製品、古銭、炭化米	標高179~190mの一戸段丘面
25	田中 2	住居跡(縄文3)、土坑12	縄文土器(中期)	標高191~193mの一戸段丘面
26	田中 1	住居跡(縄文2)、配石遺構1 伊跡2、土坑37	縄文土器(早、前、中、晩期) 弥生土器、土師器	
27	馬場平 2	住居跡(縄文37、古代4)、土坑4 埋没土器3、立石遺構1	縄文土器(前、中、後、晩期) 土師器、須恵器、石製模造品	標高167~168mの福岡段丘面
28	馬場平 1		縄文土器、土師器	一戸段丘面にある
29	子守 B	遺構遺物とも検出されない		
30	子守 A	住居跡(縄文2、古代4)、土坑2 溝2	縄文土器(前、中、後期) 土師器、須恵器、鉄製品	標高164~167mの一戸段丘面
	上野	住居跡(弥生1、古代3)、土坑9 門形溝跡1	縄文土器(前、中期)、弥生土器 土師器、石器	(上野B付近)
	沼山	住居跡(縄文1)、土坑5、炉跡1	縄文土器(前、後、晩期)弥生土器	小倉山山麓北側福原辺り部分

注：住居跡は陥穴住居跡である。陥し穴は陥し穴状遺構である。

(参考文献)

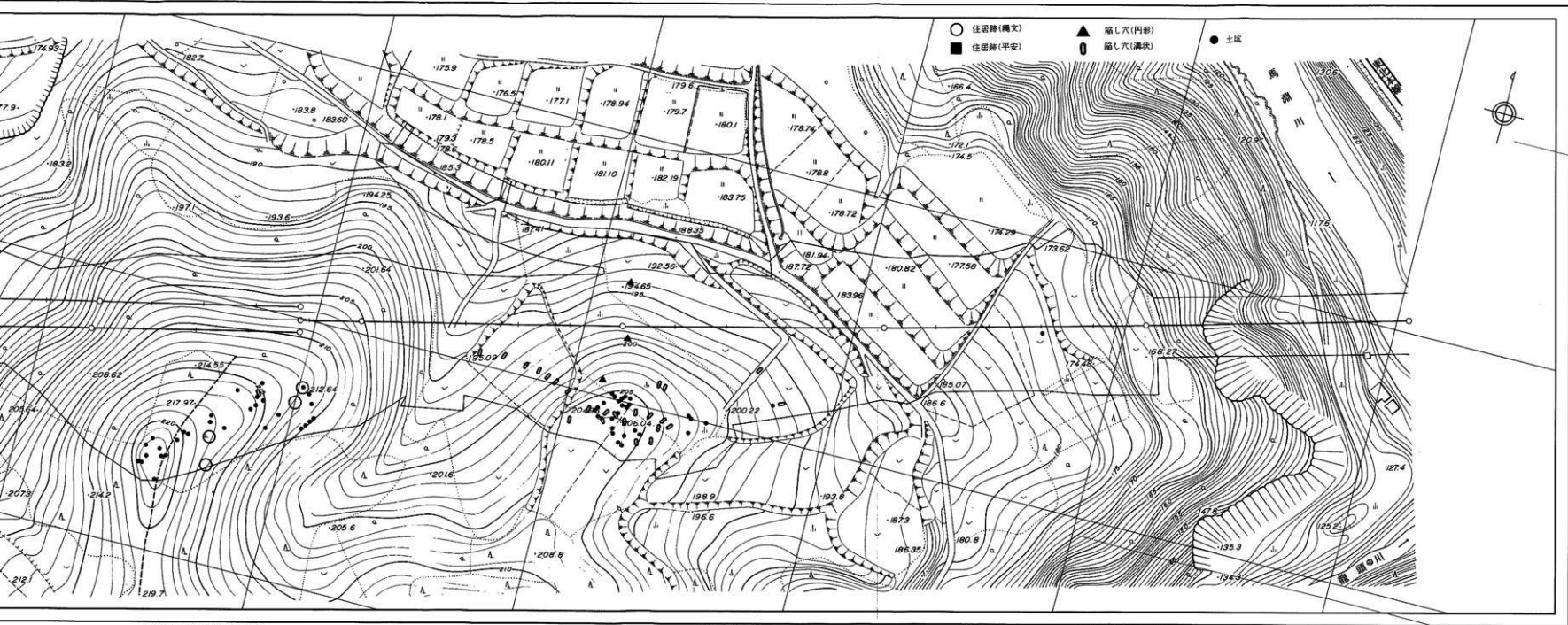
- 高田 和徳(1981)：『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I・II・III・IV(9・10・14~30の遺跡)』
高橋与右衛門(1986)：『堀切・竹林遺跡発掘調査報告書、若手歴史文化振興事業埋蔵文化財調査報告書第107集』
橋沢 誠郎(1985)：『小井田山遺跡発掘調査報告書、若手歴史文化センター文化財調査報告書第85集』
橋沢・小平(1983)：『小井田IV遺跡発掘調査報告書、若手歴史文化センター文化財調査報告書第69集』
渡辺 洋一(1984)：『平畑山遺跡発掘調査報告書、若手歴史文化センター文化財調査報告書第76集』
高田 和徳(1985)：『上野遺跡昭和59年度発掘調査報告書、一戸町文化財調査報告書第13集』
橋沢 誠郎(1983)：『沼山遺跡発掘調査報告書、若手歴史文化センター文化財調査報告書第50集』



親久保Ⅰ遺跡

親久保Ⅱ遺跡(A調査区)

第4図 遺跡周辺の地形図と遺構分布



観久保Ⅱ遺跡(B調査区)

観久保Ⅲ遺跡

観久保Ⅳ遺跡

観久保周辺の地形図と遺構分布

III 調査と室内整理の方法

1. 調査方法

(1) 地区割

4遺跡とも、東北縦貫自動車建設予定地内の道路中心杭を使用して地区割を行った。

親久保I遺跡では、下り線STA240+80 (X=25037.9767, Y=37803.8216)

下り線STA241+00 (X=25042.4385, Y=37823.3716)

の2点を結び、その延長線と平面直角座標との交点P (X=25037.1021, Y=37800.0000)を座標原点とした。P点で直交する線を基準に東西南北25m間隔の大区画を設定し、西から東にA・B・C・Dのアルファベットを、北から南へI・II・IIIのローマ数字をそれぞれ付し、両者の組み合わせによって大区画名をAII区・BIII区のように表わした。また、大区画を5mごとに区画し、西から東へa・b・c……yの小文字を付し、小区画名をAIIa・AIIb……のように表わした。

親久保II遺跡のA調査区の場合も親久保I遺跡と同じ方法で地区割を行った。

下り線STA241+80 (X=25060.2858, Y=37901.3014)

下り線STA242+20 (X=25069.2095, Y=37940.2933)

の2点を基点に、座標原点P (X=25059.9880, Y=37900.0000)を求めた。大区画や小区画の名称は親久保I遺跡と同様である。

B調査区の場合は、上り線STA243+00 (X=25076.3746, Y=38017.9927)

上り線STA243+40 (X=25085.5551, Y=38056.9249)

の2点を結び基準線とした。STA243+00を座標原点とし、基準線と直交する20m間隔の大区画を設定した。大区画には、北から南にIII・IV・Vのローマ数字を、西から東へB・C・D・E・Fのアルファベットをそれぞれ付し、III区・VD区のように表わした。また、大区画を5mごとに区画し、北から南へa・b・c……pの小文字を付し、小区画名をVCa・VCb……のように表わした。

親久保III・IV遺跡の場合は、下り線STA245+00 (X=25127.7269, Y=38214.1352)

下り線STA244+60 (X=25118.3003, Y=38175.2618)

の2点を結び基準線とした。STA245+00を中心に基準線と直交する20m間隔の大区画を設定し、北から南にI・II～Vのローマ数字を、西から東へA・B・C……M・Nのアルファベットをそれぞれ付し大区画名をIII区・IVE区のように表わした。小区画の設定と呼称は親久保II遺跡のB調査区と同様である。なお、遺構名は、各遺跡とも大区画ごとに遺構の種類と検出順位を組み合わせて、AII-1住居跡、BIII-1土坑のように表わした。

(2) 粗掘・精査

親久保Ⅲ遺跡は60年度に粗掘と検出作業を行い、翌年度に精査した。その他の遺跡は61年度に調査した。検出作業に伴う表土除去については、親久保Ⅰ遺跡は人力で、親久保Ⅱ遺跡のB調査区はバックホーで、その他は人力とバックホーを併用して行った。親久保Ⅱ遺跡のA調査区では、北側山林(CⅡ区)でバックホーを使用した。親久保Ⅲ遺跡では、尾根頂部(Ⅳ～Ⅴ、C～D区)を人力で行い、その他はバックホーを使用した。親久保Ⅳ遺跡では馬淵川左岸の崖近くを除き、バックホーで表土を除去した。

検出された遺構には、大区画ごとに遺構の種類に通し番号を付して呼称した。検出作業がある程度進んだ段階で、検出作業と併行して精査を行った。精査にあたっては、住居跡は4分法、土坑・陥し穴状遺構などは2分法を原則としたが、残存状況の不良な住居跡の場合は2分法で行った。出土遺物は、遺構名、地区名、層位を記入して取り上げた。

(3) 実測・写真撮影

実測は簡易造り方測量で行った。実測図は縮尺の20分の1を基本にした。遺構のレベルは50cm間隔で計測した。

写真撮影は、6×7cm版1台(白黒)と35mm版2台(白黒・カラーリバーサル)の3台を1セットとして使用し、埋土断面・全景・遺物出土状況等を撮影した。

2. 室内整理の方法

(1) 作業手順

遺物の水洗いと注記の一部を発掘現場で行った。室内整理では、残っている遺物の注記から始め、次いで接合・復元、石膏入れの順に進めた。これらの作業が終了した段階で遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順に作業を進め、最後に図版と写真図版を作成した。これらの作業と併行して計測、諸鑑定、原稿作成を行い報告書に掲載した。

(2) 図版・写真図版

遺構図版の縮尺は40分の1を原則としたが、カマド断面や炭化材断面は20分の1である。

遺物図版の縮尺は下記の縮尺を原則とし、その他は特記するか、スケールを付した。

土器実測図 3分の1 土器片拓影 3分の1 (小さいものは2分の1)

剥片石器 2分の1 礫石器 3分の1又は6分の1

遺構配置図の縮尺は400分の1である。

写真図版の縮尺は遺構・遺物とも不定である。

図版に使用したスクリーントーンや記号は第5図のとおりである。

P₁ P₂ P₃ ----- 柱穴状ピット

P₀ または □ → 土器

S または、▲ → 石

→ カマド(炉)の焼土:

→ その他の焼土

→ 炭化材

← 断面観察方向

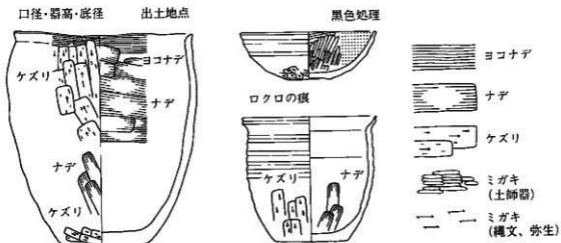
→ 炭化物(粉炭)

→ カヤ

→ 白頭山火山灰

→ 掘り方

→ 掘りすぎ



第5図 図版・土器実測図凡例

(3) 土器分類

親久保Ⅰ～Ⅳ遺跡出土の土器分類は次のとおりである。なお細分は遺跡によって異なる。

- I群 縄文時代早期の土器
- II群 縄文時代前期の土器
- III群 縄文時代中期の土器
- IV群 縄文時代後期の土器
- V群 縄文時代晩期の土器
- VI群 弥生時代の上器
- VII群 古代(平安時代)の土器

IV 親久保 I 遺跡

所在地	二戸郡一戸町字親久保92ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間	昭和61年4月14日～5月25日
整理年月日	昭和61年11月1日～11月31日
調査対象面積	2,970㎡
発掘調査面積	2,970㎡
遺跡番号・略号	J E 19-1270・OK I-86
調査担当者	佐々木嘉直・酒井 宗孝
協力機関	一戸町教育委員会

1. 調査の経過

本遺跡は南から北に下る山腹の斜面上にある。現状は畑地で、調査範囲は不整な四辺形をしており、東西最大76m、南北最大55mである。調査範囲の地形面は東西に二分され、東側は尾根状を呈し、西側は削平された谷状の地形面である。東西の畑地境は1～3mの段差があり、西側が低い。また、西側の畑地は、南側の山腹も大きく削られている。

遺跡内に散在している草木を撤去した後、表土が全体に薄かったので人手で粗掘りを進めた。最初に、東側畑地の下位斜面を土捨場にするため粗掘りと検出作業を進めた。この付近は盛土と旧表土が0.5～1mもあり時間が要したが、遺構は検出されなかった。また、出土遺物も少なく、磨製石斧1点と数点の縄文土器片が得られた。そこで下位斜面を土捨場にして、斜面上位から粗掘りと検出作業を進めた。その結果、黒褐色土と褐色土が分布し、遺構と思われる箇所が10箇所ほど検出された。次に西側の畑地の粗掘りと検出作業を行った。西側の場合は斜面下位の調査範囲外の畑地を土捨場として確保したため、斜面上位から下位方向に作業を進めた。その結果、中央部には幅10m余りの埋没した沢があり、谷頭付近に数箇所の遺構と思われる黒色土の分布がみられた。精査は検出作業と一部併行しながら進めた。遺構と思われた箇所の多くは風倒木であった。

2. 検出された遺構と遺物

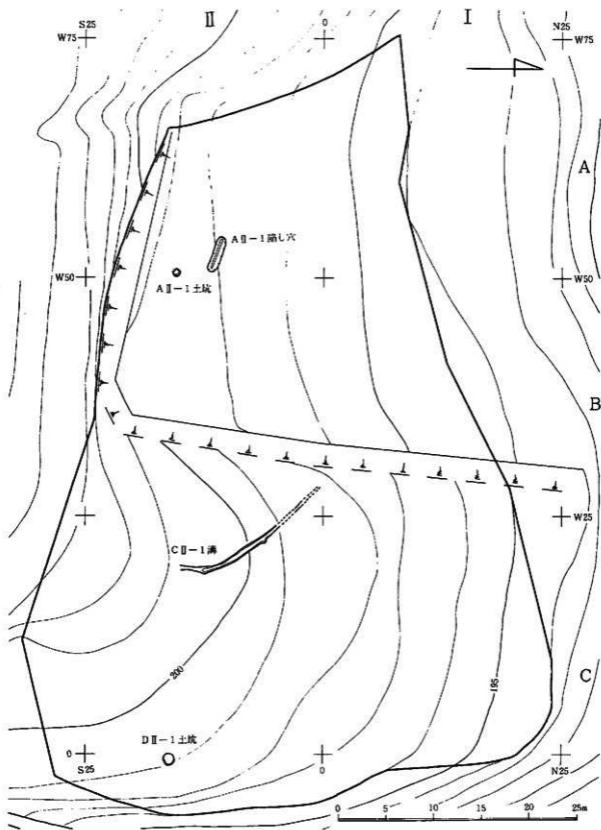
調査区の東側では遺構と思われた箇所は風倒木であった。遺構は、DⅡ区の浅い土坑1基とCⅡ区の小さい溝跡1条である。西側では、遺構として沢頭付近の浅い土坑1基と溝状の陥し穴状遺構1基がある。遺物は少なく、調査区の東側からは、縄文土器若干と欠損した磨製石斧1点を得られた。土器はほとんど表採されたものである。西側では壺と思われる弥生時代の土器片、石鏃1点、剥片27点を得られた。土器片と剥片は、十和田a火山灰の下位にある黒褐色土（親久保Ⅱ遺跡 基本土層Ⅲa層に相当）中から得られたものである。

(1) 土坑

検出された2基は、調査区東側の谷に下る東斜面上位と調査区西側の埋没した沢頭付近に位置する。2基とも浅い土坑であり、時期決定資料を欠くものである。

AⅡ-1土坑（図版2、写真図版2）

調査区西側中央に確認された埋没した沢頭付近で検出された。開口部の平面形は円形に近く、直径90×88cmである。底部は南西壁付近が攪乱されているため、平面形は不整円形に近く、直径84×76cmである。深さは中心部で26cmである。断面形をみると、壁は南西壁を除き外傾ないしは直に立ち上がる。底面は緩い凹凸が僅かにあるもののほぼ平坦である。埋土は、粒径2～



図版 1 遺構配置図

3mmの浮石まじりの黒色の単層である。出土遺物はなく、時期は不明である。他の遺構との重複はない。

D II-1 土坑 (図版2, 写真図版2)

調査区東側の谷に下る東斜面上位で検出された。平面形は円形に近く、開口部径132×120cm、底部径126×116cm、深さは中心部で24cmである。断面形をみると、壁の立ち上がりは西側で直に近く、東側では外傾している。底面は平坦でかたく、西から東に6°ぐらい傾く。埋土は、中礫浮石のまじる黒褐色の単層に近く、壁際には壁の崩落土がみられる。出土遺物はなく、時期は不明である。他の遺構との重複はない。

(2) 陥し穴状遺構

A II-1 陥し穴状遺構 (図版2, 写真図版2)

調査区西側中央に確認された埋没した沢頭付近で検出された。A II-1 土坑の北約3mの所に位置し、等高線と斜交するようにつくられている。開口部の平面形は、西北西-東南東方向に長軸をもつ長楕円形(溝状)、底部は幅が狭く帯状を呈する。規模は開口部が388×96cm、底部が334×14cm、中心部の深さは116cmである。長軸の断面形では、底面かほぼ平坦である。東壁は底面から真直ぐ立ち上がった後外傾する。西壁は底面から内湾気味に立ち上がった後中端から外反する。短軸の断面形は、平坦な底部から外反気味に立ち上がりV字状を呈する。

埋土は、上位から下位に黒色土、黒褐色土、暗褐色土で構成され、自然堆積の状況を示している。

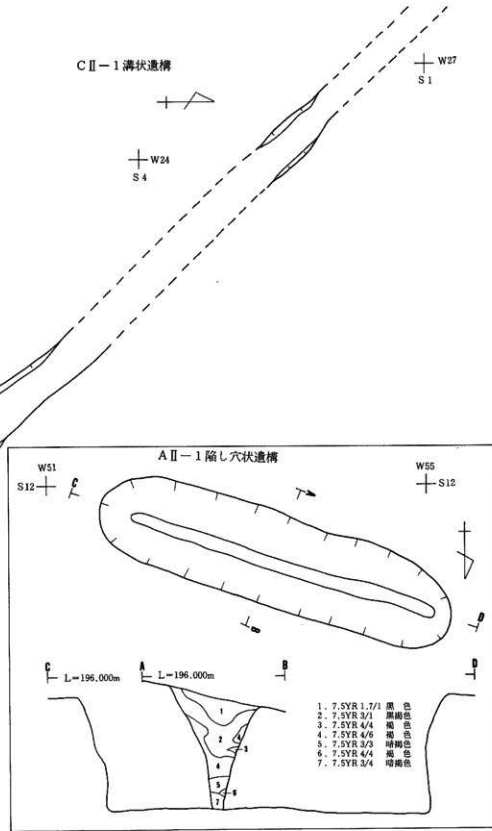
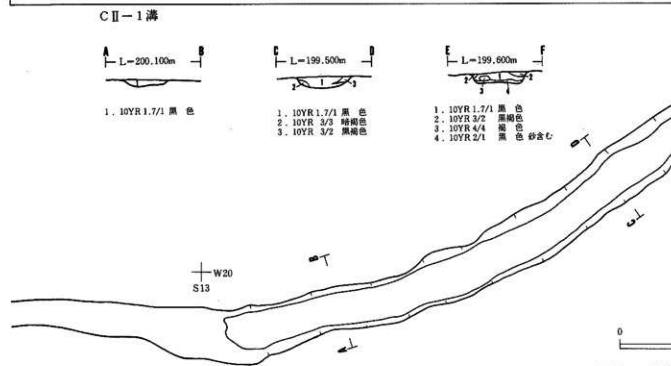
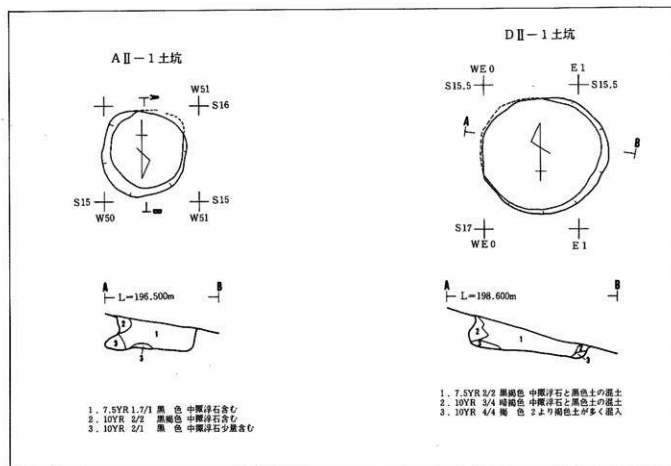
出土遺物はなく、時期は不明である。他の遺構との重複はない。

(3) 溝跡

C II-1 溝跡 (図版2, 写真図版1)

調査区東側のC II区西側からB II区にかけて検出された。稜線部やや西側のW20・S15m付近に始まり、北へ3mほど下った後次第に北北西方向に湾曲し、S9m付近から北西方向に直線的に下る。W24・S4m付近から底面のかたい部分だけが残存するようになり、W28・S1m付近で消滅する。確認された長さは17.5m、幅は最大60cm、深さは最大12cmである。壁は外傾する立ち上がりを示し、断面形は浅い皿状を呈する。底面は部分的に舟底状を呈する部分もあるが、全体的に平坦である。底部の幅は30~40cmである。

埋土は黒色土の単層部分が多いが、部分的に壁際に黒褐色土や暗褐色土がみられる。出土遺物はなく、時期は不明である。他の遺構との重複はない。



図版 2 遺構図

(4) 出土遺物

遺物には縄文土器・弥生土器・石器がある。いずれも遺構外からのもので、出土量は約2kgと少ない。

土器（図版3、写真図版3）

1は、調査区西側の埋没した沢から一括して出土した弥生土器である。口縁部・体部上半部は接合しないが、出土状況や胎土から同一個体と考えられる。大型の壺で、体部は外傾して立ち上がり、中央に最大径を有した後、内湾して窄む。頸部の形態は不明であるが、破片から推定すると、いくぶん外反するものと考えられる。口縁部は外傾して開く。体部中央に2本の沈線と連続して施される下向きの弧状文が回り、上半部と下半部を区画している。上半部には、沈線によって渦巻状の文様が描かれ、これにRL単節縄文が部分的に充填されている。下半部には、同じ縄文が縦走する。頸部には2～3本の交互刺突文が回り、これらに狭まれた部分にも縄文が施されているようである。口縁部上端は、指で摘み出したような凹凸が連続し、凹部には短い沈線、凸部には不整な刺突文をもつ。また、口唇部には縄文が施されている。2は粗製の弥生土器片で、地文はRLの単節縄文が横走し、内面には多量の炭化物が付着している。

3～7は縄文土器片である。3・4は器面がよく磨かれ、波線による文様をもつ。5は地文に不整な縷糸文が施された体部片である。6はL R単節斜縄文をもつ口縁部片で、口唇部はいくぶん肥厚する。7はL1段の無節縄文が帯状に施された体部片である。これらの土器片は、全て縄文時代後期に位置づけられるものである。

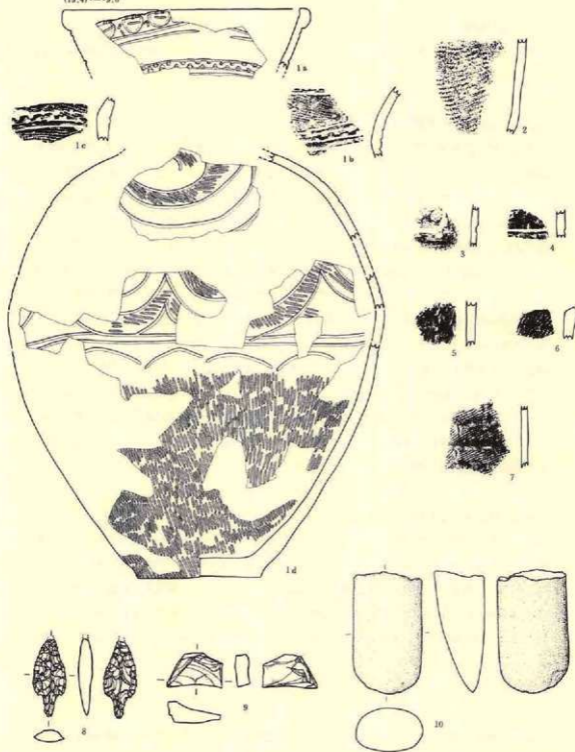
石器（図版3、写真図版3）

8は有茎の石鎌で、先端部を欠く。両面からの細かい加工によって整形されており、やや厚味をもつ。9は剝片で、使用痕などは認められない。10は基端を欠く磨製石斧である。刃部形態は円刃で、基部には開きがない。基部の断面形は楕円形を呈し、側縁部に稜はもたない。この他に、調査区西側の沢部分から、剝片27個が一括して出土した。石質はいずれもチャートで、同一母岩からの剝片と考えられるが接合はしない。全体に亀裂が多く入り、良質の素材とは考えられない。

3. まとめ

調査区域の大部分が削平されていたが、若干の遺物が発見されたことから、縄文時代後期から弥生時代にかけての遺跡であることが判明した。地形面が削平されている点を考慮しても住居跡の存在した可能性は乏しく、集落に隣接する散布地や狩場跡であろう。

(19.4) 9.6



图版3 出土遗物

写 真 图 版



調査風景



基本土層



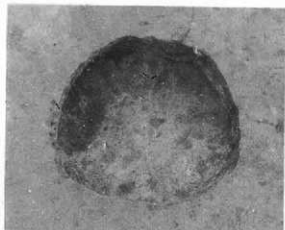
C II-1 溝跡

(断面)

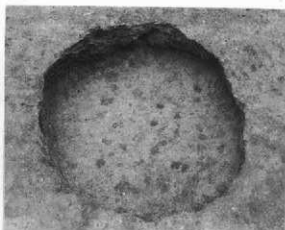


(全景)

写真図版1 遺溝(1)



A II-1 土坑 (平面)



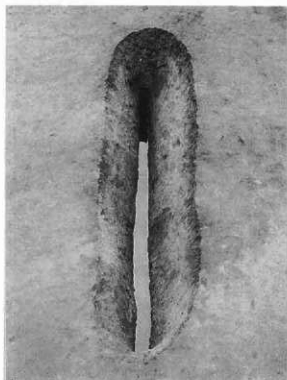
D II-1 土坑 (平面)



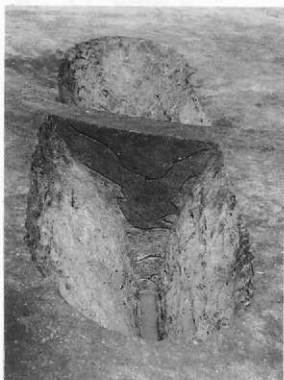
(断面)



(断面)

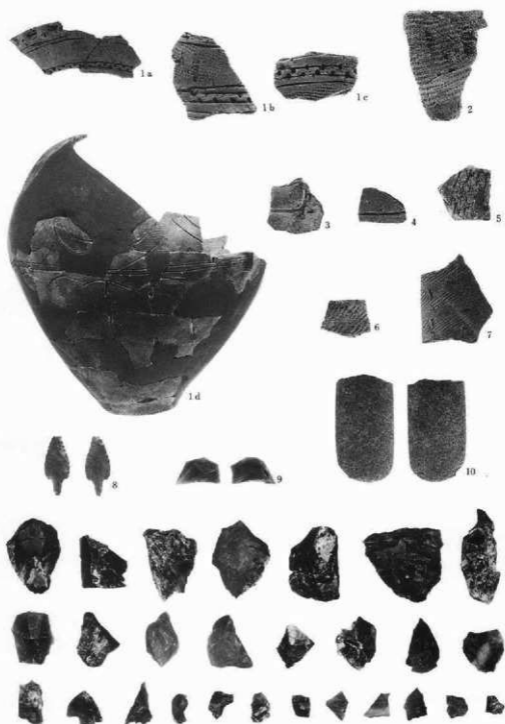


A II-1 陥し穴状遺構 (平面)



(断面)

写真図版 2 遺構(2)



写真図版3 出土遺物

V 親久保II遺跡

所在地	二戸郡一戸町字親久保112ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間	昭和61年5月26日～8月31日
整理年月日	昭和61年11月1日～62年3月31日
調査対象面積	6,740㎡
発掘調査面積	6,740㎡
遺跡番号・略号	J E 19-1189・OK II-86
調査担当者	佐々木嘉直・渡辺洋一・酒井宗孝
協力機関	一戸町教育委員会

1. 調査の経過

親久保Ⅱ遺跡の調査範囲はA調査区とB調査区に分かれる。B調査区は、親久保Ⅱ、Ⅲ遺跡の調査を進めている際に、両遺跡の間に位置する尾根で縄文土器と弥生土器が多く表採されたため日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、新しく追加された調査区である。そこで、当初の調査範囲をA調査区、新しく追加された分をB調査区として調査を進めた。

A調査区は北に下る山腹斜面の裾部近くにある。現状は畑地・桑畑・山林で、調査範囲は不整な六角形をしており、東西最大70m、南北最大70mである。調査範囲の南側は畑地で北側との境には1～2mの段差がある。北側の西半分は比較的平坦な尾根部分で桑畑として利用されている。東半分は沢に下る緩斜面で唐松林となっており、北側の畑地との境には1～3mの段差がある。そのため、この段差を利用して下位の畑地を土捨場にした。

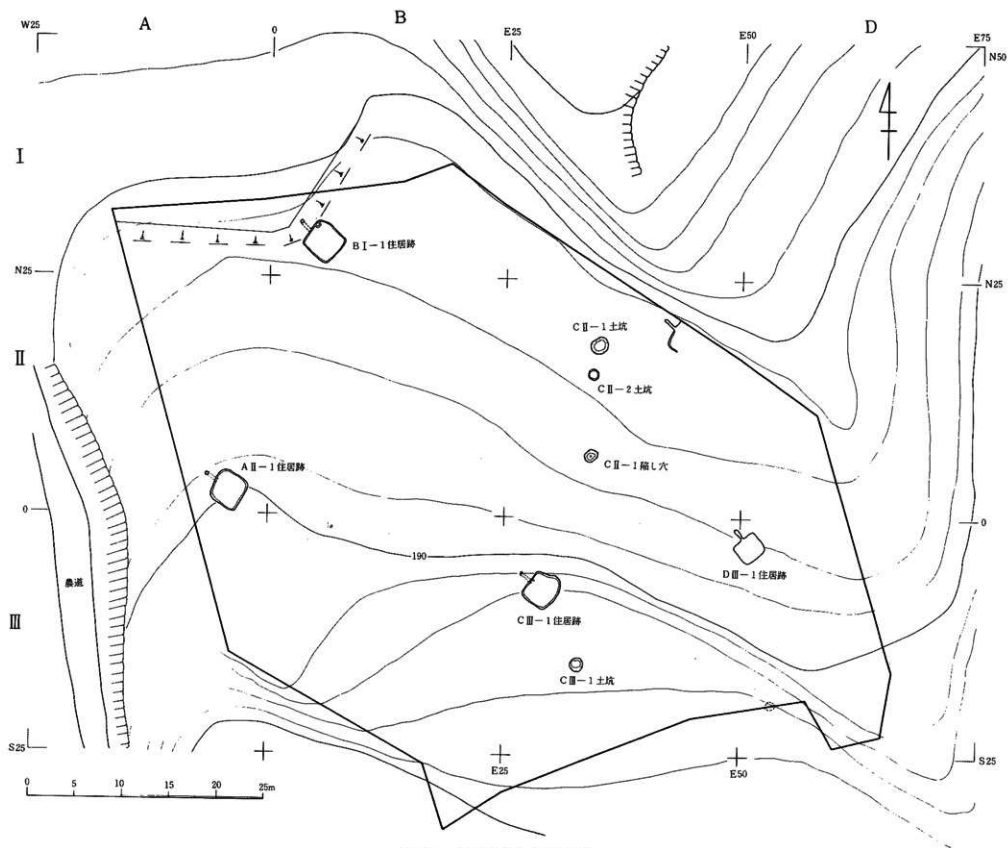
遺跡内に残されていた立木の伐採と併行して、雑木の撤去と焼却作業を行った後、南側の畑地、北側の桑畑、北側の山林の順に粗掘と検出作業を進めた。山林部分はバックホーで、それ以外は人手で行った。その結果、BⅡ区には2本の地割れがあり、十和田a火灰など埋没していた。また、東縁のDⅡ区付近の沢一帯に上流からの土石流がみられた。遺構と思われる箇所は10箇所ほど検出された。住居跡、土坑の順に精査を進めながら、B調査区の調査も併行した。

B調査区は北東に下る尾根上にある。現状は山林である。調査区の中心は稜線部分であり、調査範囲は不整な楕円形をしており、長さ89m、最大幅38mである。南斜面、稜線部、北斜面の順にバックホーで表土を除去した。主として北斜面下位を土捨場にした。検出作業は東西二手に分かれて、稜線部から南斜面、稜線部から北斜面の順に進めた。その結果、遺構と思われる箇所が40箇所ほど検出された。精査は遺構の種類に関係なく、調査区の西側から東へ進めた。なお、調査と一部併行して路線内の立木の伐採・搬出作業や沢の排水工事、工事用道路の工事などが行われたため、特に他業者との調整や安全対策に留意した。

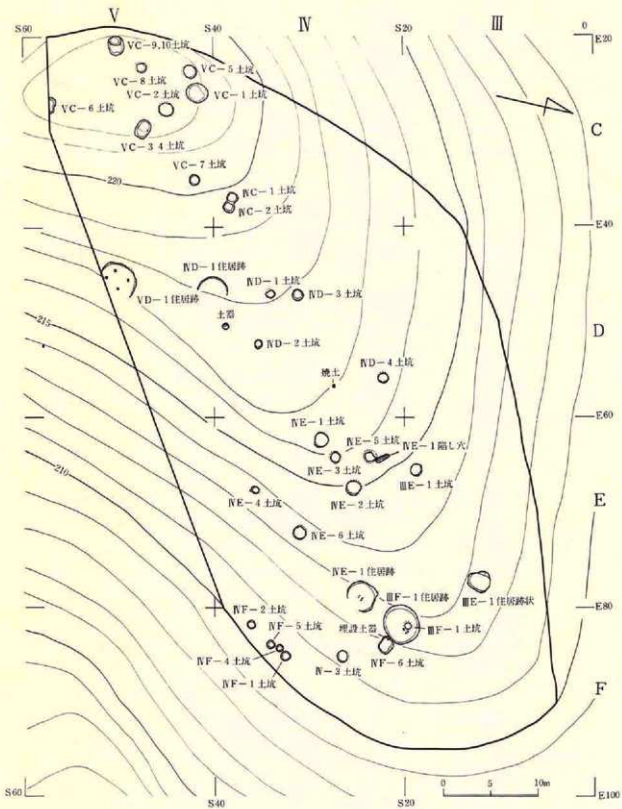
2. 検出された遺構と遺物

本遺跡の発掘調査で検出された遺構は、A調査区では竪穴住居跡5棟と円形の陥し穴状遺構1基含む土坑5基である。B調査区では竪穴住居跡4棟、住居跡状遺構1棟、土坑3基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構1カ所、埋設土器1カ所である。両調査区で合計48遺構である。

出土遺物は、A調査区では住居跡から出土した土師器をはじめ、遺構外出土の縄文土器片と割片がある。その他に寛永通寶4点と金属製品1点がある。B調査区では遺構内外から出土した縄文土器や弥生土器がある。その他に石器48点、土製品26点がある。



図版1 遺構配置図 (A調査区)



图版2 遺構配置図 (B調査区)

(1) A調査区の竪穴住居跡

検出された5棟の竪穴住居跡は南側の畑地で1棟、北側の桑畑で2棟、北側の山林で2棟検出された。分布をみると19～36m間隔で東西に長い五角形の配置を示している。完掘したのは3棟であり、いずれも埋土下位に白頭山火山灰が堆積している。5棟とも北西壁中央付近にカマドをもつ焼失住居跡であり共通点が多い。時期は平安時代後葉と思われる。

AⅡ-1住居跡（図版3・4、写真図版4・5）

調査区の最も西側に位置し、北側桑畑の南縁で検出された。埋土下位に白頭山火山灰のはいった焼失住居跡である。カマド付近を中心に出土した土器片は、24m離れたBⅠ-1住居跡から出土したものと接合している。

〈古地〉北に僅かに下る山腹斜面の裾部を占地し、東西に低くなる橋状の地形面上につくられている。BⅢ区の地割れに沿って形成され埋没谷は、遺構の南縁付近で北西から北東へ湾曲しているため、斜面上位からの流水は遺構に入りにくいと思われる。

〈検出状況〉黒色～黒褐色の乾きにくい不整形な箇所があった。北側が直線的であるほかは不鮮明なプランであったが、検土杖で調べると焼土があり、深さも一定していることから住居跡として調査を進めた。

〈平面形・規模〉平面形はやや歪んでいるが正方形に近い。規模は床面で北西-南東方向、北東-南西方向とも3.2mである。床面積は9.24㎡である。

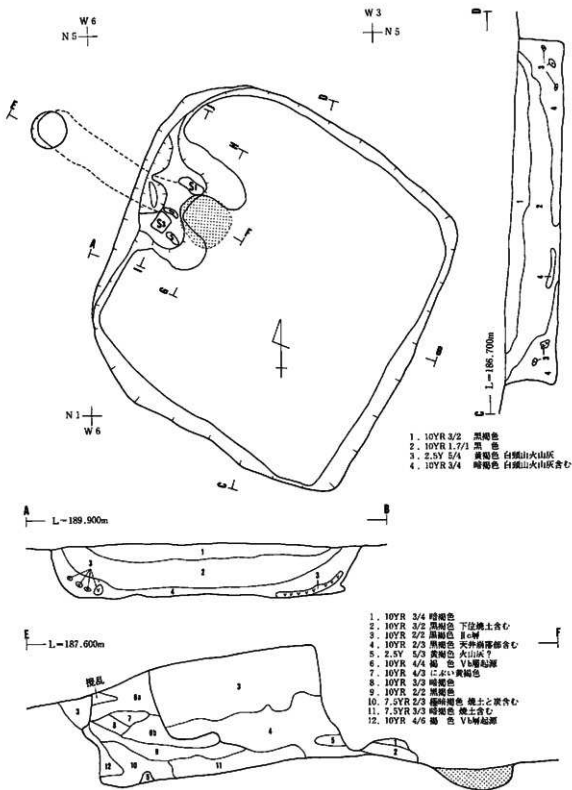
〈埋土〉上位から黒色、黒褐色、黄褐色、暗褐色の土層で構成される自然堆積層である。黄褐色の白頭山火山灰は、壁近くでは最大5cm位の厚さで床面に落ち込むように堆積している。断面図作成時は掘り足りず最下層には焼土や炭化材を含む層がある。

〈壁〉上位は崩落しているので不正確であるが、下位は直に近い。VI層付近まで掘り込まれており、西壁以外の壁面下位は床面から15cmほどの高さまで良く焼けている。壁高は40～65cmあり、南壁が最も深い。

〈炭化材〉炭化材はカマド付近を除き住居跡の全域に分布している。東半分の炭化材は床面から5cmほど浮いているものが多く、西半分は床に接するものが多い。炭化材の配列をみると全体に壁から90°方向のものが多く、これに放射状のものが加わる。炭化材の断面をみると板材は少なく、丸太材や割材が多い。これらの炭化材は屋根材や壁材と思われる。

樹種は38例のうち、スギが22点、ケヤキが7点、ソネが3点、ムラサキシキブが3点、クリが2点、ナラが1点である。

〈焼土〉焼土は炭化材を覆うように広く分布しており床面から10cmほどの厚さのものが多く、所々にカヤを伴っている。焼土や炭化材の状況から焼失住居跡と思われる。



図版3 A II-1 住居跡(1)

〈床〉床は全体に平坦であるが中央部が5cmほど低い。床面はVII層上層の角礫のまじる層まで掘り込んで固められているため、カマド右隅を除き全体にかたい。床土はVI層のにぶい黄褐色土とVb層の褐色土との混土であり、粒径5～15cmの角礫を含んでいる。下位ほど礫が多くなるため、大きな掘り方をもたず典型的な貼床とは言えない。

〈柱穴〉柱突は検出されていない。

〈カマド〉北西壁中央付近に構築されており、総長約2.2m、壁外約1.5mである。カマドの長軸方向はN-57-Wである。袖部は残存しており、左右とも長方形の角礫凝灰岩を芯材として使用し、土器片を一部に加えて黄褐色土(VI層)を貼っている。袖部の幅は芯材の外側で74cmであり、支脚と思われる跡が南に寄った所にある。

燃焼部の焼土は、直径50cm余の円形で厚さは最大10cmほどあり、浅皿状の凹地に形成され良くやけている。

くりぬき式の煙道は、壁近くから煙出しに向かって7～8'位の下り勾配となり、煙出口へ直に近く立ち上がる。煙出口は直径38cmの円形、深さは60cmほどである。煙出しや煙道の下位埋土には焼土がまじっている。また、煙出口の上位を塞ぐようにVb層起源の褐色土がはいっている。

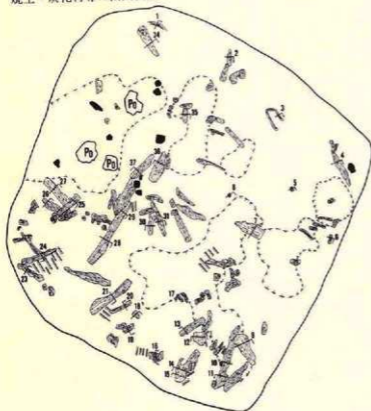
遺物(図版12, 写真図版31)

1はロクロ不使用のほぼ完型の甕である。器高は約33cmと大型である。口唇部は丸みをもち、短めの口縁部は頸部から外反する。体部は中位より上で最大径をもちながら緩やかに張り、張り出しのない安定感ある平底に納まる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部、外面は刷毛目の後ヘラケズリ、体部内面はヘラナデにより調整されている。底部は特段の調整はみられない。

2は口縁部である。甕片と思われる。口唇部は若干平坦気味となる。口縁部は緩やかに外反する。外面は、口縁部がヨコナデ、体部の一部に刷毛目が見られることから、刷毛目の後胎土が軟質のうちに弱いケズリで調整されている。内面は、口縁部が一部に刷毛目が見られるもののほぼヨコナデ、体部は口縁部近くが刷毛目、下半はヘラナデで調整されている。3はロクロ使用の完型の長頸壺である。器高は8.7cmと小型である。口唇部は斜めに平らになでられている。口縁部は頸部より外反する。頸部より肩部が張り出して体部中央で最大径となり底部に納まる。内外面ともロクロにより調整され、底部はヘラにより雑な切り離しをしている。底部内面はロクロによる整形の結果、中央部が若干盛り上がる。体部外面には細い丸棒の腹を縦位に1段2～10mm間隔、その多くは5mm間隔で浅く押押し横位に巡らす。頸部に朽痕が1箇所残存する。土器焼成前に器表面にあったらしい(写真図版31-3・釈痕)。

出土状況は、1はカマド燃焼部を中心にその周囲のカマド袖部崩壊土及び床面に、2はカマド周辺の床面に、3はカマドと反対の北壁際床面から出土している。

焼土・炭化材等の検出状況



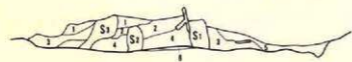
1	スギ	30	スギ
2	スギ	31	スギ
3	ナラ	32	スギ
4	ムラサキ シキブ	33	ソネ
5	スギ	34	スギ
6	ムラサキ シキブ	35	スギ
7	スギ	36	スギ
8	スギ	37	スギ
9	—	38	ケヤキ
10	スギ	39	ケヤキ
11	スギ ケヤキ	40	ケヤキ
12	スギ	41	ケヤキ
13	スギ	42	スギ
14	スギ	43	スギ
15	ソネ	44	スギ
16	ソネ	45	クリ
17	ムラサキ シキブ	46	ケヤキ
18	スギ	47	ケヤキ・ クリ
19	スギ		

G L=189.200m



1. 2.5YR 5/8 明赤褐色 焼土
2. 10YR 4/4 褐色 少し焼けている
3. 10YR 4/4 に近い黄褐色 土層(地山)
4. 5Y 8/3 淡黄色 陶磁器区画(埋層)

L=189.300m



1. 10YR 3/4 暗褐色 焼土含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 灰井跡(灰土)
3. 10YR 5/4 に近い黄褐色 石をのみえる土(埋層)
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 焼土含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 焼土含む
6. 5Y 8/3 淡黄色 陶磁器区画(埋層)

図版4 AII-1住居跡(2)

B I-1 住居跡 (図版 5・6, 写真図版 6・7)

調査区の最も北側に位置し、桑畑の北縁で検出された。埋土下位に白頭山火山灰のはいる焼失住居跡である。出土した土器片はA II-1 住居跡出土のものと接合している。

〈占地〉 A II-1 住居跡から24mほど北に下った地点に位置し、緩やかな北東斜面を占地している。遺構の北側10m付近の耕地境は急斜面になっている。

〈検出状況〉桑畑の表土を10cmほど除去した段階で黒色土の隅丸方形に近いプランがあった。検土杖で調べると火山灰があり、深さも一定していることから住居跡として調査を進めた。

〈平面形・規模〉平面形はやや歪んでいるが長方形に近く、規模は床面で北西-南東方向3.5m、北東-南西方向3.2mである。床面積は10.97㎡である。

〈埋土〉上位から黒色、黒褐色、黒色・黒褐色、黄褐色、極暗褐色の土層で構成される自然堆積層である。断面図作成時には掘り足りず、最下層には炭化材を含む焼土層が広くみられる。黄褐色の白頭山火山灰は壁際から床面に向かって落ち込むように堆積して遺構全体を覆っているが、特に南半で厚く、厚さは最大5cmほどある。焼土や炭化材の上に堆積していることから、焼失の時期と火山灰降下の時期は近いものと思われる。

〈壁〉全体に上位は外傾し、下位は直に近い。V層を掘り込んでつくられており、壁高は20~50cmである。

〈炭化材〉炭化材は密度に差があるものの遺構全域に分布しており、放射状の配列を示しているものが多い。殆どの炭化材は床面直上から10cm以内にあり、焼土に覆われている。炭化材の中でも上位にあるものはカヤが多い。炭化材の断面をみると板材は少なく、殆ど丸太材や割材である。これらの炭化材は屋根材や壁材と思われる。

樹種は42例のうち、スギが32点、クリが5点、ケヤキが4点、イタヤが1点である。クリは北西隅の土坑の壁から底面にかけて分布するものにみられる。ケヤキは北壁寄りで見られる。

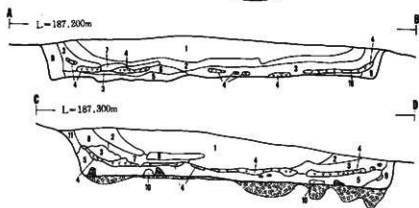
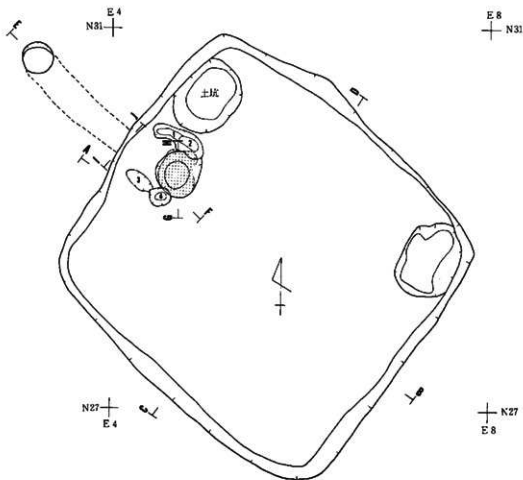
〈焼土〉焼土は炭化材を覆うように広く分布しており、床面から10cmほどの厚さで形成されている。特に中央付近から東側ではカヤを多く伴っている。この住居跡は焼失住居である。

〈床面〉床面はほぼ平坦で全体に北で低くなる。レベル差は最大8cmである。床面は、北東隅付近がV a層であるほかはV b層相当面にあり、V a層・V b層・黒色土からなる貼床である。掘り方は中央付近では少ないが、それ以外では10~20cmの深さがあり、特に東側が深い。

この付近は桑畑であるため、床面から掘り方部分にかけて覆括されている。

〈柱穴〉柱穴は検出されていない。

〈カマド〉北西壁中央付近に構築されており、総長約2.2m、壁外約1.5mである。カマドの長軸方向はN-51°-Wである。袖部は完全に破壊されており、袖部の構築材料はみられないが、芯材として礫を使用したらしく礫の抜き取り痕跡と思われる小凹地が4カ所ある。規模は、1



- | | | |
|-------------------|------------------|--------------|
| 1. 10YR 2/1 黒色 | 7. 10YR 1.7/1 黒色 | カヤと思われるものが混入 |
| 2. 10YR 2/2 黒褐色 | 8. 10YR 2/2 黒褐色 | |
| 3. 2.5Y 3/2 黒褐色 | 9. 10YR 3/3 暗褐色 | 黄褐色浮石少量含む |
| 4. 2.5Y 3/4 黄褐色 | 10. 5YR 5/6 明赤褐色 | 焼土塊 |
| 5. 7.5YR 2/3 暗赤褐色 | 11. 10YR 4/6 黒褐色 | |
| 6. 10YR 3/2 黒褐色 | | |

・図版5 BI-1住居跡(1)

が直径28×12cm、深さ最大5cm、2が直径30×15cm、深さ最大13cm、3が直径32×13cm、深さ最大5cm、4が直径20×20cm、深さ最大10cmである。この抜き取り痕跡から、袖部の幅は芯材の外側で76cmほどと推定される。

炭焼部の焼土は直径47×38cmの楕円形で、厚さは最大6cmほどあり、浅皿状の凹地に形成されている。

くりぬき式の煙道は、IV層とV層の間をくりぬいてつくられており、煙道は崩落している。煙道は壁近くから煙出しに向かって7～8°の下り勾配となり、煙出し口へ直に近く立ち上がる。煙道の短軸の断面形は壁際で直径28×24cmの楕円形である。煙出口の平面形は直径32cmの円形であり、断面形は円筒形に近く、深さは40cmほどである。

煙出しや煙道の下位埋土には焼土がまじっており、壁面も良くやけている。また、煙出口上位を塞ぐようにVb層起源の褐色土がはいっている。このことはAII-1住居跡と同じであり、煙出口の褐色土は人為的に埋められたものと思われる。

〈付属施設〉北西隅に平面形が楕円形の土坑がある。規模は、開口部の径80×60cm、底部の径56×40cm、深さ36cmである。土坑の埋土断面の実測は省略したが、埋土は焼土主体で壁から底面にかけて炭化材と土器片がはいっている。土器片は床面やカマド付近から出土したものと接合しており、この土坑が住居跡に付属するものと考えられる。

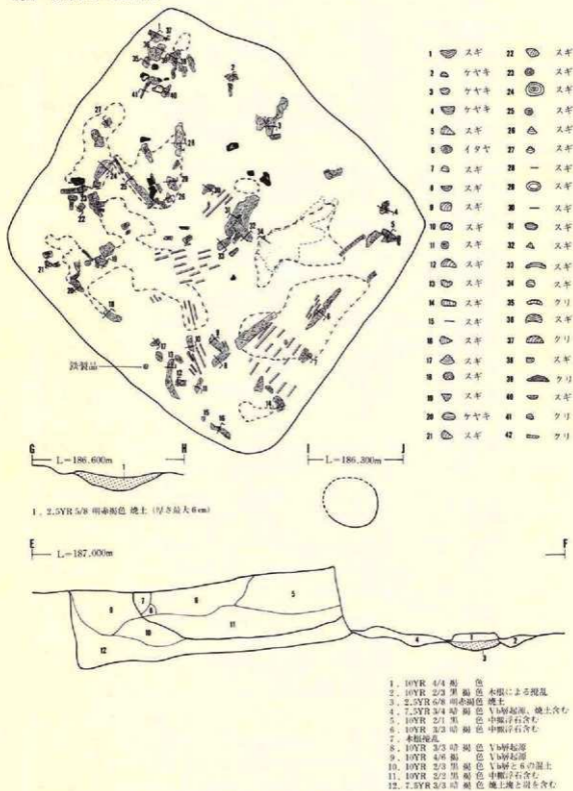
〈その他〉精査時に北東隅に軟質な土坑と思われる箇所があったので、その範囲を実測図に示したが、底面は凹凸が多く掘り方部分の攪乱と判断したので付属施設とはしなかった。

遺物（図版13、写真図版32）

9は、ロクロ不使用のほぼ完型の甕である。器高は約35cmと大型である。口唇部は丸み、短めの口縁部は頸部から外反する。体部は中位より上で最大径をもちながら緩やかに張り、張り出しのない安定感ある平底に納まる。口縁部が内外面ともヨコナデ、体部外面は上位の一部に刷毛目を残存させるが、ヘラケズリにより調整し、内面は上位の一部に刷毛目を残すが他はヘラナデにより調整されている。底部に特段の調整はみられない。10は底部に近い体部片である。甕片と思われる。外面がヘラケズリ、内面が上位は刷毛目、他はヘラナデにより調整されている。11は直径3cmのリング状の鉄製品である。

出土状況は、9は、その3分の2が床面に近い埋土やカマド付近の床面及び住居跡内の土坑から、残り3分の1はAII住居跡のカマド袖部崩壊土及び床面から1の土器（AII-1住居跡出土）と混在して出土した土器片と接合した。10は中央床面からの出土である。11は南壁近くの床面からの出土である。

焼土・炭化材等の検出状況



図版6 BI-1住居跡(2)

CII-1 住居跡 (図版7, 写真図版8)

調査区の北東部に位置し、北側山林の北縁で検出された。バックホーで掘りすぎたため、カマド付近を中心に精査したものである。

〈占地〉調査区の東部に形成された谷沿いの緩斜面を占地している。住居跡の床面は谷底面より30~50cmほど高いが、斜面上位からの流水を考えると条件は良くない。上流に20m離れてDIII-1住居跡がある。

〈検出状況〉バックホーで粗掘り作業を進めた際、谷底を埋めた土石流の堆積面まで掘り下げたところ、炭化材と焼土がみられた。断面精査の過程で焼土が住居跡のカマドと判明した。

〈平面形・規模〉詳細は不明であるが、残存する壁やカマドの位置などから3~4mの方形に近い住居跡が予想される。

〈埋土〉検土面が床面に近かったため実測を省略した。

〈壁〉確認できたのは西壁の2分の1位である。壁高は3cm位である。

〈炭化材〉炭化材は、燃焼部の焼土より上層の焼土とともに検出された。分布範囲が狭いので配列等は不明である。樹種は4例のうち、ケヤキが2点、クリが1点、ムラサキシキブが1点である。また少量であるがカヤもみられた。

〈焼土〉カマド付近を中心に分布している。残っているのは3cm前後と薄い炭化材を伴っており、焼失住居跡であろう。

〈床面〉カマド付近でV層相当面の床面がみられる。貼床はなくあまりかたくない。南西隅は風倒木によって大きく攪乱されているため床面や壁が不明瞭である。

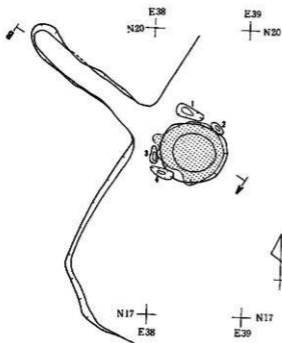
〈カマド〉北西壁中央付近に構築されており、総長約2.4m、壁外約1.6mである。カマドの長軸方向はN-56°-Wである。袖部は破壊されたとしく、芯材の継抜き取り痕跡と思われる小凹地が4箇所ある。規模は、1が直径26×13cm、深さ最大10cm、2が直径14×8cm、深さ最大6cm、3が直径18×8cm、深さ最大7cm、4が直径26×9cm、深さ最大8cmである。この抜き取り痕跡から、袖部の幅は芯材の外側で78cmほどと推定される。

燃焼部の焼土は、直径65cmの不整形円で、厚さは最大8cmあり、浅皿状の凹地に形成されている。良くやけており焼土はかたい。

煙道はくりぬき式と思われる。壁近くから煙出しに向かって僅かに下り勾配となる。煙出口の平面形は上部を欠くため不明である。煙道や煙出しの埋土下位には焼土や灰がまじる。

遺物 (図版12, 写真図版31)

4は口縁部片である。壺片と思われる。口唇部は丸み、短い口縁部は頸部から直角に近く外反する。頸部は強くなでられ凹む。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部が、外面は弱いヘラケズリ、内面はヘラナデにより調整されている。5は体部片である。壺片と思われる。外面は弱



焼土・炭化材等の検出状況



- 1 ● ケヤキ
- 2 — ムラサキシキブ
- 3 ☪ ケヤキ
- 4 ■ クリ



- 6. 10YR 2/1 黄 包 黄-YAMの焼土を含む
- 7. 10YR 2/2 黄 包 黄-YAMの焼土を含む
- 8. 10YR 2/2 黄 包 黄-YAMの焼土を含む
- 9. 2.5YR 2/2 黄 包 黄-YAMの焼土を含む
- 10. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 包 黄-YAMの焼土を含む

- 1. 2.5Y 6/3 に近い黄褐色 包 黄-YAMの焼土を含む
- 2. 10YR 3/3 暗褐色 包 黄-YAMの焼土を含む
- 3. 10YR 3/2 暗褐色 包 黄-YAMの焼土を含む
- 4. 10YR 3/2 暗褐色 包 黄-YAMの焼土を含む
- 5. 10YR 5/4 に近い黄褐色 包 黄-YAMの焼土を含む

図版7 CII-1住居跡

いへラケズリ、内面はへラナデである。

出土状況は、4は床面、5は床面及びカマド燃焼部から出土している。

CⅢ-1住居跡（図版8・9，写真図版9・10）

調査区中央のやや南寄りに位置し、南側畑地の北縁で検出された。埋土下位に白頭山火山灰のはいる焼失住居跡である。壁際の埋土の一部に十和田a火山灰がはいっている。

〈占地〉調査区中央に向かって緩く張り出す扇形状の地形面の先端付近を占地している。遺構の北西側には、十和田a火山灰が堆積する幅2～3mの地割れが北西方向に走る。また、遺構の北辺付近から急斜面となる。このため斜面上位からの流水は遺構に入りにくいと思われる。

〈検出状況〉検出面はⅢb層付近であり、乾きにくい円形の箇所があった。さらに検出面を10cmほど下げてみると黄褐色火山灰に縁どられた方形に近いプランとなり、検出土材でも炭化物や焼土が確認されたことから住居跡として調査を進めた。

〈平面形・規模〉南東隅は攪乱されているので掘りすぎたが、平面形は隅丸正方形に近い。規模は床面で北西—南東方向3m、北東—南西方向2.9mである。床面積は8.24㎡である。

〈埋土〉埋土は自然堆積層である。上位は厚い黒褐色混土であり、中位には暗褐色混土をはさみ上下2枚の植物（カヤ？）炭化層がある。下位には黄褐色の白頭山火山灰がはいっている。最下層は焼土のまじる暗褐色土である。なお、北東隅や南壁際に部分的にみられた火山灰の鑑定結果は十和田a火山灰であった。

〈壁〉全体的に上位は外傾し、下位は直に近いが、南東壁でオーバーハングする箇所がある。全体的にV層を掘り込んでいるが、南隅ではVI層がみられる。壁高は平均60cm前後であり、南隅では最大95cmである。

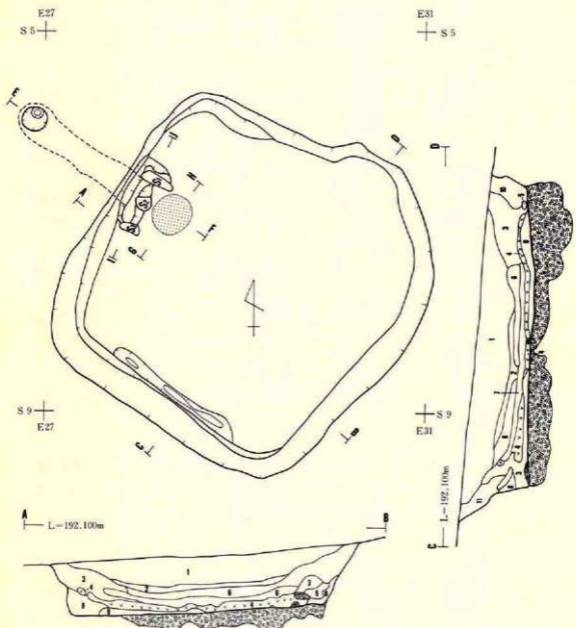
〈炭化材〉炭化材の密度はAⅡ-1住居跡やBⅠ-1住居跡ほどではないが、北東壁や南西壁付近を除く床面に散在している。これらの炭化材は床面にあり、放射状の配列を示すようで屋根材と思われる。

樹種は14例のうち、スギが9点、ケヤキが3点、クリが2点である。

〈焼土〉焼土は炭化材の近くに分布している。厚さは5cm前後あり、少量のカヤを伴うところがみられる。この住居は焼失したものである。

〈床面〉床面は全体的に平坦であり、比高差は5cmほどである。中央部は特に凹凸が少なくかたいが、カマドの北側や南隅はやや高く軟質である。床はカマド付近を除き貼床されている。床土はV層の褐色土に少量の黒褐色土を含む混土であり、十和田a火山灰と思われる火山灰も微量ははいっている。

掘り方をみると、南壁付近から中央部さらに東壁付近にかけて掘り方の著しい部分が5箇所



- 1. 10YR 2/2 黒褐色 浮石層を含む
- 2. 10YR 2/1 黒色 さやと認められるものが混入
- 3. 10YR 3/2 黒褐色 石山山灰土層を含む
- 4. 2.5Y 5/4 黄褐色 石山山灰土層
- 5. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 石山山灰土層
- 6. 10YR 3/4 暗褐色
- 7. 10YR 1.7/1 黒色 炭化物(カヤク)多く含む
- 8. 10YR 3/3 暗褐色 土層に焼土を含む
- 9. 5YR 4/4 に近い赤褐色 焼土層
- 10. 10YR 3/1 黒褐色 浮石なし
- 11. 10YR 2/3 黒褐色 浮石なし

図版8 CIII-1 住居跡(1)

ある。掘り方の範囲は不整形～長方形であり、長径は60～140cmである。これらの掘り方は、深さ20cm以上のところが多く、最深部はVII層の礫付近に達している。掘り方の部分には長さ12～18cmの楕円形の工具痕跡と思われる窪みがある。

〈周溝〉南西壁際に、長さ1.5mほ周溝状の部分がある。幅は10cm前後、深さ5～10cmである。

〈柱穴〉柱穴は検出されていない。

〈カマド〉北西壁の中央付近に構築されており、総長約2.1m、壁外約1.4mである。カマドの長軸方向はN-53°-Wである。袖部の残りは良く、芯材の礫に褐色土(VI層)を貼ってつくられている。右袖には台形の花崗岩(S₁ 大きさ40×35×12cm)を、左袖には台形の凝灰岩(S₂ 大きさ30×20×8cm)を使用している。中央には支脚と思われる五角形の礫(S₃ 大きさ15cm)がある。袖部の幅は芯材の外側で60cmほどである。

燃焼部の焼土は、直径32cmの円形で厚さは4cmである。焼土形成部分の掘り込みは他の住居跡に比べてはっきりしない。

くりぬき式の煙道は、壁近くから煙出し向かって8～9°の下り勾配となり、煙出口へ直に近く立ち上がる。煙出口の平面形は直径26cmの円形である。断面形は円筒形に近い。底面北寄りには直径10cm、深さ10cmのピットがある。煙出しや煙道の埋土には焼土がブロックではいる。煙道はIV層下位をくり抜いてつくられており、天井は崩落している。煙出口は焼けていたのですぐ検出できた。

遺物(図版12, 写真図版31)

6は口縁部片である。小片のため器種は堊と思われる。口唇部は丸みをもち短い口縁部は若干外反するようである。器面は、内外面ともヨコナデであるが、下位に、外面が刷毛目、内面がヘラナデによる調整がみられる。カマドの燃焼部焼土内からの出土である。

D III-1 住居跡(図版10, 写真図版11・12)

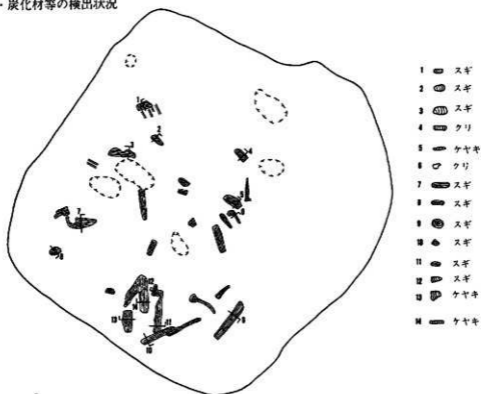
調査区の最も東側に位置し、北側山林の東縁で検出された。検出したのは床面付近である。

〈占地〉東側には北に下る沢がある。この沢筋に向かって張り出す三角形の平坦面があり、遺構はこの地形面の北端を占地している。遺構北側1m付近からは北に下る斜面となる。

〈検出状況〉かつて畑地として利用されていたこともあり、10cmほど表土を除去したところ焼土や炭化材を伴う長方形のプランが検出された。規模が小さいので小屋跡と思われたが、調査を進める過程でカマドの燃焼部や煙道の底部が検出され住居跡としたものである。

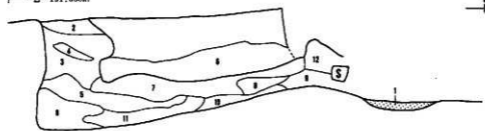
〈平面形・規模〉平面形は長方形である。規模は北西-南東方向が2.7m、北東-南西方向が2.5mである。床面積は6.68m²である。炭化材の分布を手懸に床面を把握したが北東側は炭化材が少なく推定線の部分もある。

焼土・炭化材等の検出状況



- 1 ● スギ
- 2 ○ スギ
- 3 ◐ スギ
- 4 ◑ クリ
- 5 ◒ ケヤキ
- 6 ◓ クリ
- 7 ◔ スギ
- 8 ◕ スギ
- 9 ● スギ
- 10 ● スギ
- 11 ● スギ
- 12 ◑ スギ
- 13 ◒ ケヤキ
- 14 ◓ ケヤキ

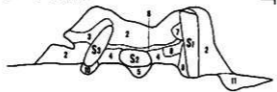
E L-191.600m



G L-191.300m



H L-191.500m



- 1. 2.5YR 5/8 暗赤褐色 焼土
- 2. 10YR 3/4 褐色 焼土
- 3. 5YR 4/8 赤褐色 焼土含む
- 4. 5YR 3/6 暗赤褐色 焼土を少量含む
- 5. 5YR 4/6 赤褐色 焼土40%含む
- 6. 10YR 2/2 褐色 色に類似
- 7. 10YR 4/6 褐色 2に類似
- 8. 10YR 2/3 暗褐色 色に類似
- 9. 10YR 2/3 暗褐色 石に貼りつけたもの
- 10. 10YR 3/4 暗褐色
- 11. 10YR 2/3 暗褐色
- 12. 10YR 3/4 暗褐色

図版9 CⅢ-1住居跡(2)

〈埋土〉埋土は厚さ3～6cmほどの黒色土の単層である。この中には焼土や細い炭化材が含まれる。また、火山灰の薄いブロックが部分的にはいつている。火山灰の鑑定結果は十和田a火山灰である。火山灰は中位より上の方にみられることや粒子別の層になっていることなどから遺構削平後に再堆積したものと思われる。

〈壁〉壁の立ち上がりは殆どわからなかった。南西壁付近には、直径4～5cmの小さな杭跡が15～20cm間隔でみられた。これは住居の外壁に関係するものかもしれない。

〈炭化材〉遺構の西半分を中心に細い炭化材が密に分布しており、全体的に放射状の配列を示し屋根材と思われる。樹種は3例のうち、ケヤキが2点、スギが1点である。

〈焼土〉焼土は中央から南寄りに広く分布している。厚さは最大5cmでカヤを伴う所もある。

〈床〉遺構は上流からの土石流の堆積物上につくられているため、床面には小窪がみられる。そのため床面には小さな凹凸がある。床面は西から東に傾斜し比高差は8cmほどである。床面は土石流を掘り返して踏み固められているが、掘り方の下面面はわかりにくい。

〈柱穴〉柱穴は検出されていない。

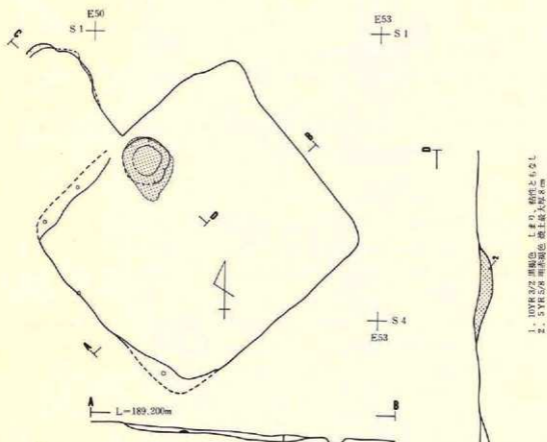
〈カマド〉残っていたのは燃焼部と煙道の底部である。カマドは北西壁中央付近に構築されており、総長2m、壁外1.3mである。カマドの長軸方向はN-44°-Wである。

燃焼部の焼土は、直径48cmの円形の凹地に形成されている。焼土の厚さは最大8cmである。

煙道は壁近くから煙出しに向かって11～12°の下り勾配である。煙出口の平面形や立ち上がりは不明である。

遺物（図版12、写真図版31）

7は、ロクロ使用の内面黒色処理の坏片で、底部を欠く。推定される法量は、口径が15cm、高さは5cm強であろう。口唇部は丸みがあり、内湾気味に立ち上がる体部から口縁部はわずかに外反して口唇部に納まる。器面は、外面はロクロ痕を残したままで特段の調整はしていない。内面はヘラミガキで調整している。8は、ロクロ使用の内面黒色処理の坏口縁部片である。形状・器面調整とも7に近似するが、口唇・口縁部分の形状及びロクロ痕が異なる別個体である。いずれもカマド燃焼部の焼土付近から出土したものである。



1. 10YR 3/2 黒褐色 L. 厚り、粘りともなし
2. 5YR 5/8 明赤褐色 焼土最大厚 8 cm

1. 10YR 2/1 黒色 十組田火山灰のフロックと炭化物を含む

焼土・炭化材等の検出状況



- 1 ○ スギ
- 2 △ ケヤキ
- 3 ◐ ケヤキ

図版10 DⅢ-1 住居跡

(2) A調査区の土坑と陥し穴状遺構

土坑4基と円形の陥し穴状遺構1基が、調査区の中央やや東側で検出された。このうち1基は調査区外に広がるため完掘していない。また、当初円形の土坑と考えていた1基は底部で逆茂木の痕跡が検出されたため、円形の陥し穴状遺構とした。いずれも出土遺物はないが、埋土の特徴などから縄文時代に属するものであろう。

C II-1 土坑 (図版11, 写真図版13)

調査区の東縁部に形成された緩やかな谷に下る傾斜変換点付近を占地している。バツクホーで粗掘りをした際、中礫浮石が多くはいる円形に近いプランとして検出された。

平面形は開口部、底部とも不整な楕円形である。断面形をみると壁は外傾する立ち上がりを示している。底面は軟質で凹凸があり、全体に西から東に低くなる。底面の比高差は最大15cmである。埋土は、上位から黒色、黒褐色、褐色、明黄褐色の4層の土層で構成される自然堆積層である。上位の2層には南部浮石がはいる。なお、中礫浮石層は粗掘段階で除去している。

規模は、開口部の径が197×170cm、底部の径が140×110cm、深さは中心部で62cmである。

C II-2 土坑 (図版11, 写真図版13)

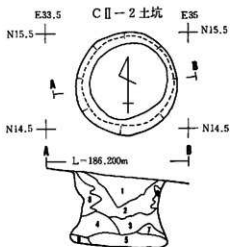
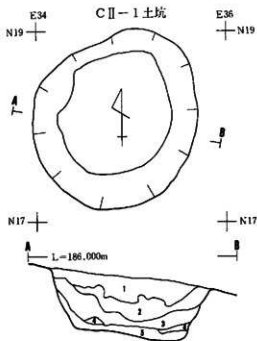
C II-1 土坑の南1.5mの所に位置し、同じ地形面を占地している。検出面はV a層上面である。平面形は開口部・底部とも円形である。断面形はフラスコ形である。底面はVI層相当面であり、平坦でややかたい。底面の比高差は最大4cmである。埋土は、上位と下位が黒色、中位は黒褐色であり南部浮石がはいる。全体的に自然堆積層である。

規模は、開口部の径が110×104cm、頸部の径が84×74cm、底部の径が97×93cm・深さは中心部で74cmである。

C III-1 土坑 (図版11, 写真図版13)

C III-1 住居跡の南約6mの所に位置し、8'ほどの斜面上にある。検出面はV a層上面である。平面形は、開口部は円形、底部は楕円形である。断面形をみると壁は外傾する立ち上がりを示している。底面はVI層面であり、中央部が全体的に4～5cmほど低くなっている。底面の一部はVII層上面に達しており、礫がみられる。埋土は、上位は南部浮石を含む黒色土、下位はV b層起源の混土であり、壁際には褐色土もみられる。全体的に自然堆積層である。

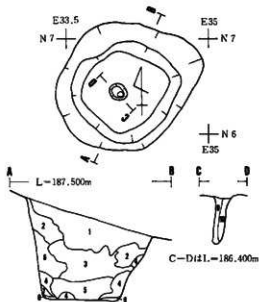
規模は、開口部の径が134×132cm、底部の径が104×80cm、深さは中心部で54cmである。



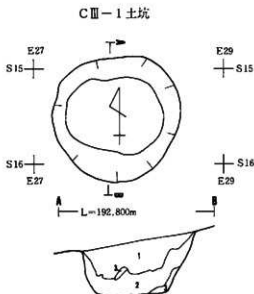
1. 10YR 1.7/1 黒色 南部浮石(中〜大粒)、5〜7%含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 南部浮石(中〜大粒)、3〜5%含む
3. 10YR 2/3 黒褐色 Va層起源、南部浮石1%含む
4. 10YR 2/2 黒褐色 Vb層起源、軟質で粘性あり
5. 10YR 4/1 黒色 黒土とVbの混成土、やや粘性あり
6. 10YR 4/4 褐色 VaとVbの混成土
7. 10YR 4/6 褐色 黄(Vb)の腐殖土
8. 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘土質

1. 10YR 1.7/1 黒色 南部浮石(中〜大粒) 5〜7%含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 南部浮石 3〜5%含む、VbとVbの混成土
3. 10YR 4/4 褐色 Vb層起源、軟質で粘性あり
4. 10YR 2/1 黒色 黒土とVbの混成土、やや粘性あり
5. 10YR 7/6 可黄褐色 粘土質、硬りすぎ

CⅡ-1 陥し穴状遺構



1. 10YR 1.7/1 褐色 南部浮石(中〜大粒)、3〜5%含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 黄(Va)の腐殖土
3. 10YR 2/2 黒褐色 Vb層起源、南部浮石 3〜5%含む
4. 10YR 4/6 褐色 黄(Vb)の腐殖土
5. 10YR 2/3 黒褐色 VbとVbの混成土
6. 10YR 4/4 褐色 黄(Vb)の腐殖土
7. 10YR 5/3 に近い黄褐色
8. 10YR 2/2 黒褐色
9. 10YR 3/4 暗褐色 黄色浮石(大粒)含む
10. 10YR 1.7/1 褐色 赤褐色浮石(大粒)含む、遊積水痕跡



1. 10YR 1.7/1 黒色 南部浮石(中〜大粒)、1〜2%含む
2. 10YR 2/2 黒褐色 VaとVbの混成土、南部浮石1%含む
3. 10YR 4/4 褐色 Vb層起源、やや粘性あり

図版11 A調査区土坑類

D III-1 土坑 (図版11, 写真図版14)

D III区南縁の基本土層断面で検出されたものである。断面実測をただけで精査を省略したので平面形は不明である。断面形は開口部がやや広がるがピーカー形に近い。底面は地形面と同じく東に13°ほど傾く。埋土はIV a層起源の黒色土が多く堆積しているが、下位ではIV a層とV層の混土がみられる。全体的に自然堆積層である。

規模は、開口部の径が90cm前後、底部の径が80cm前後、深さは100cm前後である。

C II-1 陥し穴状遺構 (図版11, 写真図版4)

北側山林の中央付近で検出されており、C III-1 住居跡から北へ13mほど下った所に位置している。当初はC II-3 土坑として調査していたが、底部から逆茂木の痕跡が検出されたため遺構名を訂正している。検出面はV a層上面である。平面形は開口部は不整な凸辺の四辺形をしており、底部は隅丸台形に近い。断面形をみると壁は外傾する立ち上がりを示している。壁の上位は崩落しているが、下半はかたくしまっている。VII a層の底面は礫を含む層でかたいが平坦に近く掘られている。底面の中央付近に直径12cm、深さ50cmの小ピットがある。この断面をみると直径5~6cmの逆茂木を北西端に寄せて埋め込んでおり、先端は尖がっていたと思われる。埋土は、上位はIV a層起源の黒色土、中位はIV b層起源の黒褐色土、下位はIVとV層の黒褐色混土であり、壁際には壁の崩落土(V層)がみられる。全体的に自然堆積層である。また、逆茂木痕跡の埋土は、黒色土と暗褐色土に2分される。黒色の部分は杭跡、暗褐色の部分は杭を固めた跡と思われる。

規模は、開口部の径が144×126cm、底部が78×78cm、深さは中心部で90cmである。

(3) 遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物には縄文土器・弥生土器・石器・古銭がある。大半は土器であるが、全体量は約8kgと少ない。

土器

縄文土器は早期を除く各時期のものが出土している。弥生土器には中期に位置づけられるものと、所謂北海道系土器がある。

第Ⅱ群土器 (図版13, 写真図版32)

2点が出土した。いずれも小破片であり、形状などは不明である。共に胎土には植物繊維を含む。16は口縁部片で、ほぼ直立する。口唇部は先細りとなり先端部は尖る。口縁部には粗雑な沈線が横・斜め方向に施され、不明瞭な刺突もみられる。17は体部片で、条間の広いL1段の蒸系文が斜位に施文されている。いずれも前期前半期に位置づけられる土器と考えられる。

第Ⅲ群土器 (図版13・14, 写真図版32・33)

1類、中葉に位置づけられるもので、同一個体と考えられる体部片が2点出土している。18は断面が台形を呈する太い隆帯が垂下し、この端部を基点とする低い隆帯に区画された磨消帯がみられる。19には磨消帯はみられない。地文は縦回転によるLR単節斜縄文である。

2類、末葉に位置づけられる土器群である。20は小さな山形突起をもつ口縁部で、緩く外反する。体部には磨消縄文による大柄な文様が描かれている。縄文はLR単節斜縄文である。21も口縁部片で、わずかに内湾する。緩い波状を呈するものと考えられ、頂部内面には三日月状の刺突をもつ。22は体部片で、20と同一個体の可能性がある。23は台状の突起部分で、内面には口唇部から続く厚い三日月状の突起をもつ。外面には棒状工具による刺突文が施されている。24は緩い波状口縁を呈し、頂部内面に小さな三日月状突起をもつ。粗製土器であるが、この突起から当類とした。

3類、時期の限定し得ない粗製土器(25~29)を一括した。いずれも口縁部片で、上端部は無文となっている。25は緩い波状口縁を呈するが、他は平縁である。地文は25・28がRL、26・27がLRの単節斜縄文で、共に縦方向への回転である。

第Ⅳ群土器 (図版14, 写真図版33)

いずれも初頭~前葉に位置づけられる土器(30~42)である。30はRL単節縄文を地文にもち、これに沈線による曲線文が描かれる。31~37は無文地に沈線による方形を基調とした区画文が施されている。38は頂部に縄文を有する折り返し口縁で、緩い波状を呈する。39はLR単節斜縄文を地文にし、これに沈線文が加えられている。40は底部片で、底面に渦巻状の沈線文が描かれている。41は中央部と考えられる位置に、縦孔を有する小突起が付く。42は深い刺突

が加えられた突起をもつ。

第V群土器 (図版14, 写真図版33)

43 1点だけの出土である。体部は内湾ぎみで、口縁部は短く外傾する。口唇部には小さな凹凸が連続して施され、口縁部には粗雑な沈線が5～7本巡る。地文はLR単節斜縄文である。縄文晩期の中葉に位置づけられる土器と思われる。

第VI群土器 (図版14, 写真図版33)

1類、弥生時代中期の土器(44～48)である。44・45は同一個体と考えられる。鉢形土器で、体部は外傾して立ち上がる。上半部に平行沈線が巡り、上位は磨かれ、下位はLR単節縄文が斜め回転で施されている。また、底面には網代痕をもち、器面には朱が塗られている。46は壺形土器と考えられ、磨消縄文による文様に朱が塗られている。47は沈線文をもつ。48は粗製土器で、地文はLR単節斜縄文である。

3類、北海道系の土器で、同一個体と考えられる49・50の2点が出土した。表裏面は浅黄褐色を呈するが、断面は黒色である。微隆起線と縄文による文様が施されているが、小破片のため文様の意匠及び縄文原体は不明である。

石器 (図版44・45, 写真図版53・54)

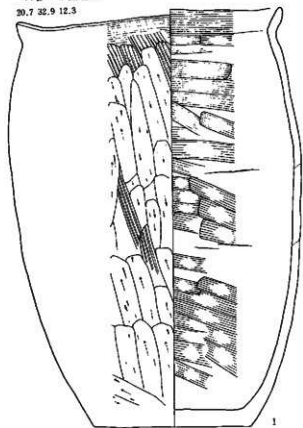
剥片石器1点と礫石器1点が出土している。387は全体に粗雑な剝離調整が加えられ整形されている。縁辺の一部に細かな剝離調整が施され、刃部状の部位を作り出している。394は磨石と考えられるが、風化が著しく使用面をわずかに残すだけである。

古銭 (図版13, 写真図版32)

12～15の4点が出土した。12は祥符元寶(北宋銭)で、初鑄年は1008年である。13～15は寛永通寶である。銘の書体から13は所謂古寛永、14は新寛永と呼称されるものである。15は半分を欠損する。13・14より大型で、背に青海波文をもつ。所謂四文銭である。

A II-1 住居跡

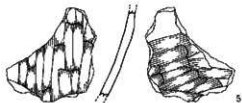
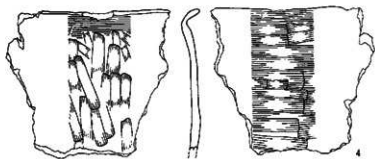
30.7 32.9 12.3



4.6 8.9 3.6



C II-1 住居跡

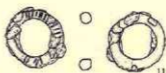
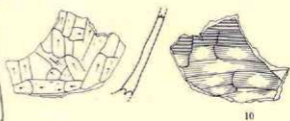
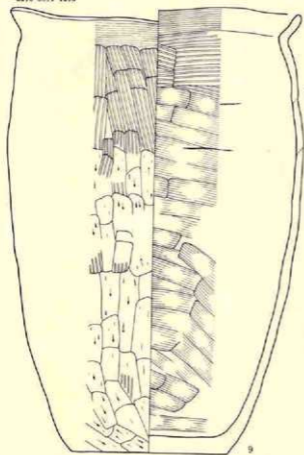


D II-1 住居跡

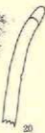
(14.8) - - -



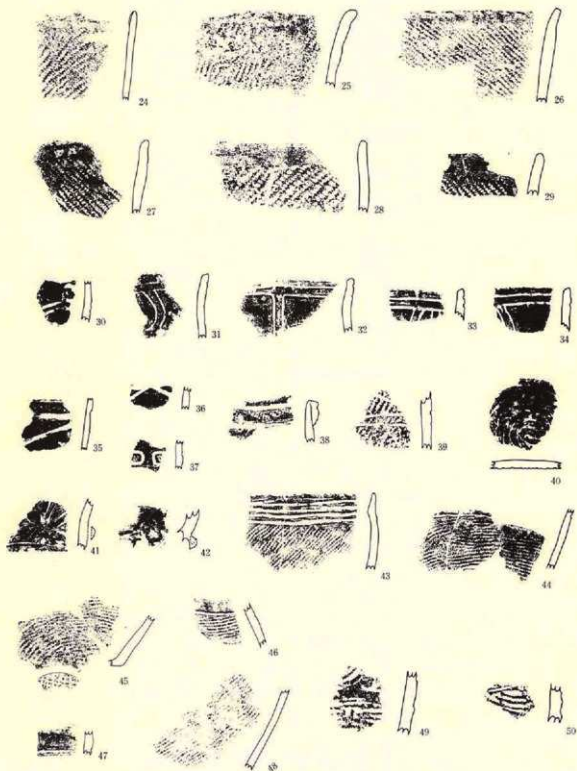
図版12 A調査区出土遺物



遺構外出土遺物



図版13 A調査区出土遺物



图版14 A调查区出土遗物

(4) B調査区の竪穴住居跡と住居跡状遺構

尾根の中央部で2棟、東端部で2棟、合計4棟を検出している。東端部の2棟の時期は縄文時代後期前葉である。中央部の2棟の時期は出土遺物がなく不明であるが、周辺の縄文時代中期又は後期中葉の土坑群に対応すると思われる。また、ⅢE-1住居跡状遺構は、出土遺物や埋土がⅣF-6土坑と似ており、墓塚の性格をもつように思われる。

ⅢF-1住居跡(図版15, 写真図版15)

〈占地〉尾根東端部の稜線部付近に位置し、南東壁付近にはⅣF-1埋設土器がある。また炉の北半はⅢF-1土坑によって切られている。

〈検出状況〉検出面はⅢ層面である。付近には弥生時代や縄文時代後期の土器片が多く出土したが、住居跡のプランは不明瞭であり、東西に長いトレンチを入れて遺構であることを確認している。

〈平面形・規模〉平面形は楕円形であり、規模は4.0×3.5m、床面積は10.46㎡である。壁をみると、東壁付近は杉の太木で覆乱されている。また南壁付近の壁の立ち上がりは、はっきりしない。西壁から北壁の楕高は30cmほどであるが、壁面は崩れやすく、立ち上がりは不明瞭である。

〈床面〉床面はVb層上部であるが南側はVa層である。貼り床はなく、全体的に軟質な床面となっており、西から東に若干低くなる。炉の東側は木根が多く、掘りすぎがみられる。

〈炉〉炉は方形の石囲炉であり、やや北東壁寄りに位置する。北半はⅢF-1土坑によって切られているが、炉の構成礫は5個残っており、大きさは、 S_1 が29×12×38cm、 S_2 が20×13×?、 S_3 が30×21×24cm、 S_4 が12×8×8cm、 S_5 が(10+ α)×16×6cmである。 S_1 は2cm、 S_2 は16cm、 S_4 は8cm、 S_5 は16cmほど埋め込まれている。また S_3 は風化して痕跡を留めているだけであり、 S_5 の一部は風化して土坑の床面に落ちている。焼土は不明だが、土坑の壁面上位に焼けている部分が認められる。柱穴は検出されていない。

〈埋土〉埋土は南北に2分される。北半では、上位が火山灰や火山灰を含む暗褐色土、下位が黒褐色土である。南半は、上位から黒褐色、暗褐色、褐色の3層の土層で構成される。火山灰の蛍光X線分析の結果は十和田a火山灰である。

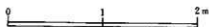
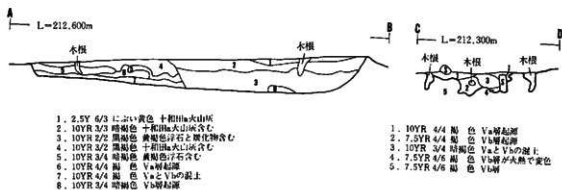
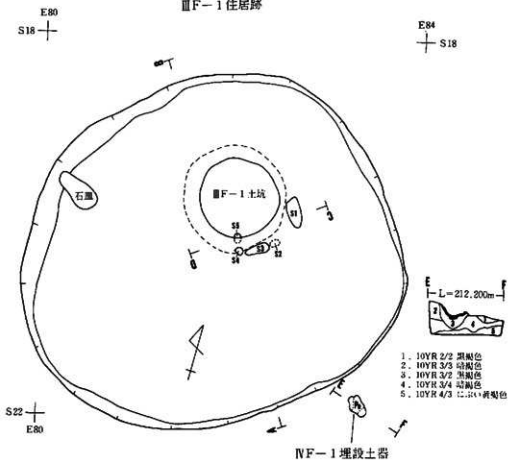
〈時期〉遺構の時期は出土遺物の所属時期や炉の形態から縄文時代後期前葉に位置づけられる。

遺物(図版25~27, 写真図版34~36)

土器・土製品・石器が出土した。礫石器を除く遺物はすべて埋土からの出土である。

土器(51~65) 51~63は縄文土器である。時期的には後期前葉のものが多い。51は粗製の深

ⅢF-1 住居跡



図版15 ⅢF-1 住居跡

鉢で、体部は外傾して開く。地文は節の細かいR L単節斜縄文で、縦回転による施文である。54はミニチュア土器で、体部中央がいくぶん膨らむ。体部には縄文が疎らに施され、頸部に1本の沈線が巡る。52・53は底部片で、52は底面に網代痕をもつ。55は前期の土器である。胎土には繊維を含む量が多くはない。頸部に刺突を伴う低い隆帯が巡る。地文はL 1段燃りの木目状燃糸文である。56～58は中期の土器片である。56は磨消縄文による文様が施されている。57・58は粗製土器の口縁部である。59～63は後期の土器片である。59・60は無文地に沈線による文様が描かれている。61は頂部に縄文をもつ隆帯と、この両側に沿った沈線によって文様が構成されている。また、隆帯の分岐点には棒状工具による刺突文が加えられている。62は太い沈線による磨消縄文をもつ。63はR 1段の網目状燃糸文が施されている。

64・65は弥生土器の口縁部片で、同一個体である。地文は0段多条R L単節斜縄文で口唇部にも施文されている。

土製品(66～68)三角形土製品が3点出土した。いずれも、網目状燃糸文を地文にもつ粗製土器を利用したものである。66は割縁を研磨して整形されている。67は部分的に磨かれ、68は側縁を打ち欠いて整形されたものである。

石器(69～77) 69～71は剥片石器である。69・70には剥片の鋭利な割縁に使用に伴って生じたと考えられる微細な剥離痕が観察される。71は使用痕をもたない剥片である。72～77は礫石器である。73は床面、74は埋土からの出土であるが、他は炉の構成礫である。72・73は磨石で、2～3面に使用痕をもつ。73は先端部に敲打痕をもち、敲石としても使用されたものであろう。75～77は粗製の石皿である。共に表裏両面が使用面となっている。なお、西壁際で出土した石皿は、風化が著しく実測できなかった。

ND-1住居跡(図版16, 写真図版16)

〈占地〉尾根中央部の南東斜面上位に位置する。南6.5mにはV D-1住居跡がある。遺構の東半を欠き、検出したのは西半である。また、床面中央は木根によって大きく攪乱されている。

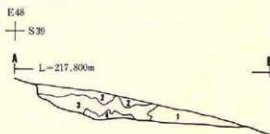
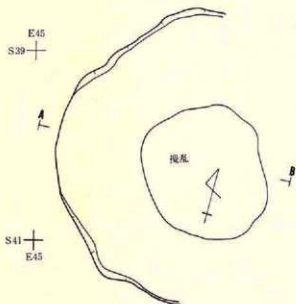
〈検出状況〉検出面はIV層付近であり、半円形のプランとして検出された。

〈平面形・規模〉平面形は残存部から円形と推定され、規模は直径3m前後と思われる。壁は北から南西にかけて残っており、壁高は10～20cmであり、外傾ないしは直立気味の立ち上がりを示している。床面は木根により攪乱をうけており、小さな凹凸がある。また中央部には径1.4×1.2m、深さ20～35cmの楕円形の攪乱部がある。

〈床面・炉〉床面は西壁近くで10cmほど高くなっている。貼り床は残存部では確認されず、全体的軟質である。炉や柱穴は検出されていない。

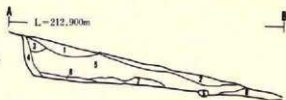
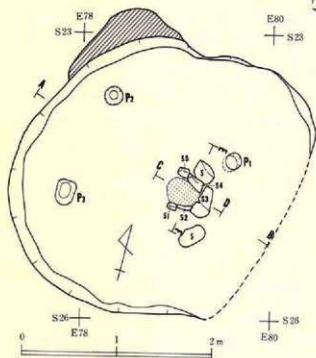
〈埋土〉埋土は黒褐色シルトが主体であり、床面近くにはV b層起源の褐色土がみられる。

ND-1 住居跡

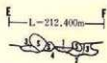


1. 10YR 2/3 黒褐色 炭化物微量含む
2. 10YR 2/1 黒褐色 中層浮石含む、掘孔あり
3. 10YR 2/2 黒褐色 暗褐色ノットがブロック状にはいる炭化物少量含む
4. 10YR 4/6 褐色 Vb層起源、浮石微量含む

NE-1 住居跡



1. 10YR 2/3 黒褐色 十和田火山灰含む
2. 10YR 2/2 黒褐色 中層浮石含む、木根多い
3. 10YR 4/4 褐色 Vb層起源、炭化物少量含む
4. 10YR 4/4 褐色 Vb層
5. 10YR 3/3 暗褐色 中層浮石と炭化物少量含む
6. 10YR 4/6 褐色 Vb層起源
7. 10YR 4/4 褐色 Vb層起源
8. 10YR 3/4 暗褐色 中層浮石と炭化物を含む



1. 5YR 4/6 赤褐色 雑土
2. 10YR 3/3 暗褐色 Vaの汚れた土
3. 10YR 3/4 Vaの汚れた土
4. 10YR 4/6 褐色 Va層(堆土)

図版16 ND-1・NE-1住居跡

〈時期〉出土遺物が少なく、住居跡の時期の細分はできない。

遺物（図版27, 写真図版34）

埋土から縄文土器片が2点出土している。78は無文沈線による文様が施されている。79は粗製土器の体部片で、地文はL1段の無節縄文である。これらはいずれも後期の土器である。

NE-1住居跡（図版16, 写真図版17）

〈占地〉尾根東端部の南東斜面上位に位置する。北2mにはIII F-1住居跡がある。

〈検出状況〉検出面はIII層付近であり、十和田a火山灰と思われる黄褐色火山灰を含む半円形のプランとして検出された。

〈平面・規模〉遺構の南東部の壁は分からないが、平面形は楕円形である。規模は3.3×(2.8)m、床面積は6.36㎡（推定）である。北壁付近を掘りすぎたが、南東部を除く壁は比較的良く残っており、外傾ないしは直に近い立ち上がりを示している。壁高は北～西の間で30cmである。

〈床面〉床面は全体的に平坦であるが、北西から南東方向に5°ほど傾き、比高差は20cmほどある。床面は炉の北西側はVb層でかたく、炉付近からはVa層でやや軟質となる。

〈柱穴〉柱穴は3個検出されている。柱穴は、P₁が直径16cmの円形・深さは33cm、P₂が直径18cmの円形・深さは35cm、P₃が直径26×18cmの楕円形・深さは22cmである。

〈炉〉炉はコの字状の石囲炉であり、中央よりやや南東寄りに位置する。炉石は5個あり、大きさはS₁が15×10×5cm、S₂が16×14×5cm、S₃が32×30×9cm、S₄が22×14×7cm、S₅が15×13×7cmである。いずれも四角形の花崗岩を使用しており、中央の石S₃は15cmほど埋め込まれている。石囲炉内の焼土は2～3cmの厚さで形成されているが、焼成は良くない。

〈埋土〉埋土は、上位は黄褐色火山灰や中礫浮石を含む黒褐色土、中位は暗褐色土、床面近くは褐色土が多くなり、全体的に自然堆積層である。

〈時期〉遺構の時期は、出土遺物の所属時期や炉の形態などから、縄文時代後期前葉に位置づけられる。なお精査時に、東壁付近に3個の石があり、炉跡と考えて調査したが、焼土の形成がみられないことなどから遺構としなかった。

遺物（図版27・28, 写真図版34・35）

縄文土器・弥生土器・石器が出土している。ほとんどの遺物は埋土からの出土である。

土器（80～93）80～85は縄文土器で、いずれも後期前葉に位置づけられる。80は浅鉢形土器で、緩い波状口縁をもつ。波頭部には、縦孔を有する小突起をもち、体部には沈線による区画文が描かれている。81は小型の壺形土器で、上半部を欠損する。体部下位に低い隆帯が巡り、器面を区画しており、この隆帯の上位に沈線文が描かれている。隆帯には、縦孔を有する小突

起がつく。82～84も沈線による文様をもつ土器片である。85～87は地文に網目状燃糸文をもつ粗製土器である。86は口縁部片で、折り返し口縁となる部分には横回転、体部には縦回転で施文されている。

88～93は弥生土器である。88は下半部を欠く壘形土器で、周辺部から出土した破片も接合した。長く外反する頸部をもち、わずかに肥厚する口縁部は緩く外傾する。体部は、いくぶん膨らむものと考えられる。口縁部と体部には沈線による曲線文が描かれ、この上にL1段の燃糸文が斜位に施文されている。頸部には、尾状に斜行する燃糸文を伴う綾絡文が2本廻り、この上下に縦方向の燃糸文が施文されている。また、口唇部にも地文が施されている。なお、体部外面には多量の炭化物が付着している。89は、沈線と連続した刺突による文様が施された口縁部片である。地文はL1段の燃糸文で、口唇部にも施文されている。90も口縁部片で、尾状の燃糸文を伴う綾絡文が廻り、口唇部にも燃糸文をもつ。91・92は沈線文と燃糸文が施された体部片である。93は斜行する燃糸文を地文としている。

石器(94・95) 94は埋土から出土した削器である。縦長削片の両側縁部に細部加工が施され、刃部が形成されている。刃部形態は片側が凸刃、もう一方は緩い凹刃となっている。95は石厩炉に使用されていた粗製の石皿で、表裏両面に使用面をもつ。

VD-1住居跡(図版17, 写真図版18)

尾根中央部の南東斜面中位に位置し、IVD-1住居跡の南にある。

検出面はIV層付近であり、周囲よりは黒い半円形のプランとして検出された。平面形は南東部を欠くが円形基調であろう。直径は残存部で3.8mである。北から南西部にかけて壁は良く残っており、直壁に近い。壁高は西壁で最大60cmである。床面は全体的に平坦であるが、斜面の下位方向で数cm低くなる。床面はかたくない。貼り床はみられず、南東部の床面は不明である。柱穴は5個検出されている。柱穴は、P₁が36×29の楕円形・深さは57cm、P₂が29×27cmの円形・深さは47cm、P₃が直径30cmの円形・深さは32cm、P₄が27×23cmの楕円形・深さは33cm、P₅が36×32cmの隅丸台形・深さは41cmである。柱穴配置はP₁-P₂-P₃-P₄-P₅を結ぶ四角形である。また、柱穴では柱痕が認められており、直径12～15cmの丸木柱と思われる。

埋土は浮石を含む黒色～黒褐色の土層で下位ほど焼土や炭化材が多くなる。炭化材は床面中央付近から西壁にかけて多く分布しており、中央付近では床面直上に堆積し壁際では5cmほど浮いた状態で堆積している。また、西壁付近の壁面では火熱による赤色変化がみられた。この住居跡は焼失住居であろう。出土遺物からは時期決定はできない。

遺物(図版28・29, 写真図版37・38)

縄文土器片2点(97・98)と、石器1点(96)が出土した。土器は共に粗製土器で、埋土か

らの出土である。97は0段多糸LRによる羽状縄文、98は縦回転によるRL単節斜縄文を地文とする。96は偏平な自然藤を利用した粗製の石皿で、床面から出土した。表裏両面に使用面をもつほか、片面の中央部には打撃によって生じたと考えられる浅い凹みが観察される。

ⅢE-1 住居跡状遺構（図版17、写真図版19）

〈占地〉尾根東端部の北斜面上位に位置しⅢF-1住居跡から北へ7mほど離れている。

〈検出状況〉検出面はⅢ層付近である。当初平面プランは分からなかったが、遺物が多かったので掘り下げたところ平坦な床面があり、遺構として精査したものである。

〈平面形・規模〉平面形は南北方向に長い隅丸台形である。規模は、上底1.4m、下底2.0m、高さ2.3mである。床面積は3.28㎡である。壁は南半の残りが良く、外傾ないしは直に近い立ち上がりを示している。壁高は南壁最大60cmである。床面はほぼ平坦であり、比高差は5cmほどである。南壁寄の床面近くには20～30cmの風化した花崗岩が3個ある。柱穴や炉はない。

〈埋土〉埋土は、上位の黒褐色土が自然堆積層であるほかは、人為的堆積層と思われる。特に埋土の4の下位には花崗岩が入っており、埋められたものであろう。炉がないことや埋土が人為的なもので大きい石を伴うことなどから、この遺構は墓墳的な性格をもつことも考えられる。

〈時期〉遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉に位置づけられる。

遺物（図版29、写真図版38）

床面から石器1点と埋土から土器片が出土している。

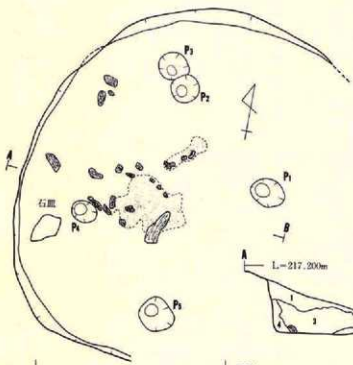
土器（99～107）99は口縁部及び底部を欠損する。体部は中央やや下位に膨らみをもち、わずかに外反しながら頸部に続く。地文はR1段の網目状燃糸文である。100・101は無文地に沈線による曲線文が施されている。102は沈線区画された細い縄文帯が文様を構成している。103は口縁部片で、口唇部内側は肥厚する。沈線区画された幅細い縄文帯が巡り、他は丹念に研磨されている。また、内面も磨かれている。104・105は網目状燃糸文を地文とする体部片である。106・107は地文にL単節斜縄文をもつ。

石器（108）南壁際で検出された花崗岩と共に出土した。表裏両面に凹みを有する所謂凹み石である。器面には磨滅痕もみられ、磨石からの転用品と考えられる。

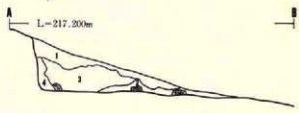
E44
S48

VD-1 住居跡

E47
S48



	上端m	深さcm
P ₁	36×29	57
P ₂	29×27	47
P ₃	30×30	32
P ₄	27×23	33
P ₅	36×32	41

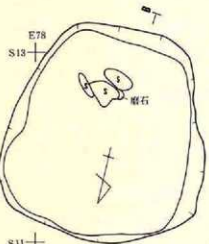


S52
E44

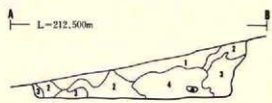
S52
E46

III E-1 住居跡状遺構

1. 10YR 2/2 黒褐色 中取浮石と南部浮石を含む
中央に炭化材と焼土塊含む
2. 10YR 2/1 黒色 中取浮石多く含む、褐色土含む
床面直上に炭化材あり
3. 10YR 2/3 黒褐色 中取浮石多く含む、褐色土含む
下に炭化材と焼土塊含む
4. 10YR 2/3 暗褐色 Vb層起源、褐色土ブロック多い



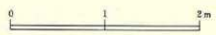
E76
S13



1. 10YR 2/2 黒褐色 中取浮石少量含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 中取浮石少量含む
3. 10YR 4/6 褐色 Va層起源、南部浮石少量含む
4. 10YR 2/1 黒色 中取浮石少量含む

S11
E78

S11
E76



図版17 VD-1 住居跡他

(5) B調査区の土坑とその他の遺構

土坑30基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構と埋設土器が各1箇所である。土坑は尾根後線部に検出されたものが多い。これらの土坑は縄文時代中期末葉～後期中葉に位置づけられるものが多く、形態的には本来フラスコ形であったものが主体である。また、南斜面下位を中心に検出された5基の土坑は弥生時代後期のものと思われる。

III E-1 土坑 (図版18, 写真図版20)

尾根中央部の北斜面上位に位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形に近く、開口部径122×116cm、底部径112×112cm・深さは中心部で30cmである。壁の立ち上がりは、北半は外傾、南半は内傾気味であり、本来はフラスコ形であろう。底面は2～5cmほど掘りすぎているが、本来は平坦に近いものと思われる。

埋土は、上位から黒色、黒褐色、黒褐色の土層で構成され、全体的に自然堆積層である。

遺構の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉に位置づけられる。

遺物 (図版29, 写真図版38)

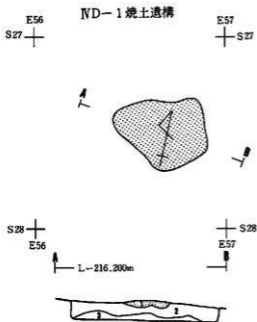
埋土から土器片109・110が出土している。共に縄文時代後期の粗製土器で、同一個体の可能性がある。109は口縁部片で、緩く外反する。折り返し口縁で、折り返された部分は無文帯となっている。地文はR1段の網目状蒸糸文である。110は同様の地文をもつ体部片である。

III F-1 土坑 (図版18, 写真図版20)

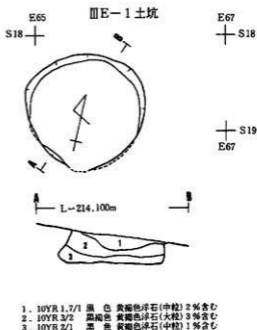
尾根東端部のIII F-1 住居跡内に位置し、石囲炉の北半を切ってつくられている。住居跡精査中に床面より軟質な部分があることから、土坑であることが判明した。遺構の上部はすでに失っているが、住居跡床面における平面形は円形で開口部径84×82cm、底部径106×106cm、深さは中心部で58cmである。断面形はフラスコ形であり、壁はかたい。南壁上位には石囲炉の石があり、壁面には焼けている部分がある。底面は浅黄色の凝炭岩が多く入るVII層上面であり、平坦でかたくしまっている。

埋土は、黒褐色シルトが多く、壁際には壁の崩落土がみられる。黒褐色シルト層は、住居跡埋土3から連続するものである。

出土遺物はなく時期は不明であるが、住居跡の埋土をみると、埋土中位付近から掘り込まれ、上位は十和田a火山灰に覆われていることから、縄文時代後期中葉～晩期の遺構と思われる。

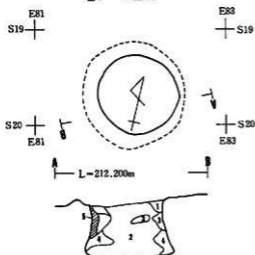


1. 7.5YR 3/4 暗褐色 焼土あまり焼けていない
2. 10YR 2/2 褐色 黄褐色浮石少含む
3. 10YR 4/4 褐色 黄褐色浮石多く含む

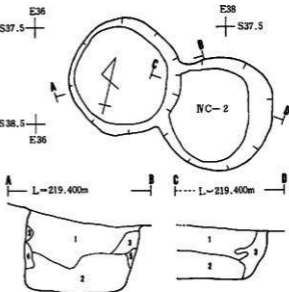


1. 10YR 1.7/1 黒色 黄褐色浮石(中粒)2%含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石(大粒)3%含む
3. 10YR 2/1 黒色 黄褐色浮石(中粒)1%含む

NC-1・2 土坑



1. 10YR 3/3 暗褐色 壁上位の粘質土、Vb層起部
2. 10YR 2/2 暗褐色 黄褐色浮石(中粒)1~2%含む
3. 10YR 2/3 黄褐色 粘質層土
4. 10YR 2/3 黄褐色 壁別層土、3より汚れている
5. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層(地山)張りすぎ



1. 10YR 4/3 濃い黄褐色 黄褐色浮石(大粒)1%含む
2. 7.5YR 4/3 褐色 Vb層起部、炭化物少量含む
3. 10YR 4/6 褐色 Va層起部
4. 10YR 3/4 暗褐色 Va層起部
5. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層、張りすぎ

図版18 B調査区土坑(1)他

IVC-1 土坑 (図版18, 写真図版21)

尾根中央部の稜線部付近に位置する。当初は単一の土坑と考えていたが、埋土断面精査時に二つの土坑であることが確認され、底面付近で本土坑がIVC-2土坑を切ってつくられていることが判明した。検出面はIV~V層付近である。平面形は円形で、開口部径120×116cm、底部径109×96cm、深さは中心部で72cmである。断面形はピーカー形であるが、壁面の崩落を考えると本来はフラスコ形であったと思われる。底面はVc層付近で中央部が5cmほど低くなっている。埋土は、上位はにぶい黄褐色土、下位は褐色土であり、壁際には壁の崩落土がみられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

IVC-2 土坑 (図版18, 写真図版21)

尾根中央部の稜線部付近に位置し、IVC-1土坑の埋土断面精査時に検出された。平面形は円形で、開口部は直径120cm、底部は直径98cm、深さは中心部で56cmである。断面形はピーカー形であるが、本来はフラスコ形であったと思われる。底面はVb層下位でほぼ平坦である。底面の西端付近はIVC-1土坑によって切られている。本土坑の底面は、IVC-1土坑の底面より、15cmほど高い。埋土は、上位はにぶい黄褐色土、下位は褐色土であり、壁際には壁の崩落土がみられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

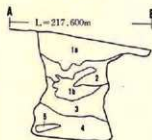
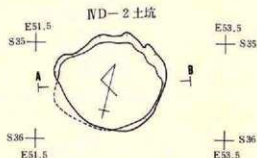
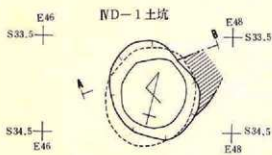
IVD-1 土坑 (図版19, 写真図版21)

尾根中央部の稜線部付近に位置し、IVD-1住居跡の北約4m付近にある。検出面はIV~V層付近である。平面形は円形に近く、開口部径104×94cm、頸部径72×70cm、底部径102×94cm、深さは中心部で108cmである。断面形はフラスコ形であり、壁の中位がくびれる。壁面の上位はVa層、中位はVb層であるが、下位は軟質な明褐色土とかたい粘土質の褐色土である。下位の2枚の層は基本土層ではなく、基本土層のVIとVIIの間にはいるものと思われる。ここではVc層とVd層と呼ぶことにする。底面はVd層でほぼ平坦である。

埋土は、上位と下位が黒褐色土、中位は壁崩落土起源の褐色土主体であり、全体的に自然堆積と思われる。出土遺物はなく、時期は不明である。

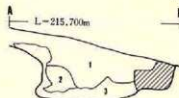
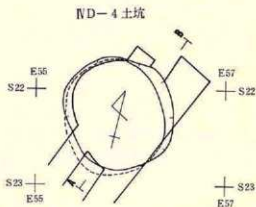
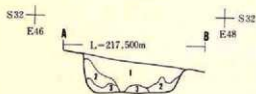
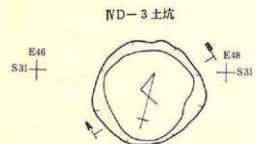
IVD-2 土坑 (図版19, 写真図版22)

尾根中央部の稜線部付近に位置する。検出面はIV~V層付近である。本根による攪乱があり、平面形は不整形円形で、開口部径102×100cm、底部径98×94cm、深さは中心部で38cmである。壁は本根の攪乱の少ない所では、内傾ないしは直に近いことから、断面形は本来フラスコ形であろう。Vb層の底面は、平坦でかたい。埋土は、上位は黒褐色土、下位は褐色土であり、全体



1. 10YR 2/2 黒褐色 黒色土とVa層の混土
 2. 10YR 4/6 褐色 壁上位の崩落土、Va層起源
 3. 7.5YR 4/3 褐色 Va層起源の汚れた土

- 1a. 10YR 2/2 黒褐色 黒色土とVa層の混土
 1b. 10YR 2/3 黒褐色 黒色土とVa層の混土
 2. 10YR 3/4 暗褐色 Va層起源の汚れた土
 3. 7.5YR 4/3 褐色 Va層起源の土が混入
 4. 10YR 2/3 黒褐色 3よりしまりがない
 5. 7.5YR 5/6 明褐色 壁面下位の崩落土



1. 10YR 3/3 暗褐色 Va層起源の汚れた土
 2. 10YR 4/6 褐色 Va層起源
 3. 10YR 4/6 褐色 Va層起源

1. 10YR 2/1 黒色 黄褐色浮石(中〜大粒)2層含む
 2. 10YR 2/1 黒色 黄褐色浮石1より少ない
 3. 10YR 3/2 暗褐色 黒色土とVa層起源の混土

図版19 B調査区 土坑(2)

的に自然堆積である。土坑の時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉と思われる。

遺物（図版30, 写真図版39）

埋土から縄文土器片111が出土した。沈線区画された磨消縄文をもつ体部片である。

IV D-3 土坑（図版19, 写真図版22）

尾根中央部の後線部付近に位置する。検出面はIV～V層付近である。平面形は円形に近く、開口部径110×107cm、底部径92×90cm、深さは中心部で36cmである。V a層の壁は脆く、外傾気味に立ち上がる。断面形はピーカー形に近い。底面はV b層上面であり、平坦である。埋土は、上位は暗褐色土、壁から底面にかけては褐色土である。いずれもV a層起源の自然堆積層である。土坑の時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉と思われる。

遺物（図版30, 写真図版39）

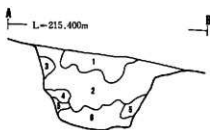
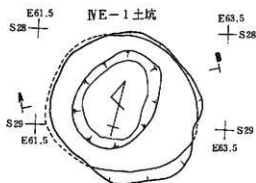
埋土から縄文土器片（112～114）が出土した。112は沈線区画による磨消縄文が施された体部片で、磨消部分の先端に「鱗状突起」をもつ。113・114は地文にL R縦回転による単節斜縄文をもつ粗製土器片である。

IV D-4 土坑（図版19, 写真図版22）

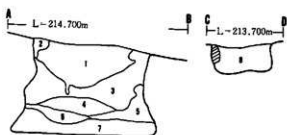
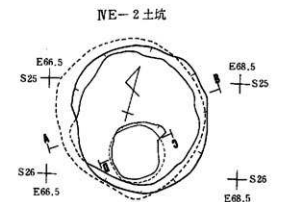
尾根中央部の北斜面上位に位置する。検出面はIII～IV層付近である。検出時のプランは不鮮明であり、2本のトレンチを入れて遺構であることを確認した。従って遺構上位を掘りすぎたが、平面形は円形に近く、頸部径120×114cm、底部径118×114cm、深さは中心部で60cmである。壁を掘りすぎた部分もあるが、全体的に内傾した立ち上がりを示し、断面形はフラスコ形となる。V a層下位面が底面となっており、中央部が僅かに低く、床面はやや軟質である。埋土は、浮石を含む黒色土主体であり、底面近くでは褐色土が多くなる。出土遺物はなく、時期は不明である。

IV E-1 土坑（図版20, 写真図版23）

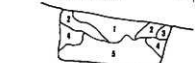
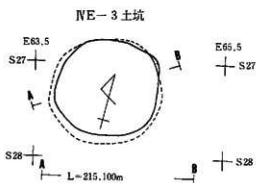
尾根中央部の後線部付近に位置する。検出面はIV～V層付近である。平面形は円形に近く、開口部径116×146cm、底部径158×146cm、深さは中心部で80cmである。壁の立ち上がりは断面実測時は中位・下位が掘り足りず外傾している。断面形はピーカー形である。底面はV b層中位付近であり、中央部には径106×80cmの楕円形の窪みがある。窪みの深さは最大13cmである。底面は全体的に軟質であり、V a層の壁も脆く崩れやすい。埋土は、上位・中位は黒褐色土、下位は暗褐色土である。全体的にV a層主体の混土からなる自然堆積層である。出土遺物はなく、時期は不明である。



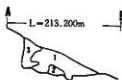
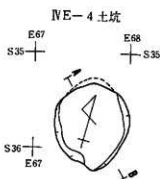
1. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中粒)1%含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 炭化物繊維を含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 炭化物や浮石を含まない
4. 10YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石(中-大粒)1%含む
5. 10YR 4/4 褐色 壁の腐落土、かたくしまる
6. 10YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石(中-大粒)1%含む 炭化物繊維を含む、Va層起源が主



1. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層起源、人為的堆積、かたくしまる
2. 10YR 3/4 暗褐色 Va-Vbと黒色土の混土
3. 10YR 2/3 黒褐色 2より黒色土多い、炭化物を含む
4. 7.5YR 4/4 褐色 1と同じ、人為的堆積
5. 10YR 4/6 褐色 VaとVbの混土
- 6-7. 7.5YR 4/4 褐色 1と同じ、人為的堆積
8. 10YR 3/3 暗褐色



1. 10YR 2/2 黒褐色
2. 10YR 3/3 暗褐色
3. 10YR 3/4 暗褐色
4. 10YR 4/6 褐色



1. 10YR 1.7/1 黒色
2. 10YR 2/2 黒褐色 黒色土とVaの混土
3. 10YR 3/3 暗褐色 Va層起源

図版20 B調査区土坑(3)

IV E-2 土坑 (図版20, 写真図版23)

尾根中央部の稜線部付近に位置する。検出面はIV~V層付近であり、V b層起源の褐色土がはいる円形に近いプランとして検出された。開口部径150×146cm、底部径162×150cm、深さは中心部で94cmである。壁は全体的に内傾する立ち上がりを示し、中位で少しくびれる。断面形はフラスコ形である。底面はV c層付近で、平坦である。底面の南壁寄りには径60cm、深さ25cmの小さな円形のピットがある。埋土は、上位は褐色土、中位は黒褐色土、下位は褐色土であり、褐色土はV b層起源の人為的堆積層である。出土遺物はなく、時期は不明である。

IV E-3 土坑 (図版20, 写真図版23)

尾根中央部の稜線部付近にあり、IV E-1土坑とIV E-2土坑の間に位置する。平面形は円形に近く、開口部径104×98cm、底部径118×108cm、深さは中心部で50cmである。壁は脆く少し掘りすぎているが、全体的に内傾気味の立ち上がりを示しており、断面形は本来フラスコ形であろう。底面はほぼ平坦である。埋土は、上位では黒褐色土が多く、下位では暗褐色土が多い。壁際の褐色土は本来の壁と思われる。出土遺物はなく、時期は不明である。

IV E-4 土坑 (図版20, 写真図版24)

尾根東端部の南東斜面上位に位置する。検出面はIV~V層付近である。掘りすぎも少しあるが、平面形は楕円形に近く、開口部径92×78cm、底部径98×96cm、深さは中心部で26cmである。壁は、斜面上位では直壁に近いが、下位では不明瞭となる。断面形はピーカー形に近い。底面はV a層付近である。木根による攪乱もあり、凹凸のある底面である。埋土は黒色土主体で、壁際には崩落土がみられる。埋土の主体を占める黒色土は、弥生時代に位置づけられるIV F-1土坑やIV F-2土坑に類似する。出土遺物はない。

IV E-5 土坑 (図版21, 写真図版24)

尾根中央部の稜線部付近に位置し、住居跡状遺構と思われた箇所を調査した際に、V b層起源の褐色土ブロックがあり、土坑の存在が確認された。平面形は不整形円形で、開口部径120×110cm、底部径144×142cm、深さは中心部で98cmである。断面形はフラスコ形であり、中位がくびれる。壁の中位はV a層、下位はV b層であり、下位は大きく脹む。底面は、中央部は平坦に近いが、壁際では次第に高くなる。埋土は、上位は黒褐色土主体であり、中位から下位褐色土が多くなる。褐色土は人為的堆積層である。時期は縄文時代晩期初頭に位置づけられる。

遺物 (図版30, 写真図版39)

115は埋土の下位から出土した深鉢形土器である。体部は外傾して立ち上がり、上半部はわず

かに内湾する。口縁部は、小さな山形が連続する。頸部には沈線に区画された無文帯が廻り、体部下端にも沈線が施されている。無文帯及び内面は雑に磨かれている。地文は節の細かいLR単節斜縄文である。また、内面には炭化物が付着している。

IV E-6 土坑 (図版21, 写真図版24)

尾根東端部の南東斜面上位に位置する。検出面はIV~V層付近である。平面形は円形に近く、開口部径148×140cm、底部径148×136cm、深さは中心部で44cmである。斜面上位の壁面はVa層からVb層に達し、内傾する立ち上がりを示す。下位の壁面はVa層付近までであり、直壁に近い。断面形は本来フラスコ形であろう。底面はVb層であり、南東部は平坦であるが、北西部は斜面上位ほど高くなっている。埋土は、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土であり、境目には少量の現地性焼土がみられる。また、壁際には壁の崩落土がみられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

IV F-1 土坑 (図版21, 写真図版25)

尾根東端部の南東斜面下位に位置する。検出面はIV~V層付近であり、黒色土の円形プラン中央には、弥生時代の毀れた埋設土器がある。平面形は円形で、開口部径100×94cm、底部径86×82cm、深さは中心部で24cmである。壁は崩れやすいが、全体的に直に近い立ち上がりを示しており、断面形はピーカー形である。底面はVa層付近であり、地山に沿って5~6°傾き、底面には小さな凹凸がある。

埋土は、埋設土器付近では砂まじりの黒色土であり、その他は黄褐色浮石まじりの黒褐色土が主体である。埋設土器は壺の体部下半であり、ほぼ正立した状態で埋置されている。この土器内には93個の不定形な小石が入っていた。小石の重量別構成は5g未満が46個、10g未満が14個、15g未満が15個、20g未満が7個、35g~100gが7個である。また、土器の近くには、580gと1160gの角礫があった。土器内の土は砂まじりの黒色土であり、土坑の埋土と同じである。

土坑の時期は、埋設土器の所属時期から弥生時代後期に位置づけられる。

遺物 (図版30, 写真図版39)

埋設されていた土器の他に、埋土から縄文土器片と弥生土器が出土している。

116~118は縄文土器片で、いずれも後期前葉に位置づけられるものである。116、117は方形基調の沈線区画文が施された体部片である。118は外反する口縁部片で頸部に沈線が廻る。

119~127は弥生土器である。127は埋設されていた壺形土器で、上半部を欠損する。底部は小振りで、体部は内湾ぎみに立ち上がり、中央部に最大径を有する。器壁は薄い。地文はL1段の撚糸文で、縦方向の施文である。また、底部に2本の不整な綾格文が廻る。内面は剥落が著

しいが、雑なナデが施され一部に炭化物の付着がみられる。119は沈線と連続刺突文が施された体部片である。120は絡糸体疋痕文が施されている。この原体は、条間の軸部分にも縄目が観察されることから、縄を軸とした絡糸体であると考えられる。121～124はいくぶん傾斜した縦方向の撚糸文が施されている。このうち、121と123は、尾状に斜行する撚糸文を伴う綾格文が巡る。125は底部片で、下端に不整な綾格文が巡る。地文は縦方向の撚糸文である。126は地文に縦方向の撚糸文をもつ体部片で、外面には炭化物の付着がみられる。なお、これらの土器の原体は全てL1段撚りである。

ⅣF-2 土坑 (図版21, 写真図版25)

尾根東端部の南東斜面下位に位置する。検出面はⅣ～Ⅴ層付近である。斜面下位(南壁)付近に若干の掘りすぎがあるため、平面形はやや卵形気味で開口部径100×88cm、底部径86×74cm、深さは中心部で10cmである。壁の立ち上がりは緩やかであり、断面形は皿形である。底面には木根による凹凸があり、斜面に沿って傾く。埋土は、焼土ブロックを少量含む黒色土が多く、斜面下位部分ではⅤa層起源の褐色土がみられる。褐色土部分には若干掘りすぎがある。

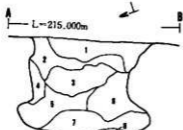
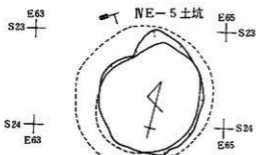
土坑の時期は、埋土の特徴や出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

遺物 (図版31, 写真図版40)

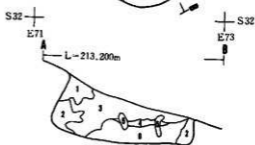
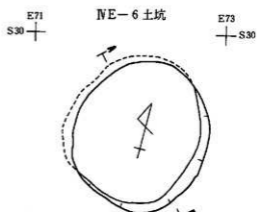
埋土から弥生土器(128～132)が出土している。128は体部上半～口縁部片である。体部はいくぶん膨らみを有し、頸部で緩く外反した後、口縁部は再び緩く内湾する。頸部には4本の平行沈線が巡る。地文はL1段の撚糸文で、口縁部～頸部には沈線を施した後、右下りの斜め回転、体部には回転方向を違えて羽状縄文風の施文をしている。また、口唇部にも施文されている。器壁は薄く、内面はナデ調整され、外面には炭化物が多く付着している。129は、128と同一個体の口縁部片である。130・131もこれらと同一個体と考えられる体部片である。131は地文に斜行するL1段の撚糸文をもつ体部片である。

ⅣF-3 土坑 (図版22, 写真図版26)

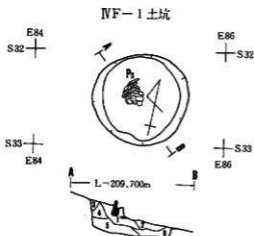
尾根東端部の南東斜面中位に位置し、ⅣF-1土坑とⅣF-6土坑の間にある。検出面はⅣ～Ⅴ層付近である。平面形は円形で、開口部径124×122cm、底部径118×114cm、深さは中心部で38cmである。壁はⅤa層付近で崩れやすく、壁の立ち上がりは、斜面上位では内傾気味、斜面下位では外傾気味である。断面形はピーカー形に近い。底面はⅤa層とⅤb層の境界付近であり、平坦でかたい。埋土は、中央部から壁にかけて黒色土、黒褐色土、褐色土の自然堆積層である。出土遺物はなく、時期は不明である。



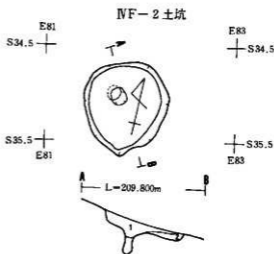
1. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中粒)1%含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 1にVb解起源の土混入
3. 10YR 4/4 褐色 VaとVbの混土、人為的堆積
4. 10YR 3/4 暗褐色 炭(Va解)の崩壊土
5. 10YR 3/4 暗褐色 4よりやや粘りあり
6. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中-大粒)3-5%含む
7. 10YR 4/4 褐色 Vb解起源、人為的堆積、かたくしまる
8. 10YR 4/3 褐色 赤褐色 Va解、粘土質



1. 10YR 3/3 暗褐色 黄褐色浮石(中粒)2%含む
2. 10YR 4/4 褐色 黄褐色浮石(中粒)1%含む
3. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中粒)1%含む
4. 10YR 3/3 暗褐色 Va解起源、混土混入
5. 10YR 3/2 黒褐色 赤褐色の塊土
6. 10YR 3/4 暗褐色 VaとVbの混土、かたくしまる



1. 10YR 2/1 黒色 シルト質、砂解がはいる
2. 10YR 2/2 黒褐色 1と褐色土と黄褐色浮石の混土
3. 10YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石を含む、汚れた土
4. 10YR 2/2 黒褐色 2よりも褐色土が多い
5. 10YR 2/1 黒色 シルト質、黄褐色浮石まばらに含む
6. 10YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石を含む、褐色土が混入



1. 10YR 2/1 黒色 シルト質、黄褐色浮石(中-大粒)1%含む
褐色土のブロックが少量混入
2. 10YR 4/4 褐色 シルト質、黄褐色浮石(中-大粒)1%含む

図版21 B調査区土坑(4)

IV F-4 土坑 (図版22, 写真図版26)

尾根東端部の南東斜面下位に位置し、IV F-1 土坑とIV F-5 土坑の間にある。検出面は、IV ~V 層付近である。平面形は楕円形気味で、開口部径78×63cm、底部径63×52cm、深さは中心部で16cmである。壁と底面は、壁の立ち上がりは緩く、断面形は皿形である。底面は掘りすぎたが、本来は丸底である。埋土は黄褐色浮石を含む黒色土である。なお、埋土2の褐色部分には掘りすぎがある。出土遺物の所属時期や埋土の特徴から、時期は弥生時代後期に位置づけられる。

遺物 (図版31, 写真図版40)

埋土から弥生土器片も133が出土した。L 1 段の燃永文による羽状縄文が施された体部片である。

IV F-5 土坑 (図版22, 写真図版25)

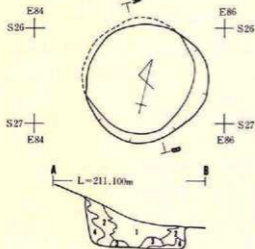
尾根東端部の南東斜面下位に位置し、IV F-2 土坑とIV F-4 土坑の間にある。検出面はIV ~V 層付近である。平面形は円形で、開口部径97×94cm、底部径90×85cm、深さは中心部で18cmである。壁は崩れやすいが、全体的に直立に近い立ち上りをなし、断面形はビーカー形である。底面は平坦だが、斜面に沿って10°ほど傾く。埋土は、上位は黒色土、下位は暗褐色土である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、形状や規模、埋土などの特徴は弥生時代後期の土坑に類似する。

IV F-6 土坑 (図版22, 写真図版26)

尾根東端部の南東斜面上位に位置し、III F-1 住居跡の南東壁付近のIV F-1 埋設土器の埋土精査中に、下位に遺物を含む整い暗褐色の人為層があることから、遺構の存在が確認されたものである。従って本土坑は、IV F-1 埋設土器(縄文後期前葉)よりは古いことになる。また、III F-1 住居跡との重複関係をみると、住居跡と土坑の壁はほぼ同位置にあり、切り合い関係は明瞭ではないが、埋土断面をみると僅かに住居跡を切っているように思われる。従って本土坑はIII F-1 住居跡より新しい可能性がある。平面形は長円形~隅丸長方形であり、開口部径188×142cm、底部径180×112cm、深さは中心部で50cmである。壁は北西から南にかけて直立に近く、北東では外傾する立ち上りを示す。特に壁の下位はV b 層であり、全体的に直に近くかたい。V b 層のかたい底面は、平坦で斜面下位方向に5°ほど傾く。埋土は、壁際を除くと上位から、暗褐色、褐色、黒褐色、暗褐色の土層で構成され、全体的に人為的堆積層が多い。出土遺物は埋土3と5で多く、埋土2はV b 層起源のかたい無遺物層である。

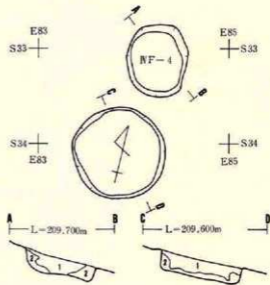
土坑の時期は、出土遺物の所属時期から、縄文時代後期前葉に位置づけられ、さらに同時期

NF-3 土坑



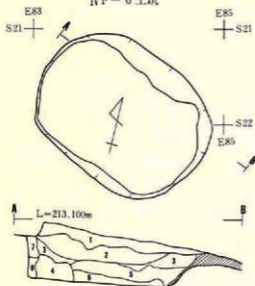
1. 10YR 2/1 黒色 黄褐色浮石(中粒) 2%含む、炭化物含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石(中—大粒) 1%含む
3. 10YR 2/2 黒褐色 2にほぼ同じ
4. 10YR 4/4—4/5 褐色 壁の剥落土

NF-4・5 土坑



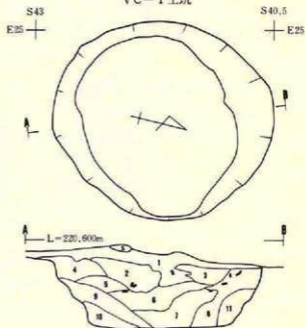
1. 10YR 2/1 黒色 黄褐色浮石(中粒) 1%含む
2. 10YR 3/4 暗褐色 Va層起源

NF-6 土坑



1. 10YR 3/3 暗褐色 Vb層起源、しまりなし
2. 7.5YR 4/1 褐色 Vb層起源、人為的堆積
3. 10YR 3/3 暗褐色 VaとVbの混土
4. 10YR 3/2 黒褐色 黄褐色浮石(中粒) 1%と炭化物少量含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 4よりしまりが少ない
6. 10YR 3/3 暗褐色 かくしまる、黄褐色浮石(中—大粒) 1%
7. 10YR 4/4 褐色 壁上位の剥落土、Va層起源
8. 10YR 4/3 におい、黄褐色 VaとVbの混土

VC-1 土坑



1. 10YR 3/1 暗褐色 黄褐色浮石(小粒) 1%含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 黄褐色浮石 1%と炭化物少量含む
3. 10YR 4/4 褐色 Va層起源主体
- 4-7 8407. 7.5YR 4/3 褐色
- 5-6. 7.5YR 4/4 褐色 Va層起源主体
7. 5YR 3/3 暗褐色
11. 10YR 4/6 褐色 壁の剥落土

図版22 B調査区土坑(5)

のIVF-1埋設土器に先行し、III F-1住居より新しい可能性がある。また、出土遺物の主体が土器片を再利用した三角形土製品であることや埋土の特徴などから、この土坑は貯蔵穴ではなく、墓墳的性格などが考えられる。

遺物 (図版31, 写真図版40)

縄文土器と土製品が出土している。これらはすべて埋土の中位～下位からの出土で、縄文時代後期前葉に位置づけられるものである。

土器 (134～137) 134は無文地に沈線による曲線文が描かれた体部片で、器面は丁寧に磨かれている。135も沈線による曲線文をもつが、地文としてR1段の無節斜縄文が施されている。136は小型の壺形土器で、体部に縦孔を有する小突起をもつ。137は粗製土器の口縁部片で、緩く内湾する。折り返し口縁で、折り返された部分は無文となっている。体部にはL1段の網目状縹糸文が施文されている。

土製品 (138～148) 三角形土製品138～146の9点、円盤状土製品147・148の2点が出土している。これらはいずれも、網目状縹糸文が施された粗製土器の破片を利用したものである。三角形土製品は縁辺部を打ち欠き、さらにこれを研磨して整形されている。このうち138・140・141は側面部全面を研磨しているが、他は部分的に施されるだけである。円盤状土製品は、共に周囲を雑に研磨して整形している。

V C-1土坑 (図版22, 写真図版27)

尾根頂上部の平坦面北縁に位置する。検出面はV層付近である。平面形は、開口部は不整形、底部は不整な長円形である。規模は、開口部径218×204cm、底部径188×153cm、深さは中心部で76cmである。壁の上位は崩れやすく、全体的に外傾する立ち上がりを示し、断面形は楕円形である。底面はかたい粘土質の褐色土 (Vd層) であり、全体的に平坦である。埋土は、上位は暗褐色～黒褐色土であり、中位・下位では褐色土が主体である。遺物は埋土中位に多く、中位は人為的堆積層であろう。

土坑の時期は、出土遺物の所属時期から、縄文時代後期中葉に位置づけられよう。なお、この土坑の南北壁直下の底面には、2つの底面の接点と思われる箇所があることから2つの土坑の可能性もある。

遺物 (図版32, 写真図版41)

埋土から縄文土器と石器が出土している。土器はいずれも縄文時代後期中葉のものである。

土器 (149～157) 149は粗製の深鉢で、下半部を欠損する。体部はほぼ直立し、口縁部はいくぶん内湾する。口唇部は内削ぎとなり、わずかに肥厚する。地文は0段多条RLの単節斜縄文で、部分的に縦走する。150は底部で、体部は外傾して立ち上がる。内外面とも雑なミガキが

施されている。151・152は同一個体と考えられる。文様は磨消縄文によって表われ、無文部分は丹念に磨かれている。縄文はLR単節と0段多条RL単節の2本を用いているが、羽状縄文とはなっていない。153も同様な磨消縄文が施されている。154は台状の突起部分で、楕円形に肥厚する頂部には深い利突を有する。155は無文の口縁部片で、器面は雑なナデが施されている。156も口縁部片で、地文にLR単節斜縄文をもつ。157は0段多条単節の2本の原体を用いた羽状縄文が施された体部片である。

石器(158~160) 158・159は剝片で、使用痕などは認められない。160は表裏両面に凹みを有する所謂凹石である。

VC-2土坑(図版23, 写真図版27)

尾根頂上部の平坦面を占地し、VC-1土坑とVC-3土坑の間に位置する。検出面はV層付近である。平面形は円形に近く、開口部径154×136cm、底部径152×150cm、深さは中心部で52cmである。壁は全体的に崩落しているが、北壁以外は僅かに内傾していることから、断面形は本来フラスコ形であろう。底面はVII層部分もあるが、Vb層最下位面が多く、ほぼ平坦でかたい。埋土は、上位は褐色土と暗褐色土、下位は黒褐色土、壁際は壁崩落した褐色土である。

出土遺物から、縄文時代の土坑と思われるが時期の細別はできない。

遺物(図版32, 写真図版41)

埋土から縄文土器片(161~163)が出土した。161は口縁部片で、縦回転によるLR単節斜縄文をもつ。162は0段多条の撚りの異なる2本の原体を用いた羽状縄文が施された体部片である。163は器面の削落が著しいが、無文の土器片である。

VC-3・4土坑(図版23, 写真図版27)

尾根頂上部の平坦面南縁付近に位置する。検出面はV層付近である。この遺構は、埋土断面から重複する遺構であることが確認され、東側のVC-3土坑が西側のVC-4土坑より新しい。2つの土坑とも平面形は円形に近く、開口部径130~140cm、底部径130cm、深さは中心部で55~70cmである。壁は直壁に近く、断面形はピーカー形であるが、壁中位にくびれがみられることからフラスコ形土坑であろう。底面はVII層付近でかたく、平坦である。埋土は、上位が暗褐色であるほかは全体的に褐色土が多く、VC-3土坑の中位では黒褐色土もみられる。

VC-4土坑の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉と思われる。

遺物(図版33, 写真図版42)

VC-4土坑の埋土から縄文土器(164~167)が出土した。164は無文の台付皿である。台部は小さく、体部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部には台形の凹凸が連続しているものと考えら

れる。165は壺形土器の口縁部で、口唇部が内割ぎみとなりこれに小突起が付く。166は0段多条LR単節斜縄文をもつ口縁部片である。167は底部片で、体部は内湾ぎみに立ち上がる。地文は0段多条LRの単節斜縄文である。

V C-5 土坑 (図版23, 写真図版28)

尾根頂上部の平坦面北縁を占地し、V C-1 土坑の西に位置する。検出面はV層付近である。平面形は円形に近く、開口部径156×134cm、底部径144×138cm、深さは中心部で68cmである。壁は北側が崩落し直立に近いほかは、内傾する立ち上がりを示しており、断面形はフラスコ形である。底面は角礫を含むVII層でかたく、平坦である。埋土は、上位にはぶい黄褐色、中位は暗褐色、壁際から下位は褐色土が主体である。埋土3と5は人為的堆積層であろう。なお、埋土1は浅い皿形の土坑の可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

V C-6 土坑 (図版23, 写真図版28)

尾根頂上部の平坦面を占地し、調査区の南側境界付近に位置する。検出面はV層付近である。調査したのは北側2分の1だけであり、形状や規模は不明である。埋土は、東から西にほぼ垂直方向に変化し、他の土坑にみられる埋土とは異なる。この埋土は、自然土層の横転と考えることもできる。従って風倒木の可能性が大きい。

V C-7 土坑 (図版24, 写真図版28)

尾根頂上部から北東に下る緩斜面に位置する。検出面はIV～V層付近である。平面形は円形に近く、開口部径(116)×108cm、底部径(100)×86cm、深さは20cmである。壁は外傾する部分が多く、断面形は皿形である。底面はV a層上面で平坦であり、西から東に5°近く傾く。埋土は黒褐色土が多く、底面近くには暗褐色土が僅かにみられる。また黒褐色土中には、焼土がまじる。出土遺物からの時期決定はできない。

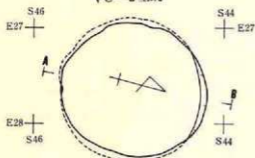
遺物 (図版33, 写真図版42)

埋土から縄文土器片(168)が出土した。RL単節斜縄文が施された体部片である。

V C-8 土坑 (図版24, 写真図版29)

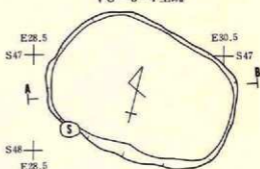
尾根頂上部の中央やや西寄りに位置する。検出面はV層付近であり、土器片の多い円形プランとして検出された。規模は、開口部径110×106cm、底部径114×108cm、深さは中心部で30cmである。壁は、北半は外傾し、南半は内傾する。断面形はフラスコ形に近い。底面は中心部で僅かに窪む。埋土は褐色の単一土層であり、上位に土器片が多い。

VC-2 土坑



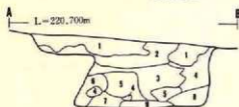
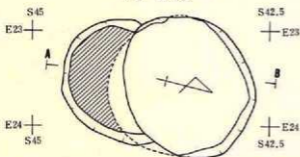
1. 10YR 4/4 褐色 黄褐色浮石(中粒) 5%含む
2. 10YR 3/4 暗褐色 黄褐色浮石(中-大粒) 5%含む
3. 10YR 3/2 深褐色 黄褐色浮石(中粒) 3%含む
4. 10YR 4/4 褐色 黄褐色浮石(中粒) 3%含む
5. 10YR 4/6 褐色 壁の崩落土 6は5よりよごれている

VC-3・4 土坑



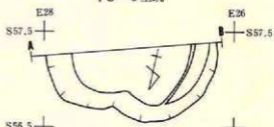
1. 10YR 3/3 暗褐色 Va層起源、炭化物少量含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 Va層起源、炭化物少量含む
- 3-4. 7.5YR 4/4 褐色 Va層起源主体
- 5-6. 10YR 3/4 暗褐色 1より炭化物少ない
- 6-7. 10YR 4/6 褐色 Va層起源主体
- 8-9. 7.5YR 4/3 褐色 VaとVbの混土

VC-5 土坑



1. 10YR 4/4 褐色 Va層起源の汚れた土
2. 10YR 5/4 に近い黄褐色
3. 10YR 3/4 暗褐色
4. 10YR 4/6 褐色 壁の崩落土(Va層)
5. 10YR 3/3 暗褐色 炭化物少量含む
6. 7.5YR 4/3
7. 10YR 3/3 暗褐色 炭化物5-8より少ない
8. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層起源主体、やや粘性あり
9. 10YR 4/4 褐色 Vb層起源主体、やや粘性あり

VC-6 土坑



1. 10YR 3/3-3/4 暗褐色 VaとVbの混土
2. 10YR 4/6 褐色 Va層起源多い
3. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層起源多い、かたくしまる
4. 10YR 3/2 深褐色 3に黒色土混入、かたくしまる
5. 7.5YR 4/3 褐色 3に角礫1%含む
6. 7.5YR 4/3 3に角礫20%含む
7. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層主体、かたくしまる
8. 10YR 4/4 褐色 汚れたVa層起源の土

土坑の時期は、出土遺物の所属時期から、縄文後期後葉に位置づけられる。

遺物 (図版33, 写真図版42)

埋土から縄文土器 (169~172) が出土した。169は粗製の深鉢形土器である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、下半部から緩く外傾して口縁部に続いている。地文は0段多条LR単節斜縄文で、内面は雑に磨かれている。170~172は体部片である。170は節の細かいLR単節斜縄文が施されている。171はLR、172はRLの単節斜縄文をもつ。

VC-9・10土坑 (図版24, 写真図版29)

尾根頂上部の平坦面西縁に位置する。検出面はV層上面である。VC-9土坑の底部付近を精査した際に、VC-10土坑が検出された。VC-10土坑は、VC-9土坑の底面を切っており、新しい遺構である。

VC-9土坑は、開口部は直径165cmの円形、底部は直径135cmの不整形円形、深さは中心部で87cmである。壁上位のVa層付近は崩れやすいが、中位・下位は角礫の多いVII層であり、上位に比べて崩落は少ない。断面形は本来フラスコ形であろう。底面は弱い丸底であり、中央部は10cmほど窪む。

VC-10土坑の底部は、径90×70cmの不整形長円形である。底面は、VC-9土坑より20cmほど底く、丸底状である。中央部が10cmほど窪む。

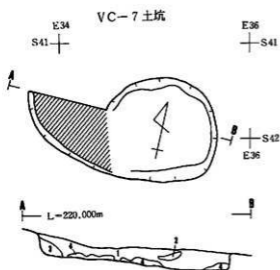
埋土は、上位は暗褐色土、下位は褐色土である。両土坑とも埋土は同じであり、時期的には大差がないものと思われる。時期は縄文時代であるが細別はできない。

遺物 (図版33, 写真図版42)

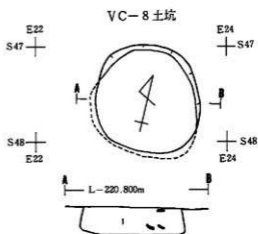
VC-9土坑の埋土から縄文土器片 (173~175) が出土した。173は台状の突起部分で、頂部に凹みを有する。地文は燃りの緩いLR単節斜縄文で、口縁部には沈線が巡る。174は粗製土器の体部片である。地文は縦回転によるLR単節斜縄文で、これに縦方向の綾絡文が加えられている。175は3本の沈線に区画された磨消縄文をもつ。区画内には2本の原体による羽状縄文が施されている。

NE-1陥穴穴状遺構 (図版24, 写真図版30)

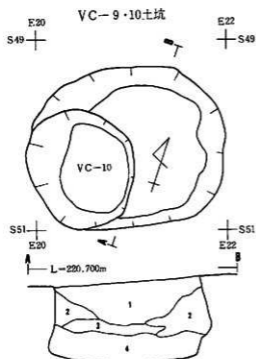
尾根中央部の稜線部付近に位置し、住居跡状遺構と思われた箇所を調査した際に、IVE-5土坑と共に検出された遺構である。従って、遺構上位は30~40cm掘りすぎている。平面形は溝状であり、開口部径154×45cm、底部径170×20cm、最大深103cmである。短軸の断面形は幅の狭いU字状である。長軸の断面形をみると、北壁は内傾し、南壁は屈曲しながら全体的には外傾する。壁面は崩壊が少なく、底面はほぼ水平である。埋土は、全体的に黒褐色土と褐色土の互



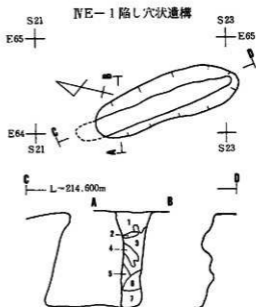
1. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中粒) 2%含む、炭化物含む
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 黄土(投げ込み)
3. 10YR 4/6 褐色 Va層起源
4. 10YR 3/4 暗褐色 1とVaの混土



1. 10YR 4/4~4/6 褐色 Va層起源の汚れた土
上位に土器片が多くはいる



1. 10YR 3/3 暗褐色 黄褐色浮石(中~大粒) 2%含む
2. 10YR 4/4 褐色 Va層起源、下位にVbまじる
3. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層起源、浮石微量、粘性あり
4. 7.5YR 4/4 褐色 Vb層起源、浮石なし、粘性あり



1. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中~大粒) 2%含む
2. 10YR 4/6 褐色 Va層主体のブロック
3. 10YR 3/4 暗褐色 下位にはVb層起源の土混入
4. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中~大粒) 2%含む
5. 10YR 3/2 黒褐色 4よりも浮石少ない
6. 7.5YR 4/6 褐色 Va・Vbの混土
7. 10YR 2/2 黒褐色 黄褐色浮石(中粒) 1%含む

図版24 B調査区土坑(7)他

層である。出土遺物はなく、時期は不明である。

ⅣD-1 焼土遺構 (図版18, 写真図版20)

尾根中央部の稜線部付近に位置する。検出面Ⅲ～Ⅳ層付近である。焼土は、径50×40cmの範囲に形成されている。焼土の厚さは最大3cmであり、あまり焼けていない。焼土の周りには柱穴などの住居跡に伴う遺構はない。出土遺物はなく、時期は不明である。

ⅣF-1 埋設土器 (図版15, 写真図版29)

尾根東端部のⅢF-1住居跡南壁付近に位置し、ⅣF-6土坑の上位に埋設されている。検出されたのは底部付近であり、体部上半を欠く。ⅣF-6土坑の埋土上位のVb層起源の暗褐色土を掘り込み、正立した状態で埋めている。土器は縄文時代後期前葉のものである。

遺物 (図版33, 写真図版42)

遺物は、埋設されていた土器176の1点だけである。壺形土器と考えられるが上半部は欠損する。底部は平底で、体部は内湾して立ち上がる。文様は入組状の渦巻文を縦に配し、これを基点とする沈線文が横位に展開している。内外面は割合丁寧に磨かれている。

(6)遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物には縄文土器・弥生土器・土製品・石器がある。出土量は42×32×19cmのコンテナ6箱、約55kgである。大半は土器で、石器及び土製品は少ない。

土器

縄文土器と弥生土器があり、出土量では弥生土器が多い。時期別には縄文土器では早期を除く各時期のものがあり、この中では後期の土器が多い。弥生土器はいずれも後期～終末期に位置づけられる土器群である。

第Ⅱ群土器（図版34、写真図版43）

同一個体と考えられ177・178の2点が出土している。胎土には植物繊維を含むが、量は多くない。177は口縁部片である。折り返し口縁となり、折り返された末端部に沿って、横方向からの刺突が連続して施されている。口縁部にはLR原体の直横文が文様を構成し、口唇部にも斜位に押圧されている。体部にはR1段の木目状燃糸文が施文されている。内面は化粧粘土が貼られ、丁寧に磨かれている。178は体部片である。これらは、文様の特徴から2類とした前期末葉期の土器であると考えられる。

第Ⅲ群土器（図版34、写真図版43）

2類（179～189） 未葉に位置づけられる土器群である。179・180は同一個体と考えられる。179は山形を呈する口縁部片で、頂部の内側はわずかに肥厚している。器面は粗く磨かれ、雑な沈線による曲線文が描かれている。180は体部片で、一部にLR単節縄文が縦回転で施文されている。181も山形を呈する口縁部片で、山形に沿って棒状工具による円形刺突が連続する。体部には沈線による文様が描かれているが、意匠は不明である。182は平縁の口縁部で、頸部に沈線が巡る。口縁部は無文となっており、体部には沈線区画された磨消縄文をもつ。183～189は沈線区画の磨消縄文が施された体部片である。183は磨消帯の中央部に沈線に囲まれた刺突文が配される。186は文様を区画する沈線上に刺突が連続して施されている。187は無文帯の末端に鱗状突起を有する。これらに施文される縄文は183を除いてLR単節斜縄文で、ほとんどのものが縦回転で施されている。189は地文にR1段の節の細かい燃糸文をもつ。

3類（190～197） 時期を限定できない粗製土器を一括した。190は小型の深鉢で、体部は緩く外傾して立ち上がり、口縁部でいくぶん内湾する。体部には細い沈線が縦方向に施されている。192は大型の深鉢である。体部は外傾して立ち上がり、中央部に膨らみを有した後、緩やかに外反して口縁部に続く。地文はLR単節斜縄文で、縦回転による施文である。193も深鉢形土器で、体部にはあまり膨らみをもたない。口縁部は小さな山形となるが単位は不明である。地文は雑な燃糸文で、斜位に施文されている。193～195は口縁部が無文となる土器群である。196

は口縁部にも縄文が施され、口唇部は角ばる。地文はいずれも縦回転によるR L単節斜縄文である。197は体部片で、縦回転によるL R単節斜縄文に縦走する不整な綾絡文が加わる。

第IV群土器（図版35～37、写真図版44～46）

1類（198～249） 初頭～前葉に位置づけられる土器群で、縄文土器の中では最も出土量が多い。このうち、198・199は初頭の土器と考えられる。198は山形を呈する口縁部片で、全体に内湾する。口縁に沿って隆帯が巡り、山形の下部には頂部に円形刺突を有する突起が付く。また、山形頂部には刻みが施されている。隆帯以下の部分は、沈線区画の磨消縄文である。199も山形を呈する口縁部片で、山形を基点にした隆帯による文様が施されている。

200は頸部から上位が残存する深鉢である。口縁部は山形を呈し、全体に緩く外反する。口縁部の山形及び、中間点には縦長の突起が配されている。文様はこの突起を基点として、上面に縄文を有する隆帯とこの両側に伴走する区画文を構成している。また、隆帯が交差する部分には、小さな刺突文が付けられている。隆帯及び口縁部に施文される縄文はL 1段無節斜縄文である。201は200と同一個体である。202は上面に縄文をもたない隆帯が文様を構成している。203～207は折り返えされた山形口縁をもち、下位の文様が磨消縄文によるものである。207を除いて、口縁部には縄文が施されている。207は口縁部に沿って沈線が巡り、山形の頂部には刺突をもつ。208は上面に縄文が施された低い隆帯と、沈線が曲線文を構成している。209～220は磨消縄文による文様をもつ土器群である。209～211は平縁を呈する口縁部である。共に渦巻文をモチーフにもつものと考えられる。212～214は同一個体である。文様は大柄な入組状渦巻文や刺菱文が横位に展開されている。215・218は方形を基調した文様をもち、216・217・219は曲線的な文様が描かれている。220は壺形土器の体部片で、曲線の磨消縄文をもつ。221は体部下端から底部が残存する深鉢である。底部は大きく、体部は外傾して立ち上がる。体部には2本1組の沈線によって、区画的文様が展開され、沈線間には部分的にL R単節斜縄文が施文されている。

222～240は無文地に沈線による文様が施されている土器群である。222は浅鉢と考えられる。体部は外傾して開き、口縁部はわずかに外反する。平縁を呈し、口唇部はいくぶん肥厚している。文様は2本1組の沈線が入組文を構成しながら横位に展開している。223は鉢または壺形土器の底部である。低い高台が付き、台部は4つの抉りを有する。体部は内湾して立ち上がり、沈線による文様が施されるが、意匠は不明である。224は小型の鉢型土器の口縁部である。山形口縁となり、頂部の下部には縦長の小突起をもつ。文様は2本1組の沈線による区画文である。225も鉢形土器の口縁部で、平縁を呈する。226～228は同一個体と考えられる。口縁部は山形を呈し、緩く外反する。文様は口縁部と体部とに区別されるが、いずれも渦巻文を基調としている。229～234は体部片で、いずれも渦巻文をモチーフとする文様が描かれている。335・336は

鉢形土器の口縁部で、共に折り返し口縁となる。237は長楕円文、238は横に流れる沈線文が施されている。239は「逆コ」字状の文様をもつ。240は小型の壺形土器の体部片で、中央部に縦孔を有する小突起をもつ。

241～248は本類に伴う粗製土器である。241～244は地文に縄文が施される土器である。いずれも折り返し口縁となり、緩やかに外反する。縄文はLR単節斜縄文で、口縁部には横回転、体部には縦・斜位回転で施文されている。245～249は地文に網目状燃糸文をもつ土器群である。249を除いて口縁部片で、形態は全て折り返し口縁となる。原体は全てR1段摺りによるもので、245～247では口縁部には横回転、体部には縦回転で施文されている。248は口縁部が無文となっている。249は体部片である。

2類 (250～262) 中葉に位置づけられる土器群である。250・251は同一個体で、壺形土器の口縁部と考えられる。緩く内傾して立ち上がり、口唇部はいくぶん内削ぎとなる。口縁部には沈線区画された細い縄文帯が巡り、口唇部には小さな突起が付く。縄文はLR単節斜縄文で、無文の部分は丁寧に研磨されている。252は磨消縄文が施文された口縁部片で、縄文帯には0段多条の原体による結束されない羽状縄文が施文されている。253～255は同一個体と考えられる口縁部片である。いくぶん内湾し、口唇部内側は肥厚する。文様は0段多条LR単節斜縄文を沈線区画した磨消縄文である。256・257も同一個体である。文様は沈線区画された磨消縄文で、縄文は0段多条の結束されない羽状縄文である。258は大柄な入組文的文様が磨消縄文によって表わされている。259も入組状の磨消縄文をもつ。縄文はいずれも、0段多条の結束されない羽状縄文である。260も結束されない羽状縄文をもつが、原体は0段多条ではない。261は部分的に羽状縄文が施文されている。262は粗製土器の口縁部片で、口唇部内側が肥厚する。地文は0段多条の結束されない羽状縄文である。

3類 (263～267) 末葉に位置づけられる土器群である。263は頂部に不整な刻みを有する台状突起をもつ口縁部片である。文様は沈線区画された磨消縄文で、突起部分を基点として展開されている。縄文はLR単節斜縄文である。

264～267は無文土器である。264は丸底を呈する鉢で、体部は内湾する。器面は内外面とも雑なナデが施されている。265も丸底を呈する。器面は内外面とも丁寧なミガキで、光沢をもつ。226は全体に雑な作りで、器面には輪痕を残す。267は小型の浅皿で、体部は短かく上方つまみ出されている。器面は全体に粗雑にナデ調整されている。

底部 (268～272) 底部を一括した。時期の詳細は不明である。268は台付鉢で、台部はわずかに内傾し、体部は内湾して立ち上がる。地文はLR単節斜縄文である。269～270には地文は認められない。272は地文にLR単節斜縄文が施され、底面には網代痕をもつ。

第V群土器（図版38，写真図版47）

1点(273)だけの出土である。低い台状突起が連続する口縁部片で、頸部に沈線が巡る。沈線の上位には入組状の三叉文が刻まれ、下位には節の細かいLR単節斜縄文が施文されている。また、器面には、内外面とも炭化物の付着がみられる。文様の特徴から、1類とした前葉期の土器と考えられる。

第VI群土器（図版38～42，写真図版47～51）

弥生土器を一括した。時期的にはいずれも、2類とした後期～終末期に位置づけられる土器群である。器種には甕・壺・鉢形があるが、破片が多く明確な器種同定はできなかった。記述にあたっては文様を構成する要素毎によったが、これらは同一個体内で併存するものもある。

274～300は刺突文を有する土器群である。274は甕の口縁部で、頸部は外反し口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部上端には2本の平行沈線間に、これに沿って交互に上下の刺突を加えた、所謂交互刺突文が2条巡る。頸部にはL1段の燃糸文が縦方向に施文される。また、口唇部にも燃糸回転文をもつ。275は壺形土器の口縁部と考えられる。文様はL1段斜位回転の燃糸文とし、これに沈線と刺突文によって構成される。この刺突文は274と同様に、2本の沈線間に施されるが、上下の交互刺突ではなく、上部に刺突を加えた後下方に押し上げて交互刺突文風の文様を作り出している。276・277は同一個体で、交互刺突文と274のようなこれを簡略化した文様を合せもつ。地文はL1段の燃糸文で、体部には綾絡文をもつ。278・279も同様の文様が施されている。280は上下2段に刺突をもつが、整然と交互に施されたものではない。また、口縁部には焼成前に穿たれた小孔を有する。281・283・284は整然とした交互刺突文をもつ。282・286は上位の刺突を下に押し下げた文様をもつ。287は2本の沈線間に横方向からの刺突が2列に施されている。288・289は同一個体である。文様は刺突を押し下げる方法で施されるが、刺突は非常に細かい。290・292は沈線の上を横方向に刺突している。地文はL1段の燃糸文で、沈線や刺突を施した後の施文である。293も沈線と重ねた横方向の刺突文をもつが、これらの文様と地文帯とは沈線によって区分されている。295は刺突を加えた沈線の下位に、細い綾絡文が巡る。

296～300は沈線間に縦長の刺突(刻み)を施した土器群である。いずれも他の土器に比べて、器厚はいくぶん厚い。296は口縁部片で、僅かに内湾する。沈線文は口縁部に沿うように施されるが、低い山形を構成する部分もある。地文はL1段の燃糸文で斜位に施されるが、口縁部の中位と頸部は無文帯となっている。297は刺突の間隔が広い。地文は刺突文の部分まで施されているが、下位は磨消され無文帯となっている。298は刺突が施される沈線間には地文が施文されていない。299は口縁部片で、口唇部にも地文が施されている。300は296と同様に、刺突をもつ沈線が山形を構成している。

301～309は地文＋沈線で文様が構成される土器群である。301は大型の甕の口縁部で、緩く外反し、低い山形口縁を呈する。口縁部直下に2本の沈線が口縁部に沿って巡り、この下位に変形工字文風の文様が施されている。また、山形の下位には原体の末端によるものと考えられる刺突文を4個もつ。地文はL1段斜位方向への燃糸文で、変形工字文が施される部分ではいくぶん疎らとなる。302は口縁部に平行沈線的な変形工字文が施されている。頸部には幅の狭い無文帯をもち、体部との境には綾絡文が巡る。303は長頸の壺と考えられる。頸部中央部は無文帯となり、上位には沈線文、下位には綾絡文を伴う燃糸文が施文されている。304は口縁部に平行沈線が5本巡る。305は壺形土器の体部片と考えられる。L1段の燃糸文を地文とし、2本1組の沈線による流水文風の曲線文が施されている。306は底部片で、底部は外方に張り出し、体部は外傾して立ち上がる。器面には下端まで曲線文が描かれているが、意匠の詳細は不明である。307は2本1組の流水文をもつ。308も類似する曲線文をもつが、沈線は1本で描かれている。309は平行沈線文をもつ。これらの地文は全て、L1段の燃糸文である。

310～318は磨消縄文による文様をもつ土器群である。310～312は同一個体と考えられる。壺形で、口縁部に変形工字文をモチーフとする磨消縄文が施されている。地文はL1段の燃糸文で、沈線間に充填され、磨消も不十分な所が多い。313～318もこれに類似した文様が施されている。315は低い山形口縁を呈し、山形の頂部には小さな刻みをもつ。いずれも小破片のため全体の形態や文様の展開は不明であるが、文様は口縁部に限られ、頸部は無文帯となるようである。

319～328は無文地に沈線による文様が描かれた土器群である。319は壺で、口縁部には3本の平行沈線、頸部には菱形あるいは変形工字文をモチーフとする文様をもつ。320は口縁部上端と頸部に平行沈線が巡る。321は菱形文様を中心して平行沈線文が描かれている。322～324は変形工字文風の文様が施されている。325は太い平行線の下位に細い沈線による文様が描かれている。326は2本の沈線による山形文をもつ口縁部片である。327は緩い山形文を頸部にもつ。

329～348は地文のみが施された土器群である。347・348を除いて地文は全て燃糸文である。329は大型の甕で、体部にはあまり膨らみをもたず、頸部が垂直に立ち上がった後、緩く外傾する口縁部に続く。口縁部には斜めに尾状の燃糸文が伴う綾絡文が2本、施文方向を変えて巡らされている。この綾絡文は体部上端にも施され、これらに区画された頸部は無文帯となっている。体部にはL1段の燃糸文が縦方向に施文されている。また、口縁部にも燃糸文が施されている。330も綾絡文に区画され、頸部は無文帯となっている。口縁部と体部にはL1段の燃糸文が縦走する。331は頸部が長く、口縁部は外反する。口縁部には原体匠痕文を挟んで、2段に斜行する燃糸文が施され、頸部は無文となっている。332は口縁部が長く外反する。地文は縦走する燃糸文で、口唇部にも施文されている。334は体部下半部で、体部には緩い膨らみをもつ。地

文はL1段の燃糸文であるが、施文はまばらで、方向も不整である。333は小型の甕で、体部が膨らんだ後、頸部でくびれて口縁部は外反して開く。口縁部は粗雑に磨かれ無文で、体部には0段多条RL単節斜縄文が施されている。335~338は大型甕の体部で、地文はL1段の燃糸文である。このうち337は、体部端部に2本の綾絡文が巡る。

339~342は綾絡文が施文されている。339・340は、口縁部片で、前述の329や330と同様の形態のものと考えられる。341は綾絡文の下位に横方向の燃糸文を施した後、間隔をあけた縦方向の燃糸文を施文している。342は2個連続した綾絡文が巡る。343~347は羽状縄文を地文にもつ。343は燃糸文による縦方向の羽状縄文を地文とするが、整然としたものではない。344は頸部が僅かに外反し、口縁部は緩く内湾する甕である。口縁部には横方向、頸部以下には縦方向に、燃糸文による羽状縄文が施文されている。345~347は横方向の羽状縄文を地文とする。345は口縁部上端が無文帯となり、下位には先端部が腕曲する燃糸文による羽状縄文が施されている。

349は折り返し口縁をもち、折り返えされた末端部に沿って、指頭丘痕状の刺突が巡らされている。地文はRL単節斜縄文である。このような特徴をもつ土器片は、今回の調査では349、1点だけである。

350~354は底部である。353・358・359を除いて、底部末端部は外側に小さな張り出しをもつ。359は底面に小さな袂りが施されている。また、大部分のものはいくぶん上げ底となっている。地文は353がLR単節斜縄文である以外は、燃糸文である。350~353は底部下端部に綾絡文が巡り、この上部では縦方向、下部では斜め方向の燃糸文が施文されている。359・357は羽状縄文が施されているほか、356・358は斜め方向の燃糸文が施文されている。

土製品（図版43、写真図版52）

362は板状土偶である。左上半部のみが残存する。乳房は小さく突出させて表現され、頂部をわずかにくぼめている。器表には細い沈線と刺突による文様が描かれ、脇の下から肩にかけて小さな貫通孔を有する。

363~367は三角形土製品である。ともに、網目状燃糸文を地文とする縄文時代後期前葉の粗製土器片を利用している。いずれも周囲を研磨して整形されている。

368~370は円盤状土製品である。367は網目状燃糸文、369は沈線区画の磨消縄文をもつ土器片を利用している。ともに縄文時代後期前葉の土器である。370は0段多条RL単節斜縄文を地文とする土器片を用いている。整形は、周囲を打ち欠くだけで、三角形土製品のような研磨は施されていない。

371は鐔形土製品である。身部の断面形は円形で、全体に内湾する。ツマミには小さな貫通孔を有する。文様は沈線によって描かれ、器面を4区分し、これに「コ」字状の文様が展開され

ている。またツマミ部分には孔を取り巻くように沈線文が施されている。文様の特徴から縄文時代後期前葉のものと考えられる。

372は有孔の小玉で、中央部がいくぶん膨らみ、縦の貫通孔をもつ。器面は全体に研磨されている。

373は用途不明の土製品で、不整な粘塊に細い沈線が施されている。鬆米町馬場野II遺跡で報告のある「どろめんこ」に類似するが、詳細は不明である。

石器

剥片石器と礫石器に分けられるが、いずれも出土量は少ない。

剥片石器（図版44，写真図版53）

374～377は石鏃である。374は円基の有茎鏃と考えられるが、茎部は短かく欠損品かもしれない。375は凹基の無茎鏃で、身は長い。376は平基の有茎鏃と考えられる。377は凸基有茎鏃である。

378～380は削器である。378は剥片の2側縁に割合角度の大きな刃部をもつ。刃部はいずれも直刃である。379は1側縁に直状の刃部をもつ。380は凸状の刃部が形成されている。

381～386は細部加工によって整形されているが、明確に器種分類のできない所謂不定形石器である。381は全体が両面からの加工によって整形され、形状は石筥に類似する。382・383は剥片の腕曲する1辺に両面からの刃部加工が施されている。384は2辺に細部加工をもつ。385・386は全面に加工が及ぶが明確な刃部は見い出せない。

387～389は一部に細部加工が施された剥片である。387・389は剥片の鋭利な側縁部に加工が施され、389は腕曲する部分に加工が施されている。

390・391はアメリカ式石鏃である。基部の両側に小さな抉りをもつ。ともに小型で、身丈は低い。両面からの丁寧な加工によって整形されている。

礫石器（図版45・46，写真図版54・55）

392・393は磨製石斧である。ともに基部下半～刃部を欠損する。392は基部断面は丸く、側辺部の稜は明確ではない。393は基部断面が長方形を呈し、側辺部には明確な稜を残す。

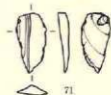
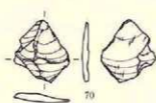
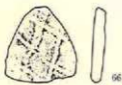
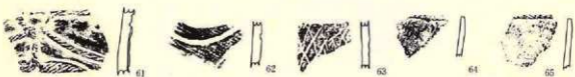
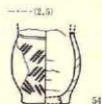
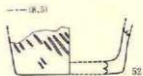
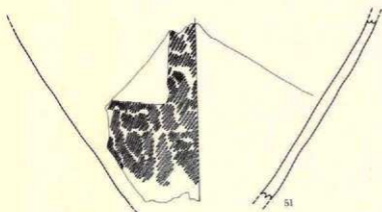
394・395は磨石である。394は器面の剝落が著しい。395は表裏両面に使用痕をもつ。

397～403は器面に円錐状の凹みを有する所謂凹み石である。401を除いて、表裏面や側辺部に擦痕をもつことから磨石と併用されたものであろう。

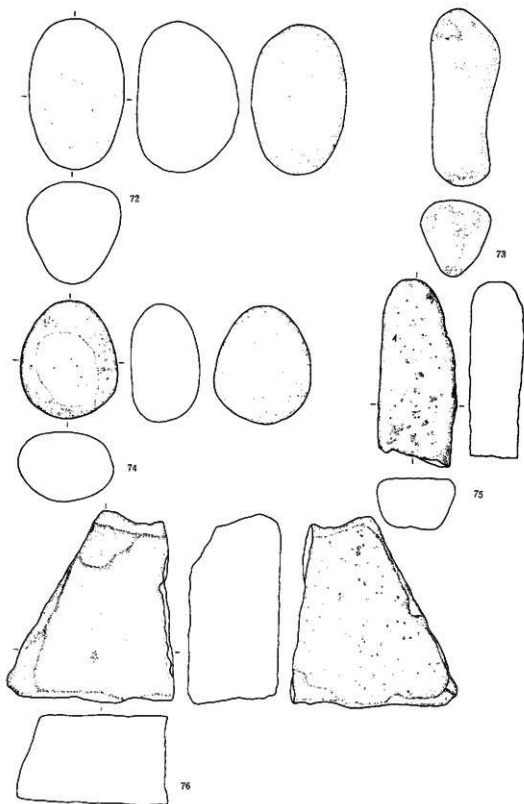
404・405は扁平な自然礫を用いた粗製の石皿である。ともに表裏両面が使用面である。

番号	国政番号	写真番号	出土地点	部類	法			石質	産地	備考	
					最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)				
1	3-8	3-8	新久保1遺跡	石 礫	4.15	1.8	0.65	4.2	高城岩質礫岩	北上山地	古生界
2	3-9	3-9	新久保1遺跡	フレイク	1.85	2.9	1.1	6	チャート	北上山地	古生界
3	3-10	3-10	新久保1遺跡	磨製石斧	9.75	5.45	3.9	302	アークス質礫岩	北上山地	古生界
4	25-69	34-69	田F-1住居跡	Uフレイク	2.5	2.5	0.5	2.1	凝灰質硬質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
5	25-70	34-70	田F-1住居跡	Uフレイク	3.4	3.0	0.4	3.99	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
6	25-71	34-71	田F-1住居跡	フレイク	3.2	1.6	0.5	2.2	凝灰質硬質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
7	26-72	35-72	田F-1住居跡	磨石	11.7	7.5	8.00	1,900	輝石安山岩	奥羽山地	中生界
8	26-73	35-73	田F-1住居跡	磨石	13.7	5.45	6.1	563	輝石砂岩	北上山地	中生界
9	26-74	35-74	田F-1住居跡	磨石	9.3	7.7	5.4	500	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
10	26-75	35-75	田F-1住居跡	粗製石皿	28.4	12.7	8.75	5,200	内門黒雲母花崗岩	北上山地	中生界
11	26-76	35-76	田F-1住居跡	粗製石皿	15.1	13.2	7.1	2,200	内門黒雲母花崗岩	北上山地	中生界
12	27-77	36-77	田F-1住居跡	粗製石皿	16.0	16.1	7.5	2,515	板状珩質頁岩	北上山地	古生界
13	28-94	37-94	IV-E-1住居跡	削 器	8.2	3.6	1.1	41.5	凝灰質硬質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
14	28-95	37-95	IV-E-1住居跡	粗製石皿	20.5	21.5	9.8	16,600	内門黒雲母花崗岩	北上山地	中生界
15	28-96	37-96	IV-E-1住居跡	粗製石皿	24.2	20.9	7.1	6,900	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
16	29-108	38-108	III-E-1住居跡	凹石	10.6	6.9	4.0	320	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
17	32-150	41-150	VC-1土塊	フレイク	2.7	3.3	0.7	3.95	高城岩質礫岩	宇石西部南部	新第三系中新統
18	32-150	41-150	VC-1土塊	フレイク	2.9	2.3	0.5	3.6	凝灰質硬質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
19	32-160	41-160	VC-1土塊	凹石	11.8	7.9	3.25	415	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
20	44-373	53-373	VC-J	石 礫	2.7	1.5	0.5	1.5	珩質頁岩	宇石西部南側	新第三系中新統
21	44-374	53-374	III-E-1 住居跡	石 礫	2.6	0.9	0.3	0.5	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
22	44-375	53-375	IV-E-G 住居跡	石 礫	1.9	1.0	0.2	0.3	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
23	44-376	53-376		石 礫	2.7	1.0	0.5	1.1	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
24	44-377	53-377	IV-F	削 器	5.8	3.8	1.3	49.77	玉髄	奥羽山地南側	中新統
25	44-378	53-378	田F-L 住居跡	削 器	2.1	3.1	0.6	3.6	凝灰質硬質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
26	44-379	53-379	IV-E-G 住居跡	削 器	3.3	2.3	0.5	3.95	チャート	北上山地	古生界
27	44-380	53-380	IV-E-F 住居跡	度状石礫	3.3	2.0	1.0	7.77	高城岩質礫岩	宇石西部南部	新第三系中新統
28	44-381	53-381	VC-F	Rフレイク	2.7	2.1	0.8	2.6	高城岩質礫岩	宇石西部南部	新第三系中新統
29	44-382	53-382	IV-D-N 住居跡	Rフレイク (不定形石礫)	3.2	2.0	0.6	3.9	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
30	44-383	53-383	IV-D-N 住居跡	Rフレイク (不定形石礫)	2.1	1.9	0.5	2.2	地塊質流紋岩	宇石西部西側	新第三系中新統
31	44-384	53-384	IV-F-H 住居跡	Rフレイク (不定形石礫)	2.65	2.6	0.7	5.3	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
32	44-385	53-385	IV-F-C 住居跡	Rフレイク	2.2	2.2	0.7	3.1	凝灰質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
33	44-386	53-386	VC-F 住居跡	Uフレイク	3.8	4.5	0.8	8.36	凝灰質硬質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
34	44-387	53-387	VC-F 住居跡	ノヱキ	2.4	3.7	0.9	9.13	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
35	44-388	53-388	RI	粗製石	4.75	4.25	0.55	19.5	珩質頁岩	宇石西部西側	新第三系中新統
36	44-389	53-389	IVD-VD 表層	アモウク石 (不定形石礫)	1.9	1.1	0.4	6.55	珩質頁岩	宇石西部	新第三系中新統
37	44-390	53-390	IVD-VD 表層	アモウク石 (不定形石礫)	1.95	1.0	0.65	6.57	珩質頁岩	宇石西部西側	新第三系中新統
38	45-391	54-391	VC-F	磨製石斧	5.7	3.7	2.7	80	輝石砂岩	北上山地	中生界
39	45-392	54-392	IVF-E 住居跡	磨製石斧	3.5	2.35	1.2	13	燧石砂岩	北上山地	古生界
40	45-393	54-393	III-C	磨石	9.9	8.3	6.7	808	内門黒雲母花崗岩	北上山地	中生界
41	45-394	54-394	IVC-K 表土	磨石	9.6	7.15	3.9	445	輝石砂岩	北上山地	中生界
42	45-395	54-395	IVE-A 表土	磨石、凹石	10.9	7.9	5.6	719	流紋色凝灰岩	北上山地	古生界
43	45-396	54-396	VC-P 表土	磨石、凹石	10.50	6.95	3.1	325	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
44	45-397	54-397	VC-N	磨石、凹石	9.8	8.5	4.8	520	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
45	45-398	54-398	VC-I	磨石、凹石	11.8	4.9	3.6	245	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
46	46-399	55-399	IVD-G 表土	磨石、凹石	12.6	7.2	3.05	400	チャート質流紋色凝灰岩	北上山地	古生界
47	46-400	55-400	IVD-N	磨石	11.25	6.4	3.8	260	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
48	46-401	55-401	VC-E 住居跡	凹石	11.4	7.3	3.3	380	板状珩質頁岩	北上山地	古生界
49	46-402	55-402	VC-N 表土	凹石	12.2	8.0	5.0	290	珩質頁岩	北上山地	中生界
50	46-403	55-403	VB-M 住居跡	粗製石皿	16.5	13.4	3.2	1,100	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系中新統
51	46-404	55-404	IVD-N	粗製石皿	15.2	11.1	4.4	970	内門黒雲母花崗岩	北上山地	中生界

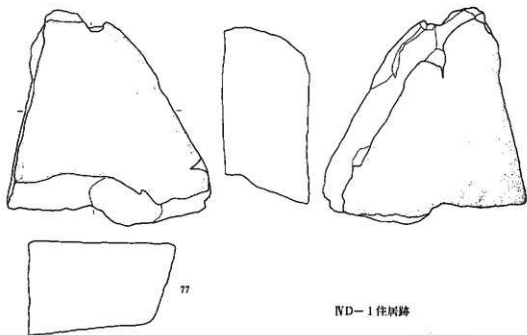
ⅢF-1住居跡



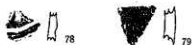
图版25 B調査区出土遺物(1)



图版26 B調査区出土遺物(2)



ND-1 住居跡



NE-1 住居跡

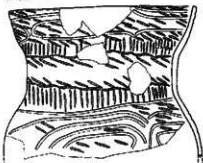
(18.7) ---



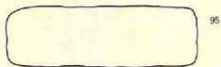
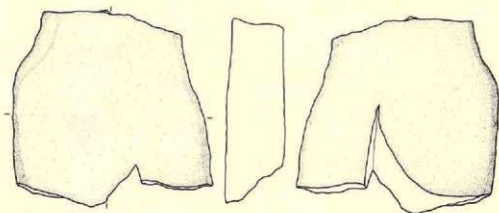
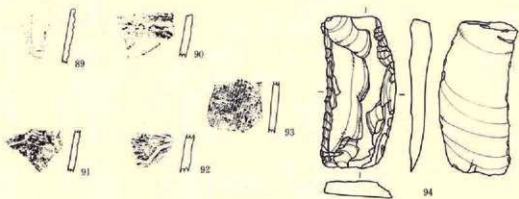
--- (5.6)



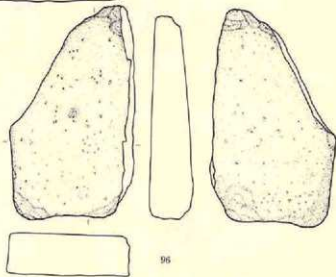
(14.9) ---



図版27 B調査区出土遺物(3)

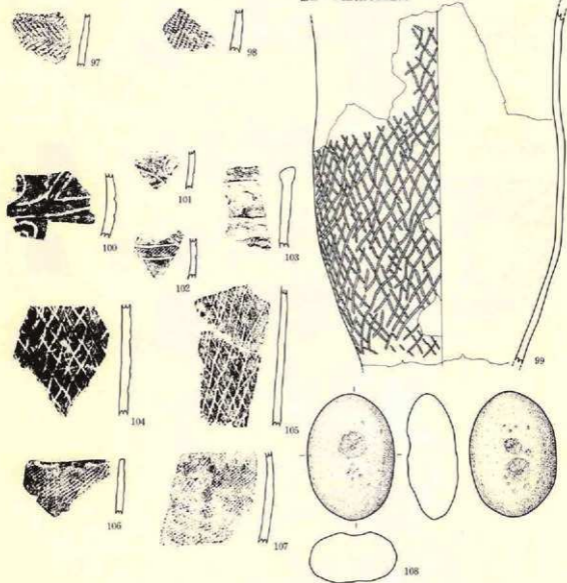


VD-1住居跡



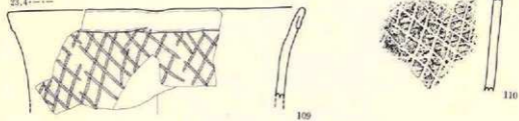
図版28 B調査区出土遺物(4)

ⅢE-1 住居跡伏遺構



ⅢE-1 土坑

23.4-1-1



图版29 B调查区出土遺物(5)

VD-2 土坑



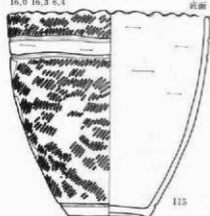
VD-3 土坑



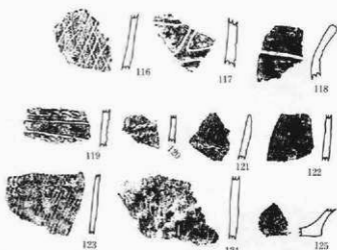
NE-5 土坑

16.0 16.3 6.4

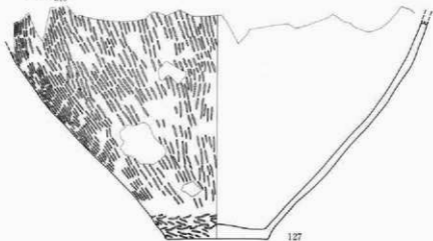
坑面



NF-1 土坑



---8.0



图版30 B调查区出土遗物(6)

NF-2 土坑



129



130

NF-4 土坑



133



131



132

NF-6 土坑



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147

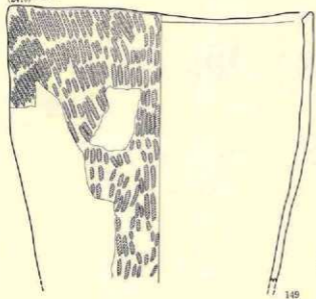


148

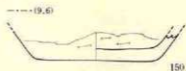
图版31 B调查区出土文物(7)

VC-1 土坑

(24.0) ---



149



150



151



152



153



154



155



156



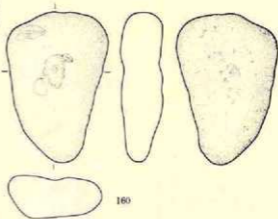
157



158



159



160

VC-2 土坑



161



162



163

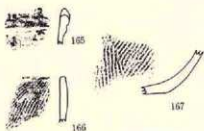
图版32 B调查区出土遗物(8)

VC-4 土坑

(11.6) 4.2 4.4



164



165

166

167

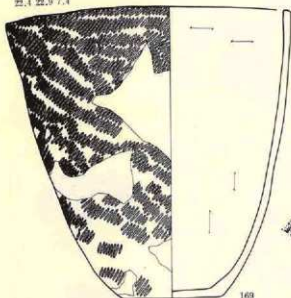
VC-7 土坑



168

VC-8 土坑

22.4 22.9 7.4



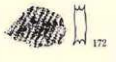
169



170



171



172

VC-9 土坑



173



174



175

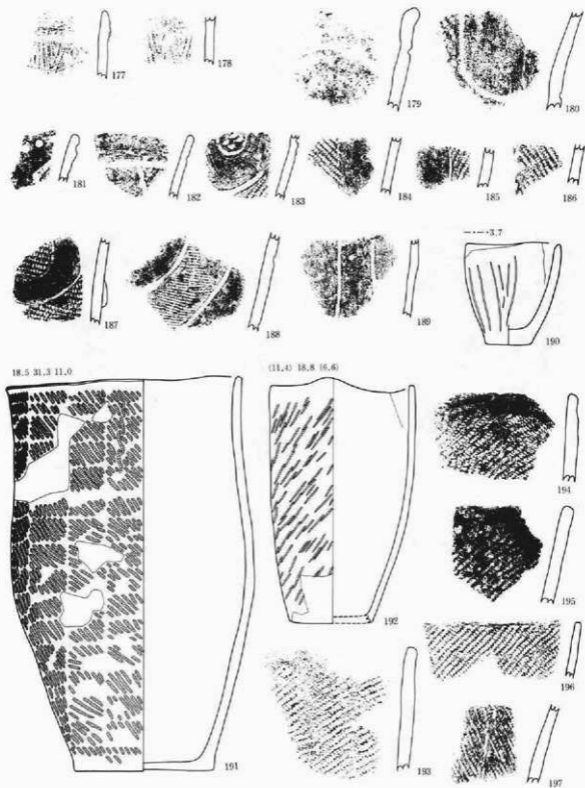
NF-1 埋設土器

-----(10.6)

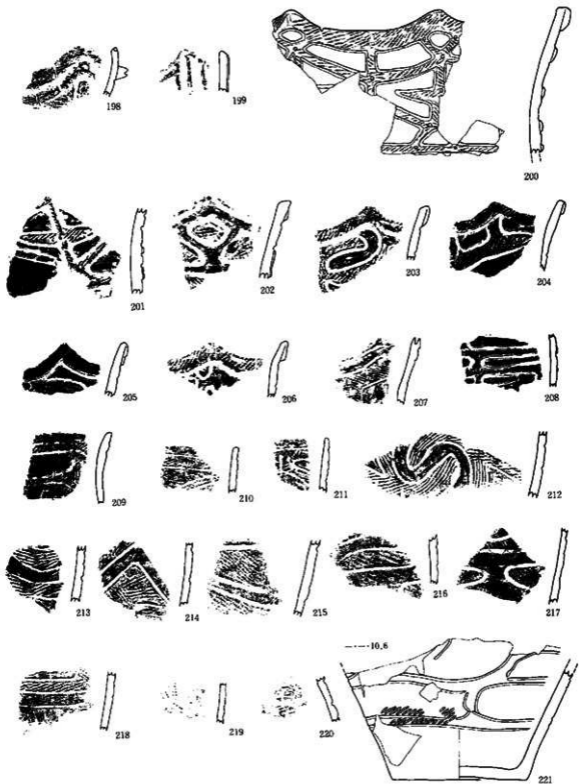


176

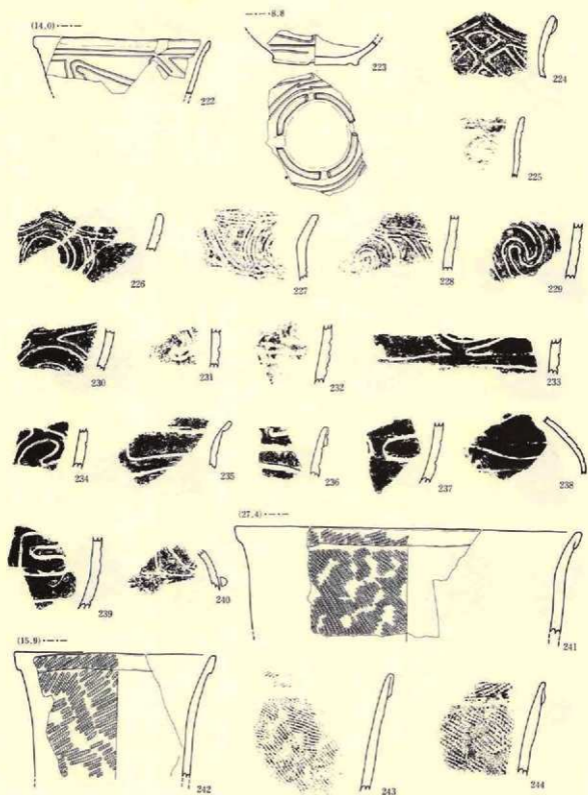
图版33 B调查区出土文物(9)



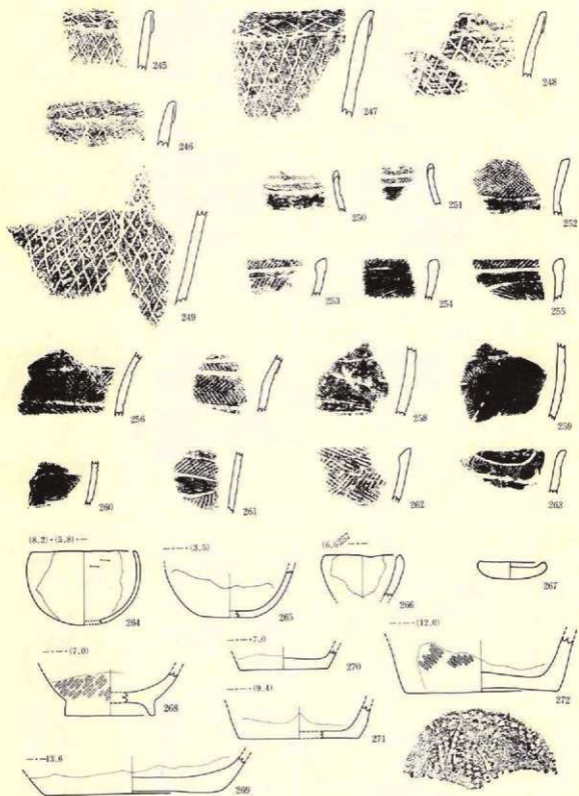
图版34 B调查区出土遗物 00



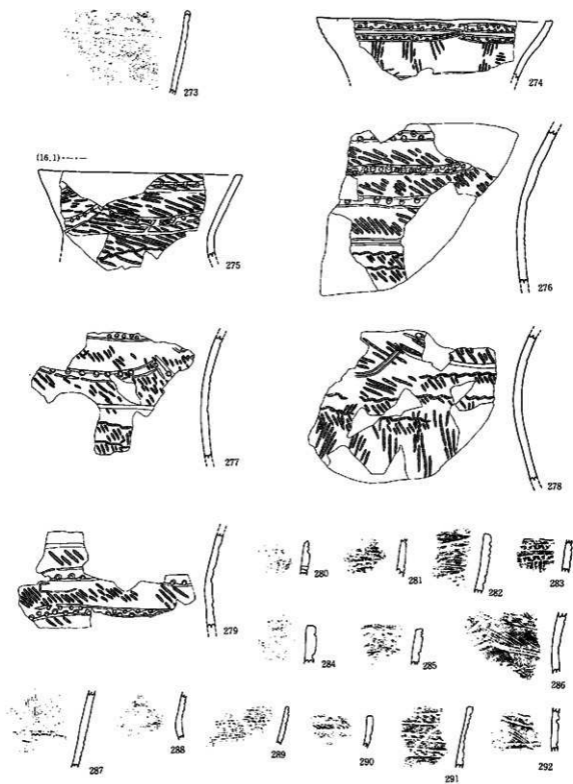
图版35 B调查区出土遗物(1)



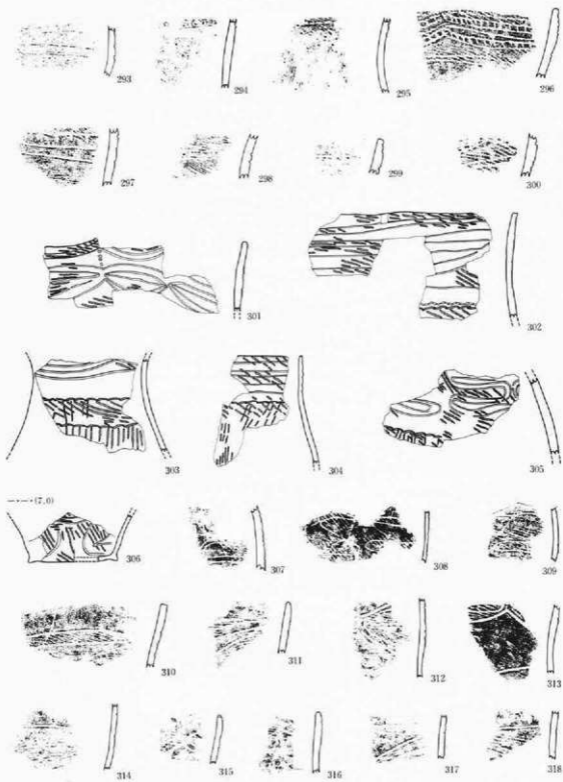
图版36 B调查区出土遗物(12)



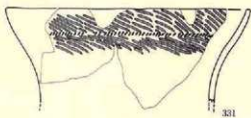
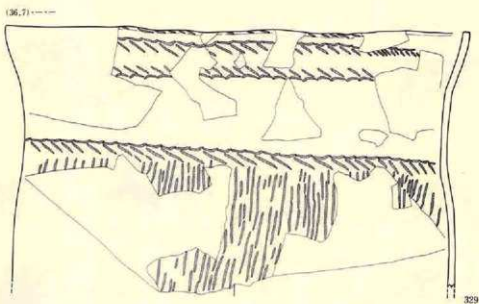
图版37 B调查区出土器物(13)



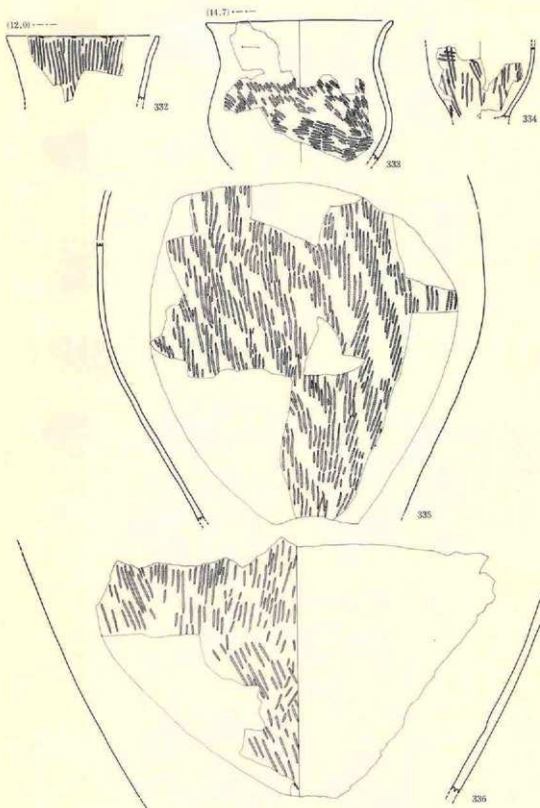
图版38 B调查区出土遗物(14)



图版39 B调查区出土遗物(15)



图版40 B調査区出土遺物 16



图版41 B调查区出土遗物 07



337



339



340



341



342



343



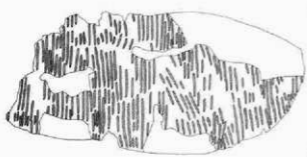
344



345



346



338



347

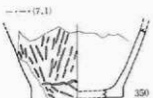


348

---8.0

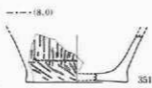


349



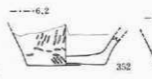
---(7.1)

350



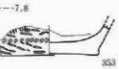
---(8.0)

351



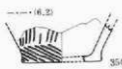
---6.2

352



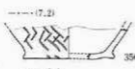
---7.8

353



---(6.2)

354



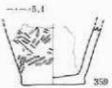
---(7.2)

356



---(5.7)

358



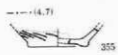
---5.1

359



---3.8

360



---(4.7)

355

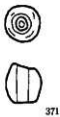
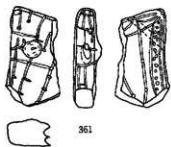


---5.8

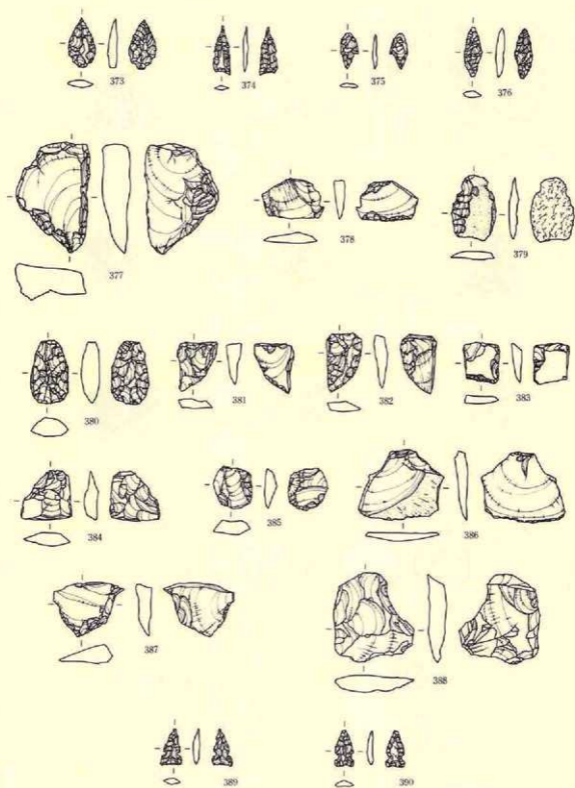
357



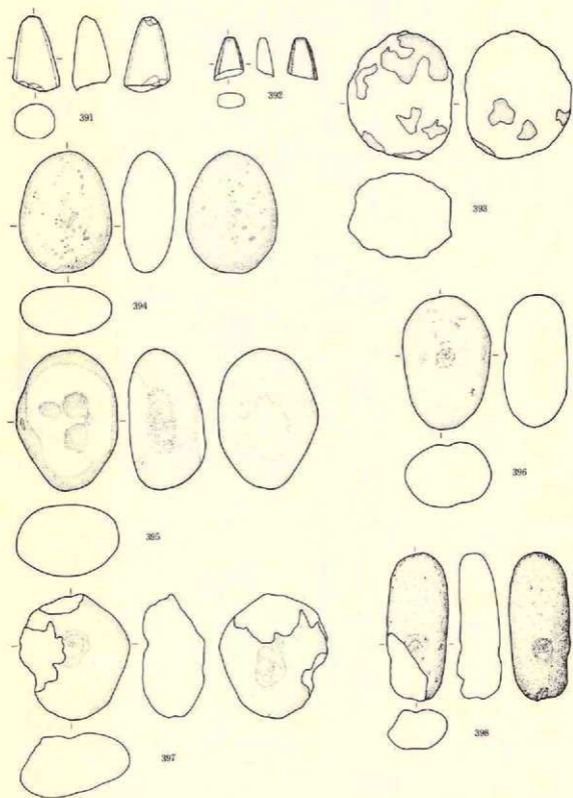
图版42 B调查区出土遗物 18



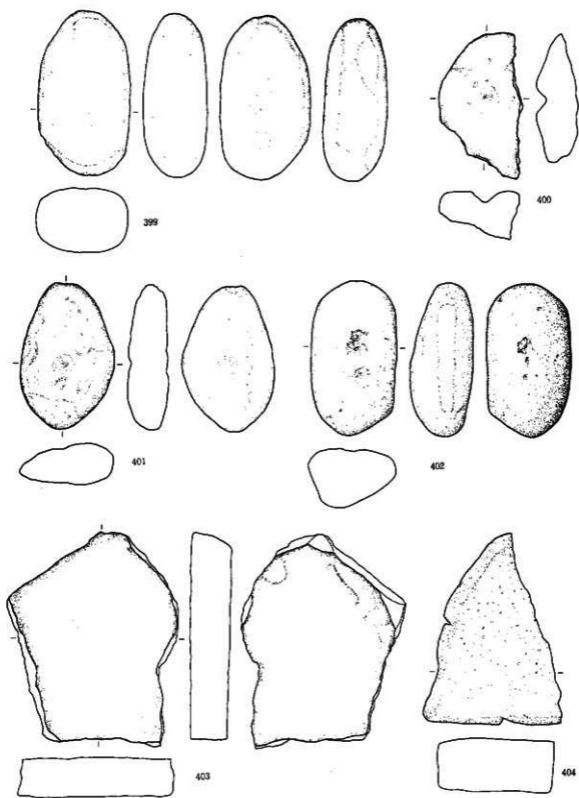
图版43 B调查区出土遗物(19)



图版44 B调查区出土遗物(20)



图版45 B调查区出土遗物(2)



图版46 B调查区出土遗物 22

3. まとめ

親久保Ⅱ遺跡の調査結果について、(1)A調査区の住居跡、(2)B調査区の遺構と占地、(3)出土遺物の3項目について、若干の考察を加えまとめとする。

(1) A調査区の住居跡

〈遺構の分布と占地〉

検出された5棟の住居跡の分布は、地形との関連から、①南側畑地の1棟(CⅢ-1住)、②北側桑畑の2棟(AⅡ-1住、BⅠ-1住)、③北側山林の2棟(CⅡ-1住、DⅢ-1住)の3群に分けることができる。

これらの住居跡間の直線距離は、AⅡ-1住居跡とBⅠ-1住居跡の間で24m、BⅠ-1住居跡とCⅡ-1住居跡の間で36m、CⅡ-1住居跡とDⅢ-1住居跡の間で20m、DⅢ-1住居跡とCⅢ-1住居跡の間で19m、CⅢ-1住居跡とAⅡ-1住居跡の間で31mであり、東西方向に長い五角形の配置を示している。

占地をみると、①と②は、北に下る舌状(または扇形状)の緩斜面上にあり、降雨時の流水がはいりにくいような地形面にある。これに対し③は、東縁部の沢筋近くにあり、遺構の南西側はやや急斜面になっており、他の住居跡に比べ占地条件が劣るように思われる。

本遺跡の住居跡埋土にみられる白頭山火山灰の堆積状況が似ている桂平遺跡¹¹⁾二戸郡浄法寺町)でも、第3群(第三期)に属する住居跡は、15~20mの間隔を保ち、まとまりのある配置を示しており、占地条件の劣る2棟の住居跡(CⅡ-1、DⅢ-1)の配置は、何らかの空間規制の存在を前提に理解される。

〈検出状況・埋土〉

残存状況の良い3棟の住居跡(AⅡ-1、BⅠ-1、CⅢ-1)は、黒色~黒褐色の埋土を有し、薄く火山灰で縁どられた状況で検出された。埋土下位には、黄褐色の火山灰が3~5cmの厚さで堆積している。この火山灰の蛍光X線分析結果は、白頭山火山灰である。

火山灰を狭み、上位は植物炭化層を含む黒色土、下位は炭化材を含む焼土層である。埋土は全体的に自然堆積と思われる。BⅠ-1住居跡では、焼土層全体を火山灰が覆っており、焼土層の形成期と火山灰の堆積期の時間差は短いものと思われる。

一方、床面付近を検出したCⅡ-1住居跡やDⅢ-1住居跡の場合は、焼土や炭化材の分布を手懸に調査を進めた。DⅢ-1住居跡の埋土に少量まじる火山灰は、十和田a火山灰との分析結果を得ている。この火山灰は2次堆積と思われる。CⅡ-1住居跡の焼土付近にも少量の火山灰らしい塊があったが、灰?として処理している。

なお、住居跡の埋土下位~床面の火山灰が、蛍光X線分析によって白頭山火山灰とされた例

には、柱平遺跡の5棟（ⅣE-1住、ⅣD-1住、ⅣC-1住、ⅣC-1住、ⅣC-1住）と五庵I遺跡²⁷（二戸郡浄法寺町）の2棟（ⅣG4住、ⅣI16住）がある。

〈平面形・規模〉

平面形はやや歪んでいるものが多いが方形基調である。規模は、床面で3～3.5mが3棟、3m未満が1棟、不明が1棟である。床面積は、最小6.68㎡、最大10.97㎡である。一戸バイパス関係遺跡²⁸で検出された住居跡50棟の内訳は、4m未満が21棟、4～6mが18棟、6m以上が3棟、不明が8棟であり、小型の住居跡が最も多く42%である。他の遺跡に比べ本遺跡の住居跡は小型のもので構成されているのが特徴である。

〈壁・床面〉

壁は下半が直に近く立ち上がるものが多いが、上半部は崩れているものが多く結果的には外傾気味になる。壁高の最大値はCⅢ-1住居跡で95cmある。

床面はほぼ平坦であり、自然地形面に沿って若干傾く住居跡が多いが、レベル差は10cm以内である。貼り床は3棟（BⅠ-1住、CⅢ-1住、DⅢ-1住）でみられる。BⅠ-1住居跡とCⅢ-1住居跡の場合は、広範囲にわたる深い掘り方をもつ。DⅢ-1住居跡の場合は、土石流の堆積面に構築されているため、掘り方はあるもののこの境は不明瞭である。

〈柱穴・壁溝〉

柱穴は、すべての住居跡で検出されていない。これは、検出された住居跡が小型であることにも関連する。一般に、床面に柱穴をもつ住居跡は大型のものに多い。一戸バイパス関係遺跡の住居跡では、6m以上の大きい住居跡は柱穴をもつが、6m未満の住居跡で柱穴のあるケースは稀である。

壁溝と思われる箇所は、CⅢ-1住居跡の南西壁際で確認された以外にはない。一戸町では壁溝のある住居跡の検出率が少なく、一戸バイパス関連遺跡では9棟確認されており、全体の18%にすぎない。

A 調査区壁穴住居跡一覧表

遺構名	平面形	規模(床面積)	柱穴	貼り床	カマドの位置と方位	袖石	火 山 灰	
AⅡ-1	正方形	3.2×3.2m(9.24㎡)	なし	なし	北西壁中央N-57-W	あり	白頭山	焼失
BⅠ-1	長方形	3.2×3.5m(10.97㎡)	なし	あり	＃ N-51-W	痕跡	白頭山	＃
CⅡ-1	方形?	不明	なし	なし	＃ N-56-W	痕跡		＃
CⅢ-1	隅丸方形	3.0×2.9m(8.24㎡)	なし	あり	＃ N-53-W	あり	白頭山と十和田 a	＃
DⅢ-1	長方形	2.7×2.5m(6.68㎡)	なし	あり	＃ N-44-W	不明	十和田 a	＃

(規模は床面中央付近で計測したもの)

〈カマド〉

カマドは、すべての住居跡で北西壁中央付近に構築されており、総長約2.2～2.4m（平均約2.2m）、壁外約1.3～1.6m（平均1.5m）である。カマドの長軸方向は、N-44～57-Wであり、強い規則性がみられる。

袖部が残っている2棟（AⅡ-1住、CⅢ-1住）では、芯材として偏平な礫を両袖に使用している。また、芯材の抜き取り痕跡が2棟（BⅠ-1住、CⅡ-1住）で確認された。袖部の幅は、芯材の外側で60～78cm（平均72cm）である。

燃焼部の焼土は、CⅢ-1住居跡以外は浅皿状の凹地に形成されており、厚さは4～10cmあり良く焼けて硬く締まっている。

煙道はすべてくりぬき式と思われる。煙道は、壁近くから煙出しに向かって8°前後の下り勾配となるものが多い。煙道の天井は崩落しているものが多い。煙出口の平面形は円形、断面形は円筒形である。煙出口下位や煙道の埋土には焼土がまじる。また壁面は焼けている。特に、煙出口の上部を、Vb層起源の褐色土で塞いでいるが2棟（AⅡ-1住、BⅠ-1住）ある点が注目される。カマドの破壊や煙出口を塞ぐ行為は、住居の廃棄行動に関わる可能性がある。この点について、焼失住居の項で再度述べる。

再びカマドの方位について述べてみたい。一戸バイパス関係遺跡で検出された古代の住居跡をみると、北西に位置するカマドが24基あり、カマド全体の55%を占めている。高田和徳氏の編年によると、Ⅰ～Ⅱ期に属するものはすべて北西カマドであるが、Ⅳ期では、北東から東南方向にカマドが構築されるようになり、規則性を認めることができる。

本遺跡と同じく白頭山火山灰が床面近くに堆積している桂平遺跡の第3群（第Ⅲ期）に分類された住居跡の場合も、カマドの方位は5棟とも北東方向を示し、規則性がみられる。カマドの方位にみられる傾向を集団規制の結果として理解したい。

〈炭化材・焼失住居〉

炭化材と焼土は、すべての住居跡でみられ、床面から10cmほどの厚さで形成されている所が多い。全体的に床面から太い炭化材、カヤ、焼土の順に堆積している所が多いが、炭化材が浮いている所もある。炭化材の分布は、直交するものもあるが、放射状のものがやや多い。断面形をみると、丸木材や割材であり、板材は殆どみられない。本遺跡では、敷板は出土していない。

炭化材の樹種鑑定結果は、101例のうち、スギが64点で最も多く、全体の63.4%を占める。特にAⅡ-1住居跡、BⅠ-1住居跡、CⅢ-1住居跡の3棟では、スギの比率が高い。

他の遺跡についてみると、五磨Ⅰ遺跡の平安時代の住居跡11棟から得られた282点の内訳はクリが191点、ケヤキが30点、タモが8点、ホウノキが4点、クワが2点、アサダが1点、不明の広葉樹が26点、不明の針葉樹が9点、不明が11点である。また、上の山Ⅶ遺跡¹⁴⁾（二戸郡安代

町)の平安時代の住居跡12棟から得られた203点の内訳は、クリが142点、ケヤキが8点、ナラが3点、マツが2点、広葉樹(アサダ?)が20点、不明が28点である。両遺跡ともクリの比率が高く、五庵I遺跡では67.7%、上の山VII遺跡では70%を占める。また、駒板遺跡⁹⁾(九戸郡軽米町)では、クリが圧倒的に多く、クリ以外の樹種は稀である。

一方、一戸バイパス関係遺跡の奈良・平安時代の遺構から出土した炭化材の場合は、529点のうち、コナラが264点で最も多く49.9%を占める。その他に、ヤチダモが64点、サクラ類が45点、ケヤキが27点、クリが21点、カエデが15点、カツラが12点、クルミとヤマグワが各11点、カバノキとヤナギが各7点、トチノキが6点、キハダが4点、ホウノキが3点、マツ・サワグルミ・クスギ・ニレ・ブナが各2点、スギとトネリコが各1点、樹種を特定できないものが20点である。

炭化材の樹種構成には地域差がみられる。ただ同じ遺跡内でも住居跡によって構成率が異なる場合がみられる。本遺跡以外でスギが出土しているのは、馬場平2遺跡¹⁰⁾(一戸町)のA6住居跡の1点だけであり、スギの使用時期を決める上で本遺跡は重要な遺跡となると思われる。

炭化材が検出される住居跡は、焼失住居跡と思われる。本遺跡の住居跡は5棟とも焼失したものである。五庵I遺跡の場合も検出された15棟の住居跡は、すべて焼失住居跡である。この他に、焼失住居率の高い遺跡には、駒板遺跡、長瀬B遺跡¹¹⁾(二戸市)、桂平遺跡がある。焼失住居率は、駒板遺跡66.7%(15棟のうち10棟)、長瀬B遺跡56.3%(32棟のうち18棟)、上の山VII遺跡53.8%(39棟のうち21棟)、桂平遺跡50%(14棟のうち7棟)である。また、一戸バイパス関係遺跡では36%(50棟のうち18棟)である。

県北地方に焼失住居が多いことについて、統一された解釈はないが、本遺跡に限定すれば、住居の廃棄行動の結果と

炭化材樹種鑑定結果集計表

して理解したい。その理由として、①すべてが焼失していること、②炭化材や焼土は床面近くに堆積しており、廃棄と焼失の時間差が小さいと思われること、③出土遺物が極めて少ないこと、④カマドが破壊されたと思われること(BI-1住)

	スギ	ケヤキ	クリ	紫シキブ	ソネ	ナラ	イタヤ	合計
AII-1住	22	7	2	3	3	1	1	38
BI-1住	32	4	5					42
CII-1住		2	1	1				4
CIII-1住	9	3	2					14
DIII-1住	1	2		1				4
合計	64	18	10	4	3	1	1	101
百分率	63.4	17.8	9.9	4.0	3.0	1.0	1.0	100

や煙出口が塞がれていること(AII-1住、BI-1住)などをあげることができる。なお、県北地方の焼失住居について、鈴木恵治氏は蝦夷征討との関連を指摘している¹²⁾。

〈集落の立地・年代〉

本遺跡で検出された5棟の住居跡のうち、残存状況の良い3棟の住居跡（AⅡ-1、BⅠ-1、CⅢ-1）は、埋土下位～床面に白頭山火山灰がはいることから同時期と推定される。

一方、東縁部の谷底近くで検出された2棟の住居跡（CⅡ-1、DⅢ-1）では、白頭山火山灰を確認していない。しかしこれらの住居跡も、前者と同時期と推定しておく。理由として、①DⅢ-1住居跡に少量みられる十和田^o火山灰は、削平後の二次堆積と思われること、②カマドの方位が北西方向を示し、焼失住居であること、③出土遺物は少ないものの時期差は少ないと思われること、④占地条件の劣る2棟の配置は、何らかの空間規制の存在を前提に理解されることなどをあげることができる。

調査区付近の地形をみると、調査区北端には5mほどの段差がある。西側50m付近には北流する沢があり、比高は15mほど低い。東側は20°余の斜面で稜線部はB調査区である。南側にも20°近い斜面がある。したがって、本調査区は小規模ながら独立した地形面であり、検出された5棟以外に、同じ地形面で住居跡の検出される可能性は少なく、本集落は小型の住居跡5棟からなる小規模な集落と言える。

DⅢ-1住居跡の南西約35m付近には、発掘調査の際に飲料水として利用した湧水がある。この湧水は、当時も利用されていた可能性があり、西側の沢とともに集落立地条件の1つに数えられる。当時の生産活動や交易活動などの手懸となる資料は得られなかったが、人々が近くの湧水との結びつきをもちながら、この狭い地形面に集落を営み、その後何らかの理由で集落を放棄したことだけは確である。集落の営まれた年代は、11世紀あるいは11世紀前半と推定される。そのことについては下記の遺物の項でふれてある。

〈遺物〉

土師器は、坏片（7・8）・大型の甕（1・9）と甕片（2・4・5・6・10及び未接合片少量）、そして小型の長頸甕(3)が出土した。いずれも住居跡からの出土で、遺構以外からは出土していない。出土した土師器全体量の器種組成をみると、甕が多く、坏はDⅢ-1住居跡から2個体片、他に小型の長頸甕が出土しているだけである。

坏（7・8）は、いずれもロクロを使用し、内面は黒色処理されている。底部を欠く。器面は、外面がロクロ痕を残したままで特段の調整はない。内面はヘラミガキで調整されている。いずれもカマド燃焼部焼土から出土している。

長頸甕(3)は、小型でロクロを使用している。張った体部には細い丸棒を縦に押圧したためと思われる痕跡が横位に巡る。文様を構成するために押圧したと思われる。頸部に楞痕が1個ある。カマドと反対の壑際床面から出土した。

甕は、全容がわかるのは1・9である。ロクロ不使用で、短かめの口縁部は頸部から外反し、

体部は中位より最大径をもちながら緩やかに張り、張り出しのない安定感ある平底に取まる。器面は、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面が刷も目後ヘラケズリ、内面がヘラナデでそれぞれ調整されている。1・9以外は破片である。2・4・6は口縁部片である。2は長め、4・6は短かい。4は特に短かく、かつ強く外反する。6は小片のためはっきりしない。

これらの甕の出土は、カマド付近及びカマド燃焼部付近とその周辺の床面である。9は24m離れた2つの住居跡(AⅡ-1住居跡とBⅠ-1住居跡)から出土した土器が接合している。3分の2はBⅠ-1住居跡の床面及び住居跡に伴う土坑から、3分の1はAⅡ-1住居跡の床面及びカマド袖部崩壊土から1土器と混在したものが接合している。

土器出土状況と住居跡埋土中の火山灰との位置関係をみると、AⅡ-1住居跡・BⅠ-1住居跡・CⅢ-1住居跡の土器は、床面近くで出土しており、その上を白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)が3~5cmの厚さでおおっている。したがってこの火山灰が上記3住居跡出土土器の年代決定に直接的に関わると考えられる。そこで当遺跡で出土した土器の年代を、一つは近隣遺跡出土土器と比較検討することにより、もう一つは土器出土状況に密接に関わる白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)との年代関係の両面から推定することにする。

器形・器面調整技法を比較するにあたり、全容のわかるのは甕(1・9)と長頸甕(3)だけである。甕を比較すると、「駒焼場遺跡緊急発掘調査報告書⁽⁹⁾」では第Ⅶ期に類似し、それによると年代は10世紀後半から11世紀?となる。また「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」ではIVb期に類似し、それによると年代は「10世紀後半」となる。底部片を欠く坏は、器形・器面調整技法から前述遺跡と比較すると平安時代に取まる。

これら甕(1・9)と長頸甕(3)が出土するAⅡ-1住居跡・BⅠ-1住居跡では、床面直上に白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)が3~5cm堆積する。当火山灰については、町田洋氏は青森県「垂柳遺跡発掘調査報告書⁽¹⁰⁾」では「およそ11世紀を中心とする一時期」、松山力氏は「十和田火山噴出物と火山活動⁽¹¹⁾」では「11世紀前半を中心を含む100年以内の間」とそれぞれ年代を述べている。

このように、器形・器面調整技法からみる土器の年代は10世紀後半から11世紀、平安時代後半と考えられるが、出土した土器は少量であり、器形・器面調整技法から年代を推定することは困難である。幸い当遺跡では白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)が住居跡の埋土下位層となっており、AⅡ-1住居跡・BⅠ-1住居跡・CⅢ-1住居跡からの出土土器は「およそ11世紀を中心とする一時期」あるいは「11世紀前半を中心を含む100年以内の間」にその年代が取まると考える方が妥当であろう。

(2) B調査区の遺構と占地

B調査区は、約9°の勾配で北東方向に下る尾根上にある。調査区の東端は210mの等高線であり、長さは約90mある。調査区を等高線によって、220m以上を頂上部、214m以上を中央部、210m以上を東端部に区分し、遺構の種類と数を見ると頂上部では、土坑10基

中央部では、住居跡2棟、土坑11基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構1箇所

東端部では、住居跡2棟、住居跡状遺構1棟、土坑9基、埋設土器1箇所となり、頂上部は土坑だけであるのに対して、中央部や東端部では、住居跡と土坑がみられる。

丘陵地に載る縄文時代の遺跡をみると、頂上部にフラスコ形土坑群があり、土坑群より下位面で住居跡が検出される事例は良くみられる。一戸バイパス関係遺跡の田中1遺跡の場合でも尾根頂上部に、フラスコ形土坑（縄文中期が主）25基が円形（環状）に分布し、住居跡は南斜面で検出されている。また隣接して調査された親久保Ⅲ遺跡でも住居跡は検出されなかったが、尾根頂上部で土坑が集中して検出されている。尾根筋における遺構の占地について、吠屋敷Ⅲ遺跡¹⁴⁾（九戸郡軽米町）によってみると、遺構は、稜線部→南斜面→北斜面の順に多く、稜線部と南斜面を占地する遺構が87%であった。また住居跡は、稜線のすぐ南側につくられているものが多い。本調査区でも、稜線部（幅約10m）と南斜面を占地する遺構は92%であり、住居跡も稜線の南側につくられている。以上のことから、本調査区にみられる遺構の占地関係は、今までの報告事例とほぼ同じと言えよう。

次に遺構の時期をみると、

頂上部では、VC-1土坑が縄文時代後期中葉、2基の土坑（VC-4、VC-8）が縄文時代後期後葉と思われる。また2基の土坑（VC-2、VC-9）は縄文時代であろう。

中央部では、2基の土坑（IVD-2、IVD-3）が縄文時代中期末葉、ⅢE-1土坑は縄文時代後期前葉、ⅣE-5土坑は縄文時代晩期初頭と思われる。

東端部では、2棟の住居跡（ⅢF-1、ⅣE-1）、ⅢE-1住居跡状遺構、ⅣF-6土坑、ⅣF-1埋設土器が縄文時代後期前葉と思われる。また、弥生土器が出土した3基の土坑（ⅣF-1、ⅣF-2、ⅣF-4）と埋土の特徴が似ている2基の土坑（ⅣE-4、ⅣF-5）は弥生時代と思われる。

一方、遺物の出土状況をみると、等高線213m付近を界に上位では縄文時代中期末葉と後期中葉・後葉の土器片が多く、下位では縄文時代後期前葉と弥生時代の土器片が多い。

これらのことから、主要な占地面は、縄文時代中期末葉には頂上部から中央部、後期前葉には東端部、後期中葉・後葉は頂上部、弥生時代は東端部であったと推定され、時期ごとに占地面が移動していることが窺われる。

検出された住居跡4棟のうち、出土遺物や炉の形態から縄文時代後期前葉に位置づけられるⅢF-1住居跡とⅣE-1住居跡は、尾根東端部を占地する。この住居跡の近くには、埋土や遺物から墓塚の性格が考えられるⅢE-1住居跡状遺構とⅣF-6土坑がある。この中でⅢF-1住居跡の南壁際で検出されたⅣF-6土坑は、切り合い関係は明瞭ではないが、ⅣF-6土坑の方が住居跡より新しい可能性がある。これらのことから、住居跡と墓塚との共存関係が成立し、ⅢF-1住居跡とⅢE-1住居跡状遺構が、ⅣF-1住居跡とⅣF-6土坑に先行するようと思われる。

尾根中央部を占地するⅣD-1住居跡とⅤD-1住居跡の場合は、時期決定資料となる遺物がなく、遺構の時期は不明であるが、近くの土坑との関連から縄文時代中期末葉～後期の範囲に位置づけられよう。

土坑は30基検出されている。このうちⅤC-6土坑は範囲外に広がるため2分の1だけの調査であるが、埋土から風倒木の可能性がある。平面形はⅣF-6土坑以外は円形基調である。断面形はフラスコ形が多く、ピーカー形のもでも壁の崩落を考えると本来フラスコ形であったと思われるものがある。フラスコ形とは異なる機能が推定される土坑は、ⅣE-4土坑、ⅣF-1、2、4、5土坑、ⅤC-7土坑の6基であり、このうち、ⅤC-7土坑以外は弥生時代と思われる。弥生時代の土坑のうち、ⅣF-1土坑のように土器を伴う例は、曲田Ⅰ遺跡¹⁴（二戸郡安代町）のⅥ-028土坑などがあり、墓塚と考えられている。これらの土坑はフラスコ形の土坑に比べ、底面は丸底気味で地山に沿って傾くものも多く、規模も小さい。占地面をみてもフラスコ形の土坑は、尾根頂上部や稜線部に多く、弥生時代の土坑は斜面に多い。

陥し穴状遺構は1基だけである。形態的には小型の溝状のもので、隣切る親久保Ⅲ遺跡で検出されているものと同じである。一戸町では、親久保Ⅲ遺跡や小井田Ⅲ遺跡を除くと陥し穴状遺構の検出例は少なく、けもの道が段丘や丘陵の先端部に形成されていたものと思う。

最後に水の問題について述べる。親久保Ⅲ遺跡との間には小さな沢があり、調査時に飲料水として利用した湧水がある。この湧水は尾根東端部のⅣE-1住居跡から南東へ45mほど下った地点にあり、縄文時代から利用されていたものと思う。また、湧水から70mほど下った地点に親久保Ⅲ遺跡の遺物包含層（主として縄文時代後期中葉）があり、尾根頂上部には土坑群が分布していることから、本調査区の南側に住居跡の存在が予想される。

(3) 出土遺物

親久保Ⅰ・Ⅱ遺跡から出土した土器について、各群ごとに簡単に整理をする。

第Ⅱ群土器……Ⅰ・Ⅱ遺跡とも出土量が少なく、小破片のため詳細は不明であるが、文様や胎土から、Ⅱ遺跡出土の2類は円筒下層式、Ⅰ遺跡出土の1類は円筒下層式土器の成立前

の土器と考えられる。

第III群土器………1類としたものはI遺跡からのみ出土している。太い隆帯の施文などから中期中葉に位置づけられる大木8b式に相当するものであろう。2類としたものは、磨消縄文の特徴や「鱗状突起」から末葉期の大木10式と考えられる。

第IV群土器………1類は縄文土器の中で最も出土量の多い土器であるが、大半はIIb遺跡からの出土であった。沈線文や磨消縄文の特徴、また粗製土器にみられる網目状捻糸文などから、十腰内I式に相当する土器群と考えられる。2類はこれらに続く、十腰内II・III式、3類は十腰内IV・V式に相当する土器群であろう。

第V群土器………1・2類とも少量の出土である。1類は前葉の大洞B-C式、2類は中葉の大洞C₁式に併行するものと考えられる。

第VI群土器………弥生時代の土器を当群とした。

弥生土器は、I、IIa、IIb区のいずれの調査区からも出土している。時期別に、中期（1類）後期（2類）、北海道系の土器（3類）と区分した。2類土器は同一個体と考えられる鉢形土器片がIIa区から出土した。詳細は不明であるが、文様は磨消縄文によって表わされ、同時期でも後半期に位置づけられる樹園式に類似する。また、同区からは後北C₂式に比定される3類土器も出土しているが、出土地点は近いものの、層間的な関係は不明である。

3類土器は、Ia区とIIb区から出土している。文様は交互刺突文、沈線による変形工字文、変形工字文を基調とする磨消縄文などがあるが、これらの要素は同一個体内で重複するものもある。地文は条の少ない捻糸文が多く、ほとんどのものが縦走するが、斜行するものや、羽状となるものもみられる。この原体は、器面に押圧されたものからの観察では、一度RL（多くは0段多状）の撚りをかけた後、一方の撚り紐を軸として、他方を扱いた、所謂縄巻縄文と考えられる。また、器面区画に用いられる斜位に尾状の縄文尻痕を残す縄絡文は、扱いた撚り紐の末端を軸に結びつけて作られたものであろう。

文様では、I区から出土したものと、IIa区から出土した土器では若干様相を異にしている。I区のもの、壺形土器1点であるが、施文される交互刺突文は、整然としており、体部には渦巻状の磨消縄文と、下向きの運弧文をもつ。また、口縁部には指頭疔痕状の突起をもつ。これらの特徴は、福島県天王山遺跡を標式とする天王山式土器、県内では常盤式に極めて類似する。これに対して、IIb区出土のものは、交互刺突はみられるものの、施文は甚だ簡略化され、地文には、前述の縄絡文や捻糸文が粗雑に施される。また、捻糸文の末端を交差されるものや、はっきりとした羽状縄文のものもみられる。これらの特徴から、IIb区の土器群はI区のものに後続すると考えられている岩泉町赤穴遺跡出土の赤穴式に近いものかもしれない。しかし、これらの土器について、層間的な把握はできなかった。これらの土器に類似する資料では、同

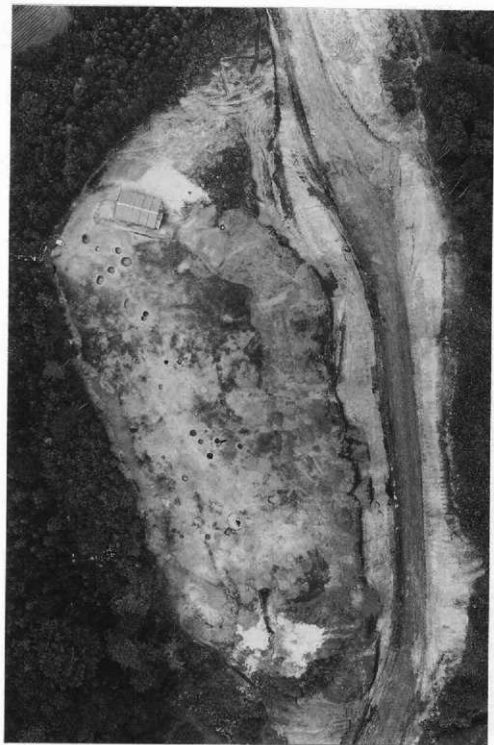
写 真 图 版



北方から

道跡遠景 (A調査区)

写真図版 1



北方から

遺跡遠景 (B調査区)

写真図版 2



基本土層 (DⅢ区南縁)



基本土層 (拡大)

写真図版3 基本土層



炭化材・遺物出土状況



埋土断面A-B

写真図版4 AⅡ-1住居跡(1)



完掘状況



カマド検出状況



カマド断面G-H



カマド断面I-J



煙道部断面E-F



煙道部断面完掘

写真図版5 AII-1住居跡(2)



炭化材出土状況



埋土断面A-B

写真図版6 BI-住居跡(1)



火山灰堆積状況



完掘状況



焼土検出状況



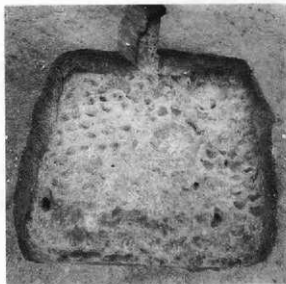
焼土断面G-H



煙道部断面E-F



煙道部断面完掘



掘り方完掘状況

写真図版7 B1-1 住居跡(2)



完掘状況



焼土検出状況



焼土断面



カマド断面A-B

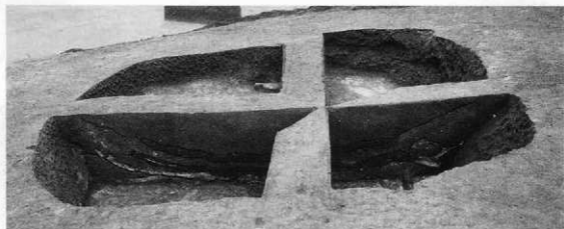


カマド完掘状況

写真図版8 CⅡ-1住居跡



炭化材出土状況



埋土断面A-B

写真図版9 CⅢ-1住居跡(1)



埋土断面C-D



完掘状況



カマド検出状況



煙道部断面E-F



カマド断面C-H



煙道部断面完掘



カマド断面I-J

写真図版10 CⅢ-1住居跡(2)



a CⅢ-1住居跡掘り方断面C-D



CⅢ-1住居跡掘り方状況



b DⅢ-1住居跡検出状況



DⅢ-1住居跡

炭化材 焼土出土状況

写真図版11 DⅢ-1住居跡(1)他



埋土断面A-B



焼土断面



煙道部断面



掘り方完掘状況
写真図版12 DⅢ-1住居跡(2)



a C II-1 土坑

(平面)

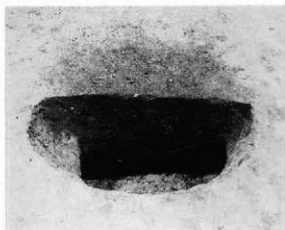


(断面)



b C II-2 土坑

(平面)



(断面)



c C III-1 土坑

(平面)



(断面)

写真図版13 A調査区土坑類(1)



a CⅡ-1 陥し穴状遺構 (平面)



(断面)



(逆茂木断面)



(逆茂木断面)



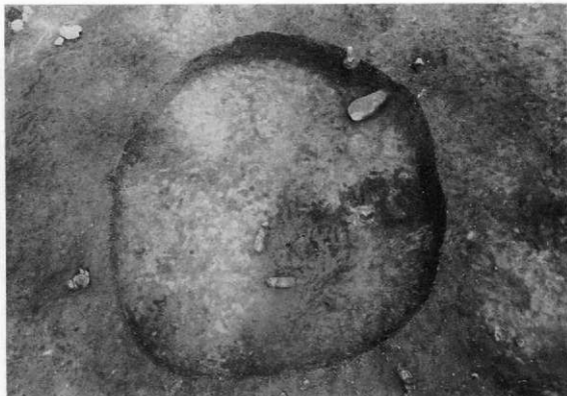
(逆茂木断面完掘)



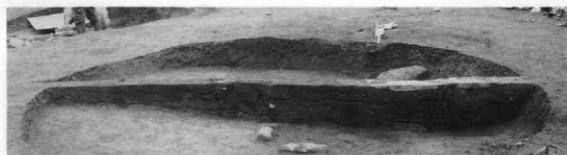
b DⅢ-1 土坑

(断面)

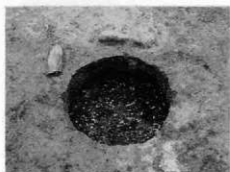
写真図版14 A調査区土坑類(2)



完掘状況



埋土断面A-B



炉と土坑



炉断面C-D

写真図版15 III F-1 住居跡



完掘状況

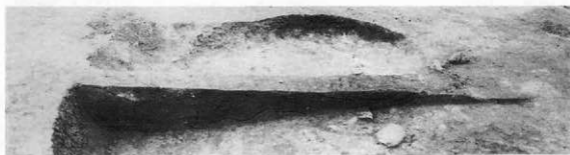


埋土断面

写真図版16 IV D-1 住居跡



完掘状況



埋土断面A-B



炉

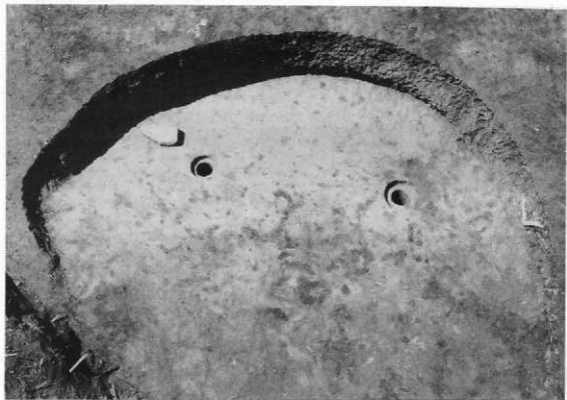


炉断面E-F

写真図版17 NE-1住居跡



炭化材出土状況

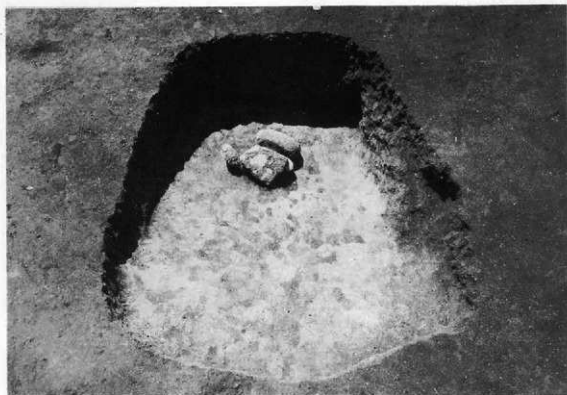


完掘状況
写真図版18 VD-1住居跡



a VD-1 住居跡

埋土断面



b III E-1 住居跡状遺構

完掘状況



埋土断面

写真図版19 III E-1 住居跡状遺構他



a IV D-1 烧土 (平面)



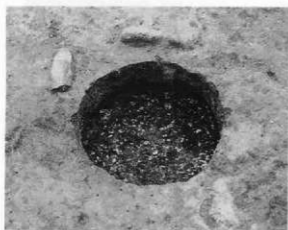
(断面)



b III E-1 土坑 (平面)



(断面)

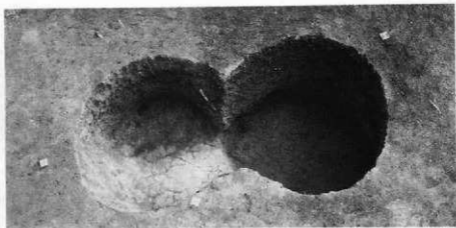


c III F-1 土坑 (平面)



(断面)

写真図版20 B調査区土坑(1)他



a NC-1·2土坑

(平面)



NC-1 土坑

(断面)



NC-2 土坑

(断面)



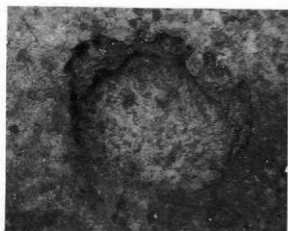
b ND-1 土坑

(平面)



(断面)

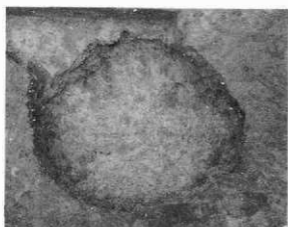
写真图版21 B调查区土坑(2)



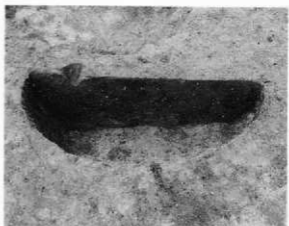
a ND-2 土坑 (平面)



(断面)



b ND-3 土坑 (平面)



(断面)



c ND-4 土坑 (平面)



(断面)

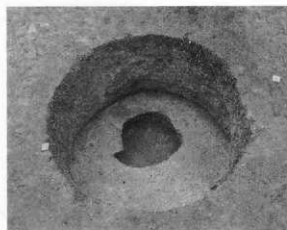
写真図版22 B調査区土坑(3)



a NE-1 土坑 (平面)



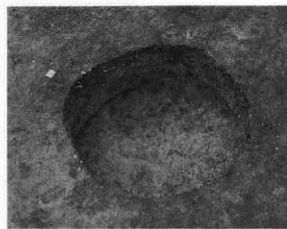
(断面)



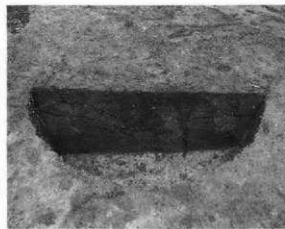
b NE-2 土坑 (平面)



(断面)



c NE-3 土坑 (平面)

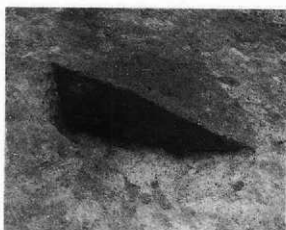


(断面)

写真图版23 B调查区土坑(4)



a NE-4 土坑 (平面)



(断面)



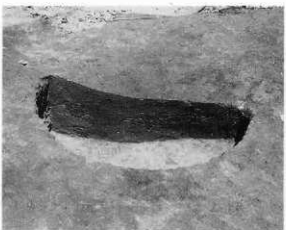
b NE-5 土坑 (平面)



(断面)

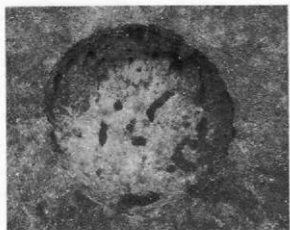


c NE-6 土坑 (平面)



(断面)

写真图版24 B調査区土坑(5)



a IVF-1 土坑

(平面)



(断面)

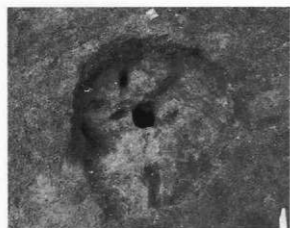


b IVF-1 土坑

(土器出土狀況)



(平面)



c IVF-2 土坑

(平面)



(断面)

写真図版25 B調査区土坑(6)



a NF-3 土坑

(平面)



(断面)



b NF-4 土坑

(平面)



(断面)



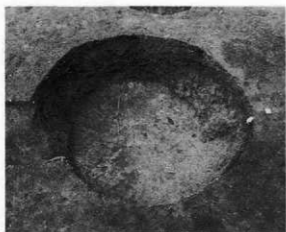
c NF-6 土坑

(平面)

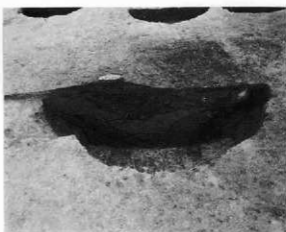


(断面)

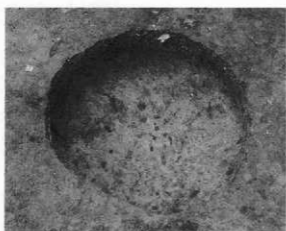
写真图版26 B調査区土坑(7)



a VC-1 土坑 (平面)



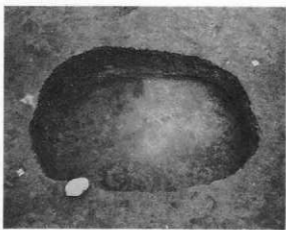
(断面)



b VC-2 土坑 (平面)



(断面)



c VC-3·4 土坑 (平面)



(断面)

写真图版27 B调查区土坑(8)



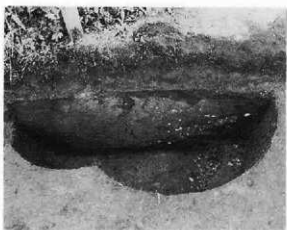
a VC-5 土坑 (平面)



(断面)



b VC-6 土坑 (平面)



(断面)

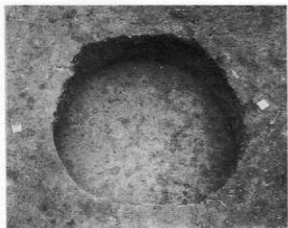


c VC-7 土坑 (平面)

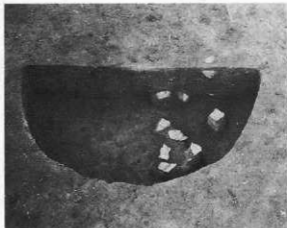


(断面)

写真图版28 B调查区土坑(9)



a VC-8土坑 (平面)



(断面)



b VC-9·10土坑 (平面)



(断面)



c NF-1埋藏土器 (平面)



(断面)

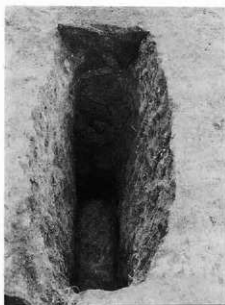
写真图版29 B調査区土坑他00



a IV区土器出土状況



b NE-1 陥し穴状遺構 (平面)



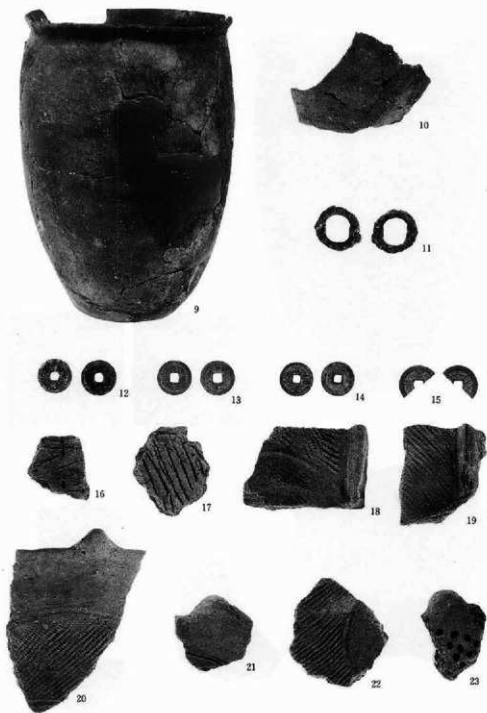
(断面)



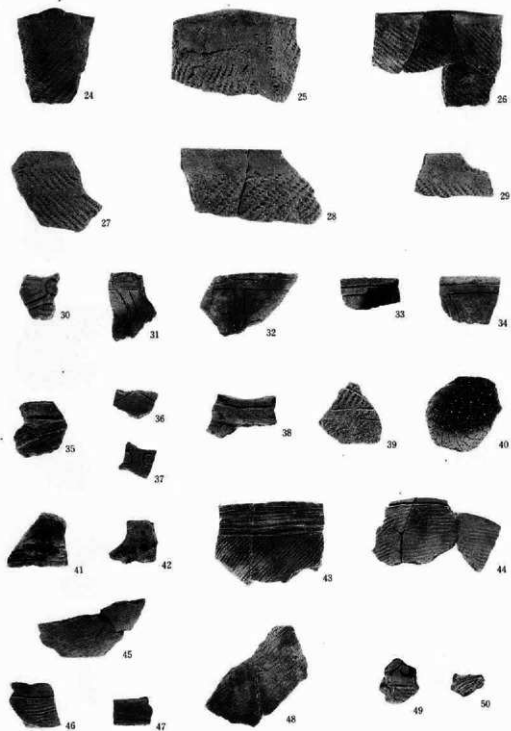
c A調査区のBⅢ区の十和田a火山灰堆積状況
写真図版30 B調査区陥し穴状遺構他



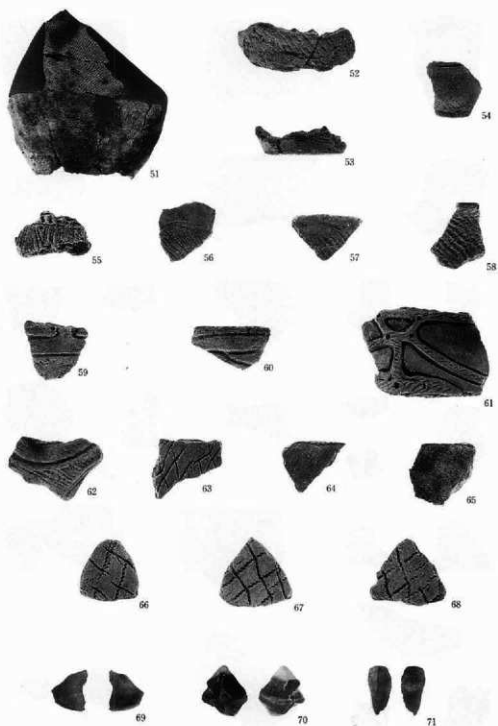
写真図版31 A調査区出土遺物(1)



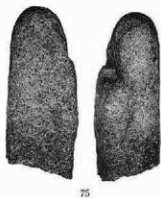
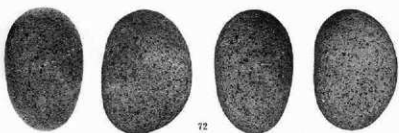
写真図版32 A調査区出土遺物(2)



写真图版33 A调查区出土遗物(3)



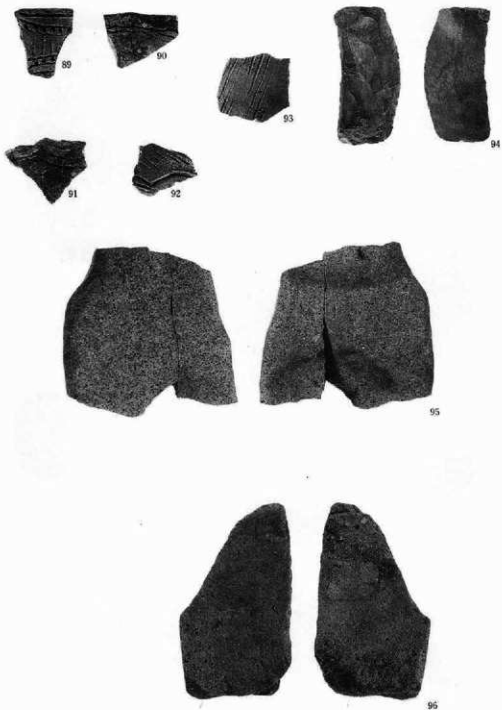
写真图版34 B区调查区出土遗物(1)



写真図版35 B調査区出土遺物(2)



写真図版36 B調査区出土遺物(3)



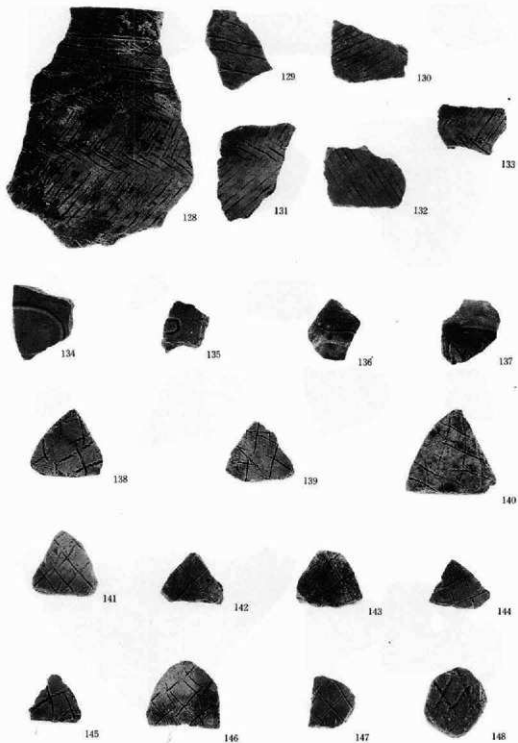
写真図版37 B調査区出土遺物(4)



写真図版38 B調査区出土遺物(5)



写真図版39 B調査区出土遺物(6)



写真図版40 B調査区出土遺物(7)



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161

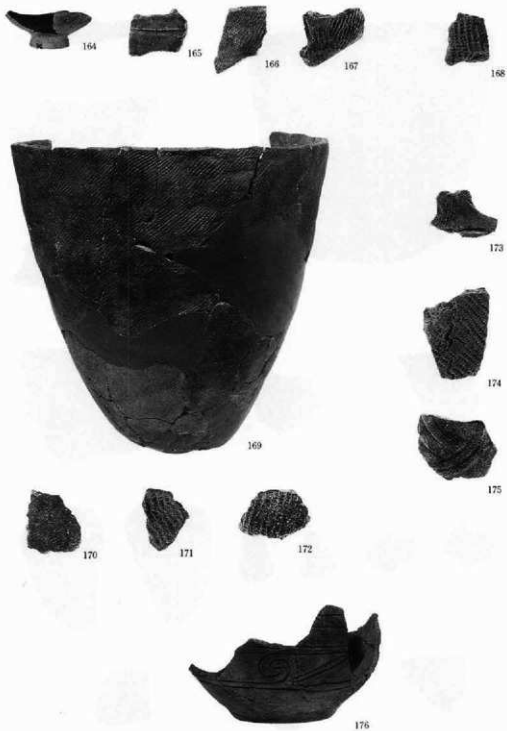


162

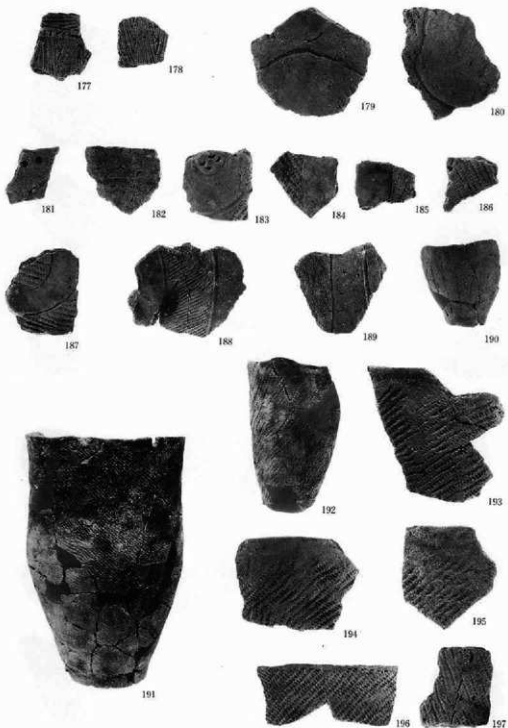


163

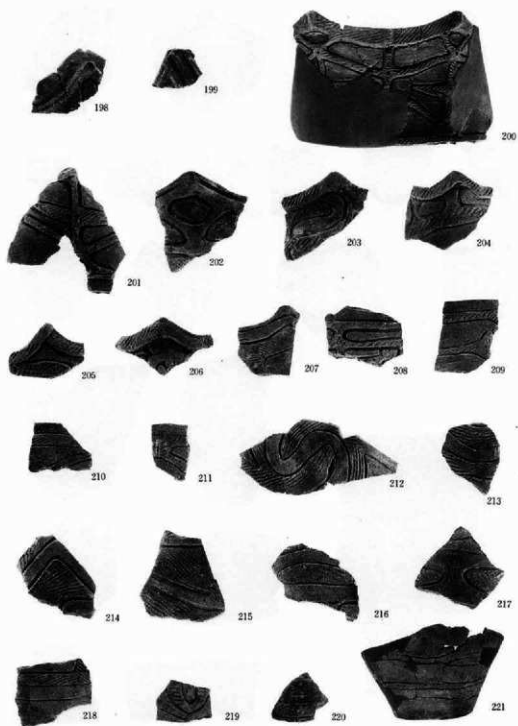
写真図版41 B調査区出土遺物(8)



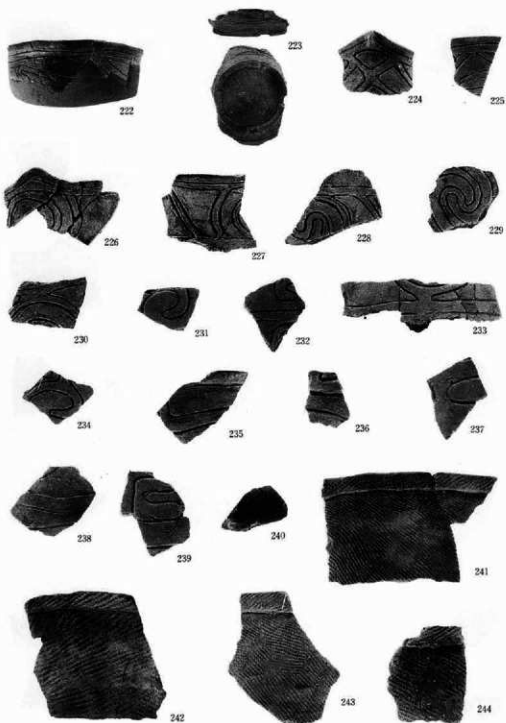
写真図版42 B調査区出土遺物(9)



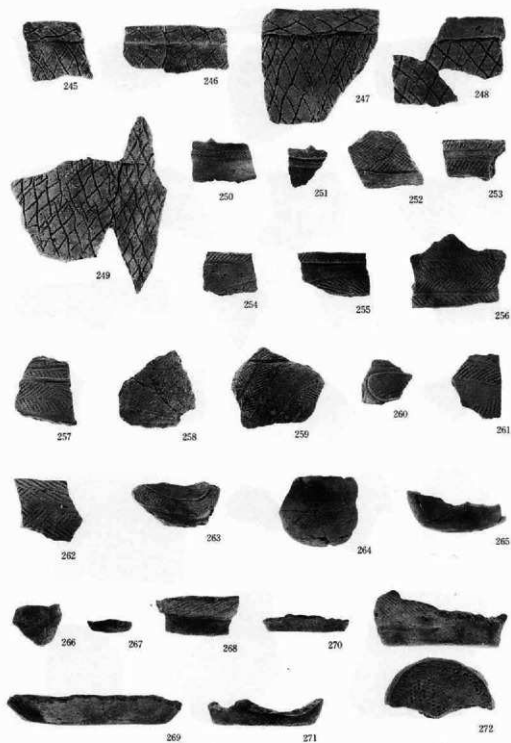
写真図版43 B調査区出土遺物(10)



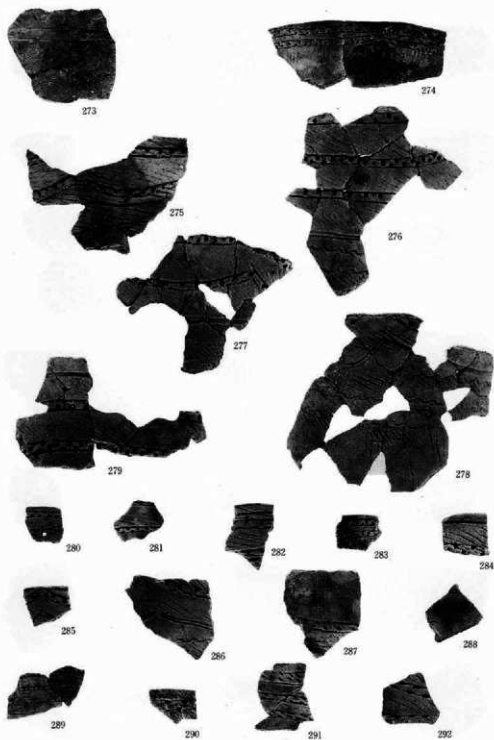
写真图版44 B调查区出土遗物(1)



写真図版45 B調査区出土遺物(12)



写真图版46 B调查区出土遗物(13)



写真图版47 B调查区出土遗物 00



写真図版48 B調査区出土遺物(15)



319



320



321



322



323



324



325



326



327



328



329



330



331

写真図版49 B調査区出土遺物 06



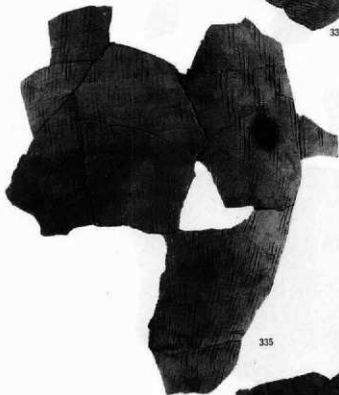
332



333



334

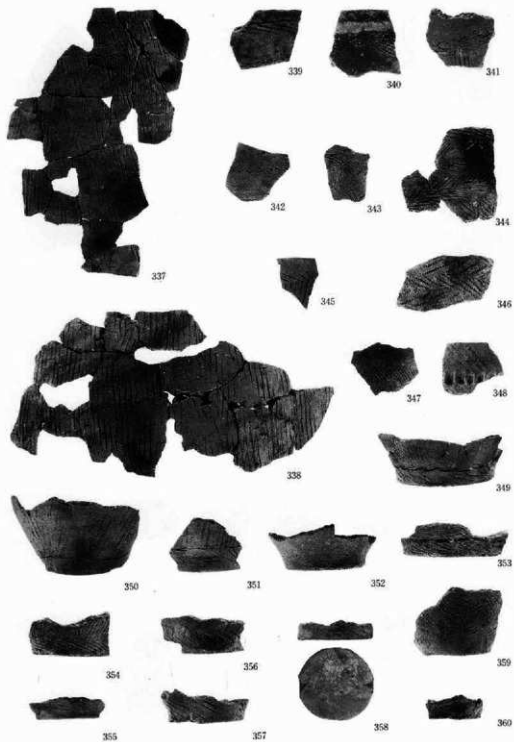


335



336

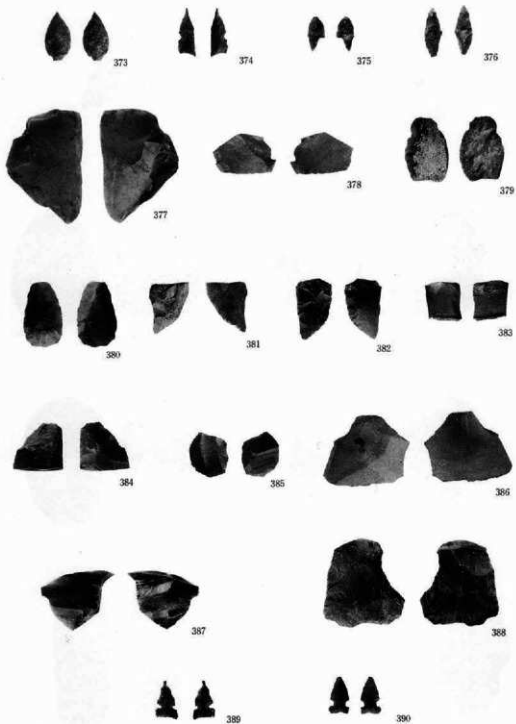
写真図版50 B調査区出土遺物(17)



写真图版51 B调查区出土遗物(18)



写真図版52 B調査区出土遺物 09



写真図版53 B調査区出土遺物 ②



391



392



393



394



395



396

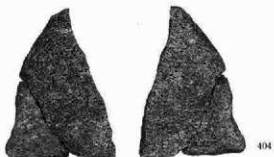
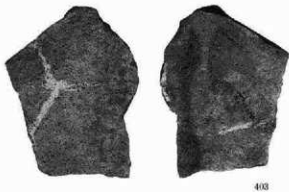


397



398

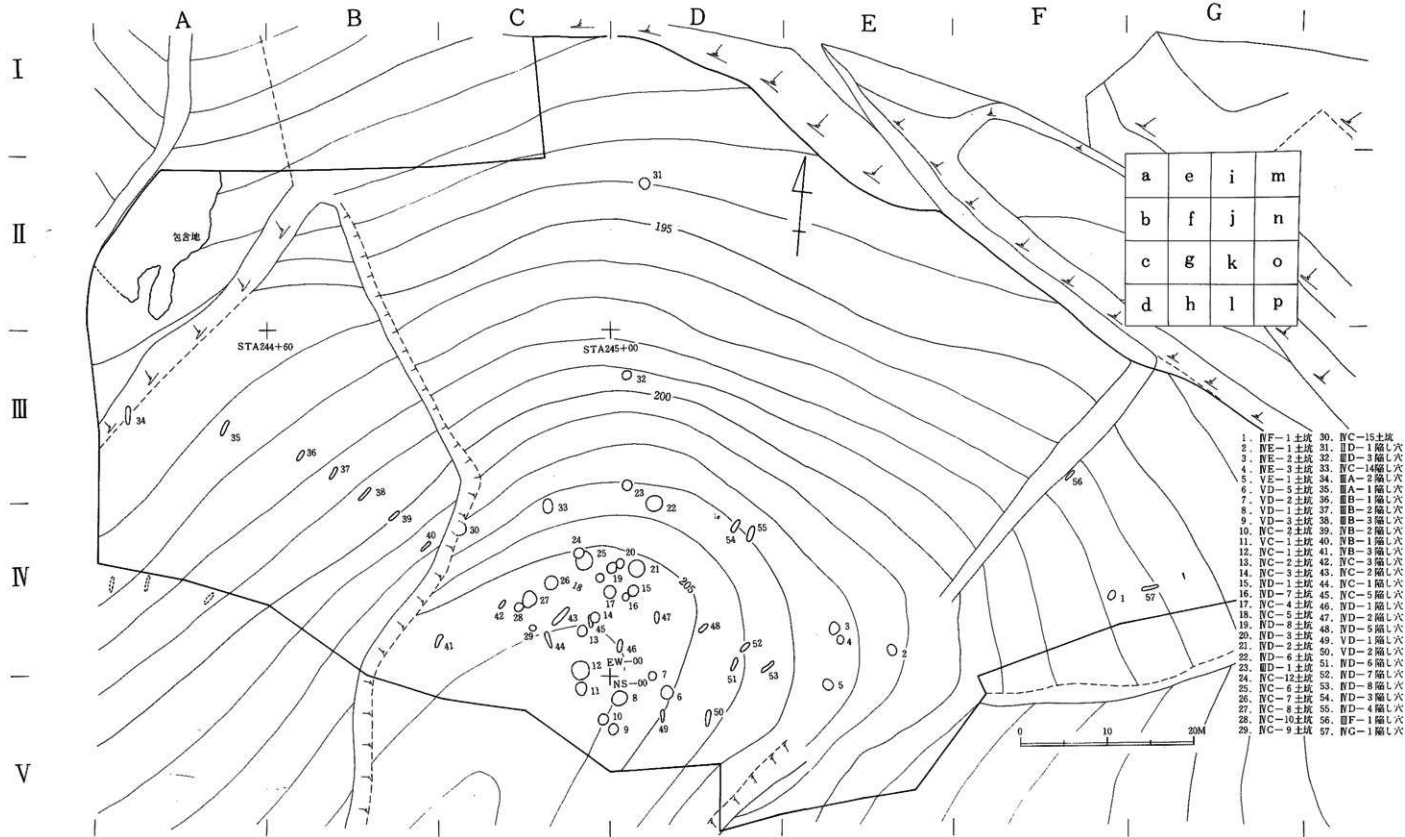
写真図版54 B調査区出土遺物(2)



写真図版55 B調査区出土遺物(2)

VI 親久保Ⅲ遺跡

所在地	二戸郡一戸町一戸字親久保149ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間	第一次 昭和60年7月16日～9月13日 第二次 昭和61年4月14日～6月15日
整理年月日	昭和61年11月1日～62年2月28日
調査対象面積	8,220㎡
発掘調査面積	8,220㎡
遺跡番号・略号	J E 19-1198・OKⅢ-85, OKⅢ-86
調査担当者	片方宗明・中川重紀(60年) 光井文行・中川重紀(61年)
協力機関	一戸町教育委員会



図版1 親久保Ⅲ遺跡遺構配置図

1. 調査の経過

親久保Ⅲ遺跡の調査は2年間に渡って行った。初年度は昭和60年7月16日～9月13日の約2カ月間実施し、粗掘りと遺構検出を行った。粗掘りは人手と重機の併用で行い、重機を使用するに当たっては当初、尾根部から斜面部にかけて幅1mのトレンチをいれて土層を確認した。その結果を基に重機をいれる場所を決定した。トレンチをいれて土層を確認したところ、尾根頂部では表土が10～20cmと浅く傾斜変換部分から尾根の裾部分にかけて50～100cmの堆積があることが解った。その結果、グリッド名で言えばC、D区は人手で、それ以外は重機で粗掘りと遺構検出作業を行った。遺構は主に尾根頂部に集中して検出された。

検出した遺構としては、土坑34、陥し穴13、十和田a降下火山灰が集中して見られ住居址と思われるもの3箇所が確認された。調査終了に当たっては次年度調査の際の目安となるように遺構内にプレートを打ち込んでおいた。

次年度は昭和61年4月14日～6月15日の2カ月間実施した。調査は第一次調査の成果を踏まえて実施したが冬季における雪や霜の影響や鳥によるいたずらなどのため初年度打ち込んでおいたプレートが動いていることから新たに精査のしなおしから始めた。精査は尾根部から開始し、遺構の調査は尾根頂部の東南方向の土坑から始めた。その結果、土坑は浅いと思われたが予想に反して深いものが多く検出された。また、精査をするにつれて第一次調査で検出された土坑が陥し穴になったものや土坑でないもの、新たに検出された土坑などがあるが、ほぼ初年度の調査結果に沿うものであった。また調査区西側にみられた十和田a降下火山灰が見られた部分は住居址とはならずただ単に窪地に堆積したものであり、その下位には縄文晩期や後期の土器を僅かであるが包含しているところであることが判明した。遺跡の調査は包含地を最後に終了しその後、隣接地の親久保Ⅳ遺跡の調査に入った。

2. 検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は土坑30基と陥し穴27基である。遺構は何れも基本土層6層上面で検出されている。土坑は大調査区のC、D、E区に主に集中して検出され、F区には僅かに1基が検出された。形状は平面形が何れも円形状であり、断面形はフラスコ形と皿形の2形態があり、フラスコ形が多い。陥し穴は調査区のほぼ全域に検出されている。形状は平面形が円形のものと同状であり、溝状のものは並列して検出されている。

遺物は、縄文時代の土器、石器と弥生時代の土器である。土器は主に尾根部分に比較的多く検出されているが、遺構からの出土は少ない。その他には調査区西側(ⅡA区)では小規模であるが遺物包含地状になっている地区から縄文時代後期の土器が比較的まとまって出土している。石器は石鏃、凹石、磨石、銅片、石皿等が検出された。

(1) 土坑

土坑は先に述べたとおり、その占地形態を見れば主に尾根中央部に集中している。フラスコ形土坑は深さがあり規模の大きなものが目だが、皿形土坑は浅く規模が小さいものである。フラスコ形土坑と皿形土坑との切り合い関係は少ないが、フラスコ形土坑が古いようである。

ⅢD-1土坑 (図版2・17-1~6, 写真図版3・16-1~6)

調査区ⅢD-d区の斜面部に位置している。規模は開口部径で1.14×1.10m、底部径で1.14×1.12m、検出面からの深さは中央部で0.22mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。

埋土は色調などから6層に細分され、比較的締りが良く浮石が混入している。1層の褐色土が埋め戻され、他の層は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土器片、石器が埋土4層の上部から中頃に掛けて出土している。1、2とも胎土に繊維を含む土器片で第2群に属する土器片である。1が0段多条LR、2がLRの斜縄文である。3~5は第4群に属する土器片であり、何れも条の細いLR斜縄文である。5には横部に一条の沈線がみられる。6は二等辺三角形の無茎の石鏃である。

ⅣC-1土坑 (図版2・17-7~9, 写真図版3・16-7~9)

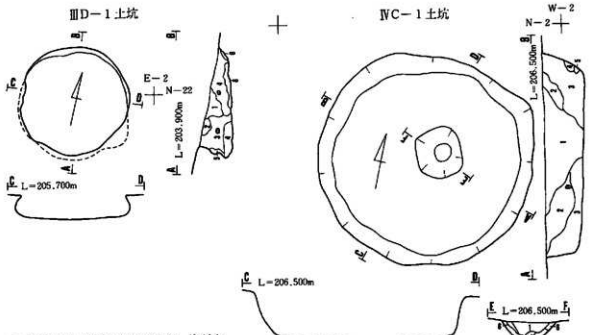
調査区ⅣC-1, P, VC-m区の尾根頂部の平坦部に位置している。規模は開口部径2.26×2.20m、底部径1.90×1.92m、検出面からの深さ0.42mである。平面形は開口部、底部ともほぼ円形を呈し断面形は皿形の形状を呈している。また底部のほぼ中央部やや北東に寄った部分に開口部径0.5×0.54m、底部径0.20×0.18m、検出面からの深さ0.22mの断面形が摺鉢状を呈する、小ピットが見られる土坑である。

埋土は色調や、含有物によって5層に細分され、1層には炭化物の混入が多く認められている。他の層には浮石が散在している。堆積の状況から1層は自然層、2層が人為層と考えられ、小ピットは本土坑に直接関わりがないものかも知れない。

出土遺物は、土器片と石器が埋土中や底面より出土している。7は埋土中から出土した第4群に属する土器片で原体LRが施文されている。8、9は底面上で検出された石鏃である。8は無茎の石鏃であり、9は尖基状を呈している石鏃である。

ⅣC-2土坑 (図版2, 写真図版3)

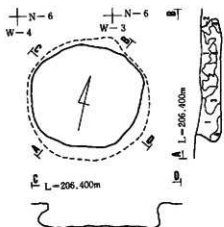
調査区ⅣC-o区の尾根頂部の平坦部に位置している。規模は開口部径1.20×1.16m、底部径1.26×1.32m、検出面からの深さ0.22mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断



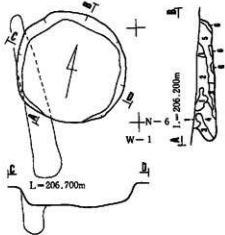
1. 10YR 4/6 褐色 全体に泥岩の碎片含む、浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む、泥岩の碎片含む
4. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、褐色土ブロックで含む
5. 10YR 5/6 黄褐色 壁の崩落土、浮石含まない
6. 10YR 3/4 暗褐色 浮石含む、褐色土ブロック含む

1. 10YR 2/1 黒色 全体に炭化物粒含む、焼土粒を少量含む、全体に浮石含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 浮石散在、炭化物粒少量含む、礫を僅かに含む
3. 10YR 2/3 暗褐色 浮石全体に散在する、暗褐色土ブロック状に含む
4. 10YR 4/4 褐色 壁からの崩落土、浮石を含む
5. 10YR 5/6 黄褐色 壁からの崩落土
6. 10YR 3/2 黒褐色 全体に細い浮石散在
7. 10YR 4/3 褐色 浮石含む

NC-2 土坑



NC-3 土坑



1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石散在、炭化物粒少量含む、暗褐色土ブロックで多く含む
2. 10YR 4/4 褐色 浮石全体に含む、暗褐色土(7.5YR 5/6)ブロック少量含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 浮石全体に含む、炭化物粒少量含む
4. 10YR 4/6 褐色 全体に浮石含む

1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物粒僅かに含む、暗褐色土小ブロックで含む
2. 10YR 2/3 暗褐色 全体に少量浮石を含む、褐色粘土質小ブロックで含む
3. 10YR 4/4 褐色 ほとんど浮石を含まない



図版2 土坑(1)

面形はプラスチック形を呈している。底面は緩やかな凹凸が僅かに見られる。

埋土は色調等から4層に細分され、全体に浮石が散在している。埋土の状況から1、4層は自然層、2、3層は人為層と考えられる。出土遺物はない。

IVC-3土坑 (図版2, 写真図版4)

調査区IVC-o区の尾根頂部の平坦部に位置し、IVC-5陥し穴を切っている。規模は開口部径1.18×1.16m、底部径1.04×1.02m、検出面からの深さ0.18mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は皿状を呈している。底面は僅かに凹凸が見られるが相対的に平坦である。埋土は色調等から6層に細分され、1、3～6層が自然堆積や壁の崩落土と思われる。2層は人為層と考えられる。出土遺物はない。

IVC-4土坑 (図版3, 写真図版4)

調査区IVC-n、o区、VC-b、c区にまたがった尾根頂部の平坦部に位置している。規模は開口部径1.14×1.14m、底部径1.46×1.58m、検出面からの深さ0.52mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はプラスチック形を呈している。埋土は色調等から8層に細分され、自然堆積層である。出土遺物はない。

IVC-5土坑 (図版3, 写真図版4)

調査区IVC-n区の尾根頂部の平坦部に位置している。規模は開口部径0.88×0.86m、底部径0.82×0.86m、検出面からの深さ0.14mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は皿状を呈している。埋土は色調等から3層に細分され、浮石を僅かに含み、挙大の礫が壁際の2層中に少ないが見られた。自然堆積層と考えられる。出土遺物はない。

IVC-6、12土坑 (図版3・17-10, 11, 写真図版4・16-10, 11)

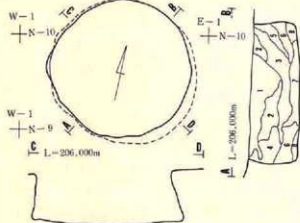
調査区IVC-n区の尾根頂部の縁辺部分に位置している。北西側で重複関係にある土坑で、新旧関係はIVC-6土坑がIVC-12土坑に切られていると考えられる。

IVC-6土坑の規模は開口部径2.04±1.94m、底部径1.94±1.90m、検出面からの深さ0.90mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はプラスチック形を呈している。

IVC-12土坑の規模は開口部径1.06×0.90m、底部径0.74×0.74m、検出面からの深さ0.92mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はピーカー形を呈している。

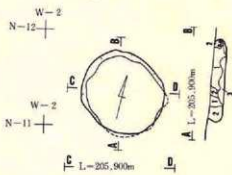
埋土は色調等から24層に細分され、浮石や炭化物粒、焼土粒を含むもので構成されており埋土の多くは人為堆積層(投げ込み)である。また、IVC-6土坑の底面ほぼ中央に直径0.90m、

NC-4 土坑



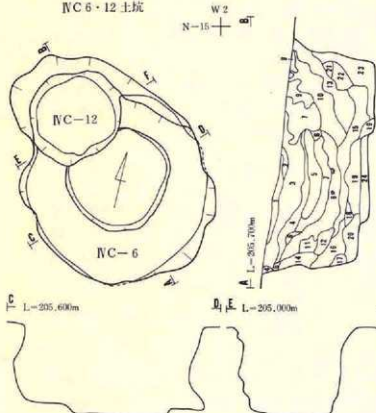
1. 10YR 2/1 黒色 炭化物物粒多く含む。全体的に浮石を含む。タピロ少量含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む。暗褐色土小ブロックで多く含む。炭化物粒少量含む
3. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む。黒色土小ブロックで多く含む。炭化物粒少量含む
4. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
5. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む。4層より汚れている
6. 10YR 4/6 褐色 おずかに浮石含む。壁からの崩落土
7. 10YR 2/3 黒褐色 おずかに浮石含む。褐色粒土質が小ブロックで少量含む
8. 10YR 4/4 褐色 ほとんど浮石を含まない。壁からの崩落土

NC-5 土坑



1. 10YR 2/2 黒褐色 炭化物を幾分多く含む。全体に浮石を含む。褐色土小ブロックで多く含む
2. 10YR 4/6 褐色 浮石を全体に含む。炭化物少量含む。北壁際に泥岩の破片を含む
3. 10YR 4/3 暗褐色 浮石を含む。褐色土(W/4層層)小ブロックで多く含む

NC-6・12 土坑



1. 10YR 2/1 黒色 炭化物を多く含む。全体に浮石多く含む。小塊少量含む
2. 10YR 4/8 赤褐色 焼土。全体に浮石含む。炭化物粒少量含む
3. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石多く含む。炭化物粒少量含む
4. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石多く含む。泥岩の小粒を含む
5. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石・泥岩の小粒多く含む
6. 7.5YR 2/2 暗褐色 全体に浮石含む。暗褐色土。ブロック状に含む
7. 7.5YR 4/4 褐色 全体に泥岩の破片や多く含む。炭化物粒少量含む
8. 10YR 3/2 暗褐色 全体に浮石含む。泥岩少量含む。暗褐色の小塊を含む
9. 7.5YR 3/2 暗褐色 全体に浮石多く含む。暗褐色土小ブロックで含む
10. 10YR 2/2 黒褐色 浮石全体に多く含む。炭化物粒少量含む。暗褐色ブロック状に含む
11. 7.5YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む
12. 7.5YR 4/4 褐色 全体に浮石含む。小塊少量含む
13. 10YR 2/3 暗褐色 全体に浮石含む。炭化物粒含む
14. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む。暗褐色土小ブロックで含む
15. 10YR 5/4 ぶい黄褐色 全体に泥岩の破片を含む。浮石を含む
16. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む
17. 10YR 5/4 ぶい黄褐色 少量浮石含む。泥岩多く含む
18. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む
19. 10YR 4/4 褐色 泥岩の破片多く含む。浮石少量含む
20. 10YR 5/6 黄褐色 浮石ほとんど含まない
21. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む
22. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
23. 10YR 4/6 褐色 おずかに泥岩を含む。浮石ほとんど含まない
24. 10YR ぶい黄褐色 多量に泥岩の破片を含む。小粒少量含む。浮石含まない

0 1m

図版3 土坑(2)

底面からの深さ0.10mの浅い土坑状のものが見られるがIVC-6土坑に伴うか、または古い土坑であるかは調査中に判明しなかった。出土遺物は埋土上部や中頃に土器片が出土している。10は第4群に属する注口土器片であり表面を磨いている。11は第2群土器に属する土器片であり、胎土に繊維を含んでいる。縄文は0段多条LRの原体を施文している。

IVC-7土坑 (図版4, 写真図版5)

調査区IVC-j, k区の尾根頂部の平坦部に位置している。規模は開口部径1.70×1.60m、底部径1.76×1.74m、検出面からの深さ0.56mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。壁面は西側でかなりオーバーハングしているが東側は内側に僅かに傾く程度である。底面は平坦で固く締まっている。埋土は色調等から8層に細分され、浮石が埋土中に多く見られる。1～3層は投げ込み層、4～8層は自然堆積層と考えられる。出土遺物はない。

IVC-8土坑 (図版4, 写真図版5)

調査区IVC-g, k区の尾根頂部の平坦部に位置し、南側でIVC-10土坑に一部切られている。規模は開口部径1.88×1.78m、底部径1.82×1.94m、検出面からの深さ0.70mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。底面は若干の凹凸が見られるがほぼ平坦である。埋土は色調等から14層に細分され、1層の黒褐色土層中には浮石が見られる。埋土上部から壁面に見られる黒褐色土から暗褐色土が自然堆積層、埋土中位に見られる黄褐色土層は投げ込み層と考えられる。出土遺物はない。

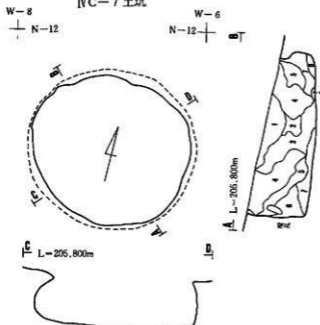
IVC-9土坑 (図版4, 写真図版5)

調査区IVC-k区の尾根頂部の平坦部に位置している。規模は開口部径0.82×0.82m、底部径0.94×0.92m、検出面からの深さ0.40mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。底面は中央部が弓状に僅かに窪み比較的堅くなっている。埋土は色調等から7層に細分される。自然堆積層と考えられる。出土遺物はない。

IVC-10土坑 (図版, 写真図版5)

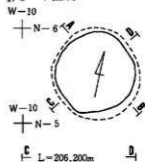
調査区IVC-g区の尾根頂部の緩斜面に位置し、北側でIVC-8土坑の一部を切っている。規模は開口部径1.26×1.20m、底部径1.16×1.08m、検出面からの深さ0.26mである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈し、断面形は山側でフラスコ状に見られるが、谷側では壁が崩れたものと思われフラスコ状となっていない。底部は谷側に向かって緩やかに傾斜しているが

NC-7 土坑



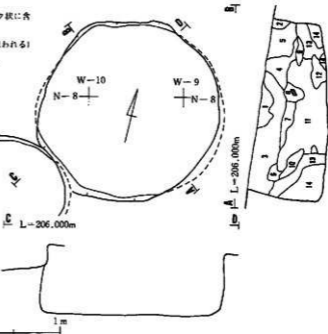
1. 10YR 3/3 黒褐色 全体に浮石を含む
2. 10YR 4/4 褐色 全体に浮石を含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石を含む、褐色土小ブロックを含む
4. 7.5YR 3/3 暗褐色 全体に浮石を含む
5. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石を多く含む、炭化物粒小塊を含む
6. 10YR 3/4 暗褐色 比較的細い浮石を全体に含む
7. 10YR 3/3 暗褐色 浮石はほとんど含まない

NC-9 土坑



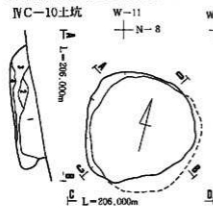
NC-8 土坑

1. 7.5YR 3/3 暗褐色 全体に細い浮石を多く含む、褐色土ブロック状を含む炭化物粒を含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石を含む
3. 10YR 4/4 褐色 上部はやや暗褐色を帯び(風化したものと思われる)浮石を多く含む
4. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石を多く含む、炭化物粒少量含む
5. 10YR 4/6 褐色 少量浮石を含む
6. 10YR 5/6 黄褐色 ほとんど浮石を含まない
7. 10YR 5/8 黄褐色 ほとんど浮石を含まない
8. 7.5YR 4/6 褐色 ほとんど浮石を含まない



1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石を含む、炭化物粒・小石少量含む
2. 10YR 4/6 褐色 少量浮石を含む
3. 10YR 3/2 黒褐色 全体に泥岩の破片を含む、浮石を含む、炭化物粒少量含む
4. 7.5YR 3/2 暗褐色 僅かに泥岩の小塊、浮石を含む
5. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石を多く含む、褐色土ブロックを含む
6. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石を含む、炭化物粒少量含む
7. 7.5YR 3/2 黒褐色 泥岩の破片を含む、浮石を幾分含む、炭化物粒少量含む
8. 10YR 3/3 暗褐色 泥岩の破片、浮石を幾分含む、黒川礫を含む
9. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石を含む、炭化物粒少量含む
10. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石を含む、褐色土小ブロックを含む
11. 10YH 4/3 近い黄褐色 全体に含む、泥岩の破片を含む
12. 10YR 2/2 黒褐色 浮石・泥岩の破片を幾分含む
13. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石を多く含む、暗褐色土ブロックを含む
14. 10YR 4/4 褐色 ほとんど浮石を含まない

NC-10 土坑



1. 10YR 5/4 近い黄褐色 全体に泥岩を多く含む
2. 10YR 4/3 近い黄褐色 僅かに小さい泥岩を含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 褐色土小ブロックを含む、上部に浮石を含む
4. 10YR 4/6 褐色 基本層厚6cm

図版 4 土坑 (3)

ほぼ平坦で固い。埋土は色調から4層に細分される。埋土の状態は遺構検出面下位の黄褐色土と褐色土で構成されることにより人為的に投げ込まれたものと考えられる。出土遺物はない。

IVC-15土坑 (図版5, 写真図版6)

調査区IVC-a区の斜面部に位置し、斜面下方部は削られている。規模は開口部径 $1.50 \times 0.98 + \alpha$ m、底部径 $1.30 \times 0.88 + \alpha$ m、検出面からの深さは斜面上方で0.26mである。平面形は削られているため良く判らないが、開口部、底部とも円形を呈していたと思われる。断面形は斜面上方で残っていたものから推察すればフラスコ形を呈していたと思われる。壁や底部には風化した凝灰岩が見られ、底部は平坦である。埋土は色調等から6層に細分される。自然層と考えられる。出土遺物はない。

IVD-1土坑 (図版5・17-14, 写真図版6, 16-14)

調査区IVD-b, c区の尾根頂部の平坦部に位置し、南西側でIVD-7土坑と接している。新旧関係は不明である。規模は開口部径 1.50×1.40 m、底部径 1.58×1.60 m、検出面からの深さ0.62mである。平面形は開口部、底部とも円形状を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。底部は固い面はないが比較的平坦である。

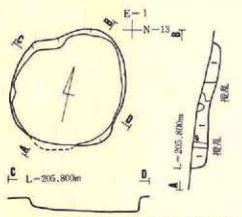
埋土は色調等から11層に細分され、ほぼ全層に浮石を含む。層上部には黒褐色土、下部には褐色土が見られる。埋土の状態から、層上部は自然層、層の中程から下位の層は投げ込み層と考えられる。出土遺物は埋土上部から、土器片が出土している。14は第2群土器に属する土器片で、土器胎土中に繊維を含む。表面には原体2種LR、RLの単節斜縄文を施文して羽状縄文を構成している。裏面は比較的丁寧なミガキが施されている。

IVD-2土坑 (図版5・17-15~18, 写真図版6, 16-15~18)

調査区IVD-b区の尾根頂部の斜面部に位置する。規模は開口部径 2.00×1.90 m、底部径 2.02×2.04 m、検出面からの深さ0.66mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。壁は一部で抉られている状態に窪んでいる部分がある。底部は特に固い面はないがほぼ平坦である。

埋土は色調等から13層に細分され、全層に浮石が見られる。埋土の状態から、1層や壁際の層等が自然層、他の層が投げ込み層と考えられる。出土遺物は埋土4層中から同一個体と思われる土器片が出土している。第4群土器に属するもので、15、18には胴尖部に横位に沈線が1条巡り、それより下位には原体LRの細い縄文が施文されている。沈線より上部は無文と思われる。17は底部片で若干上げ底状である。胎土はあまり良くないが器厚が薄く砂粒が見られる。

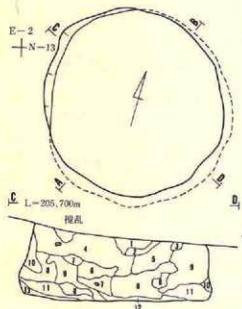
ND-8 土坑



1. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む。炭化物粒少量含む。川原の礫2個含む。

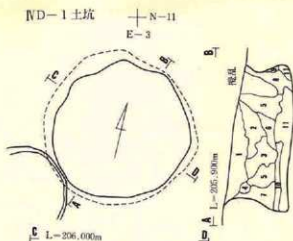


ND-2 土坑



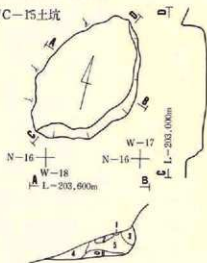
1. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む。炭化物粒含む。泥岩破片含む。黒色土・暗褐色土ブロックを含む。
2. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む。
3. 10YR 4/4 褐色 細粒浮石を含む。
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 全体に泥岩の破片を多く含む。細い浮石多く含む。少量炭化物粒を含む。
5. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む。少量泥岩の破片を含む。少量炭化物粒を含む。
6. 10YR 4/4 褐色 全体に浮石含む。少量泥岩の破片を含む。
7. 7.5YR 4/3 褐色 全体に泥岩の破片を多く含む。
8. 10YR 4/4 褐色 白い浮石を含む。泥岩の小破片を若干含む。炭化物粒少量含む。
9. 7.5YR 4/4 黒褐色 全体に浮石含む。暗褐色土・黒色土ブロック状に含む。小礫泥岩破片を若干含む。
10. 7.5YR 3/1 暗褐色 少量浮石含む。
11. 7.5YR 4/6 褐色 少量浮石含む。
12. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む。
13. 10YR 5/4 濃い黄褐色 少量浮石含む。

ND-1 土坑



1. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石。炭化物粒を含む。黒色土ブロックを含む。
2. 10YR 4/4 褐色 浮石少量含む。泥岩の破片を含む。褐色粘土質土。黒褐色土ブロックを含む。
3. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む。上位に泥岩の小破片を含む。
4. 7.5YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む。上位に泥岩の小破片含む。
5. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む。暗褐色土ブロック状に含む。
6. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む。
7. 7.5YR 5/6 明褐色 浮石を全体に含む。
8. 10YR 4/4 褐色 浮石を含む。黄褐色粘土質土。黒褐色土ブロックで多く含む。
9. 10YR 5/8 黄褐色 浮石をほとんど含まない。
10. 9.5YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む。濃い黄褐色～褐色の粘土質土ブロックで多く含む。
11. 10YR 4/6 褐色 浮石を含む。

NC-15 土坑



1. 10YR 2/1 黒色 浮石含む。
2. 10YR 2/3 暗褐色 浮石含む。泥岩・褐色土ブロックを含む。
3. 10YR 2/3 暗褐色 浮石含む。泥岩の破片少量含む。
4. 10YR 3/4 暗褐色 少量含む。泥岩の破片多く含む。
5. 10YR 3/2 黒褐色 浮石含む。少量泥岩の破片含む。
6. 10YR 2/3 黒褐色 浮石含む。泥岩の破片少量含む。

図版5 土坑(4)

色調は黄褐色を呈している。

ND-8 土坑 (図版 5・17-12, 13・32-191, 写真図版 6・16-12, 13・24-191)

調査区IVC-n、IVD-1b区の尾根頂部の緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.30×1.20m、底部径1.34×1.10m、検出面からの深さ0.12mである。平面形は開口部、底部とも北東側でやや張り出しているが概ね円形である。断面形は浅皿状を呈している。壁、底部とも特に固い面はなく、底部は斜面に沿うように傾斜している。埋土は浮石が混入した暗褐色土の単層で、木根による攪乱が見られる。

出土遺物は土器、石器が埋土中から出土している。12は第4群土器に属する土器片で原体LRの条の細い縄文が施文されている。13は磨石の風化したもの、191は表面の一部がやや窪んでいる石皿状の石製品である。

ND-3 土坑 (図版 6・17-19, 写真図版 7, 16-19)

調査区IVD-1b区の尾根頂部の緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.20×1.10m、底部径1.70×1.60m、検出面からの深さ0.84mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。壁、底部とも固く底部は平坦である。

埋土は色調等から10層に細分され、1～9層は壁の崩落土や投げ込み(埋め戻し)であり、最下部の黒色土層は炭化物が多く含まれているが自然層と考えられる。

出土遺物は埋土上部から石器が出土している。19は凹石の破損品であり、礫のほぼ中央部に円錐状の凹みがある。

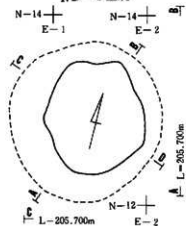
ND-6 土坑 (図版 6・18-31-33, 写真図版 7・17-31-33)

調査区IVD-1a、e、IIID-1d、h区の斜面部に位置する。規模は開口部径1.98×1.94m、底部径1.98×1.94m、検出面からの深さ0.84mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈している。壁は斜面上方で凝灰岩層を壁面とし、斜面下位は褐色土層を床面としている。底部は平坦である。

埋土は色調等から13層に細分され、埋土中の11層中には壁の崩落土である凝灰岩の角礫が壁際に多く見られた。埋土の地積は自然堆積であり、多くは壁からの崩落土である。

出土遺物は埋土1層中から土器、剥片が出土している。土器はいずれも小破片で、31、32とも第2群土器に属する土器破片で胎土中に繊維を含んでいる口縁部破片で口唇部は平坦である。表面には原体LRの縄文が施文されている。剥片は打面部に自然面が見られる薄手の剥片である。

ND-3 土坑

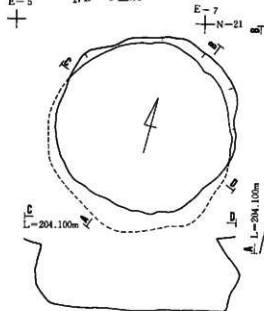


5. 10YR 5/8 黄褐色 浮石ほとんど含まない、わずかに暗褐色土小ブロックを含む
6. 10YR 4/4 褐色 浮石含む、褐色土ブロックで含む
7. 10YR 5/6 黄褐色 浮石ほとんど含まない
8. 10YR 5/6 黄褐色 浮石ほとんど含まない
9. 10YR 5/8 黄褐色 浮石含まない
10. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、少量炭化物粒を含む



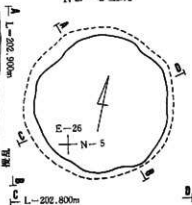
1. 10YR 5/4 に近い黄褐色 泥岩の碎片少量含む
2. 7.5YR 4/6 褐色 全体に浮石含む
3. 10YR 5/6 黄褐色 浮石ほとんど含まない
4. 10YR 5/6 黄褐色 浮石ほとんど含まない、小礫を少量含む、スコリアを含む

ND-6 土坑



1. 10YR 2/1 黒色 全体に細い浮石多く含む、暗褐色土ブロックで少量含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 全体に1mmの浮石含む、1層より大きい浮石含む、細いものは灰白色、やや大きめものは黄褐色を帯び、褐色土ブロック少量含む、下部に褐色土ブロックで含む
3. 10YR 2/2 黒褐色 少量浮石含む、小礫含む、褐色土ブロックで含む
4. 10YR 3/2 暗褐色 少量浮石含む

NE-2 土坑



1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物粒少量含む、褐色土ブロックで含む
2. 10YR 3/4 暗褐色 少量浮石含む、炭化物粒少量含む
3. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物粒少量含む
4. 10YR 3/1 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物粒含む
5. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む
6. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む
7. 10YR 3/4 暗褐色 細粒の浮石含む、炭化物粒少量含む
8. 10YR 2/2 黒褐色 浮石全体に多く含む、炭化物粒少量含む



IVD-7土坑 (図版6・18-34, 35, 写真図版7・17-34, 35)

調査区IVD-c区の尾根頂部の緩斜面部に位置しIVD-1土坑と北東方向で接しているが新旧関係は不明である。規模は開口部径0.98×0.92m、底部径0.86×0.84m、検出面からの深さ0.14mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は浅皿状を呈している。壁、底部とも固い面はなく底部は平坦である。埋土は色調等から5層に細分され何れも自然堆積である。出土遺物は1層中から土器、剥片が1点ずつ出土している。土器34は第2群土器に属する土器片で土器胎土中に繊維を含んでいる、縄文は原体LR、RLの2種によって羽状縄文を施文している。剥片35は縦長剥片の先端部分に調整痕がある不定型石器と思われるものである。

IVE-2土坑 (図版6, 写真図版7)

調査区IVE-g, h区の東側緩斜面部に位置し南東際にIVE-3土坑がある。規模は開口部径1.42×1.40m、底部径1.60×1.60m、検出面からの深さ0.40mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。壁、底部とも固い面はなく底部は平坦である。埋土は色調等から8層に細分され、シルト質で浮石を含んでいる土層で何れも自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

IVE-3土坑 (図版7, 写真図版7)

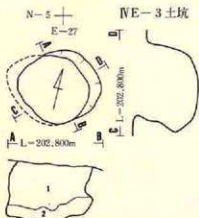
調査区IVE-h区の東側緩斜面部に位置しすぐ北西脇にIVE-2土坑がある。規模は開口部径0.80×0.76m、底部径0.72×0.72m、検出面からの深さ0.60mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は筒形状を呈している。壁、底部とも固い面はなく底部は中央部が窪みや丸底状となっている。埋土は若干汚れた黄褐色土の単層であり、埋め戻しか投げ込みによるものと考えられる。出土遺物はない。

IVE-4土坑 (図版7, 写真図版8)

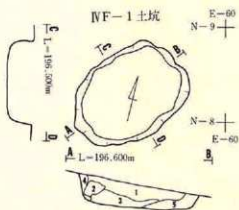
調査区IVE-l区の東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.16×1.08m、底部径1.46×1.60m、検出面からの深さ0.48mである。平面形は開口部が円形状、底部が円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。壁、底部とも固い面はなく、底部は若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。埋土は色調等から10層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土で、3、6～8層が壁の崩落土、他は自然堆積層と考えられる。出土遺物はない。

IVF-1土坑 (図版7, 写真図版8)

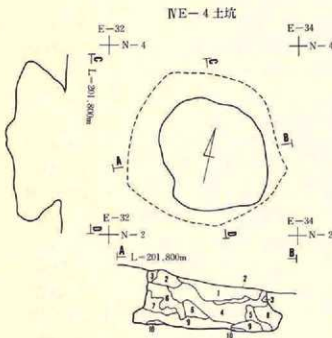
調査区IVF-o区の東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.26×0.92m、底部径1.08×



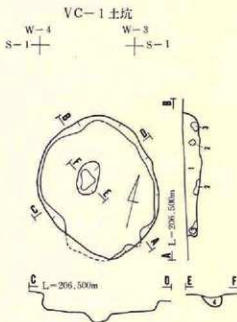
1. 10YR 4/3 に近い黄褐色 浮石多く含む、礫物層で僅かに汚れている
2. 10YR 5/3 に近い黄褐色 浮石少量含む



1. 10YR 2/1 黒色 浮石多く含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 2/2 黒褐色 浮石含む
3. 10YR 3/1 黒褐色 浮石多く含む、暗褐色土小ブロックで含む
4. 10YR 4/4 褐色 浮石少量含む
5. 10YR 2/3 暗褐色 浮石炭化物粒少量含む



1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む、炭化物粒少量含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む
3. 10YR 4/6 褐色 全体に浮石含む
4. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土粒状に含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土粒状に含む
6. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む、褐色土ブロックに含む
7. 10YR 4/4 褐色 全体に浮石含む
8. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
9. 10YR 3/1 黒褐色 全体に浮石多く含む
10. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量含む、褐色土粒状に含む



1. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む、炭化物粒少量含む
2. 10YR 4/4 褐色 浮石少量含む
3. 10YR 5/3 黄褐色 少量浮石含む
4. 10YR 3/2 黒褐色 全体に少量浮石含む、礫土粒・炭化物粒少量含む、最下部で褐色土ブロック含む



図版7 土坑(6)

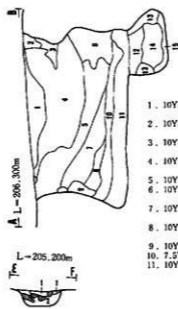
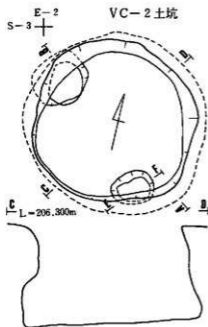
0.80m、検出面からの深さ0.24mである。平面形は開口部、底部とも楕円形を呈し、断面形は浅皿状を呈している。壁、底部とも固い面はなく、底部はほぼ平坦である。埋土は色調等から5層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土である。埋土は自然堆積層と考えられる。出土遺物はない。

V C-1 土坑 (図版7・17-20~22, 写真図版8・16-20~22)

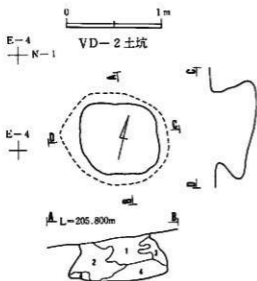
調査区V C-m区の尾根頂部平坦面に位置する。規模は開口部径1.40×1.22m、底部径1.30×1.12m、検出面からの深さ0.18mである。平面形は開口部、底部とも楕円形状を呈し、断面形は浅皿状を呈している。壁、底部とも固い面はなく、底部はほぼ平坦である。また、底部中央北よりに径0.40×0.24m、深さ0.28mの柱穴状の副穴が見られる。埋土は色調等から4層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土で炭化物粒が混じる土層で、副穴に入るものが自然層と思われ他は投げ込み層と考えられる。出土遺物は埋土中から土器、石器が出土している。土器は何れも第4群土器に属する土器破片であり、20、21は同一個体の口縁部破片と思われる。口縁部は折り返された様になり、表面には原体RLの縄文が施文されている。土器胎土中には金雲母が見られる。石器は22で二等辺三角形の無茎の石鏃である。

V C-2 土坑 (図版8・17-26~29, 写真図版8・16-26~29)

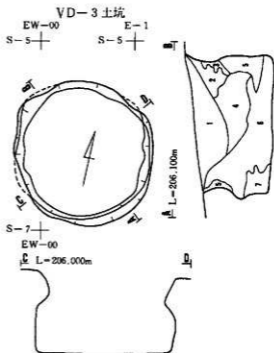
調査区V C-m、n区の尾根頂部東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.84×1.68m、底部径2.00×1.86m、検出面からの深さ1.00mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は頸部にくびれがあるフラスコ形を呈している。壁は若干凹凸があり比較的固い、底部は堅く締りほぼ平坦である。また、底部の北西壁際(Na-1)と南東壁際(Na-2)の2箇所副穴が見られる。Na-1は開口部径0.46×0.42m、底部径0.50×0.60m、土坑底部からの深さ0.40mで、断面形はフラスコ形を呈している。Na-2は開口部径0.44×0.38m、底部径0.34×0.24m、土坑底部からの深さ0.18mで、断面形は浅皿状を呈している。土坑の埋土は色調等から11層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土で炭化物粒が混じる土層である。埋土の状態は最上部と最下層に黒褐色土が見られ自然堆積と考えられ、埋土中央に入っている暗褐色土等は投げ込みや壁の崩落土と考えられる。副穴(Na-1、Na-2)の埋土は土坑埋土の最下層が上部に、下位には黒褐色土や黄褐色土が入っている。出土遺物は埋土上部(4層)から土器、石器、剥片が出土している。土器26、27は何れも第4群土器に属する土器口縁部破片であり、26は小破片のため良く判らないが小突起が小波状に巡っていると思われる深鉢口縁部破片で波状頂部にキザミがあり、口縁部は外反し口縁から1cm位下がった部分に2条の平行する沈線が巡っている。縄文は口縁部に無節rが施文されている。27は円盤状の口縁部突起をもつ深鉢口



1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む、炭化物粒含む
2. 10YR 5/8 黄褐色 大きな浮石が全体に多く含む
3. 10YR 4/6 褐色 浮石少量含む、黒褐色ブロック状に含む
4. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物粒を少量含む
5. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む、炭化物粒含む
6. 10YR 3/8 黄褐色 浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
7. 10YR 4/4 褐色 浮石含む、炭化物粒少量含む
8. 10YR 3/3 暗褐色 浮石含む、褐色土ブロックで多く含む
9. 10YR 4/4 褐色 浮石含む、褐色土ブロック含む
10. 7.5YR 3/4 暗褐色 浮石含む、少量炭化物含む
11. 10YR 2/2 黒褐色 浮石含む



1. 10YR 2/1 黒色 炭化物粒多く含む、全体に浮石含む
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、隣接するVD-5土坑3層と色調類似する
3. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む、黄褐色土ブロック含む
4. 10YR 4/6 褐色 ほとんどと浮石含まない



1. 10YR 3/1 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物少量含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む、褐色土ブロックで含む
3. 10YR 4/4 褐色 暗褐色土ブロックで含む
4. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石多く含む、炭化物粒少量含む
5. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む、暗褐色土ブロック含む、炭化物粒少量含む
6. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石多く含む、暗褐色土ブロックで含む
7. 7.5YR 4/4 褐色 わずかに浮石含む、若干暗褐色土ブロックで含む

図版 8 土坑(7)

縁部破片で口縁部は幾らか内湾している。文様は縄文施文後に平行沈線をほぼ同じ位置で折り返すことによって文様を構成し、突起部から文様帯まで一条の隆帯が円盤を取り巻くようにしながら文様帯部分まで付けられている。縄文は原体LRのものが付けられ、文様帯以外は磨消されている。胎土は良く、器厚は約7mm、色調は褐色を呈している。石器28は石ヒの破片と思われるもので細部調整を片面から丁寧に行っている。裏面にはバルブがある。剥片29は端部の一部に調整痕らしきものが見られる。

VD-2 土坑 (図版8, 写真図版9)

調査区IVD-d, h, VD-a, e区の尾根頂部東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径 $0.82 \times 0.74\text{m}$ 、底部径 $1.12 \times 0.96\text{m}$ 、検出面からの深さ 0.46m である。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は開口部から急に底部に向かって広がるフラスコ形を呈している。壁は若干凹凸があり、底部は中央部がやや窪んでいるがほぼ平坦である。埋土は色調等から4層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土で炭化物粒が混じる土層である。1~3層が自然堆積、4層は投げ込み層と考えられる。出土遺物はない。

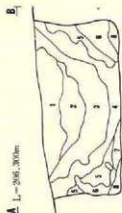
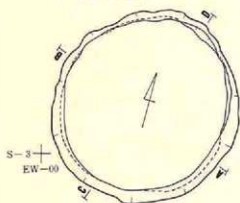
VD-3 土坑 (図版8・17-23-25, 写真図版9・16-23-25)

調査区VD-b区の尾根頂部東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径 $1.56 \times 1.46\text{m}$ 、頸部径 $1.50 \times 1.44\text{m}$ 、底部径 $1.34 \times 1.34\text{m}$ 、検出面からの深さ 0.80m である。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は頸部でくびれがあるフラスコ形を呈している。壁は若干凹凸が見られ、底部はほぼ平坦で固く締まっている。埋土は色調等から7層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土で炭化物粒が混じる。自然堆積と考えられる。出土遺物は埋土上部から土器が出土している。23は無文地に沈線を施文した第4群土器に属する土器破片であり、24、25は胎土中に繊維を含み、原体LRの縄文が施文されている土器で第2群土器に属する。

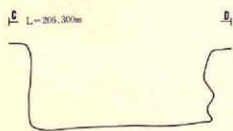
VD-1 土坑 (図版9・18-30, 写真図版9・16-30)

調査区VD-a区の東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径 $2.06 \times 1.94\text{m}$ 、頸部径 $1.90 \times 1.72\text{m}$ 、底部径 $1.82 \times 1.78\text{m}$ 、検出面からの深さ 0.80m である。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈している。壁は北壁側で若干凹凸が見られるが他の壁には凹凸は見られない。底部はほぼ平坦で固く締まっている。埋土は色調等から8層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土である。1、2層が投げ込み層であり、他の層は自然堆積層や、壁の崩落土である。出土遺物は埋土上部から偏平な石の両面に浅い窪みがある凹石30が1点出土している。

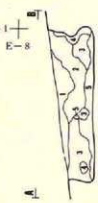
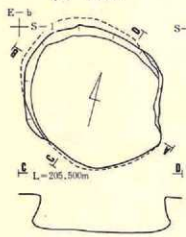
VD-1 土坑



1. 10YR 6/8 明褐色 浮石少量含む
2. 10YR 4/4 褐色 全体に浮石多く含む、小礫少量含む
暗褐色土ブロック少量含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石多く含む、黒褐色・褐色土
ブロックで少量含む
4. 10YR 3/1 黒褐色 炭化物粒少量含む、浮石全体に含む
5. 10YR 3/2 黒褐色 炭化物粒少量含む、暗褐色土ブロックで
若干含む、全体に浮石含む
6. 10YR 4/6 褐色 壁からの剥落土、壁より若干凹れている
浮石少量含む
7. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む

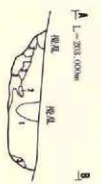
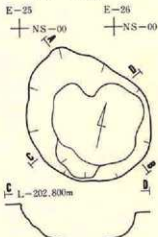


VD-5 土坑

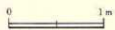


1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む、暗褐色土ブロック含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石多く含む、暗褐色土ブロックで含む
3. 7.5YR 3/2 黒褐色 全体に浮石多く含む、暗褐色・褐色土ブロックで
若干含む
4. 10YR 4/4 褐色 全体に黄褐色浮石少量含む、壁の剥落土
5. 10YR 4/3 褐色 はとんど浮石含まない

VE-1 土坑



1. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロック多く含む、小石若干含む
2. 10YR 4/6 褐色 浮石少量含む
3. 10YR 4/4 褐色 わずかに浮石含む



図版9 土坑(8)

VD-5土坑 (図版9, 写真図版9)

調査区VD-e区の東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.62×1.36m、底部径1.70×1.44m、検出面からの深さ0.36mである。平面形は開口部、底部とも楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈している。壁は北壁側で若干凹凸が見られ、底部はほぼ平坦で若干固く締まっている。埋土は色調等から5層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土である。埋土の状態から自然堆積層や壁の崩落土と考えられる。出土遺物はない。

VE-1土坑 (図版9, 写真図版9)

調査区VE-e区の東側緩斜面部に位置する。規模は開口部径1.50×1.24m、底部径0.76×0.90m、検出面からの深さ0.34mである。平面形は開口部が楕円形状を呈し、底部は不整な円形を呈している。断面形は浅皿状を呈している。壁は固い面はなく緩く外傾し凹凸があり、底部はほぼ平坦で固い面はない。埋土は色調等から3層に細分され、全体的に浮石を含むシルト質土である。埋土の状態から自然堆積層や、壁の崩落土と考えられる。出土遺物はない。

(2) 陥し穴

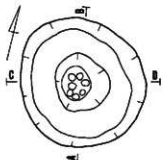
本遺跡で検出された陥し穴は合計27基である。内訳は平面形が円形のもの3基、細長い溝状のもの24基である。陥し穴の検出面は尾根頂部で基本土層の3層上面、斜面部で基本土層の2層から層上面にかけてである。これら陥し穴の埋土の多くは自然堆積層が主であり、投げ込みによると思われる土層の堆積が見られるものはVC-2陥し穴に見られる褐色土や暗褐色土の土層が投げ込み層と考えられる。

A) 円形のタイプのものであり、底部中央に杭痕が見られるもので、調査区北側斜面部に3基検出された。

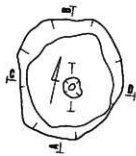
IID-1陥し穴 (図版10, 写真図版10)

調査区IID-a区の北側斜面に位置する。規模は開口部径1.36×1.34m、底部径1.12×1.06m、検出面からの深さは山側で0.64mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形は壁が外傾するピーカー状を呈している。壁、底部とも柔らかく、底部中央には直径0.56m、深さ0.50mの穴があり、さらにその穴の底部には直径0.08mの円形状の浅い窪みが穴の壁に沿うように7カ所見られた。埋土は色調等から7層に細分され、シルト質土の黒褐色土や暗褐色土である。1～4、6、7層が自然堆積層で、5層が杭を埋めた際の埋め戻し土と考えられる。出土遺物はない。

E-3
+ N-58



E-2
+ N-36



ID-1 陥し穴

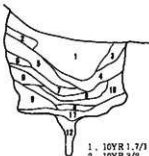
A L=194.100m B C L=194.100m D



1. 10YR 1.7/1 黒色 全体に細粒の浮石多く含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 全体に細粒の浮石多く含む
3. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色・褐色ブロック含む
4. 10YR 3/1 黒褐色 少量浮石含む、にがい黄褐色小ブロック含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 少量浮石含む、にがい黄褐色ブロック多く含む
6. 10YR 3/4 暗褐色 浮石含む、黒褐色土小ブロック多く含む
7. 10YR 3/3 暗褐色 浮石含む

III D-3 陥し穴

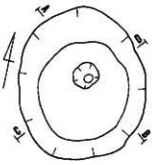
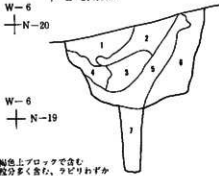
A L=199.400m B C L=199.100m D



1. 10YR 1.7/1 黒色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロック状に含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 浮石少量含む、泥岩の砕片若干含む
3. 10YR 2/3 黒褐色 浮石少量含む
4. 10YR 3/2 黒褐色 浮石・泥岩の砕片等若干含む
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 浮石少量含む、泥岩の砕片全体に含む
6. 10YR 4/6 褐色 泥岩の砕片多く含む
7. 10YR 2/2 黒褐色 暗褐色土小ブロックで含む
8. 10YR 3/4 暗褐色 泥岩の砕片若干含む、炭化物粒少量含む
9. 10YR 5/4 にがい黄褐色 多量の泥岩を含む崩壊土層
10. 10YR 2/3 黒褐色 壁際に多く泥岩の砕石含む
11. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量含む
12. 10YR 3/2-3/3 黒褐色-暗褐色 浮石含む、褐色土粒状に含む

NC-14 陥し穴

A L=204.300m B C L=204.300m D



W-6
+ N-19

1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物粒分多く含む、ラビロワヅカに凝結する
3. 10YR 3/2 黒褐色 浮石・炭化物粒含む、泥岩の砕片含む、暗褐色土含む
4. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む、泥岩の砕片含む
5. 10YR 4/4 褐色 泥岩の砕片含む、浮石若干含む
6. 10YR 5/4 にがい黄褐色 泥岩を多く含む壁際の崩壊
7. 10YR 4/3 にがい黄褐色 浮石含まない、泥岩の砕石を若干含む



図版10 陥し穴状遺構(1)

ⅢD-3 陥し穴 (図版10, 写真図版10)

調査区ⅢD-d 区の北側斜面に位置する。規模は開口部径1.26×1.06m、底部径0.94×0.86m、検出面からの深さは中央部で0.80mである。平面形は開口部が南北にやや長い楕円形状、底部が不整な円形を呈し、断面形はピーカー状を呈している。壁、底部とも柔らかく、底部中央に直径0.20m、深さ0.40mの穴があり先端部は細くなっている。埋土は色調等から12層に細分され、シルト質土の黒褐色土や暗褐色土、黄褐色土等で自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

ⅣC-14 陥し穴 (図版10・18-41~43, 写真図版10・17-41~43)

調査区ⅣC-i 区の西側斜面に位置する。規模は開口部径1.60×1.52m、底部径1.00×1.00m、検出面からの深さは中央部で0.70mである。平面形は開口部が南北にやや長い楕円形状、底部が円形を呈し、断面形は壁が外傾するピーカー状を呈している。壁、底部とも柔らかく、底部中央付近に直径0.25m、深さ0.60mの穴があり先端部は若干細くなっている。埋土は色調等から7層に細分され、シルト質土の黒褐色土、黄褐色土等で自然堆積と考えられる。出土遺物は2層中から土器片やフレークが数点出土している。41~43は何れも胎土中に繊維を含む土器片で縄文原体は0段多糸LR、RLによって羽状縄文を横位に施文している。第2群土器群に属する。

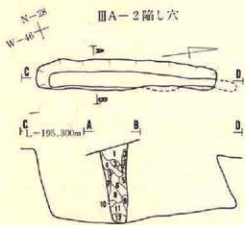
B) 幅が狭く細長い溝状のものであり、枕痕が見られないもので調査区のほぼ全域に対をなして検出され、中には24基が並ぶように検出されているものがある。

ⅢA-1 陥し穴 (図版11, 写真図版11)

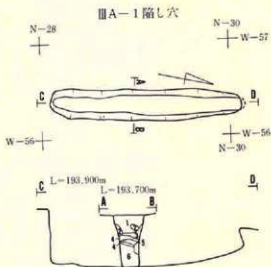
調査区ⅢA-j, k, n, o 区の西側斜面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.90m、短径0.30m、底部で長径2.00m、短径0.14m、検出面からの深さ0.80mである。断面形は長軸で、北側壁面がオーバーハングし、南側は外傾している。横断面形はU字状である。底部は北側で細く、ほぼ平坦である。埋土は浮石を含む黒色土、黒褐色土、暗褐色土等であり、黒色土や黒褐色土は上位から中位にかけて見られ、下位や壁沿いには暗褐色土が見られる。出土遺物はない。

ⅢA-2 陥し穴 (図版11, 写真図版11)

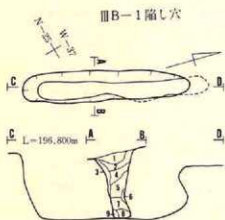
調査区ⅢA-b, c 区の西側斜面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.90m、短径0.30m、底部で長径2.00m、短径0.14m、検出面からの深さ0.80mであ



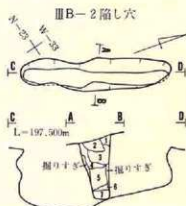
1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 5/6 黄褐色 浮石含む
3. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、褐色土ブロックで含む
4. 7.5YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 全体に細粒の浮石多く含む、褐色土粒状に含む
6. 10YR 3/2 黒褐色 全体に細粒の浮石多く含む
7. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む
8. 10YR 3/1 黒褐色 浮石全体に含む
9. 10YR 3/3 暗褐色 若干浮石含む
10. 10YR 5/6 黄褐色 若干浮石含む
11. 10YR 3/2 暗褐色 全体に細粒の浮石含む
12. 10YR 3/4 暗褐色 全体に細粒の浮石含む、褐色土ブロック多く含む



1. 10YR 2/3 黒褐色 全体に細粒浮石多く含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 全体に細粒浮石多く含む
3. 10YR 4/6 褐色 浮石含む、中央に暗褐色土ブロックで覆はる
4. 10YR 2/2 黒褐色 浮石
5. 10YR 3/2 暗褐色 浮石
6. 10YR 3/3 暗褐色 浮石・褐色土大ブロックで含む、境界に多い



1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石多く含む、炭化物若干多く含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
3. 10YR 3/4 暗褐色 浮石少量含む
4. 7.5YR 2/2 黒褐色 浮石若干含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 浮石全体に含む、暗褐色土・褐色土粒状に含む
6. 10YR 5/6 黄褐色 浮石少量含む、暗褐色土ブロックで含む
7. 7.5YR 暗褐色 浮石少量含む
8. 7.5YR 3/2 暗褐色 浮石少量含む
9. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量含む、褐色土ブロックで含む



1. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石含む
3. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む
4. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロックで含む、褐色土ブロック境界に堆積
6. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む
7. 10YR 3/1 暗褐色 全体に浮石含む、褐色土ブロックで含む

0 1m

図版11 陥し穴状遺構(2)

る。断面形は長軸で、北側壁面がオーバーハングし、南側は外傾している。横断面形はU字状である。底部は北側で細く、ほぼ平坦である。埋土は浮石を含む黒色土、黒褐色土、暗褐色土であり、黒色土や黒褐色土は上位から中位にかけて見られ、下位や壁沿いには暗褐色土が見られる。出土遺物はない。

ⅢB-1 陥し穴 (図版11, 写真図版11)

調査区ⅢB-c、d区の西側斜面に位置する。長軸方向はほぼ北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.76m、短径0.34m、底部で長径1.86m、短径0.16m、検出面からの深さ0.66mである。断面形は長軸方向が南西側で僅かに外傾するが、北東側はオーバーハングしている。横断面形はU字状である。底部はほぼ平坦である。埋土は黒褐色土、褐色土、暗褐色土で何れも浮石を含んでいる。黒褐色土は層上部と下部に見られ他は暗褐色土、黄褐色土である。出土遺物はない。

ⅢB-2 陥し穴 (図版11, 写真図版11)

調査区ⅢB-h区の西側斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.58m、短径0.36m、底部で長径1.56m、短径0.10~0.20m、検出面からの深さ0.62mである。断面形は長軸方向が若干オーバーハング状で、横断面形はU字状である。底部は南西側が深く北東側で浅くなっている。埋土は黒色土と黒褐色土で何れも浮石を含む土層で層全体に見られる。出土遺物はない。

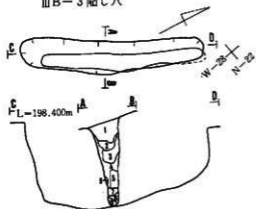
ⅢB-3 陥し穴 (図版12, 写真図版11)

調査区ⅢB-1区の西側斜面に位置する。長軸方向はほぼ北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.94m、短径0.36m、底部で長径1.74m、短径0.16m、検出面からの深さ0.88mである。断面形は長軸方向が両端とも外傾し、横断面形はU字状である。底部は湾曲し北東側が南西側に比べて浅くなっている。埋土は黒褐色土が主体で浮石を含んでいる。層の下位には浮石を含む黄褐色土層が僅かに見られる。出土遺物はない。

ⅣB-1 陥し穴 (図版12, 写真図版11)

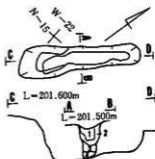
調査区ⅣB-m、n区の西側斜面の傾斜変換部分に位置する。長軸方向はほぼ北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.14m、短径0.24m、底部で長径0.90m、短径0.14m、検出面からの深さ0.30mである。断面形は長軸方向が両端とも外傾し、横断面形はU字状である。底部は北東側が浅く南西側が若干深くなっている。埋土は層の上部と下部が浮石を含む黒褐色

ⅢB-3 陥し穴



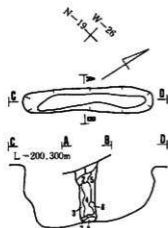
1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石多く含む、暗褐色土粒状に含む
2. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む
3. 7.5YR 2/2 黒褐色 全体に少量浮石含む
4. 10YR 3/2 黒褐色 全体に少量浮石含む、壁際に暗褐色または褐色土ブロック多く含む
5. 10YR 3/1 黒褐色 浮石少量含む、暗褐色土粒状に少量含む
6. 10YR 4/6 褐色 浮石少量含む、黒褐色土ブロックで含む
7. 10YR 2/1 黒色 浮石少量含む
8. 10YR 5/8 黄褐色 浮石少量含む、黒褐色土ウミナ状に含む
9. 10YR 2/2 黒褐色 浮石少量含む

ⅣB-1 陥し穴



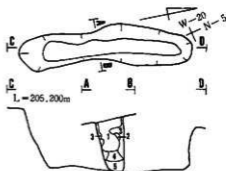
1. 10YR 3/1 黒褐色 全体に浮石含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、褐色土粒状に含む
3. 10YR 5/4 に近い黄褐色 壁からの崩落土、泥岩の碎片多く含む
4. 10YR 3/2 黒褐色 褐色土大ブロック、小ブロックで若干含む

ⅣB-2 陥し穴



1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土粒状に含む
2. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石含む
3. 10YR 4/4 褐色 はほとんど浮石を含まない
4. 10YR 3/1 黒褐色 全体に浮石含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、壁際に多く褐色土ブロックで含む
6. 10YR 4/6 褐色 若干浮石含む、黄褐色土ブロックで多く含む
7. 10YR 1/3 黒褐色 全体に浮石含む、褐色土粒状で含む
8. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、褐色土粒状で含む

ⅣB-3 陥し穴



1. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、壁際に暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 4/6 褐色 全体に浮石含む
3. 10YR 4/4 褐色 全体に浮石含む
4. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
5. 10YR 4/4 褐色 浮石を含まない



図版12 陥し穴状遺構(3)

土で中程にはよい黄褐色土が入っている。出土遺物はない。

IVB-2 陥し穴 (図版12, 写真図版12)

調査区IVB-i、m区の西側斜面に位置する。長軸方向はほぼ北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.38m、短径0.22m、底部で長径1.08m、短径0.10m、検出面からの深さ0.58mである。断面形は長軸方向で南西側が階段状に、北東側がオーバーハング状、横断面形はU字状である。底部は北東側が浅く南西側が深くなっている。埋土は浮石を混じる黒色土、黒褐色土、褐色土で、褐色土は壁際に見られ、層の大半は黒褐色土である。出土遺物はない。

IVB-3 陥し穴 (図版12, 写真図版12)

調査区IVB-p、IVC-d区の西側斜面に位置する。長軸方向はほぼ南北である。規模は開口部で長径1.80m、短径0.40m、底部で長径1.40m、短径0.16m、検出面からの深さ0.54mである。断面形は長軸方向で両端が外傾し、横断面形はU字状である。底部はほぼ平坦である。埋土は浮石を混じる黒褐色土が層上部に見られ、他は浮石が混じる褐色土が主体である。出土遺物はない。

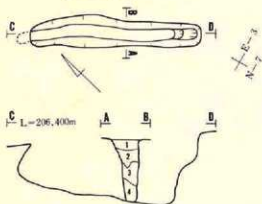
IVC-1 陥し穴 (図版13, 写真図版12)

調査区IVC-1区の尾根頂部緩斜面に位置する。長軸方向は北西から南東方向である。規模は開口部で長径1.80m、短径0.26m、底部で長径1.80m、短径0.12m、検出面からの深さ0.66mである。断面形は長軸方向で北西側がオーバーハングし、南東側が階段状である。横断面形はU字状である。底部は北西側が浅く南東側が深くなっている。埋土は浮石を混じる黒褐色土、暗褐色土、褐色土からなり、層上部に黒褐色土、下部に褐色土が入っている。出土遺物はない。

IVC-2 陥し穴 (図版13・18-38~40, 写真図版12・17-38~40)

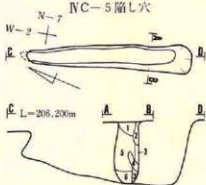
調査区IVC-k区の尾根頂部緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径2.80m、短径0.58m、底部で長径2.94m、短径0.18m、検出面からの深さ0.90mである。断面形は長軸方向で両端がオーバーハングし、横断面形はU字状である。底部は下位の礫層まで掘り込まれているが平坦である。埋土は黒褐色土が上部に見られるが、他は暗褐色土、褐色土で占められている。出土遺物は埋土1層の黒褐色土層から土器片38~40の3片が出土している。何れも第2群土器に属する破片で、胎土に繊維を含む深鉢形土器破片であり、表面には原体2種(LR、RL)で羽状縄文を構成している。

NC-1 陥し穴



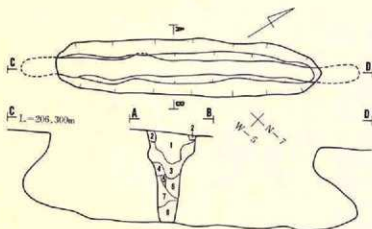
1. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石、隙間に褐色土ブロック多く含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む
4. 7.5YR 4/4 褐色 浮石をほとんど含まない、壁の崩落土

NC-5 陥し穴



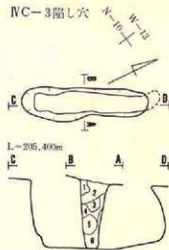
1. 10YR 3/2 黒褐色 浮石含む、暗褐色土ブロックで含む
2. 10YR 4/4 褐色 浮石含まない
3. 10YR 4/6 褐色 浮石含まない
4. 10YR 4/4 褐色 およそに浮石含む
5. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石含む
6. 10YR 3/4 暗褐色 浮石少量含む

NC-2 陥し穴



1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石多く含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量含む
3. 10YR 3/4 暗褐色 上位に浮石含む
4. 10YR 4/4 褐色 ほとんど浮石含まない、壁の崩落土
5. 10YR 4/6 褐色 ほとんど浮石含まない、壁の崩落土
6. 7.5YR 4/6 褐色 およそに浮石含む、壁の崩落土
7. 10YR 5/4 に近い黄褐色 浮石含まない、壁の崩落土
8. 10YR 3/3 暗褐色 全体に小礫含む、浮石含まない

NC-3 陥し穴



1. 10YR 4/4 褐色 全体に浮石含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、上位に黒褐色ブロック含む
3. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物少量含む
4. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
5. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む
6. 7.5YR 3/4 褐色 少量浮石含む



図版13 陥し穴状遺構(4)

IVC-3 陥し穴 (図版13, 写真図版12)

調査区IVC-g区の尾根頂部緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.34m、短径0.28m、底部で長径1.28m、短径0.20m、検出面からの深さ0.70mである。断面形は長軸方向で北東側がオーバーハングし南西側で外傾している。横断面形はU字状である。底部はほぼ平坦である。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、褐色土が見られ、上部に黒褐色土、下部に暗褐色土と褐色土が見られる。出土遺物はない。

IVC-5 陥し穴 (図版13, 写真図版12)

調査区IVC-o区の尾根頂部平坦面に位置し、北側でIVC-3土坑に一部切られている。長軸方向は北西から南東方向である。規模は開口部で長径1.78m、短径0.26m、底部で長径1.62m、短径0.16m、検出面からの深さ0.64mである。断面形は長軸方向で北西側がオーバーハングし南西側で外傾している。横断面形はU字状である。底部はほぼ平坦であるが北西側が浅く南東側が深くなっている。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、褐色土が見られ、上部に黒褐色土、中頃に褐色土、下部に暗褐色土が見られる。出土遺物はない。

IVD-1 陥し穴 (図版14, 写真図版13)

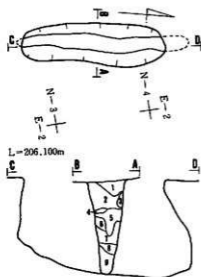
調査区IVD-d区の尾根頂部平坦面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.52m、短径0.40m、底部で長径1.82m、短径0.18m、検出面からの深さ0.86mである。断面形は長軸方向で両端がオーバーハングし、横断面形はU字状である。底部は両端が浅く中央部が湾曲し南端が北端に比べてより浅くなっている。埋土は浮石が混じる黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土、褐色土が見られ、上部に黒色土、黒褐色土、中頃から底部にかけて褐色土、暗褐色土が互層をなし、最下部に黄褐色土が見られる。出土遺物はない。

IVD-2 陥し穴 (図版14, 写真図版13)

調査区IVD-g区の尾根頂部平坦面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.54m、短径0.34m、底部で長径1.56m、短径0.12m、検出面からの深さ0.80mである。断面形は長軸方向で北端がオーバーハングし、南端がほぼ垂直に立ち上がっている。横断面形はU字状である。底部は中央部が湾曲し北端が浅くなっている。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土、褐色土が見られ、上部から中頃にかけて黒褐色土、中頃から底部、壁際には褐色土、暗褐色土、黄褐色土が見られる。出土遺物はない。

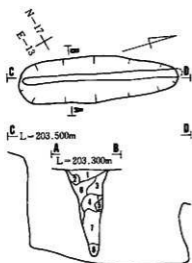
IVD-3 陥し穴 (図版14, 写真図版13)

ND-1 陥し穴



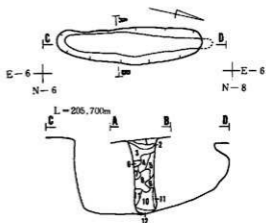
1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石多く含む
3. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む
4. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む
5. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石多く含む、褐色土小ブロックで含む
6. 7.5YR 4/4 褐色 全体に浮石含む
7. 10YR 4/4 褐色 ほとんど浮石含まない
8. 10YR 4/3 暗褐色 ほとんど浮石含まない
9. 10YR 5/8 黄褐色 浮石含まない

ND-3 陥し穴



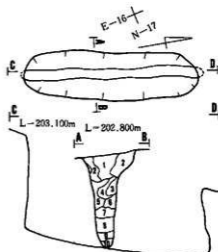
1. 10YR 2/2 黒褐色 浮石全体に炭化物少量含む、暗褐色土ブロックで少量含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 浮石全体を含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 浮石全体を含む、褐色土ブロックで含む
4. 10YR 2/3 黒褐色 浮石少量含む、褐色土ブロックで含む
5. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む、炭の破落土
6. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む、炭の破落土
7. 10YR 2/2 黒褐色 浮石含む、褐色土小塊含む
8. 7.5YR 4/4 褐色 少量浮石含む、全体にやや汚れている

ND-2 陥し穴

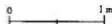


1. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む、炭化物少量含む
2. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
3. 10YR 3/2 暗褐色 全体に浮石含む、暗褐色土小ブロックで含む
4. 10YR 2/2 黒褐色 少量浮石含む
5. 10YR 3/2 暗褐色 少量浮石含む、褐色土小ブロックで含む
6. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む
7. 10YR 3/2 暗褐色 少量浮石含む、褐色土小ブロックで含む、褐色土小ブロックで含む
8. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む
9. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む、褐色土ブロックで含む
10. 10YR 3/3 暗褐色 浮石含む、炭屑の砂石を含む
11. 10YR 4/3 暗褐色 ほとんど浮石含まない、褐色土小ブロックで含む

ND-4 陥し穴



1. 10YR 2/1 黒色 全体に多く浮石含む
2. 10YR 2/2 黒褐色 全体に多く浮石含む
3. 10YR 3/4 暗褐色 浮石少量含む、褐色土小ブロック含む
4. 10YR 2/2 黒褐色 浮石少量含む
5. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量、褐色土小ブロックで含む
6. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石少量含む
7. 10YR 3/2 暗褐色 全体に浮石少量含む
8. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量含む
9. 10YR 2/2 黒褐色 浮石少量含む
10. 10YR 4/4 褐色 ほとんど浮石含まない、暗褐色土含む



図版14 陥し穴状遺構(5)

調査区IVD-1区北側斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径2.64m、短径0.26m、底部で長径1.70m、短径0.06m、検出面からの深さ0.90mである。断面形は長軸方向で北端がオーバーハングし、南端がほぼ垂直に立ち上がっている。横断面形はV字状である。底部は中央部がやや湾曲している。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土からなり、黒褐色土、暗褐色土が互層に堆積し最下部に褐色土が見られる。出土遺物はない。

IVD-4 陥し穴 (図版14, 写真図版13)

調査区IVD-m区北側斜面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.80m、短径0.50m、底部で長径1.92m、短径0.10m、検出面からの深さ0.98mである。断面形は長軸方向で北端がオーバーハングし、南端が垂直に立ち上がっている。横断面形はV字状である。底部は斜面に沿った状態で傾斜している。埋土は浮石が混じる黒色土、黒褐色土、暗褐色土が互層に堆積し最下部に褐色土が見られる。出土遺物はない。

IVD-5 陥し穴 (図版15, 写真図版13)

調査区IVD-k区東側斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.80m、短径0.46m、底部で長径1.62m、短径0.20m、検出面からの深さ0.80mである。断面形は長軸方向で北東端でオーバーハングし、南西端は外傾している。横断面形はU字状である。底部は緩やかに湾曲し、北東側が浅くなっている。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土で、最下部に黒褐色土が見られる。出土遺物はない。

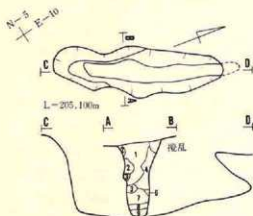
IVD-6 陥し穴 (図版15, 写真図版13)

調査区IVD-1区東側緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.48m、短径0.43~0.54m、底部で長径1.50m、短径0.12m、検出面からの深さ0.68mである。断面形は長軸方向で北東端でオーバーハングし、南西端は外傾している。横断面形はV字状である。底部は緩やかに湾曲している。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土は上部と最下部に見られ、暗褐色土は中頃と壁沿いに見られる。出土遺物はない。

IVD-7 陥し穴 (図版15, 写真図版14)

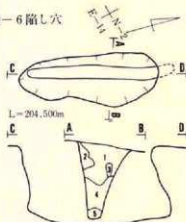
調査区IVD-p区東側緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.74m、短径0.34m、底部で長径1.42m、短径0.18m、検出面からの深さ0.64mである。断面形は長軸方向で北東端でオーバーハングし、南西端は外傾している。横断面形はU

ND-5 陥し穴



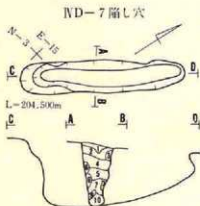
1. 10YR 1.7/1 黒色 全体に浮石多く含む。暗褐色土ブロックで一部含む
2. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
3. 10YR 3/2 黒褐色 ほぼ完全に浮石含む。褐色土ブロックで含む
4. 10YR 2/2 暗褐色 全体に浮石含む。褐色土ブロックで含む。炭化物粒少量含む
5. 10YR 2/3 暗褐色 少量浮石含む
6. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む。黒褐色土ブロックで含む
7. 10YR 2/2 暗褐色 浮石を幾分全体に含む。炭化物粒少量含む
8. 10YR 3/4 暗褐色 少量浮石含む
9. 10YR 3/2 暗褐色 少量浮石含む

ND-6 陥し穴

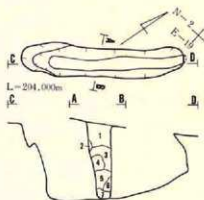


1. 10YR 2/2 暗褐色 全体に浮石多く含む。下に暗褐色土ブロックが多く含む。炭化物粒少量含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 全体に浮石多く含む
3. 10YR 4/6 褐色 浮石少量含む
4. 10YR 4/4 褐色 浮石少量含む。壁からの粘着土
5. 10YR 2/3 暗褐色 浮石少量含む

ND-8 陥し穴



1. 10YR 2/3 暗褐色 全体に浮石多く含む。褐色土ブロックで含む。炭化物粒少量含む
2. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石多く含む
3. 10YR 3/3 暗褐色 浮石少量含む
4. 10YR 3/2 暗褐色 全体に浮石多く含む
5. 10YR 2/2 暗褐色 全体に浮石含む。褐色土ブロックで含む
6. 10YR 4/6 褐色 浮石含む
7. 10YR 3/2 暗褐色 浮石含む。褐色土ブロックで含む
8. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む
9. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む
10. 10YR 2/2 暗褐色 全体に浮石含む。炭化物粒少量含む



1. 10YR 2/2 暗褐色 全体に浮石含む。暗褐色土ブロックで多く含む。炭化物粒少量含む
2. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む
3. 10YR 2/4 暗褐色 全体に浮石含む。褐色土ブロックで含む
4. 10YR 2/3 暗褐色 浮石含む
5. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
6. 10YR 4/6 褐色 浮石ほとんど含まない
7. 7.5YR 3/4 暗褐色 浮石ほとんど含まない



図版15 陥し穴状遺構(6)

字状である。底部は南西から北東に向かって浅くなっている。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、褐色土で、暗褐色土が最上部に、黒褐色土が上部から下位に、壁際に暗褐色土、褐色土が見られる。出土遺物はない。

IV D-8 陥し穴 (図版15, 写真図版14)

調査区IV D-P区の東側緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.70m、短径0.30m、底部で長径1.42m、短径0.10m、検出面からの深さ0.80mである。断面形は長軸方向で北東端でオーバーハングし、南西端は外傾している。横断面形はU字状である。底部は緩く湾曲している。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、褐色土で、黒褐色土が上部と中頃に見られ、他の多くは暗褐色土で、壁際に褐色土が見られる。出土遺物はない。

IV G-1 陥し穴 (図版16, 写真図版14)

調査区IV G-c区の北東側緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南東方向である。規模は開口部で長径1.70m、短径0.28m、底部で長径1.82m、短径0.16m、検出面からの深さ0.78mである。断面形は長軸方向で両端がオーバーハングし、横断面形はU字状である。底部は斜面に沿った状態で傾斜している。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土、褐色土等で、黒褐色土が上部から中頃に見られ、さらに下位には褐色土、暗褐色土、黒褐色土が互層に見られ、最下部にはにぶい黄褐色土が見られる。出土遺物はない。

III F-1 陥し穴 (図版16, 写真図版14)

調査区III F-1区の北東側緩斜面に位置する。長軸方向は北東から南西方向である。規模は開口部で長径1.66m、短径0.30m、底部で長径1.68m、短径0.20m、検出面からの深さ0.68mである。断面形は長軸方向で両端がオーバーハングし、横断面形はU字状である。底部は斜面に沿った状態で傾斜している。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗褐色土で、黒褐色土は全体に見られ、暗褐色土は壁沿いに見られる。出土遺物はない。

V D-1 陥し穴 (図版16・18-36, 写真図版14・17-36, 37)

調査区V D-e、f区の東側緩斜面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.64m、短径0.30~0.46m、底部で長径1.84m、短径0.10~0.18m、検出面からの深さ0.84mである。断面形は長軸方向で北端がオーバーハングし、南端は階段状となり、横断面形はV字状である。底部は湾曲し北側で浅くなっている。埋土は浮石が混じる黒褐色土、暗

褐色土、褐色土で、黒褐色土は全体に見られ、暗褐色土、褐色土は壁沿いに僅かに見られる。

出土遺物は1層中から土器片が2片出土している。36、37とも胎土中に纖維を含んでおり、第2群土器に属する土器片である。36は口縁部破片で口唇部は平坦である。36、37とも原体はLR、RLの2種で羽状縄文を施文している。

VD-2 陥し穴 (図版16, 写真図版14)

調査区VD-i、j区の東側緩斜面に位置する。長軸方向はほぼ南北方向である。規模は開口部で長径1.72m、短径0.30m、底部で長径1.76m、短径0.14m、検出面からの深さ0.76mである。断面形は長軸方向で両端がオーバーハンクス、横断面形はU字状である。底部は湾曲し両端が高くなっている。埋土は浮石が混じる黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土で黒褐色土は全体に見られ、暗褐色土、褐色土は壁沿いに僅かに見られる。出土遺物はない。

遺物包含地(図版20~26 78~93、96~109、112, 写真図版18~20-78~93、96~109、112)

調査区の西側にある小沢沿いに平行する形で東西10m、南北17mの範囲に遺物が包含されており、さらに調査区域外の北側に延びていると思われるものである。この地区の上部には十和田a降下火山灰があり、その下位に縄文時代晩期の深鉢ほぼ1個体分112が検出され、さらに下位には縄文時代後期の土器78~93、96~109の29点が検出された。

3) 遺構外出土遺物

本遺跡の調査で遺物の大半が遺構外からの出土である。遺物は土器、石器、土製品、石製品があるが出土量は少ない。

(1) 土 器

土器は縄文時代早期から晩期までの各時期、弥生時代の土器がある。これらは1層から4層までの間に出土したものであるが、明確に層位的関係を把握できたものはない。なお、縄文時代後期の遺物の大半は先の遺物包含地からのものである。以下、各群毎に分類して記述する。

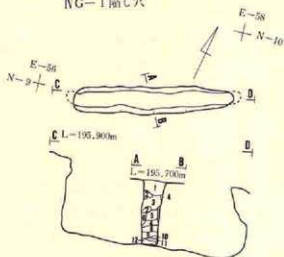
第1群土器 (図版18-44~47, 写真図版17-44~47)

縄文時代早期に属すると思われる土器を本群とした。施文方法から2類に細分される。

1類: 貝殻文によって文様を施文するもの (図版18-44)

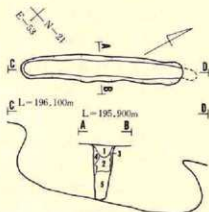
尖底深鉢形土器の胴部小破片と思われる1点の出土である。文様は縦位の貝殻腹線文を表面に施文しているものであり、裏面はミガキが丁寧なされている。胎土は粘土が主で、焼成も良い。色調は褐色、器厚は7mm前後である。

NG-1 陥し穴



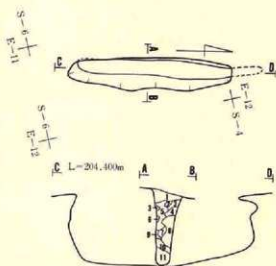
1. 10YR 3/1 黒褐色 全体に浮石多く含む、暗褐色土小ブロックで少量含む
2. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む、黒褐色土小ブロック少量含む
3. 10YR 2/3 黒褐色 浮石含む、暗褐色土小ブロックで多く含む
4. 10YR 4/6 褐色 浮石含む
5. 10YR 2/3 黒褐色 全体に浮石含む
6. 10YR 4/6 褐色 浮石ほとんど含まない
7. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む、褐色土小ブロックで多く含む
8. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石含む、暗褐色土粒状で含む
9. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む
10. 10YR 5/4 に赤い黄褐色、浮石含む
11. 10YR 2/3 黒褐色、浮石含む
12. 10YR 5/4 に赤い黄褐色、ほとんど浮石含まない

III F-1 陥し穴



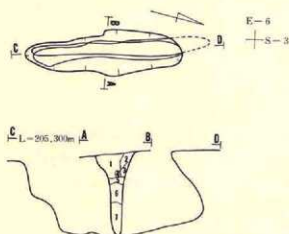
1. 10YR 3/2 黒褐色 全体に浮石多く含む、暗褐色土小ブロックで多く含む
2. 10YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む
3. 10YR 2/4 暗褐色 浮石少量含む、黒褐色土粒状で少量含む
4. 10YR 2/3 暗褐色 浮石含む
5. 10YR 3/1 黒褐色 浮石少量含む、暗褐色土小ブロックで含む

VD-2 陥し穴



1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石含む、褐色土ブロックで含む
2. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む
3. 10YR 2/2 黒褐色 少量浮石含む
4. 10YR 2/3 黒褐色 少量浮石含む
5. 2.5YR 2/2 黒褐色 全体に浮石含む
6. 10YR 4/6 褐色 少量浮石含む、暗褐色土ブロックを含む
7. 10YR 2/2 黒褐色 少量浮石含む、褐色土ブロックで含む
8. 10YR 3/3 暗褐色 少量浮石含む、褐色土ブロックで含む
9. 10YR 3/4 暗褐色 少量浮石含む
10. 10YR 2/3 黒褐色 浮石含む
11. 10YR 4/4 褐色 浮石ほとんど含まない

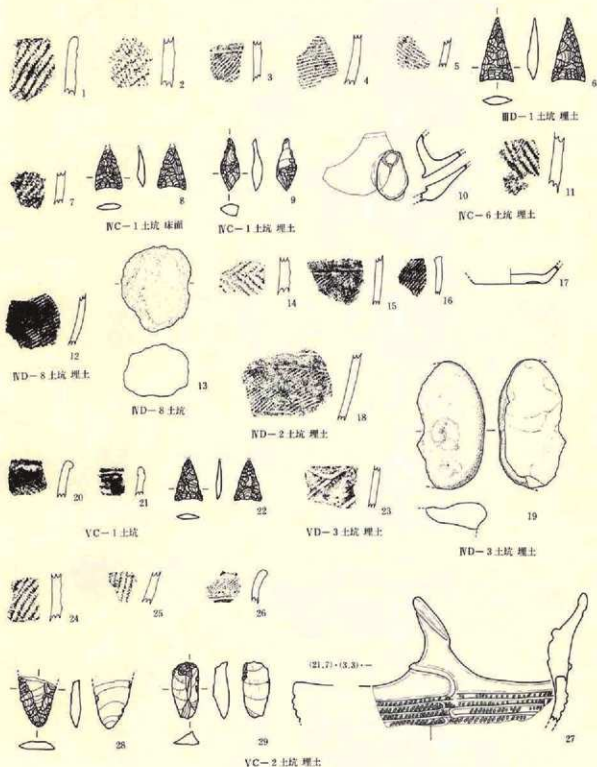
VD-1 陥し穴



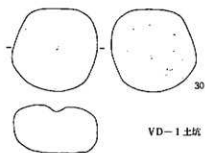
1. 10YR 2/1 黒色 全体に浮石含む、暗褐色土小ブロック少量含む
2. 10YR 3/4 暗褐色 全体に浮石含む
3. 7.5YR 4/4 栗褐色 全体に浮石含む
4. 10YR 4/4 褐色 少量浮石含む
5. 7.5YR 2/3 栗褐色 全体に浮石含む
6. 10YR 2/3 栗褐色 全体に浮石含む
7. 10YR 3/2 栗褐色 全体に浮石含む、暗褐色土小ブロックで含む



図版16 陥し穴状遺構(7)



图版17 土坑出土遗物(1)



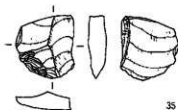
VD-1 土坑



ND-6 土坑 埋土



34



35

ND-7 土坑 埋土



36



37



38



39

VD-1 隔L穴 埋土

NC-2 隔L穴



41



42



43



40

NC-14 隔L穴

NC-2 隔L穴



44



45



46



46



47



48



49



50

图版18 土坑出土遗物(2)·遺構外出土土器(1)

2類：表裏に縄文を施文しているもの（図版18-45~47）

すべて深鉢形土器の胴部破片と思われるが全体的な器形は小破片のため判らない。45は原体RLの同一縄文を表裏に施文し、表面には羽状縄文を回転方向を変えて施文している。胎土は繊維を多量に含んでいるが堅い。色調は表面が褐色、裏面が暗褐色である。器厚は7mm位である。46は原体Rの撚り糸文を表面に施文しているもので、裏面にも同一原体の撚り糸文を施文していると思われる。47は裏面に撚り糸文の施文は見られないが46の同一個体と思われるものである。胎土は繊維を多量に含み脆い。色調は表面が黄褐色、裏面が黒褐色である。器厚は7~12mm位である。

第II群土器（図版18-48~50・19-51~70，写真図版17-48~60・18-61~70）

縄文時代前期に属すると思われる土器を本群とした。

器形は62・64・67の破片を見ると丸底か尖底の深鉢形土器と思われるが何れも小破片のため全体形は不明である。口縁部は幾分外傾するものであり、口唇部の断面形は口唇部上部が平坦になるもの（48~51）と丸みを帯びるもの（52・54~60）がある。口唇部上面が平坦となるものは土器表面に縄文後に整形しているようである。縄文施文方法には原体2種（RL、LR）で横位の羽状縄文と原体1種（RL）の斜縄文があるようであるが原体1種のものについては羽状がどうか良く判らない。また61は0段多条である。その他には小破片のため良く判らないが筋条体の縄文を施文しているもの（68~70）がある。胎土は何れも繊維を含んでおり、器裏面を丁寧にミガキを施しているもの（52・53・56・58・62・65・66）がある。色調は暗褐色から褐色である。器厚は薄いもので4mm、厚いもので7mm位である。

第III群土器（図版19-72~76，写真図版18-72~76）

縄文時代中期末から後期初頭に属すると思われる土器を本群とした。

器形は何れも深鉢形土器と思われるが小破片のため全体形は不明である。文様は72・73が棒状の工具によって浅い沈線を引き沈線間の中を磨り消している。72はU字状に、73は沈線に沿って竹管文を施文している。74~76は網目状の文様を施文しているもので、74は口縁部片で口唇部に突起がある。74・75は沈線によって網目状の文様を構成し、74では縄文（RL）施文後に沈文している。76は縄文原体Rを棒に巻き付けて網目状撚り糸文を施文している。胎土は72が脆く、73~76は比較的良い。色調は何れも暗褐色である。器厚は4mm位である。

第IV群土器（図版19-71、77・20~26-78~109，写真図版18~20-71、77~109）

縄文時代後期に属すると思われる土器を本群とした。

1類：後期前葉に属すると思われる土器類である（図版19-71, 77, 写真図版18-71, 77）

出土地区はIV C区の遺構検出面である出土量は多くない。器形は何れも深鉢形土器と思われるが破片のため良く判らない。71はブリッチ状の裝飾把手部分の破片で沈線が2条見られる。77は無文地に棒状工具によって沈線で曲線文を施文している。胎土は両方とも比較的堅い。色調は暗褐色である。77の器厚は8mm位である。

2類：後期中葉に属すると思われる土器類である。

出土地区は主に大グリッドのII A区に出土したものである。これら土器類は文様等から更に細分される。

a：幅の狭い平行沈線によって文様を施文しているもの（図版20-78, 写真図版18-78）

1点の出土で器形は深鉢型土器と思われるものであるが上半部がないため全体形は不明である。文様は頸部に相当する部分に平行沈線が見られ平行沈線間に原体LRの縄文を施文している。それ以外は無文である。胎土は良く、色調は暗褐色を呈している。器厚は3~5mmである。

b：沈線と刻みによって文様を施文しているもの（図版20-80, 81）

2点の出土で器形は何れも小型の鉢形土器である。文様は胴部に沈線によって施文しているもので、何れも頸部と胴下部に横位に沈線を引きその中に80は弧状に、81はX字状に斜行する沈線を引いている。80は頸部の2本の平行沈線間に棒状工具による刺突列が、81は口縁部に平行する沈線を引き、口唇部と沈線の間に80と同様の刺突列があるものである。縄文は何れにもなく無文である。81の底部には1本越え1本滞りと思われる網代痕がある。胎土は普通で、色調は暗褐色、器厚は80が3mm、81が5mmである。

c：入り組状文様で縄文が単節斜縄文のもの（図版20-79・82・83, 写真図版18-79・82・83）

3点あり、器形は何れも鉢型と思われるものである。79・82は口縁部破片で口唇部は平坦で角ばっている。83は底部破片である。文様は82が良く判らないが、79・83は何れも平行沈線間を無文としているものであり、縄文は沈線間外に沈線施文後に施文されている。縄文は82がLR、79・83がRLの単節斜縄文である。胎土、焼成は何れも良く比較的堅い。色調は何れも暗褐色である。器厚は79・82が5mm、83が7mm位である。

d：口縁部と頸部に刻みを施しているもの（図版20・21-84~86, 写真図版18・19-84~86）

3点あり、器形は何れも口縁部で外傾し頸部でくびれる深鉢型土器である。口縁部は84が平縁であり85・86が波状口縁である。口唇部の形状は84が平坦で、85・86が丸みを帯び内側に肥厚している。刻みは口縁部と頸部にあり84・85は1段、86は2段つけられている。84・85の胴部には入り組状の文様を施文している。縄文は84がRLの単節斜縄文、85がRLの0段多糸の斜縄文である。胎土、焼成とも良く内面はミガキが見られる。色調は何れも暗褐色である。器

厚は5～7mm位である。

e：頸部に刻みを施し胴部に入り組状の文様を施文するもの(図版21—87, 写真図版19—87)

1点の出土である。器形は口縁部が外傾し頸部でくびれ、胴部が僅かに膨らみ底部が頸部よりも小さい深鉢型土器である。口唇部は内側に肥厚し口唇部上に大小5個ずつの突起がある。文様は頸部以下の胴部に入り組状の文様が横位に3単位施文されている。縄文は原体2種RL、LRによって羽状縄文を施文している。胎土は普通で、色調は暗褐色である。器厚は7mm位である。

f：入り組状の文様を施文し縄文は羽状のもの(図版21, 22—88～93, 写真図版19—88～93)

6点の出土である。器形は大半が破片のため良く判らないが88が注口土器、89が筒形土器、他は頸部でくびれる深鉢型土器と思われ、93は口縁部に大小の突起が付けられ突起の直下の口縁部には貼瘤が付けられている。文様は何れも入組文が施文され、注口土器には貼瘤がある。93は口縁部と口縁部下位にそれぞれ2段の刻みが施され、他には頸部にも刻みが施文されている。縄文は88の注口土器が原体RLの縄文を回転方向を変えて羽状を作っているが他のものは原体2種RL、LRによって羽状を作り出している。胎土は何れも普通であり、色調は88が褐色、他は暗褐色である。器厚は5～7mm位である。

3類：後期後葉に属すると思われる土器類である。(図版22—94・95, 写真図版19—94・95)

出土地区はIVC区の遺構検出面で、2点の出土であるが何れも小破片のため器形や文様を正確に把握するには至らないが94は深鉢の胴部破片、95は深鉢の口縁部突起破片である。文様は94が断列沈線と2状の平行沈線によって文様を施文している。貼瘤が付けられ、縄文は原体RLの状の細いもので平行沈線間内のみ見られ、縄文施文後に沈線を引き沈線間以外を磨消しているものである。95は94と同様の文様施文方法であり、縄文自体も原体の細いRLを突起上部の部分にも施文している。胎土は堅く焼成も良い。色調は黒褐色である。器厚は94が3mmで95が5mm位である。

4類：2類に伴うと思われる粗製の鉢や深鉢型土器類を本類とした(図版23～26—96～109, 写真図版19・20—96～109)

出土した土器は2類土器に伴って出土したものであるが、107はIII E区からの出土である。何れも完形品は無く全体形を把握できるものは少ないが、96が鉢形、97が頸部でくびれる深鉢形、98以降が深鉢形土器と思われる。口唇部は多くが内面に肥厚するが、99・106は口唇部が平坦である。縄文は106・108・109以外の土器に付けられ、斜縄文(96・98・102・104・105・107)は原体RLが施文され、98・102は0段多条である。羽状縄文(97・99～101・103)は原体2種R

L、LRで横位の羽状を作り出している。97は0段多条である。縄文以外では106が歯状工具による縦位の沈線を施文するものと、無文(108・109)のものがある。胎土は何れも脆く焼成は普通である。色調は暗褐色である。器厚は5～7mm位である。

第V群土器(図版26-111・112, 写真図版20-111・112)

縄文時代晩期に属する土器群である。出土地区はIVC区とIIA区であるが出土量は少なく図示したものだけである。器形は112が口縁部が外傾し頸部でくびれ胴上部で若干膨らむ深鉢形であるが、111は小破片であるため判らない。文様は111が雲形文と思われる文様が付けられ、112は口縁部に2状の平行する沈線を引いてその間を無文としているものである。112の口唇部外周にはヘラ状の工具による刻みが付けられ、胴部には原体LRの単節斜縄文が付けられている。

第VI群土器(図版27-113～151, 写真図版21-113～151)

弥生時代に属する土器類である。出土地区としては主に尾根頂部IVC区で検出されている。何れも小破片であることから器形、文様とも全体の器形や文様を把握するに至らないが、器形は小型の鉢や壺と思われる。文様については何種類か見られることから若干細分して記述することとする。

多条平行沈線によって文様を施文するもの(113～120, 124～132)

2条ないしそれ以上の並行する沈線によって波状文(113・114)、直接的並行沈線文(115・126～128, 130～132)、並行沈線間に刺突文(116～120)、山形文(124・125・129)等の文様が見られる。113・115は口唇部に燃糸文の圧痕がある。また、131・132には一段の結節回転文が2段横方向に付けられている。並行沈線間に刺突を施文するものうち116～118は器面に対して横方向から、119は器面に対して上方から刺突されている。縄文は原体の細い燃糸文が縦位や斜位に施文され、文様施文部は磨消して無文とするものと縄文を施文しないものがある。

交互刺突によって波状浮線文を施文するもの(121～123)

何れも無文地に沈線を引き、2条の並行沈線間の隆起帯部分に上方と下方から交互に刺突しているものである。121は口縁部に2段並行に見られる。胎土は他の土器に比べて良好である。

器面に縄文と綾織り以外の文様を持たないもの(133～151)

135は縄文原体の側面圧痕文、136～138は縄巻き縄の側面圧痕文、133・134は綾織文、139・140・142～147は縦位や斜位の燃糸文と綾織文、141・148～150は縄文と綾織文が施文されている。綾織文は一段の結節回転文である。151は無節である。

これら土器の胎土は砂粒が比較的多く見られるが焼成は良く、特に交互刺突されている土器の内面は他の土器よりはミガキが丁寧なようである。

(2) 円盤状土製品 (図版26-110, 写真図版20-110)

1点の出土で、縄文時代後期と思われる深鉢形土器の胴部破片の表面から打ち欠いて円盤状にした土製品である。表面には原体LRの単節斜縄文が見られる。

(3) 石 器

石器は土器と同様に遺構外からの出土が多く、何れも粗掘り中や遺構検出作業中に出土している。石器種としては石鏃、石匕、切削器、石篋、使用痕のある剥片、磨製石斧、石錘、凹み石、磨石、叩き石、石皿、石製品である。以下各器種ごとに記述する。

石鏃 (図版28-152~155, 写真図版22-152~155)

4点の出土で、無茎凹基型1点(152)、尖基型2点(153・154)、平基型1点(155)である。何れも剥片の縁辺に調整加工を施しているものである。

石匕 (図版28-156, 写真図版22-156)

1点の出土で、縦形の石匕であるがつまみ部分は欠損している。全周縁に渡って片面からの細かい剝離調整を施して刃部を作り出しているものである。

石篋 (図版28-159, 写真図版22-159)

1点の出土である。縦長の剥片の縁辺に両面から調整加工を施しているものである。刃部面は先端部にあり片面からの調整加工である。

不定形石器 (図版28-157・158・160~163, 写真図版22-157・158・160~163)

定形的な石器を除く剥片石器類である。何れも剥片の縁辺部分に調整剝離を施しているが適当な名称を与えることが出来ないものである。157は小形の縦長剥片の側縁に両面から調整剝離を施しているもので削器の類と考えられる。158は横長剥片の側縁部から先端部分にかけて比較的丁寧な調整剝離を施しているもので、削器かもしくは先端部にも調整剝離を施していることから石錘とも考えられる。160は剥片の一部を大きく剝離し抉り部分を作成し、その部分を使用している抉入石器の類かと考えられる。161・163は剥片の縁辺に調整剝離が見られるもので石篋の欠損品かと考えられるものである。162は横長剥片の上端と下端に調整剝離を加えているもので石篋の類と考えられる。

石斧 (図版28-164・165, 写真図版22-164・165)

2点の出土である。いずれも磨製のものであり、全面がよく研磨されていると思われるが、両方とも欠損品であることからよく判らない。164は刃部部分で、165は基部部分であり、欠損後に片面を調整しようとしたと思われるものである。

石錘 (図版29-166・167, 写真図版22-166・167)

2点の出土である。扁平な自然礫の短軸両端に敲打による凹みをつけて紐掛かりとした錘で

ある。大きさに違いがあるがいずれも長楕円形状の礫を利用したものである。

凹み石 (図版29・30-168~177, 写真図版22・23-168~177)

10点の出土である。いずれも円形や楕円形の自然礫の片面か両面に凹面が見られるものである。凹面は浅いものや深いものであるがいずれも敲打による痕と思われる。175は棒状の礫の側面部分に磨面が見られ、177は全面に磨面が見られることから、磨石としても利用された可能性がある。

磨石 (図版30・31-178~186, 写真図版23・24-178~186)

9点の出土である。形態としては2種類あり、断面三角形で棒状のもの(178~182)と断面楕円で円形状のもの(181~186)である。断面三角形で棒状のものは石の縁辺部分に細長い平坦面が見られるもので、平坦面は磨きによって作り出されているようである。また、一部の例では平坦面の縁辺に打ち欠きの痕が見られることから打ち欠き後の磨きによってその面が作られているものもあるようである。平坦面にはかるい擦痕があり、長形方向に見られるものと、矩形方向に見られるものもある。182に見られる剝離痕は使用によるものか、整形によるものか判断できなかった。断面楕円形で円形状のものは、全面に使用によると思われる擦痕が認められるもので他には特別な加工は見られない。186は磨石の風化したものである。

叩き石 (図版31-187, 写真図版24-187)

1点の出土である。球形状の礫のほぼ全周に敲打面が形成されているもので一部に自然面が残されている。

石皿 (図版32-192~194, 写真図版25・26-192~194)

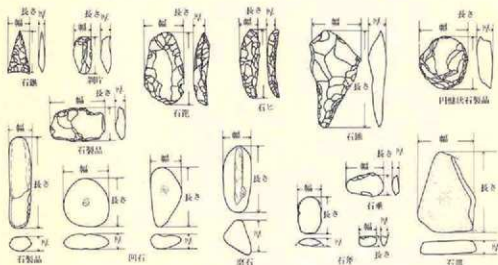
4点の出土である。いずれも扁平礫の片面に使用によって出来たと思われる微かな磨耗が見られその部分は僅かに凹んでいる。使用面以外は自然形状に大きな違いは認められない。

石製品 (図版32-188~190, 写真図版24-188~190)

石製品類は3点出土している。188は扁平な石の縁辺を打ち欠いた円盤状石製品であり、打ち欠き部分以外には擦痕が微かに認められる。189は楕円形状の石製品であり、全面を磨いて滑らかになっている。欠けた所は磨きの後に欠損したものである。190は棒状の石製品であり、側縁部に僅かであるが磨き痕が観察され、一部欠けている。

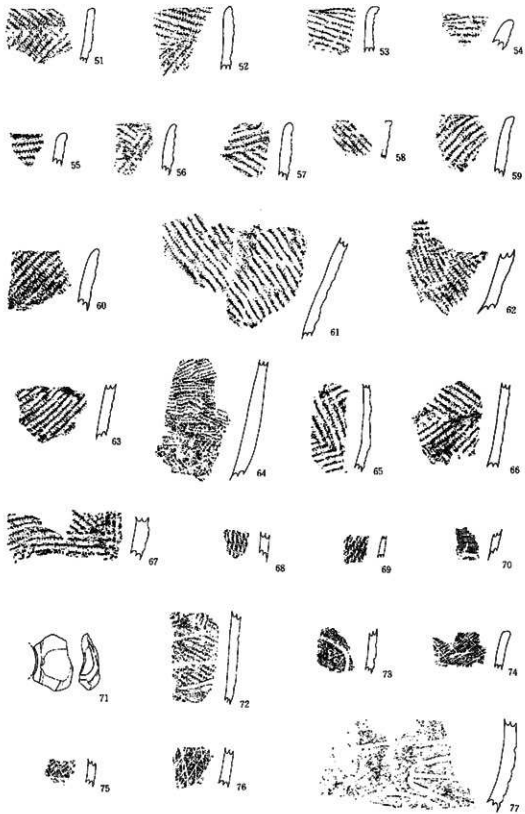
石器計測表

番号	100号号	写真番号	出土地点	器種	法 量				石 質	産 地	備 考
					最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	容 量 (ml)			
1	17-8	16-6	部D-1土坑・埋土上部	石鏃	3.2	1.8	0.5	1.92	純燧石片状石	美山山地	
2	17-8	16-8	部C-1土坑・埋土	石鏃	0.11	1.2	0.3	0.85	燧石	北上山地	
3	17-9	16-9	部C-1土坑・埋土下部	石鏃	2.8	1.0	0.5	1.40	純燧石片状石	美山山地	
4	17-12	16-13	部D-8土坑・埋土	磨石	6.5	5.2	4.2	1.80	石英質岩	北上山地	
5	17-19	16-19	部D-3土坑・埋土中位	磨石	10.2	05.31	02.01	1.70	輝石質山岩	美山山地	
6	17-22	16-22	部C-1土坑・埋土	石鏃	0.11	1.3	0.4	0.87	燧石片状燧石	宇石西部	
7	17-28	16-28	部C-2・土坑	石ヒ	0.40	1.9	0.4	2.25	燧石片状石	宇石西部	
8	17-29	16-29	部C-2土坑・埋土中位	製石	2.9	1.1	0.7	0.75	純燧石片状石	美山山地	
9	18-30	16-30	部D-1土坑・埋土(3層)	磨石	6.6	6.4	3.3	2.5	輝石質山岩	美山山地	
10	18-32	17-32	部D-6土坑・埋土	製石	3.8	2.9	0.5	0.85	燧石片状燧石	宇石西部	
11	18-33	17-33	部D-7土坑・埋土	不定形石	3.3	2.0	0.8	13.0	チャート・燧石片状石	北上山地	
12	28-132	22-132	ⅤC区	石鏃	2.2	11.0	0.3	0.60	燧石片状燧石	宇石西部	
13	28-133	22-133	ⅤC区	石鏃	2.4	1.2	0.4	0.86	チャート	北上山地	
14	28-134	22-134	ⅤC区	石鏃	2.7	1.1	0.5	0.60	燧石片状燧石	宇石西部	
15	28-135	22-135	ⅤC区	石鏃	3.1	2.1	0.4	0.80	燧石片状燧石	美山山地	
16	28-136	22-136	ⅤD区	石ヒ	3.4	1.5	0.7	6.0	燧石片状燧石(石質燧石)	美山山地	
17	28-137	22-137	ⅤC区	不定形石	3.4	1.9	0.5	0.80	燧石片状石	宇石西部	
18	28-138	22-138	ⅤA区	不定形石	7.7	4.1	1.4	4.9	燧石片状燧石	北上山地	



石器計測位置図

番号	図説番号	写真番号	山 上 地 点	属 種	法 量				石 質	産 地	備 考
					最大径 (cm)	最大面 (cm ²)	最大厚 (cm)	重 量 (kg)			
19	28-159	22-159	IV B区	石英	5.8	3.2	0.9	25	凝灰質流紋岩	宇石西郷	
20	28-160	22-160	IV B区	不定形石英	2.7	3.7	1.2	22	チャート質凝灰岩	北上山地	使用度が見られる。 ノッチ?
21	28-161	22-161	IV B区	不定形石英	12.0	2.7	0.5	9.96	流紋岩	宇石西郷	石バラ?
22	28-162	22-162	IV B区	不定形石英	2.0	4.4	0.9	15	凝灰質凝結凝灰岩	奥羽山地	標本?
23	28-163	22-163	III C区	不定形石英	13.0	4.1	1.5	18	凝灰質流紋岩	宇石西郷	
24	28-164	22-164	IV B区	石英	12.5	4.9	1.7	25	輝石岩	北上山地	片断
25	28-165	22-165	IV D区	石英	18.7	15.5	12.8	150	流紋色凝灰岩	奥羽山地	
26	29-166	22-166	V E区	石英	15.3	7.0	2.6	455	凝灰岩	北上山地	
27	29-167	22-167	IV B区	石英	15.6	8.8	1.5	80	チャート質流紋凝灰岩	北上山地	
28	29-168	22-168	表層	石英	18.4	16.4	14.0	275	輝石安山岩	奥羽山地	
29	29-169	22-169	III C区	石英	9.5	5.8	3.1	310	輝石安山岩	奥羽山地	
30	29-170	22-170	III B区	石英	9.3	7.0	3.5	380	流紋色凝灰岩	奥羽山地	
31	29-171	22-171	V D区	石英	10.6	6.1	2.2	200	輝石安山岩	奥羽山地	
32	29-172	22-172	IV D区	石英	12.0	5.9	3.6	410	流紋色凝灰岩	奥羽山地	
33	29-173	22-173	IV D区	石英	11.4	7.6	2.0	220	輝石安山岩	奥羽山地	
34	29-174	22-174	V D区	石英	13.9	7.1	3.8	380	白色凝結凝灰岩	奥羽山地	部分的に輝石伊州
35	30-175	22-175	IV B区	石英	111.25	4.8	4.3	300	輝石安山岩	奥羽山地	部分的に輝石伊州
36	30-176	22-176	V D区	石英	11.1	7.2	2.9	350	凝灰岩	北上山地	
37	30-177	22-177	III C区	石英	11.2	10.6	3.4	610	輝石安山岩	奥羽山地	
38	30-178	22-178	III C区	石英	15.0	7.5	7.1	1,150	輝石安山岩	奥羽山地	
39	30-179	22-179	IV D区	石英	14.0	5.8	6.3	790	輝石安山岩	奥羽山地	
40	30-180	22-180	III C区	石英	15.1	6.5	6.7	1,030	輝石安山岩	奥羽山地	
41	31-181	22-181	V D区	石英	12.3	4.8	7.2	550	輝石安山岩	奥羽山地	
42	31-182	22-182	III C区	石英	13.7	5.4	7.0	700	輝石安山岩	奥羽山地	
43	31-183	24-183	III D区	石英	10.2	9.4	5.4	700	輝石安山岩	奥羽山地	
44	31-184	24-184	IV D区	石英	9.0	8.6	5.0	530	凝灰岩	北上山地	
45	31-185	24-185	II A区	石英	10.5	9.8	6.3	820	輝石安山岩	奥羽山地	
46	31-186	24-186	IV B区	石英	4.8	4.4	3.8	140	石英岩	北上山地	
47	31-187	24-187	II D区	石英	5.1	6.9	5.3	280	凝灰岩	北上山地	
48	32-188	24-188	III B区	円錐状石英晶	4.2	4.9	1.2	25	凝灰岩	北上山地	
49	32-189	24-189	IV B区	石英晶	6.5	4.1	2.6	110	凝灰岩	北上山地	
50	32-190	24-190	II A区	石英晶	21.3	5.3	3.3	620	砂岩凝灰岩	北上山地	
51	32-191	24-191	IV C - II土成・埋土中穴	石英	27.5	17.6	5.1	3,910	凝灰岩	北上山地	
52	32-192	24-192	V D区	石英	26.0	17.8	4.7	3,620	凝灰岩	北上山地	
53	32-193	25-193	IV C区	石英	35.5	19.0	9.5	12,000	石英質岩	北上山地	
54	32-194	26-194	IV D区	石英	38.7	26.5	6.7	11,000	凝灰岩	北上山地	

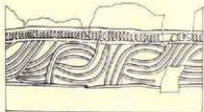


图版19 遼構外出土土器(2)

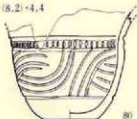
— (8.5) · 6.2



78



— (8.2) · 4.4



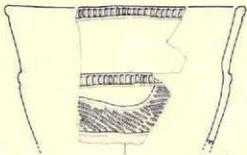
80

(22.8) (6.0) —

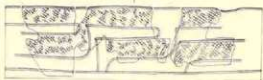


82

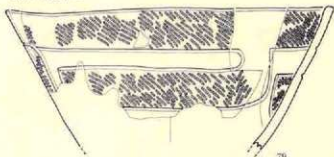
(18.9) (11.0) —



84

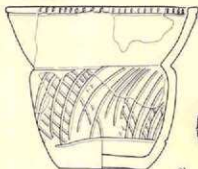


(26.0) · (11.0) —



79

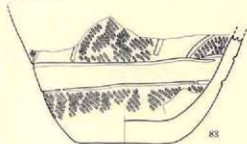
(15.2) · 12.9 · 6.9



81

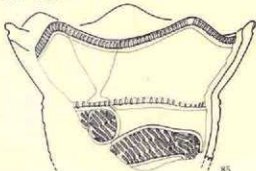


— (9.1) · 7.6



83

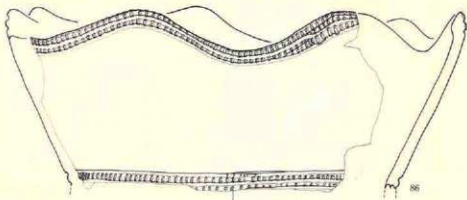
(20.0) · (10.2) —



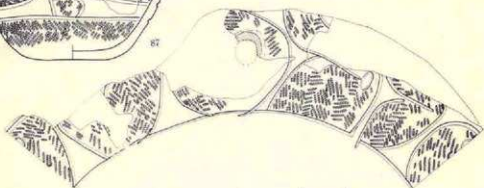
85

图版20 道構外出土土器(3)

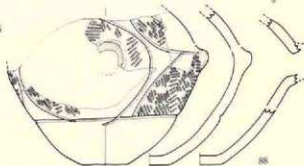
(35.0)·(11.0)→



16.0 16.6 6.0

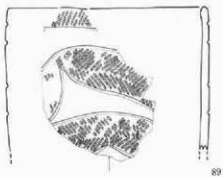


→(11.5)·3.5

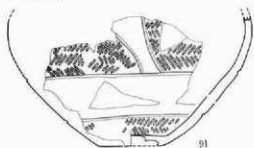


图版21 遺構外出土土器(4)

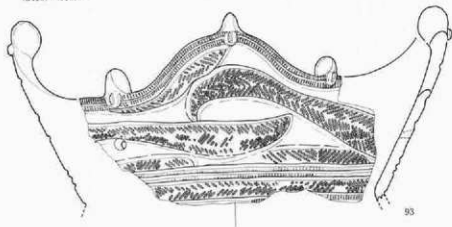
(20.5)・(18.8)・—



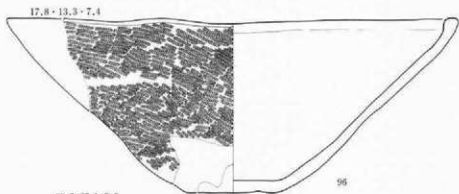
— (10.2)・(5.0)



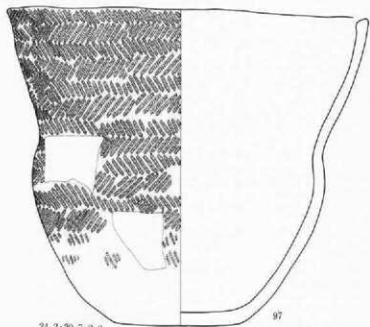
(34.0)・(8.6)・—



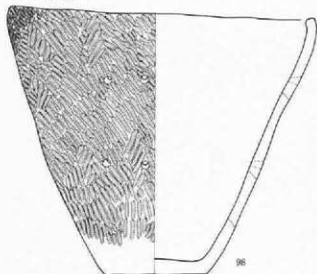
図版22 遺構外出土土器(5)



28.5・25.1・9.0

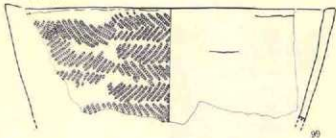


24.2・20.7・8.0

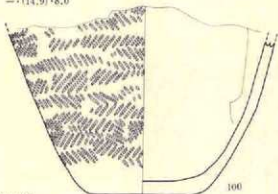


图版23 遺構外出土土器(6)

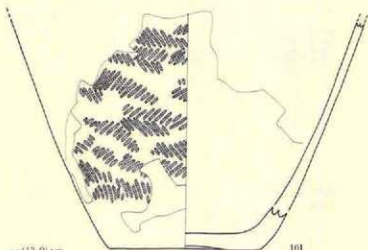
(26.0)・(8.9)・—



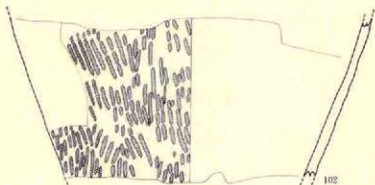
—・(14.9)・8.0



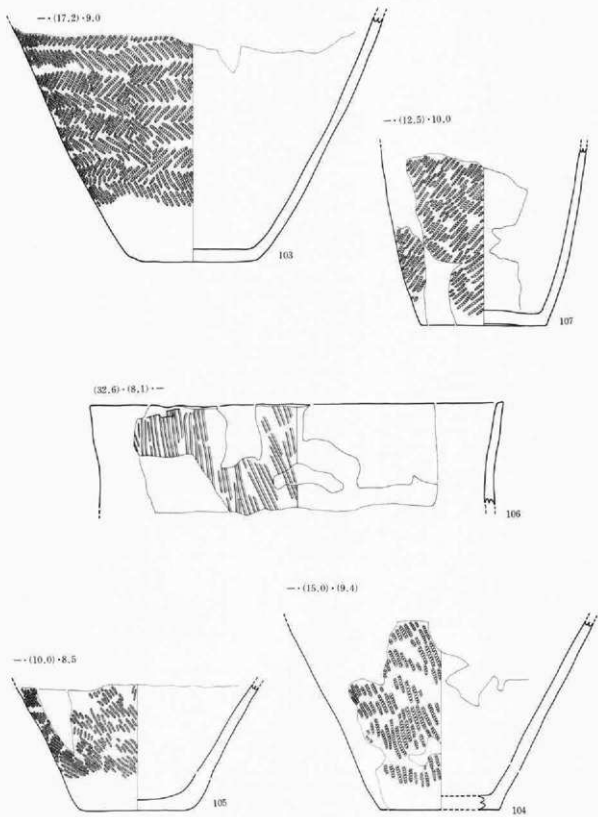
—・(18.6)・12.0



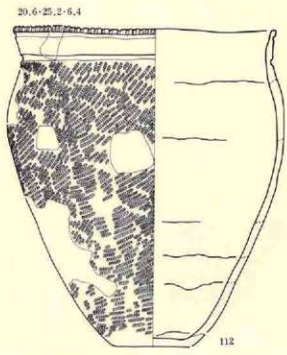
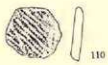
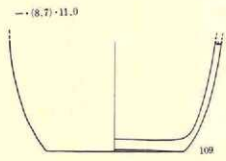
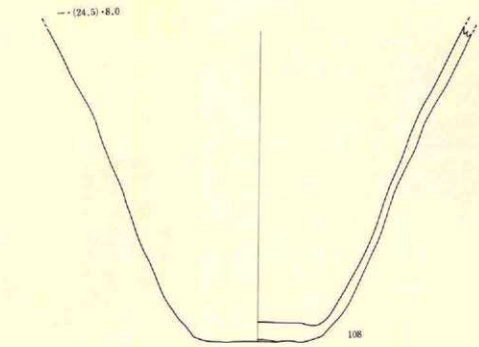
—・(13.0)・—



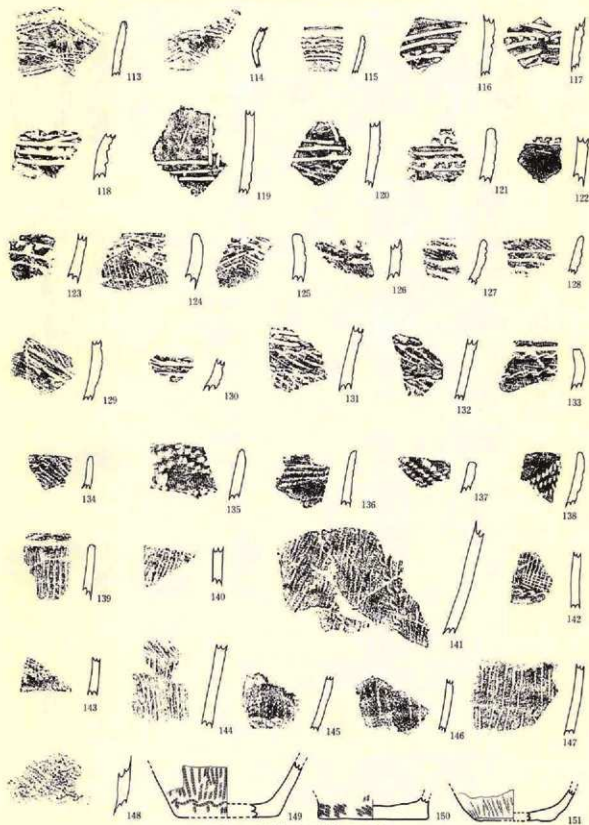
图版24 遺構外出土土器(7)



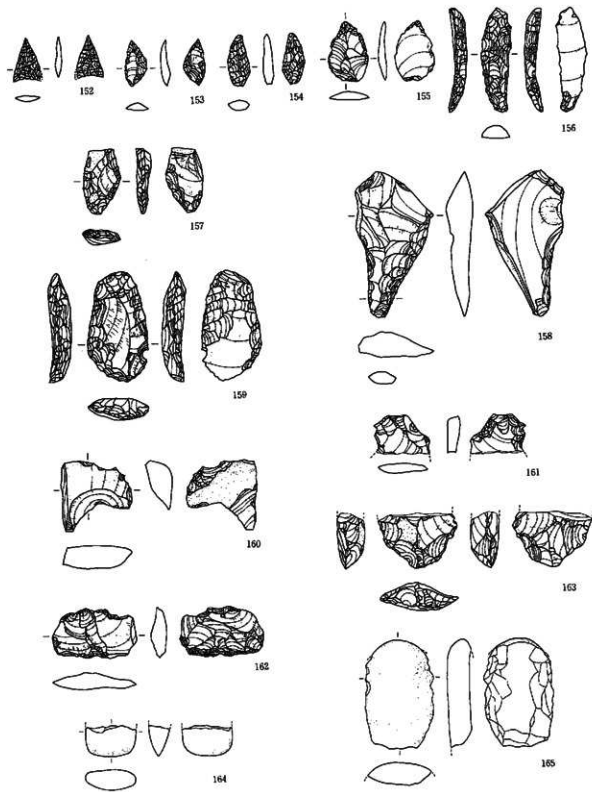
图版25 遗構外出土土器(8)



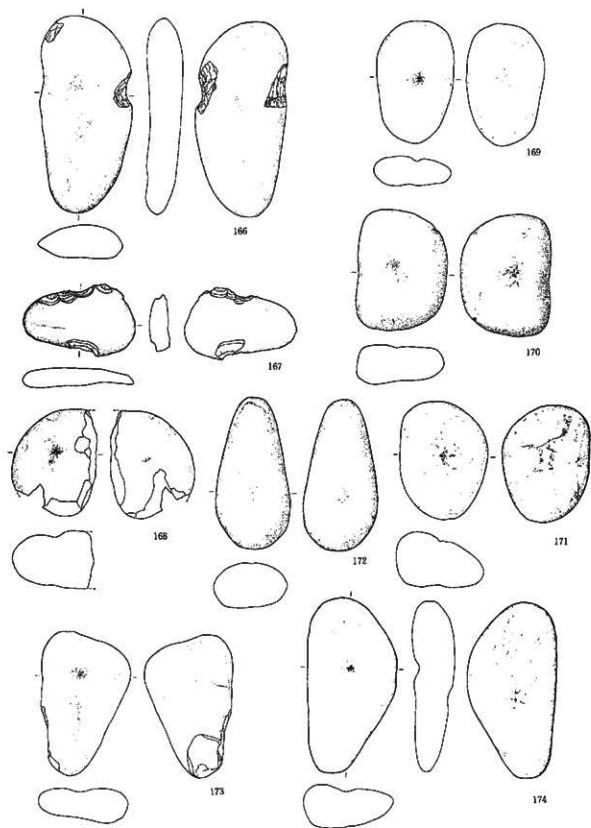
图版26 遗構外出土土器(9)



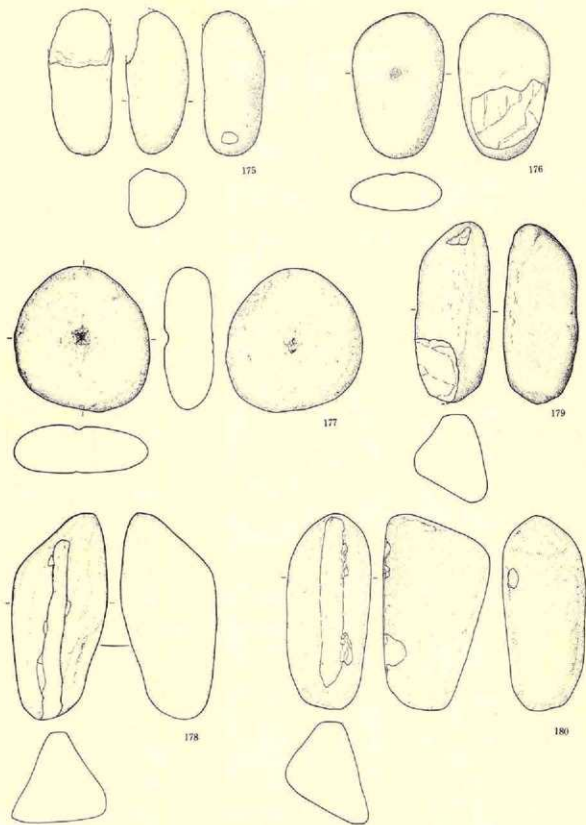
图版27 造構外出土遺物 10 弥生



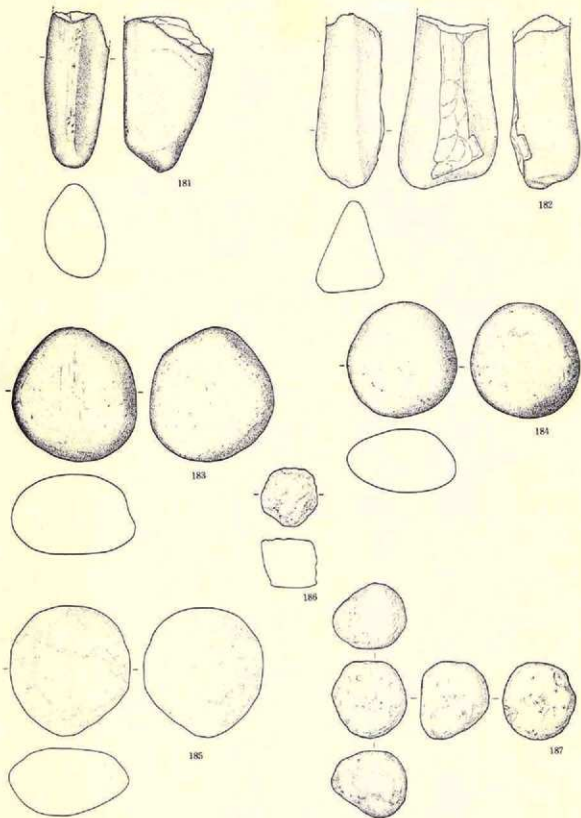
圖版28 遺構外出土石器(1)



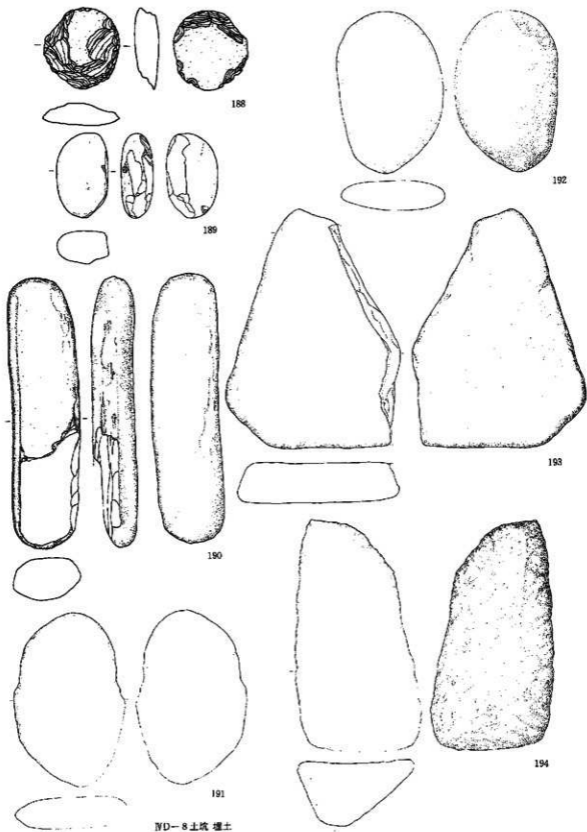
图版29 遺構外出土石器(2)



图版30 遺構外出土石器(3)



图版31 遗構外出土石器(4)



图版32 土坑遺構外出土石器(5)

まとめ

親久保田遺跡の調査内要は以上述べたとおりであるが、ここでは更に要約して遺構、遺物についてまとめとする。

1. 遺構について

今回の調査によって明らかになった遺構は土坑30基、陥し穴27基と遺物が包含されていた地区一カ所で、これら遺構は何れも縄文時代に属するものである。以下土坑、陥し穴についてまとめてみる。

(1) 土坑

土坑は主に大調査区のC～E区の尾根頂部、特に先端部分に集中して見られる。土坑の占地形態を見るとフラスコ形（状）土坑が尾根部分の縁辺に沿うように造られ2～4基が一つのまとまりをもっていることが判り、皿状土坑は尾根の腹線に沿う形で造られていることが判明している。これら土坑の埋土は人為的に埋め戻されている土坑が多く自然堆積のものは少ない傾向にあり、特にIVD-2、VC-2、VD-3、IVE-3土坑では埋土のすべてが埋め戻されている土坑であることが判明した。これら土坑で構造的に変わったものとしては、フラスコ形土坑ではVC-2土坑があり、床面の北西隅と南東隅に2個の副穴があり北西隅のものはフラスコ状となっているものがあり、皿状土坑ではIVC-1土坑とVC-1土坑があり、床面中央付近に柱穴状の副穴を持つものがある。土坑の新旧関係は皿状土坑がフラスコ形土坑を切っているものがあることからすべてについて言えないが皿状土坑がフラスコ形土坑より新しいと思われる。土坑の時期としては出土遺物が少ないことから良く判らないが、埋土中からの出土遺物や周辺出土遺物や土坑の形態等から縄文時代後期から晩期の時期にかけてのものと考えられる。

(2) 陥し穴

陥し穴は調査区のほぼ全域に検出された。平面形態から円形と溝状のものに分けられ、円形のは底面のほぼ中央に杭跡をもつものであり、尾根の先端部分から下った斜面20m位ずつ離れて3基が南北方向に並ぶように検出された。溝状のものは果下一般に見られるもので底面に杭跡のないもので、本遺跡の場合には西側の小沢に平行する形で長軸方向が北西～北東方向に向くように2～4基が一つの単位となるように造られている。また、溝状のものは西側の小沢から尾根部分を通して東側に至るように中央部分に造られ、それに沿うように他のものが造られているようである。なお、調査区域外のIVA区にも溝状のものが同様に3基あることが確認されている（図版1）が、やはり西側から東側に至るように造られていると考えられ、同時期か時期が違って造られているようである。これら陥し穴はケモノ道に造られたかどうかは現

段階では不明である。陥し穴の時期は、1基であるが皿状土坑に切られているものがあることから土坑の時期よりは古いと考えられ、縄文時代後期でも始めのほうかそれよりも古いと考えられる。

2. 遺物について

本遺跡から検出された遺物は土器、石器などであるが、何れも出土量は少なく、大半が遺構外からの出土である。ここでは土器について各群毎に若干の説明を加えてまとめとする。

第I群土器：縄文時代早期代早期に属する土器群であり、1類としたものは器表面に縦位に貝殻文を施文しているものであり、胎土も良いことから早期末の寺の沢式土器に近似しているものである。2類としたものは表裏両面に縄文を施文しているものであり、胎土中には多量の繊維を含んでいるものであることから早期末の早稲田5類等に併行するものと考えられる。

第II群土器：縄文時代前期に属する土器群であるが何れも小破片であり、特徴等を良く捉えることはできないが、器内面をみがいているものがあること、羽状縄文があることや、胎土中に繊維を含んでいること等から長七谷地III群に併行するものと考えられる。

第III群土器：縄文時代中期末から後期初頭に属する土器群であり、文様等から大木10式土器等に併行するものと考えられる。

第IV群土器：縄文時代後期に属する土器群であり、1類は十腰内I群土器に、2類と4類は十腰内III群からIV群土器に、3類は十腰内V群土器に位置づけられるであろう。

第V群土器：縄文時代晩期に属する土器群であり、文様の特徴から中葉の大洞C₂式に相当すると考えられる。

第VI群土器：弥生時代に属する土器群である。何れも小破片であることから文様などの特徴をよく把握できないが、残されている文様から弥生時代後期以降の天王山式土器や赤穴式土器等に相当するものであろう。

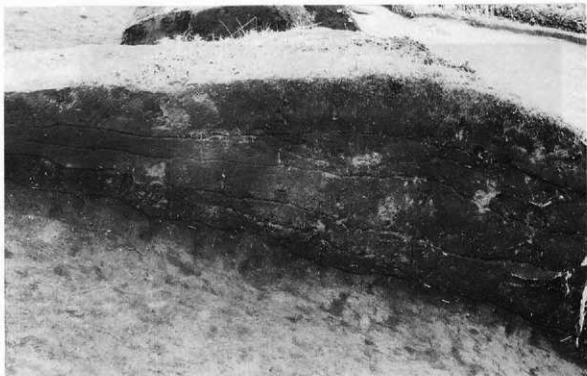
3. 遺跡の性格等について

本遺跡は遺物が縄文時代早期から晩期、弥生時代に渡って検出されていることから、縄文時代の早い段階から狩猟場として、居住地としてその他阿らかの形でこの地域で縄文人や弥生人が活動していた場所であることは疑いの無いところである。土坑の検出状況から遺跡の主体は調査区の南側にあるものと考えられ、住居地の存在が考えられる。

写 真 图 版



写真図版1 遺跡遠景（北から）

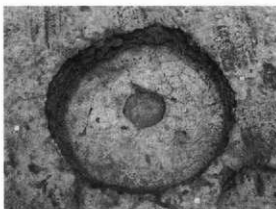
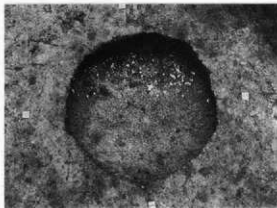


ⅡC区東西断面

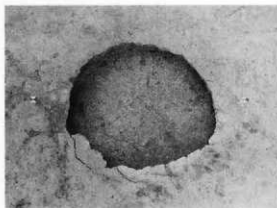


ⅢD区南北断面

写真図版2 基本土層



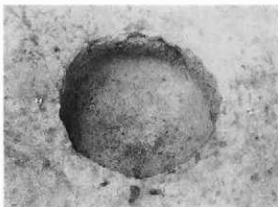
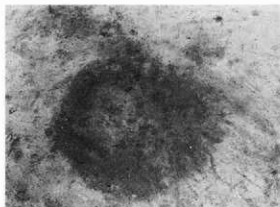
ⅢD-1 土坑平面・断面



ⅢC-2 土坑平面・断面

ⅢC-1 土坑檢出狀況 平面・断面・副穴

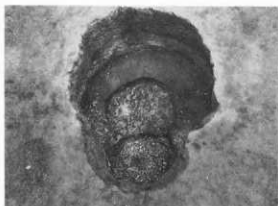
写真図版3 土坑(1)



NC-4 土坑 平面・断面



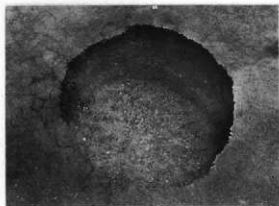
NC-3 土坑検出状況 平面・断面



NC-5 土坑 平面・断面

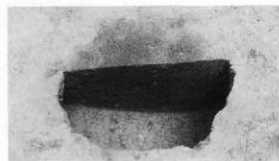
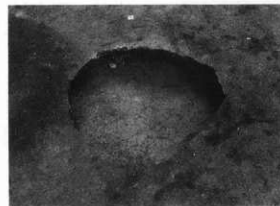
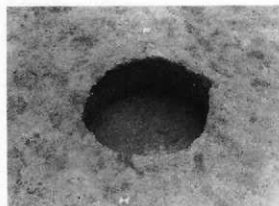
NC-6・12土坑 平面・断面

写真図版4 土坑(2)



NC-7 土坑 平面・断面

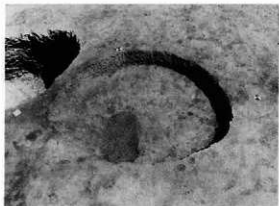
NC-8 土坑 平面・断面



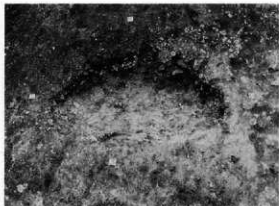
NC-9 土坑 平面・断面

NC-10 土坑 平面・断面

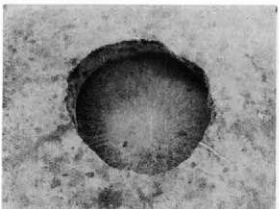
写真図版5 土坑(3)



ND-8 土坑 平面·断面



NC-15 土坑 平面·断面



ND-1 土坑 平面·断面



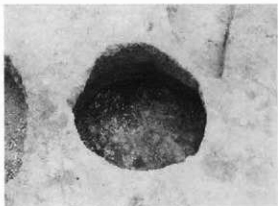
ND-2 土坑 平面·断面



写真図版 6 土坑 (4)



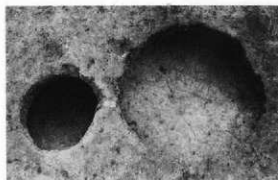
ND-6 土坑 平面·断面



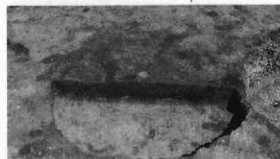
ND-3 土坑 平面·断面



ND-7 土坑 平面·断面



NE-3·2 土坑 平面

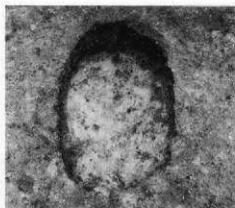
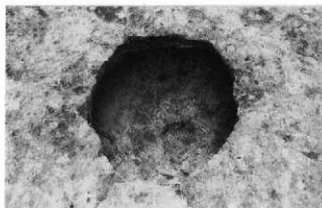


NE-3 土坑 断面



NE-2 土坑 断面

写真图版 7 土坑(5)



NE-4 土坑 平面・断面



NF-1 土坑 平面・断面



VC-1 土坑 平面・断面

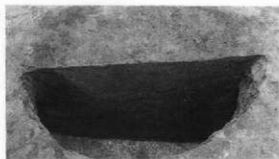
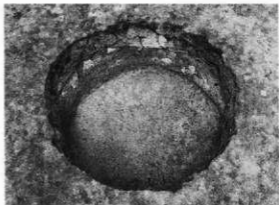
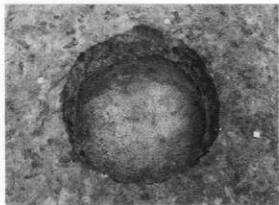


VC-2 土坑 平面・断面



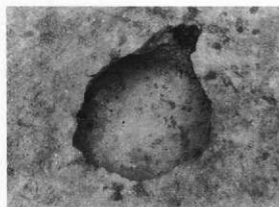
VC-2 土坑副穴 1・2

写真図版 8 土坑(6)



VD-3 土坑平面·断面

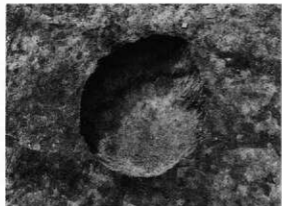
VD-1 土坑 平面·断面



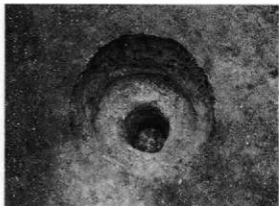
VD-2 土坑 平面·断面

VD-5 土坑 平面·断面

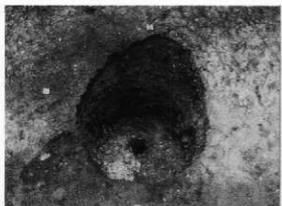
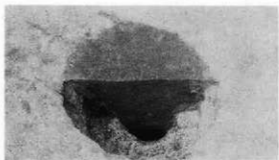
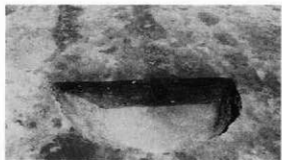
写真图版9 土坑(7)



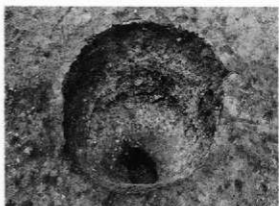
IVF-1 土坑 平面・断面



IID-1 陥し穴 平面・断面



IID-3 陥し穴 平面・断面



IVC-14 陥し穴 平面・断面



写真図版10 土坑(8) 陥し穴状遺構(1)



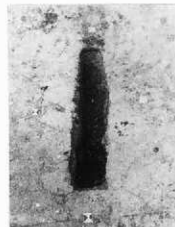
ⅢA-1 陥し穴



ⅢA-2 陥し穴



ⅢB-1 陥し穴



ⅢB-2 陥し穴



ⅢB-3 陥し穴



ⅣB-1 陥し穴

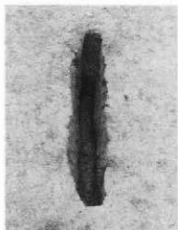
写真図版11 陥し穴状遺構(2)



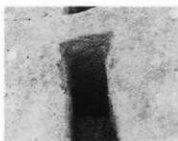
NB-2 陥し穴



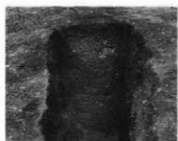
NB-3 陥し穴



NC-1 陥し穴



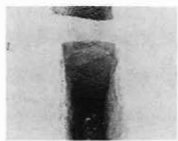
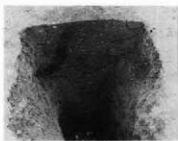
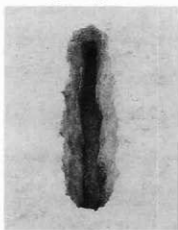
NC-2 陥し穴



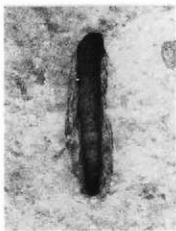
NC-3 陥し穴



NC-5 陥し穴



写真図版12 陥し穴状遺構(3)



ND-1 陥し穴

ND-2 陥し穴

ND-3 陥し穴

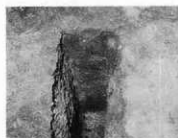
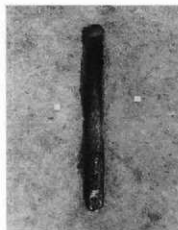


ND-4 陥し穴

ND-5 陥し穴

ND-6 陥し穴

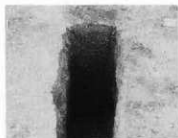
写真図版13 陥し穴状遺構(4)



MD-7 陥し穴



ND-8 陥し穴



III F-1 陥し穴



NG-1 陥し穴



VD-1 陥し穴

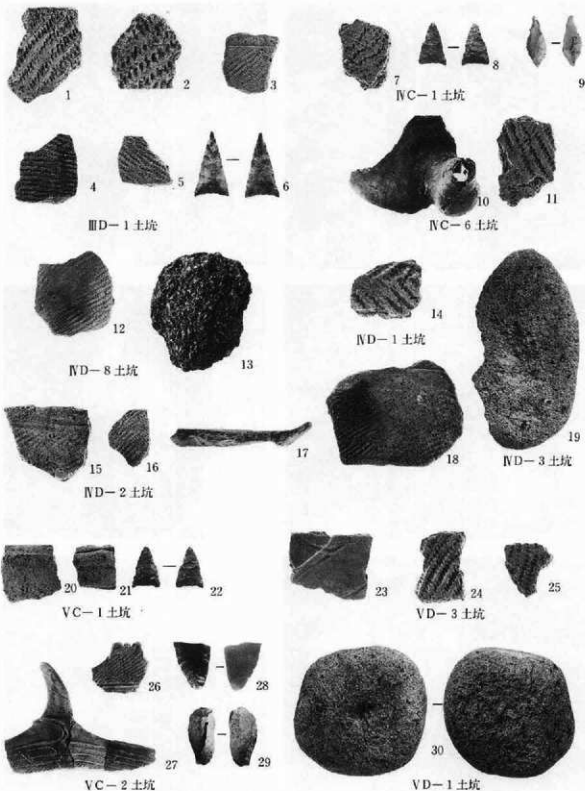


VD-2 陥し穴

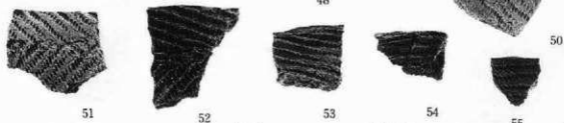
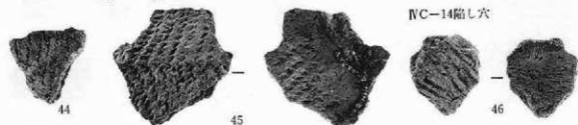
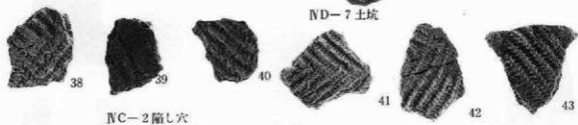
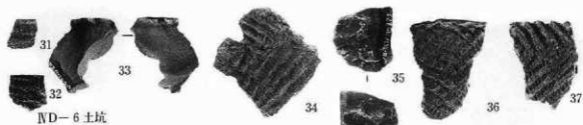
写真図版14 陥し穴状遺構(5)



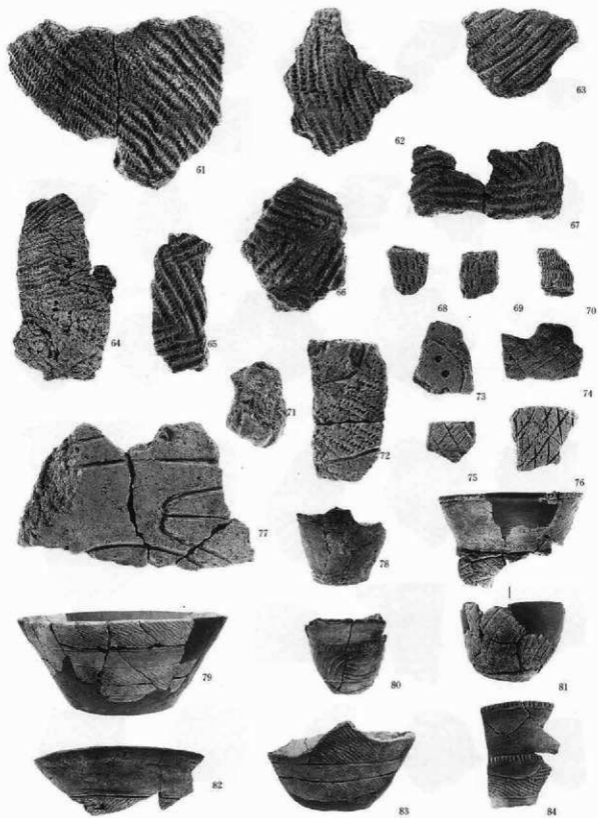
写真図版15 II A区遺物出土状況



写真図版16 出土遺物(1)



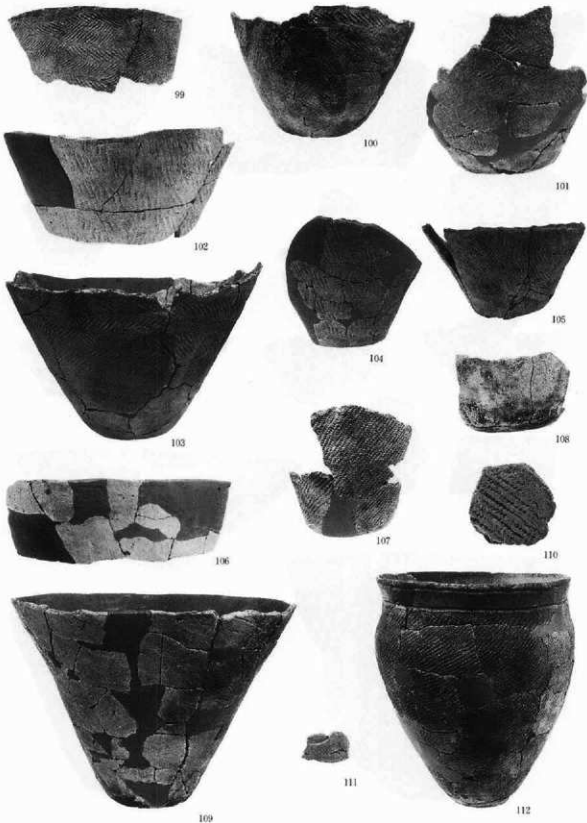
写真図版17 出土遺物(2)



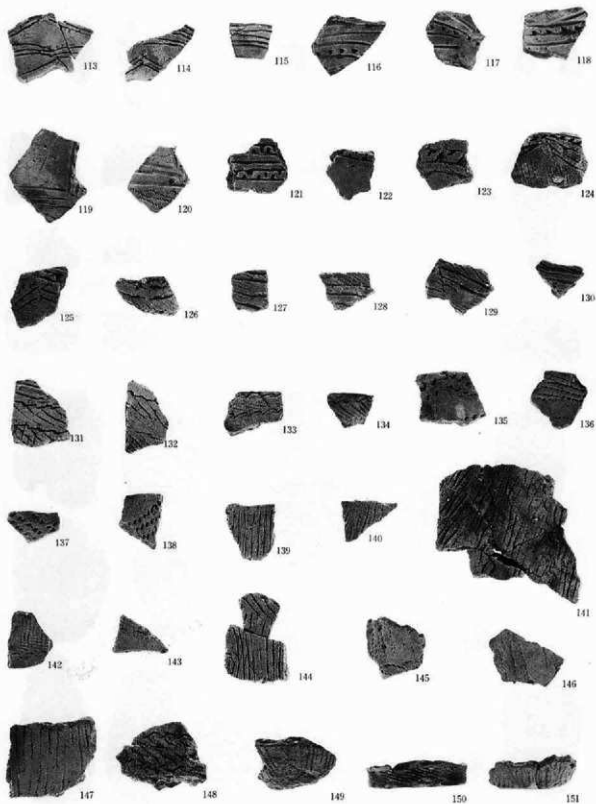
写真図版18 出土遺物(3)



写真図版19 出土遺物(4)



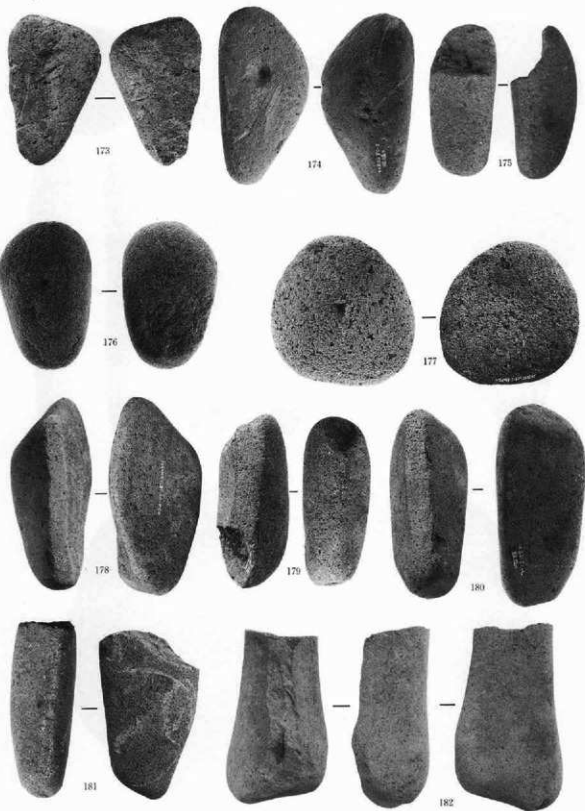
写真图版20 出土遺物(5)



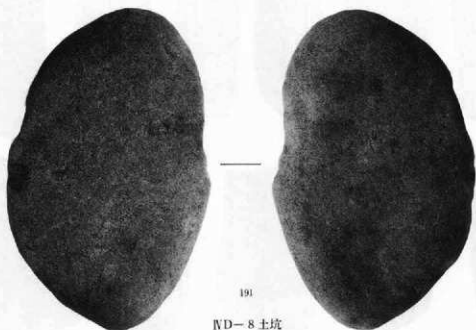
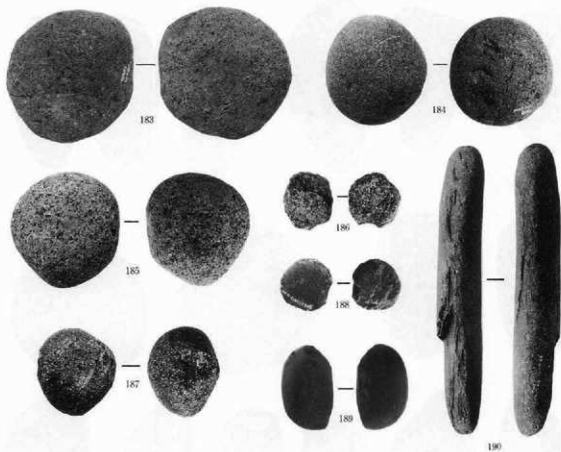
写真図版21 出土遺物(6)



写真図版22 出土遺物(7)

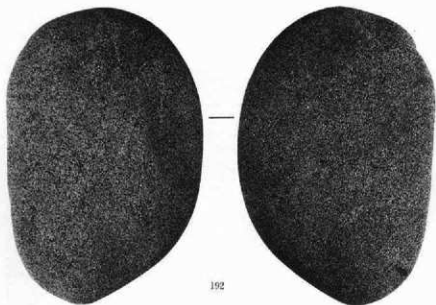


写真図版23 出土遺物(8)

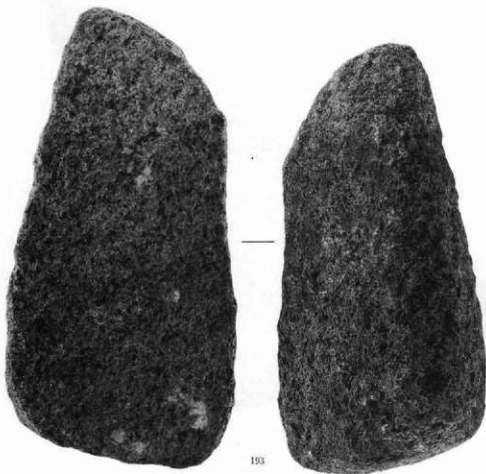


ND-8 土坑

写真图版24 出土遗物(9)

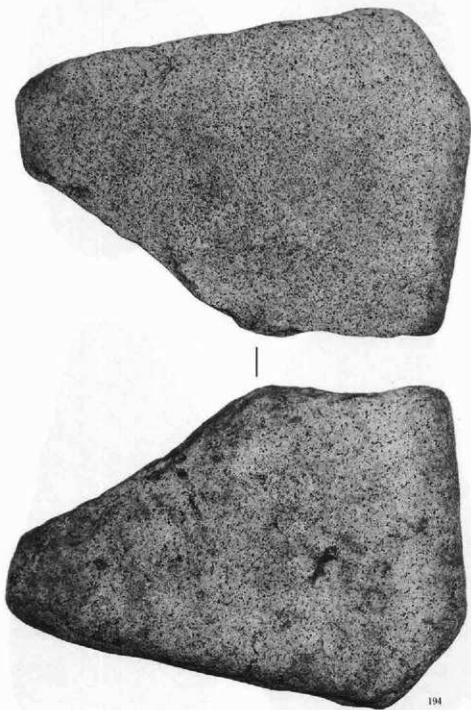


192



193

写真図版25 出土遺物 110



194

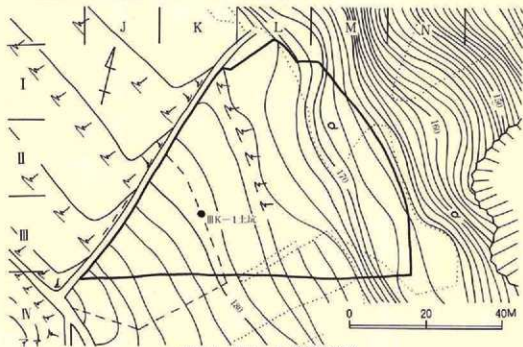
写真図版26 出土遺物(11)

VII 親久保IV遺跡

所在地	二戸郡一戸町一戸字親久保146ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局 一戸工事事務所
発掘調査期間	昭和61年6月16日～7月31日
整理年月日	昭和62年3月1～3月31日
調査対象面積	3,460㎡
発掘調査面積	3,460㎡
遺跡番号・略号	J E19-1199・OKIV-86
調査担当者	光井文行・中川重紀
協力機関	一戸町教育委員会

1. 調査の経過

親久保IV遺跡の調査は、昭和61年6月14日～7月31日の約1カ月間実施された。調査地区の現状は北東方向に傾斜している緩斜面に造られている畑地であり、調査地区の北西側は水田である。馬淵川に望む部分では比高差が4m以上の段差が2段あり、段状となっている地区である。調査に際して、調査地区の設定は親久保III遺跡の延長とし、J～M区まで設定した。調査は面積に比して期間が短いことや、現地踏査の段階で黒色土が厚いと思われ、重機による表土除去を行うこととしていたが、まず土層の状態を調べるために馬淵川に望む縁辺のそれぞれの段に幅3m×長さ約10mのトレンチを、他の地区には一辺50cm程の穴を掘って土層を確認しその結果を基に重機での表土除去を行う部分を決定することにした。その結果、縁辺分のM区は表土が浅く、L区は黒色土が厚く、J、K区ではさらに黒色土が厚く堆積していることが確認され、L、M区に見られる段差は地滑りによって出来た段であることが確認され、地元の方から4、5年前にも地滑りを起こしL区に見られる段差の所で幅1mの地割れが出来たとの話を聞くことができた。以上のようなことから重機は主にJ、K区に入れ表土除去をし、その後精査を行った。L、M区は作業員によって粗掘り、精査を行った。その結果、L区では縄文前期、晩期の土器片3片、M区で縄文早期土器片5片、J、K区では風倒木痕2、土壌1基、縄文早期土器片30片が検出された。なお、風倒木痕の上部に火山灰が見られ、十和田a降下火山灰であることが後の鑑定結果から判明している。この火山灰は黒褐色土の中にも部分的に見られる。精査は土壌1基を精査、実測し、IVK区で検出した貝殻文土器の破片は1点ずつ高さ、地点を入れて取り上げた。その後、他に遺構、遺物が無いことを確かめた後に、更に部分的に掘下げたが遺構、遺物とも検出されないことから調査を終了した。



図版1 グリッド・遺構配置図

2. 検出された遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は調査区のほぼ中央に土壌1基だけで、風倒木痕が2カ所検出された。遺物としては縄文時代の土器、石器だけである。

1) 土壌

ⅢK-1土坑(図版2, 写真図版1)

調査区ほぼ中央、ⅢK-E、I区に位置する。南西側で風倒木の一部と接するが新旧関係は不明である。規模は開口部で長軸1.50m、短軸1.46m、底部で長軸1.40m、短軸1.38m、検出面からの深さ0.28mである。平面形は開口部、底部とも円形を呈する。底部はほぼ平坦であるが特に固い面はなかった。埋土は黒褐色土の単層で、浮石を僅かに含むシルト質土である。堆積の状況から自然堆積と思われる。出土遺物はない。

2) 遺構外出土遺物(図版2・3, 写真図版2)

本遺跡から出土した遺物は、縄文時代の土器、石器である。遺物の出土状況から判断して縄文時代前期、晩期の土器は耕作による移動や自然の営力によってもたらされたものと考えられ、早期土器片の内ほぼ一個体分の土器片が集中して出土したものはその場所に投げ捨てられたものと考えられる出土状態を示している。石器2点は表土除去作業中に出土している。

(1) 土 器

土器は次の3群に分けることが出来る

第1群土器(図版2-4・3, 写真図版2-4~19)

縄文時代早期に属する土器群である。文様施文の方法からさらに細分される。

a類(図版3, 写真図版2-4~19)

貝殻文が器表面に施文される土器で、同一個体の破片が大小合わせて30点程検出された。器形は尖底深鉢形と思われ口縁部で朝顔状にひらき、口縁部が3カ所で段がつくと思われるものである。施文は最初に貝殻青圧痕による条痕文を横位に施文しその後縁部から尖底部近くまで貝殻腹縁文を施文しているもので、口唇部は斜位に、その下位3cm位の間にはほぼ横位に、それより下位には器形に対して垂直になるように施文し、その後全面にミガキを施し、裏面にも縦位の方向にミガキが施されている。胎土、焼成とも良く、粘土の中に砂粒が少量と極微量であるが植物繊維が入っている。色調は表裏とも暗褐色~黄褐色で、表面の一部に煤が付着している。器厚は4~6mmである。

b類(図版2-4, 写真図版2-4)

貝殻文と沈線、刺突の併用によって文様を施文しているもので、掲載した以外に同一個体と思われる、無文の土器破片が2点ある。器形は破片のため詳細は不明であるが尖底深鉢と思われる。文様は口縁部から約5cmの部分に2条の平行する沈線を施文し、部分的に刺突(恐らく

4カ所)を入れて口縁部との間に斜位もしくは横位に沈線と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものである。また、口縁部の内側には貝殻背圧痕文が施文されている。胴部は破片から見ると無文のようである。胎土は良く、表裏面とも良くミガキが施されている。色調は暗褐色である。

第II群土器(図版2-2・3, 写真図版2-2・3)

縄文時代前期に属する土器片である。2・3とも同一個体の胴部破片で、器形は深鉢形と思われる。縄文は原体LRが施文されている。胎土は繊維を含み、焼成は良い。色調は表裏とも暗褐色～黒褐色である。

第V群土器(図版2-1, 写真図版2-1)

縄文時代晩期に属する土器片で、1点が出土した。器形は体部破片のため不明である。文様は雲形文と思われるものが見られ、文様中に縄文原体LRが施され、文様は幾分浮き上がり、ミガキが文様部以外に施されている。胎土、焼成とも良く、色調は表裏とも暗褐色である。

(2) 石器(図版2-5・6, 写真図版2-20・21)

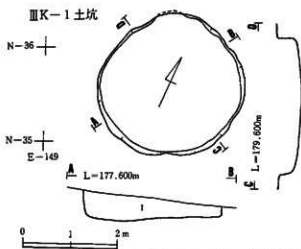
礫石器と剥片がそれぞれ1点ずつ出土した。5は縦長剥片の右側縁に微細な剥離痕が認められる剥片、6は断面三角形の棒状の礫の縁辺部に擦痕、叩き痕が僅かに認められる磨石である。

3. まとめ

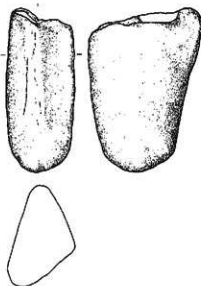
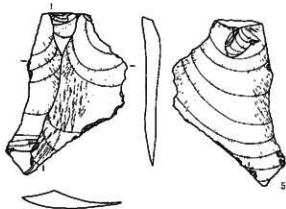
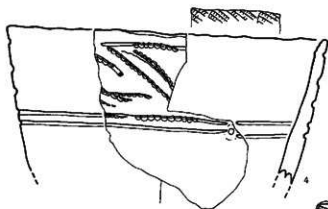
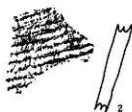
本遺跡で検出された遺構は土坑1基だけであり、遺物も早期、前期、晩期の土器片が少量と石器が2点と遺跡の全体象として捉えることは出来ないが若干の考察を述べてまとめとする。

土坑は1基検出され、検出状況、規模、形状から縄文時代に属する土坑であることは間違いないが、特定の時期を決定する資料がないことから良く判らないが、形状、埋土の状況から親久保III遺跡で検出された土坑とほぼ同じ位の時期かと考えられる。遺物は石器が2点と少ないことから土器の時期についてのみ述べる。第I群土器a類としたものは器表面全体に貝殻腹縁圧痕文を施文していることや、胎土に砂粒や微量ながら繊維が見られること、器内外に丁寧なミガキが見られること、口唇部が若干外側に反っていること等の特徴から寺の沢式に比定でき、第I群b類としたものは沈線と貝殻腹縁圧痕文と刺突の組み合わせによって文様を構成していることなど物見台式土器の特徴に類似していることから同形式に比定でき、いずれも縄文時代早期に位置づけられる。第II群土器は破片のため詳細は不明であるが、胎土に繊維を含んでいることや、縄文の特徴から縄文時代前期に位置づけられるものである。第V群土器は雲形文と思われる文様が見られることから縄文時代晩期の大洞C₂式に比定できよう。

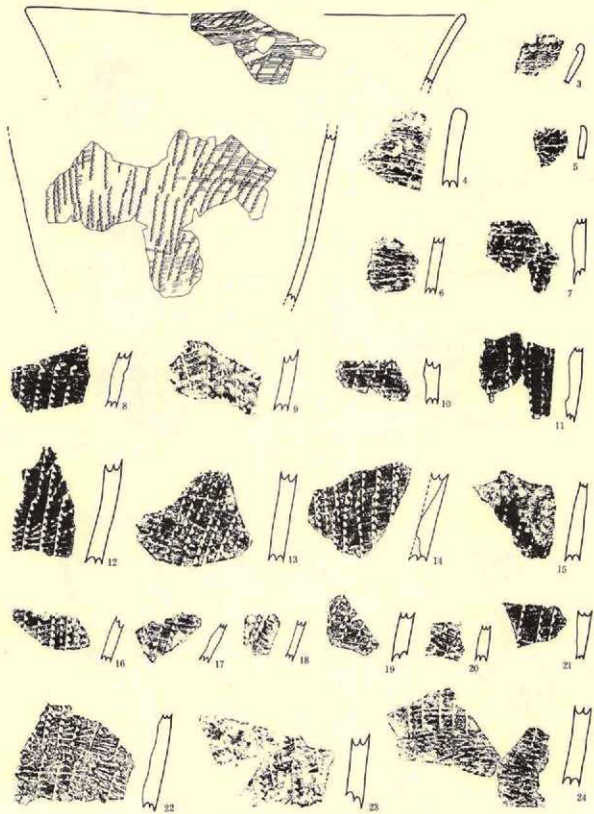
遺跡としては西側に続く親久保III遺跡の北端部である可能性があり、縄文時代早期からの遺跡で、縄文時代の生活空間であったことが確認できた。



1. 10YR 2/1 黑色浮石全体に散在。炭化物少減

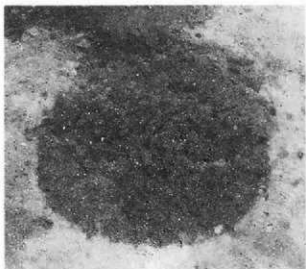


図版 2 土坑・遺構外出土遺物



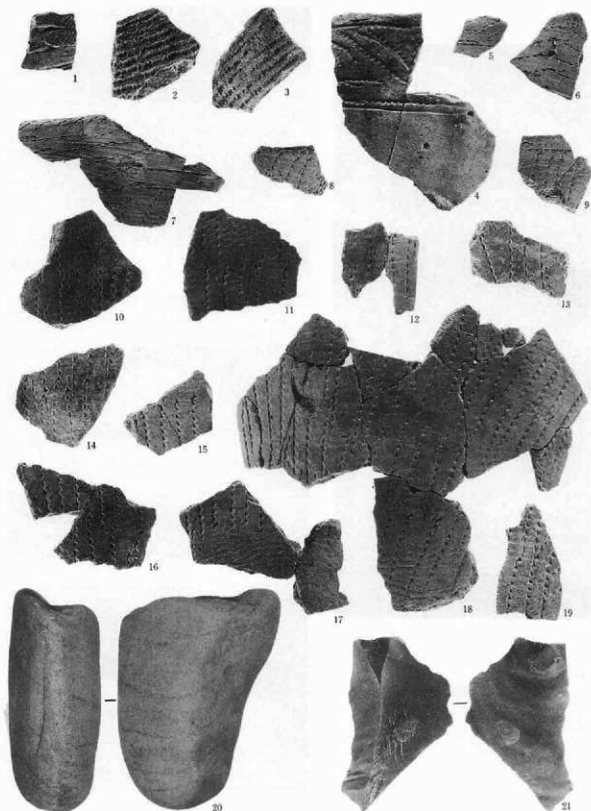
图版3 遺構外出土遺物2

写 真 图 版



- a. 基本土层
 b. IIIK-1 土坑檢出狀況
 c. IIIK-1 土坑平面
 d. IIIK-1 土坑断面

写真図版1 基本土层・土坑



写真図版 2 出土遺物

IX むすび

昭和61年度に東北縦貫自動車道建設に関連して発掘調査した親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡の調査結果について記載した。これらの遺跡は、馬淵川左岸の集落八木沢の南側に位置し、北東に延びる尾根の頂上部や山腹斜面上に立地し、東西約700mの間に分布する。

4遺跡の調査面積は合計21,390㎡であり、竪穴住居跡9棟(縄文4、平安5)、住居跡状遺構1棟、土坑67基、陥し穴状遺構30基のほか、溝跡、埋設土器、焼土遺構各1箇所など、総計110の遺構を検出した。この遺構数は、一戸町で検出された遺構の18.6%を占める。今回の調査結果の特徴点として以下の5点をあげることができる。

①縄文時代後期前葉の住居跡が親久保Ⅱ遺跡のB調査区で2棟検出された。一戸町では、中期中葉～後葉の住居跡が最も多く、後期前葉のものは初めてである。しかも、この2棟の住居跡は、墓塚と思われる土坑とセットになっていた可能性がある。

②弥生時代後期の土器を伴う土坑が親久保Ⅱ遺跡のB調査区で検出された。このように土器を伴う土坑は、曲田Ⅰ遺跡(二戸郡安代町)でも検出されており、墓塚の可能性はある。

③白頭山火山灰が埋土下位に堆積する平安時代の住居跡が親久保Ⅱ遺跡のA調査区で3棟検出された。このような事例は桂平遺跡(二戸郡浄法寺町)にある。この住居跡は、一戸バイパス関連遺跡のⅣb期に後続する可能性がある。

④逆茂木痕跡のある円形の陥し穴状遺構が親久保Ⅲ遺跡を中心に4基検出された。このような遺構は、五庵Ⅰ遺跡(二戸郡浄法寺町)や大久保遺跡(二戸市福田)などで検出されており、時期的に縄文時代早期～前期の遺物分布圏にみられる。

⑤出土遺物は、量的には少ないものの縄文土器(早期～晩期)、弥生土器(後期)、土師器がある。特に弥生土器は、親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡で出土しており、分布範囲が広い。

昨年度の畑切・竹林遺跡や今回の調査結果によって、八木沢地区の縄文時代、弥生時代、歴史時代を知る上で、手懸となる遺物が得られた。今後も周辺の遺跡で同様な成果が期待できる。

最後に、発掘調査および室内整理にあたり、ご協力とご指導を賜った関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二
副 所 長 宮 英 一

[管理課]

課 長 宮 英 一
課長補佐 伊 藤 吉 郎
主 事 立 花 多加志
嘱 託 似 内 喜 兵
選 任 技 能 士 佐 藤 春 男

[調査課]

課 長	昆 野 靖		
主任文化財 専門調査員	小 田 野 哲 憲		
〃	三 浦 謙 一		
〃	工 藤 利 幸		
文 化 財 専門調査員	佐 々 木 嘉 直	文 化 財 専門調査員	平 井 進
〃	中 村 良 一	〃	田 村 社 一
〃	光 井 文 行	〃	玉 川 英 喜
〃	佐 藤 嘉 広	〃	中 川 重 紀
〃	高 橋 義 介	〃	酒 井 宗 孝

[資料課]

課 長 新 田 和 雄
主任文化財
専門調査員 高 橋 与 右 工 門
文 化 財
専門調査員 田 領 寿 夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第116集

親久保 I・II・III・IV 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和62年11月25日

発行 昭和62年11月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23番27号

電話 (0196) 25-2323
